

松江城下町遺跡(殿町287番地)・(殿町279番地外)
発掘調査報告書

－松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書－

本文編



平成23(2011)年3月

島根県松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

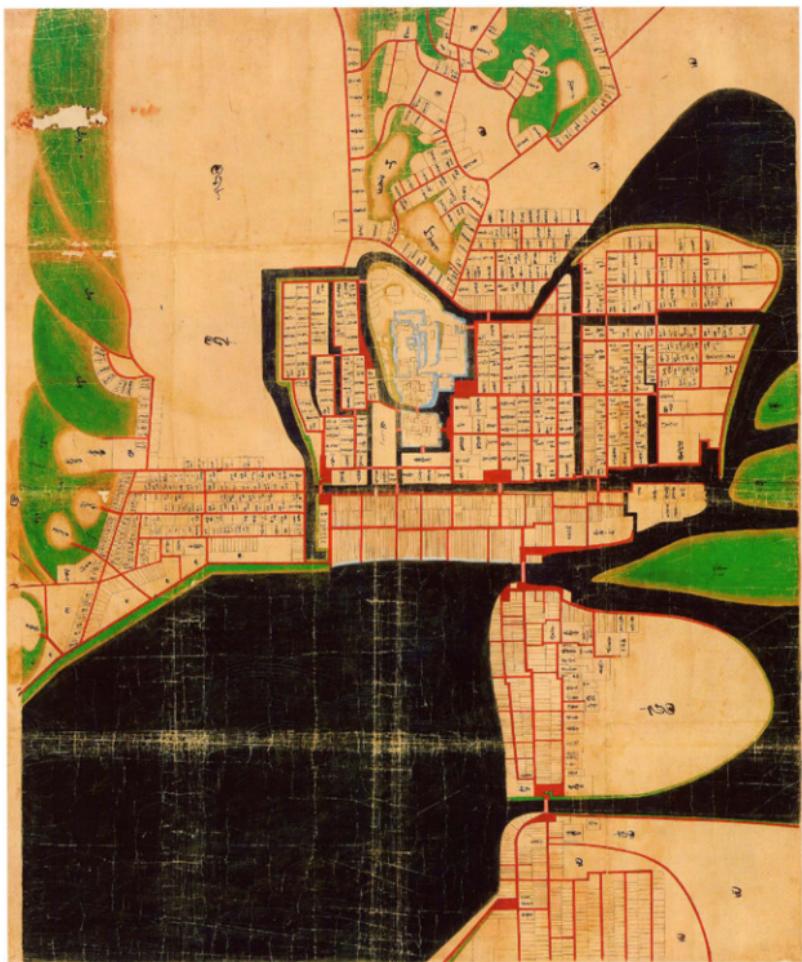
**松江城下町遺跡(殿町287番地)・(殿町279番地外)
発掘調査報告書**

－松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書－

本文編

平成23(2011)年3月

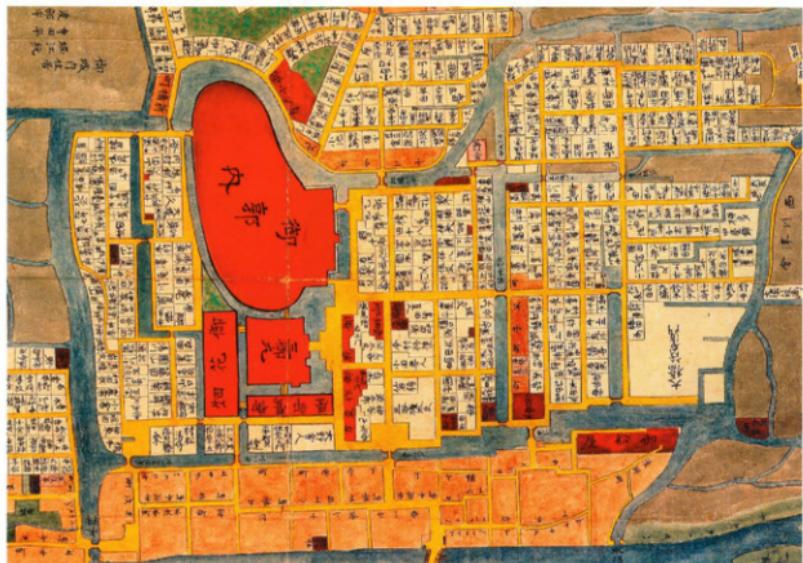
島根県松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団



堀尾期松江城下町絵図
(島根大学附属図書館蔵)



京極期松江城下町絵図（寛永年間松江城家敷町之図 丸亀市立資料館蔵）



松平期松江城下町絵図（桑原文庫 島根大学附属図書館蔵）



調査地 空中写真（北から）



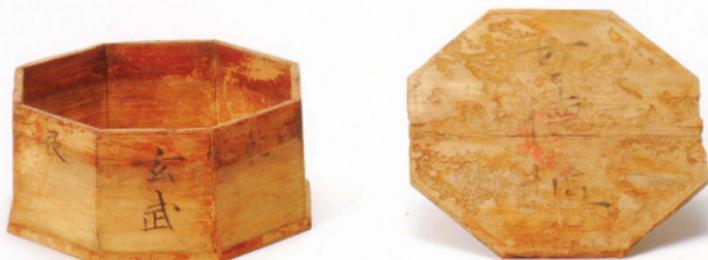
調査地 空中写真（東から）



出土した胞衣箱



出土した祈祷箱（祈祷具）



出土した祈祷箱（八角形箱）

例　　言

- 本書は、平成 21・22 年度に委託を受けた、松江歴史館整備事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書作成業務の松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、平成 17 年度～20 年度の松江市歴史資料館（仮称）整備事業に伴い、松江市観光振興部歴史資料館整備室から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
- 本調査地の名称・所在は以下のとおりである。
(名称) 松江城下町遺跡（殿町 287 番地）
(所在地) 島根県松江市殿町 287 番地
(名称) 松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）
(所在地) 島根県松江市殿町 279、279-1、280、280-5、280-6、280-7、281-1、281-2、281-3、281-4、282-1、282-2、282-3、282-4、282-5、282-6、282-8、283、284-2、284-3、286、292、293、294、294-1 番地

- 現地調査の期間、調査面積は以下のとおりである。

[試掘調査]

平成 18 年 2 月 13 日～平成 18 年 3 月 17 日

平成 19 年 4 月 9 日～平成 19 年 8 月 9 日

[松江城下町遺跡（殿町 287 番地）発掘調査]

平成 18 年 4 月 18 日～平成 19 年 3 月 13 日 945m²

[松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）発掘調査]

平成 19 年 5 月 17 日～平成 20 年 8 月 14 日 3,155m²

[追加調査]

平成 20 年 10 月 1 日～平成 20 年 11 月 28 日 1,027m²

- 開発面積は以下のとおりである。

開発面積 5,343.43m²

- 調査組織は以下のとおりである。

依頼者 松江市観光振興部歴史資料館整備室

主査者 松江市教育委員会

[平成 17 年度] [試掘調査]

事務局 松江市教育委員会

教育長 山本弘正（～5 月 20 日）、福島律子（5 月 21 日～）

参事官 岡崎雄二郎（文化財課長兼務）（6 月 1 日～）

文化財課長 岡崎雄二郎（～5 月 31 日）、調査係長 鹿塚康行

実施者 財團法人松江市教育文化振興事業団

理事長 松浦正敬

専務理事 長野正夫

事務局長 松浦克司（埋蔵文化財課長兼務）、調査係長 清古諒子、主任 門脇誠也（事務担当者）、調査員 石川崇（調査担当者）、調査補助員 廣瀬貴子、秦愛子、三木雅子

[平成 18 年度]【試掘調査】[殿町 287 番地発掘調査]

事務局 松江市教育委員会

教育長 福島律子

参事 岡崎雄二郎（文化財課長兼務）、調査係長 飯塚康行、主任 後藤哲男（事務担当者）

調査指導 島根県教育庁 文化財課 文化財保護主任 勝部智明

米子高等専門学校 建築学科 教授 和田嘉有

実施者 財團法人松江市教育文化振興事業団

理事長 松浦正敬

専務理事 長野正夫

事務局長 松浦克司、埋蔵文化財課長 広江眞二、調査係長 渕古諒子、主任 門脇誠也（事務担当者）、調査員 石川崇（調査担当者）、調査補助員 三木雅子、三代正裕

[平成 19 年度]【試掘調査】[殿町 279 番地外発掘調査]

事務局 松江市教育委員会

教育長 福島律子

文化財課長 吉岡弘行、調査係長 飯塚康行、主任 後藤哲男（事務担当者）

調査指導 島根県教育庁 文化財課 文化財保護主任 東森晋

大阪城天守閣 館長 松尾信裕

島根大学 法文学部 教授 渡辺貞幸

〃 総合理工学部 准教授 酒井哲弥

島根大学ミュージアム 准教授 会下和宏

松江市文化財保護審議委員 勝部昭

島根県埋蔵文化財調査センター 企画幹 西尾克己、調査補助員 澤田正明、阿部賢治
津和野町教育委員会 文化財係 主幹 宮田健一

財團法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 主任調査員 佐伯純也

実施者 財團法人松江市教育文化振興事業団

理事長 松浦正敬

専務理事 中島秀夫

事務局長 松浦克司、埋蔵文化財課長 広江眞二、課長補佐 鎌織慶樹、主任 門脇誠也（事務担当者）、調査員 石川崇（調査担当者）、落合昭久、調査補助員 秦愛子、
徳永桃代

[平成 20 年度]【殿町 279 番地外発掘調査】

事務局 松江市教育委員会

教育長 福島律子

文化財課長 吉岡弘行、調査係長 飯塚康行、主任 後藤哲男（事務担当者）

調査指導 島根県教育庁 文化財課 主幹 林健亮、企画員 池淵俊一、文化財保護主任 是田敦
大阪城天守閣 館長 松尾信裕

東北芸術工科大学 歴史遺産学科 教授 田中哲雄

京都造形芸術大学 芸術学部 教授 仲隆裕

島根大学 法文学部 教授 渡辺貞幸

〃 〃 准教授 小林准士

	島根大学 総合理工学部 准教授 酒井哲弥
	松江市文化財保護審議委員 乾隆明、和田嘉宥、足立正智
	島根県古代文化センター 専門研究員 西尾克己
	岡山市教育委員会 文化財課 文化財副専門監 乘岡実
	財團法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 主任調査員 佐伯純也
実施者	財團法人松江市教育文化振興事業団 理事長 松浦正敬 事務局長 松浦克司（専務理事職務代理者）、埋蔵文化財課長 幸江眞二、課長補佐 錦織慶樹、調査係 主幹 中尾秀信、主任 門脇誠也（事務担当者）、調査員 石川崇（調査担当者）、落合昭久、廣瀬貴子、祐原恆平、調査補助員 秦愛子、徳永桃代、北島和子、三代正裕、清水初美、大西総司、宇津直樹
調査協力	松江市教育委員会 文化財課 調査係長 飯塚康行、主任 赤澤秀則、主任 後藤哲男、副主任 川上昭一、徳永隆、佐々木紀明、主任主事 佐々木啓祐、嘱託職員 高橋真紀子、宮本亜希子、小山泰生、金森みのり
[平成20年度]【追加調査】	
事務局	松江市教育委員会 教育長 福島律子 文化財課長 吉岡弘行、調査係長 飯塚康行、主任 後藤哲男（事務担当者）
調査指導	島根県教育庁 文化財課 企画員 池淵俊一、文化財保護主任 是田敦 大阪城天守閣 館長 松尾信裕 島根大学 法文学部 教授 渡辺貞幸 島根県建築士会 専務理事 足立正智
実施者	松江市教育委員会 島根県建築士会 専務理事 足立正智 松江市文化財保護審議委員 乾隆明 島根県古代文化センター 専門研究員 西尾克己 岡山市教育委員会 文化財課 文化財副専門監 乗岡実 財團法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 主任調査員 佐伯純也 松江市教育委員会 文化財課 調査係係長 飯塚康行、主任 赤澤秀則、主任 後藤哲男、副主任 川上昭一（調査担当者）、徳永隆、佐々木紀明、主任主事 佐々木啓祐、嘱託職員 高橋真紀子、宮本亜希子、小山泰生、金森みのり
調査協力	財團法人松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課 調査係 主幹 中尾秀信、調査補助員 徳永桃代、清水初美、大西総司
[平成21年度]【報告書作成】	
事務局	松江市教育委員会 教育長 福島律子 文化財課長 吉岡弘行、調査係長 飯塚康行、主任 後藤哲男（事務担当者）
遺物指導	愛知学院大学 文学部 教授 藤澤良祐 有田町教育委員会 学芸員 村上伸之 島根県教育庁 文化財課 専門研究員 守岡正司

島根県古代文化センター 専門研究員 西尾克己
財団法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 主任調査員 佐伯純也
米子市歴史館 学芸員 伊藤創
実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団
理事長 松浦正敬
事務局長 松浦克司（専務理事職務代理者）、埋蔵文化財課 課長 廣江眞二、課長補佐 錦織慶樹、調査係 主幹 中尾秀信、主任 門脇誠也（事務担当者）、調査員 石川崇、落合昭久、調査補助員 秦愛子、徳永桃代

[平成22年度]【報告書作成】

事務局 松江市教育委員会
教育長 福島律子
文化財課長 錦織慶樹、調査係長 赤澤秀則、主任 後藤哲男（事務担当者）
遺構指導 島根県建築士会 専務理事 足立正智
有限公社後藤屋 代表取締役 後藤史樹
島根県古代文化センター センター長 西尾克己
岡山市教育委員会 文化財課 文化財副守門監 乘岡火
財団法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 主任調査員 佐伯純也
遺物指導 総合地球環境学研究所 研究員 石丸恵利子
実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団
理事長 松浦正敬
常務理事 松浦克司
事務局長 原 成美、埋蔵文化財課長 大西 誠、調査係長 中尾秀信、専門企画員 門脇誠也（事務担当者）、調査員 石川崇、落合昭久、調査補助員 秦愛子、徳永桃代
作成協力 松江市教育委員会
文化財課 調査係 主任 川上昭一、副主任 徳永隆

7. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の機関や方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
- 東京文化財研究所保存修復科学センター、島根県教育委員会、島根県埋蔵文化財調査センター、島根県古代文化センター、島根県立古代出雲歴史博物館、安来市教育委員会、
穴澤義功、井上寛司、井上 恒、岩崎仁志、植田直見、小野正敏、角田徳幸、高妻洋成、肥塚隆保、
古賀信幸、近藤英夫、坂詰秀一、竹尾 進、田中義昭、谷川章雄、田中照久、坪井清足、徳岡隆夫、
富山直人、中森 祥、丹羽野裕、橋口定志、濱田幸介、広江耕史、舟木 球、降幡順子、増田浩太、
馬淵和雄、松尾 寿、松尾允晶、水野正好、村上 勇、山本敏充
8. 本書に記載した遺物の復元・実測・淨書、遺構の浄書に携わった遺物整理員。
飯野正子、石倉紀子、井上喜代女、坂本玲子、善家幸子、高尾万里子、中谷美枝子、福原恭子
細田純子、松尾澄美
9. 本書に掲載した現場写真は川上、徳永 隆、石川、広浜、秦、徳永桃代、落合が、遺物写真は石川、落合が撮影した。
10. 本書の執筆・編集は、第1章を石川、落合、第2章を石川、落合、徳永 隆、第3章を石川、第4章を徳永桃代、第5章を秦、第6章を川上、第7章を川上、徳永桃代、第8章を落合、徳永桃代が行った。

11. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。
陶磁器分類：『内藤町遺跡 一放射 5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一』新宿区内藤町遺跡調査会 1992
陶磁器編年：『九州陶磁の編年 一九州近世陶磁学会 10周年記念一』九州近世陶磁学会 2000
12. 本書に掲載した遺構図の一部は株式会社荒谷建設コンサルタント、株式会社トーワエンジニアリングに委託し作成した。また、陶磁器実測図の写真画像の嵌め込みと大半のトレースは株式会社トーワエンジニアリングに委託し作成した。
13. 出土した木製品の保存処理は、以下の機関・業者に委託をして行った。
(祈禱具・胸衣箱) 財団法人元興寺文化財研究所
(漆椀・下駄・その他木製品) 株式会社吉田生物研究所
14. 本書における方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第III系の値である。また、レベル値は海拔標高を示す。
15. 本書における遺構番号は以下のとおりである。
SA…辦・権 SB…建物 SC…廊 SD…溝 SE…井戸 SG…池 SJ…上器埋設遺構 SK…土坑
SN…烟 SP…ピット SS…礧石・配石 SU…遺物集積 SW…石垣 SX…その他
16. 山上遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

目 次

例 言

第 1 章 位置と歴史的環境

第 1 節 地理的環境	1
第 2 節 周辺の歴史的環境	3

第 2 章 調査の経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯	15
第 2 節 松江城下町遺跡（殿町 287 番地）の試掘調査と発掘調査の経過	18
第 3 節 松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）の試掘調査と発掘調査の経過	20
第 4 節 工事の変更と保存範囲	23

第 3 章 殿町 287 番地調査（北屋敷）の概要

第 1 節 基本層序：上層堆積状況と遺構面	27
第 2 節 上面の遺構面	29
第 3 節 中間層の遺構面	44
第 4 節 最終遺構面	62
第 5 節 小結	74

第 4 章 殿町 279 番地外調査（北屋敷）の概要

第 1 節 基本層序：上層堆積状況と遺構面	81
第 2 節 第 1 遺構面	84
第 3 節 第 2 遺構面	134
第 4 節 第 3 遺構面	152
第 5 節 第 4 遺構面	192
第 6 節 小結	224

第 5 章 殿町 279 番地外調査（南屋敷）の概要

第 1 節 基本層序：上層堆積状況と遺構面	243
第 2 節 第 1 遺構面	245
第 3 節 第 2 遺構面	263
第 4 節 第 3 遺構面	291
第 5 節 第 3-1 遺構面	311
第 6 節 第 3-2 遺構面	346
第 7 節 小結	373

第6章 南屋敷第4遺構面

第1節 調査の経緯と経過	389
第2節 基本層序	391
第3節 区画の分類方法	393
第4節 素掘りの人溝	394
第5節 带状区画	411
第6節 方形区画	425
第7節 短冊形区画	443
第8節 小結	445

第7章 第4遺構面以前の遺構

第1節 鍛冶遺構	457
第2節 素掘り土坑	465
第3節 小結	465

第8章 まとめ

第1節 遺構の変遷	467
第2節 松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）出土の陶磁器について	481
第3節 松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）出土の土師器皿について	489

第1章 位置と歴史的環境

第1節 地理的環境

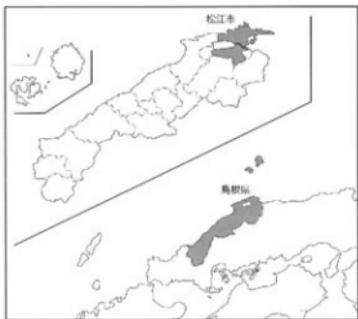
遺跡の所在地 松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）は島根県松江市殿町に所在する。松江市は山陰のほぼ中央に位置する島根県の県庁所在地で、市域は東西 41km、南北 31km、面積は 530km²を測る。平成 17 年には松江市、八束郡八束町、同島根町、同美保関町、同鹿島町、同玉湯町、同宍道町、同八雲村が合併し、人口 196 千人の山陰を代表する中核都市となっている。

遺跡周辺は江戸時代に第一級の上級家臣が屋敷を構えた場所であり、現在においても市内の第一等地となる場所である。

松江平野 遺跡は松江平野の中に立地している。松江平野の北側は島根半島山地、南側には中国山地へと向かう高地が存在し、西には宍道湖、出雲平野、東には中海、米子平野があり、その先はそれぞれ外海の日本海へと接している。

松江平野は中海と宍道湖を結ぶ大橋川や朝倉川などの沖積作用で形成された東西約 4km、南北約 2.5km、標高 2 ~ 3 m の低湿な三角州平野である。平野の南側は標高 15 ~ 30m の乃木段丘と呼ばれる河成段丘が広がり、北側には平野との比高差が 5 ~ 10 m の断片的な段丘も散在している。

松江平野の形成 松江平野の基盤（岩）は地下 6 ~ 20 m にある砂岩、凝灰岩から成り、その上に約 2.5 ~ 3 万年前の最終氷期の海退期に堆積した礫層が存在する。この礫層の上には約 1 万年前の後氷期のシルト・粘土を主体とする粘土層が堆積しており、下位層には AT（姶良 Tn 火山灰）も確認されている。この時期は、縄文海進と呼ばれる急激な海面上昇が世界規模で起こっており、約 5 ~ 6 千年前の海面高頂期の松江平野の海面は現在より 2 ~ 3 m 高い位置にまで達していた。また、宍道湖と中海は外海の日本海と繋がっており、島根半島は単独の島となっていたようである。この後、3200 年前以前～弥生時代まで海退が続き、海面は現在より少なくとも 2 m は低下している。この海退期以降は、西方の出雲平野が島根半島と繋がったため、宍道湖は中海だけを経て外海と結ばれるようになる。また、海面は現在とほぼ同じ高さとなり、松江平野においては砂層による新しい三角洲が形成され始め、8 世紀頃には三角洲の大部分は陸地となっている。ただこの時期の三角洲の陸地は、まだ沼が点在するような湿地帯であり、朝倉



第1図 島根県・松江市位置図



第2図 遺跡位置図 1/8000

川から大橋川にかけては深さ 2 ~ 3 m の浅い湖が残っていたようである。

中近世の地形 中近世の松江平野はあまり知られていないが、近世以前は 8 世紀頃からあまり変化ではなく、沼や浅い湖が残る湿地帯が広がっていたと考えられている。なお、中世になると宍道湖沿いの砂州上には「末次」や「白潟」といった小さな村が形成され始める。

17 世紀初頭に入ると大橋川以北を中心とした低地に城下町が築かれるが、古絵図などを見ると大橋川の北東周辺にはまだ沼や湖などがあったことが伺える。

松江平野以外では、それまで山雲平野を西流し大社鴻から外海に流れていた斐伊川が、寛永期には東流し、宍道湖に注いでいた。¹⁰これにより、宍道湖の水位は一気に上昇したものと思われ、この後、平野に立地する松江城下町は幾度も洪水が起こっていたことが文献にも見られる。

17 世紀初頭以降の城下町が形成された松江平野は、その後、宍道湖の氾濫等の洪水の為か幾度も盛土が成される。その厚さは平均約 2 m を測り、現在の平野の地表面が築かれている。

註

- ・松江平野周辺の概観、松江平野の形成、に関しては、林 正久「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地理科学46巻2号』地理科学学会 1991 を参考に記した。



松江市地形写真（空中写真）
(1947年11月3日撮影：国土地理院)

第2節 周辺の歴史的環境

1. 周辺の遺跡について（第3図）

本遺跡は松江平野の北西部に位置している。この平野部には周知されている遺跡は少なく、ここでは平野部を含めた周辺の中世以降の遺跡や城館について、若干触れておきたい。まず周辺の城館について紹介する。

周辺の城館

松江城

松江城（2）は松江平野の北西端に位置する標高約28mの亀田山に構築された山城である。この城は関ヶ原の戦い後、慶長5年（1600年）に堀尾忠氏が山雲・隱岐両国24万石の国主となり、遠江浜松から父吉晴と共に、安来市広瀬町の月山富田城に入った後、慶長12～16年（1607～1611年）にかけて築いた。繩張りは亀田山の最高所に本丸があり、そこに五層六階の望楼式の複合天守をもち、本丸周縁には櫓を配置し、高石垣をめぐらし、東側に二之丸、二之丸下ノ段、南側に三之丸、西側に腰郭を配置し、これらの外側に内堀をめぐらす。本丸部分を除いて北側から西側にかけて石垣がなく、南側から東側にかけて高石垣をめぐらす。

白鹿城跡

白鹿城跡（3）は松江城の北約3kmのところに位置し、松江市街地北側にある北山山脈から派生する白鹿山に築かれた山城跡である。戦国時代には山雲の戦国大名尼子氏の重要な支城であり、安芸の戦国大名毛利氏との雲芸攻防戦の舞台ともなった。永禄6年（1563年）に毛利元就が白鹿城を攻撃した時には、城主が尼子家当主晴久の姉（妹とも）婿の松田藏保であったとされる。この城跡は頂上部の平坦地を主郭とし、陥しい地形を活用して大小の郭を設置する。また本城跡に加えて、小白鹿城跡、高坪山城跡、大高丸跡、真山城跡を含めて白鹿山城砦群とも呼ばれている。

真山城跡

真山城跡（4）は白鹿城跡の北隣に位置し、北山山脈から派生する真山に築かれた山城で、歴史は古く、『雲陽軍実記』によると平安時代末期に築いたとの伝承がある。前述したように広義的には白鹿山城砦群跡の一つに含まれ、毛利元就が白鹿城を攻めた時に、元就の次男吉川元春が向城として陣を置き、白鹿城陥落後は毛利氏による周辺支配の拠点となった。その後、尼子復興戦では尼子軍の手に落ちるが、尼子氏の山雲山後に再び毛利氏の手に戻り、江戸時代を迎え破却される。本城は尾根伝いに郭を築き、一部には土塁とわずかに石積みも見られる。

荒限城跡

荒限城跡（5）は松江城の西約1.5kmのところにある荒限山に築かれた山城跡である。穴道湖北岸沿いに築かれたこの城は、雲芸攻防戦における毛利軍の前線拠点として、また宍道湖・帯の水運・流通機能を取り込んでいた。広範圍にわたって礎の痕跡が見られ、昭和42年の発掘調査では尾根の高所に掘立柱建物跡が検出され、また昭和54年の調査でも柵列を思わせる柱穴や階段状造構が確認された。雲芸攻防戦以後、城として機能することではなく、江戸時代になり堀尾吉晴、忠氏父子による城地選定で候補に上がるも採用されず、故地となって現在に至る。

木次城跡

木次城跡（6）の所在に関しては2説あり、「山雲市史」「鳥根県誌」では荒限山にある丘陵にあったとされ、「松江市誌」などでは亀田山にあったとされる。文献では山雲守護佐々木氏の支流木次氏がこの一帯を支配していたとされ、戦国時代の天文元年（1532年）に尼子経久の次男塩冶興久が謀反を起こしてこの城を攻め、尼子復興戦では尼子軍によって土塁が築かれている。江戸時代になると亀田山に松江城が築かれ、木次城の遺構は消滅していると思われる。

満願寺城跡

満願寺城跡（7）は松江城の西約3kmのところにある丘陵上に築かれた平山城跡である。穴道湖北岸に接しているこの城は、湯原氏の居城とされ、当初は尼子方に属していたものの、毛利元就の山雲進出により毛利方に属した。城跡には港湾施設を思わせる造構が認められ、穴道

湖の水運を握る水軍の拠点であった可能性があり、そういった点で雲芸攻防戦での争奪の舞台ともなった。穴道湖に面する斜面には階段状遺構があり、主郭部分には横堀も認められる。

和久羅山城跡 和久羅山城跡(8)は松江城の東約5kmのところにある標高約262mの和久羅山に築かれた山城跡である。中海、穴道湖をはじめ松江市街地が一望できる高台に位置し、最高所に4つの郭をもち、腰郭や虎口があり、山腹には馬乗馬場跡と思われる遺構も残存する。城主は当初は尼子方の原田氏であったが、毛利氏の手に落ち、尼子復興戦の折には再び尼子氏の羽介氏が城主となり、尼子氏の出雲出雲以後に再度毛利氏の手に転した。⁽⁷⁾

茶臼山城跡 茶臼山城跡(9)は松江城の東南約6kmにある標高約172mの茶臼山に築かれた山城跡である。この山は、古くは『出雲国風上記』の意⁽⁸⁾郡野条にある「神名檍野」に比定され、頂部からは中海、穴道湖をはじめとして松江市街地が一望できる高台である。最高所に主郭を持ち、その東西を別の郭で囲まれ、さらにその外側の東西に尾根を遮断する堀切が掘られ、山の斜面には連続堅堀群がある。築城年代や城主は定かではないが、『雲陽誌』には雲芸攻防戦の折に村井伯耆守が撃ったとされる。⁽⁹⁾

床几山 床几山(10)は松江城の南約2.5kmのところにある標高41mの山で、古くは元山と呼ばれた。この山は堀尾吉晴、忠氏父子が城地選定のために登り、その時に荒隈山のあった荒隈山を主張した吉晴と木次城があったとされる亀山を主張した忠氏とで意見が別れたが、忠氏が急逝したため、結局吉晴が忠氏の意見を採用して亀山山に松江城を築城することになった。この山は二人が床几(携帯の椅子のようなもの)に腰掛け話し合ったことから、後に床几山と呼ばれるようになった。

その他の中世遺跡

ここからは発掘調査が行われた中世以降の主な遺跡を紹介する。

中竹矢遺跡 中竹矢遺跡(11)は竹矢町に所在し、平成2年度に発掘調査が行われた。多くの柱穴が検出され、掘立柱建物跡の覆土から白磁碗や褐釉四耳壺とともに土師器の壺や皿などが出土した。山上した白磁碗は12世紀頃のものと考えられる。

石台遺跡 石台遺跡(12)は東洋田町に所在し、昭和55年から数度にわたって発掘調査が行われた。弥生時代の遺構・遺物のほか包含層から輸入陶磁や土師器、瓦器壺、土錫、黒色土器、東播系須恵器などが出土し、その黒色土器の壺は形態から12世紀代のものとされている。

天満谷遺跡 天満谷遺跡(13)は大草町に所在し、昭和62年に発掘調査が行われた。丘陵谷部より掘立柱建物跡が検出され、白磁碗や瀬戸系灰釉、美濃系山茶碗、土師器・壺・皿などのほか、12世紀代のものと考えられる土器が出土している。

出雲国造館跡 山雲国造館跡(14)は大庭町に所在し、昭和54年に発掘調査が行われた。柱穴や井戸跡、土坑が検出され、古代の須恵器・土師器の他、白磁碗や青磁碗、青磁皿、粉青沙器などの輸入陶磁器や中世の須恵器や国産陶器などが出土した。白磁碗や青磁碗から盛期は11～14世紀と考えられる。

黒田畦遺跡 黒田畦遺跡(15)は大庭町に所在し、平成4年度に発掘調査が行われた。古代や律令時代の遺構のほか、中世～戦国末期の建物跡や溝状遺構、土坑などが検出され、12～16世紀末の輸入陶磁器や国産陶磁器などが出土した。

黒田館跡 黒田館跡(16)は山代町に所在し、昭和37年と昭和57・58年に発掘調査が行われた。古代の鉢跡のほか、15～16世紀代の井戸跡が検出され、白磁碗や青磁碗、粉青沙器などの輸入陶磁器や備前系・肥前系の国産陶磁器、土師器皿、瓦質土器などが出土した。

下黒田遺跡 下黒田遺跡(17)は大庭町に所在し、昭和61年に発掘調査が行われた。遺跡東側には「黒

1. 松江城下町道路（現町 287番地・279番地跡）
2. 松江城 3. 白鹿城跡 4. 真山城跡
5. 芳賀城跡 6. 末次城跡 7. 西原守城跡
8. 和久瀬山城跡 9. 斎田山城跡 10. 広川山
11. 小竹丸遺跡 12. 有台遺跡 13. 天海谷遺跡
14. 出雲國法輪跡 15. 黒田遺跡 16. 無田遺跡
17. 下瀬川遺跡 18. 二反田古墳 19. コゴメダカ遺跡
20. 梶原山城跡 21. 法吉古墓 22. 藤ヶ谷遺跡群
23. 上浜弓 1号墳 24. 芳賀城跡（小太刀丸跡）
25. 春日城跡 26. 有台墓群 27. 市場遺跡
28. B28道跡 29. 大敷遺跡 30. 的場橋穴塚
31. 須原遺跡 32. 松本修法塚跡
33. 布志毛才の神遺跡 34. 布志毛燒窯跡群
35. 鎌谷御遺跡 36. 佐室上名背古着跡
37. 布志毛城山城跡 38. 松才遺跡
39. 佐武々木真鍋型 40. 松江應生塚尾忠祐塚所
41. 西城ノ前遺跡 42. 東城ノ前遺跡 43. 右沙井遺跡
44. 桐原城跡 45. 鮎山城跡 46. J15 遺跡
47. 二保山城跡 48. 一ノ谷遺跡 49. 仲田遺跡
50. 稲葉山城跡 51. J14 遺跡 52. 川津城跡
53. 芳賀山城跡 54. 丹淮 1 遺跡 55. J32 遺跡
56. J31 遺跡 57. 或本加跡 58. 安土山城跡
59. 大高丸城跡 60. 小山城跡 61. 高つ浜山城跡
62. 山越野原塚 63. 石在終塚 64. 海老山城跡
65. 高津城跡 66. 唐津山城跡 67. 合人遺跡
68. 松江魚主松平家塚所



第3図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図

「田館跡」が隣接する。古代の遺構のほか 15世紀後半～16世紀代の建物跡や溝状遺構が検出され、青磁などの輸入磁器や国産陶磁器、土師質土器や錢貨などが出土した。

二反田古墓 二反田古墓（18）は法吉町に所在し、昭和 61 年に発掘調査が行われた。15～16世紀代の石敷基壇や宝篋印塔が出土した。白鹿城や真山城が北側に位置し、遺跡の時期も雲芸攻防戦と合致することから何らかの関連があるかも知れない。

コゴメダカ遺跡 コゴメダカ遺跡（19）は法吉町に所在し、宋銭や明銭などの渡来銭のほか、長さ 44cm の脇差が一振り出土した。

稲葉山城跡 稲葉山城跡（20）は西尾町に所在し、昭和 55 年に発掘調査が行われた。主郭部分に礎石群や土坑が検出され、青磁碗や青磁輪花皿などの輸入陶磁器や土師器皿が出土した。

袋戻遺跡群 袋戻遺跡群（21）は平成町に所在し、平成 7 ～ 8 年にかけて発掘調査が行われた。この遺跡群の中にある古墓は丘陵頂部につくられたもので、中腹部分の平坦地からは多くの五輪塔とともに、備前系焼締陶器の壺が出土し、その中から人間の左鎖骨も出土した。

また、D 遺跡からは墓壙が 2 穴検出され、遺跡内からは 17 世紀後半の磁器や土師器皿が出土した。

藤ヶ谷遺跡群 藤ヶ谷遺跡群（22）は北陵町に所在し、平成 9 年に発掘調査が行われた。山城、砦跡と考えられる遺跡で溝状遺構・小土堤・土橋・郭・堀切などが検出され、鐵砲玉なども出土した。この鐵砲玉は直径 2.30cm 、重さ 63.5 g を測る鉛製である。同じ尾根筋の北側に真山城が、左隣尾根には白鹿城が存在し、広義的にはこの遺跡群も白鹿城跡群の一部と考えられる。

上浜弓 1号墳 上浜弓 1号墳（23）は西川津町に所在し、平成 4 年に発掘調査が行われた。古墳の裾では方形のマウンドが検出され、土師器皿と火葬骨が出土した。出土した土師器皿は口クロ成形で、その遺物から近世の火葬墓と思われる。

2. 城下町建設以前の松江(第4図)

城下町以前の松江 開府以前の松江城下町周辺は伝統的な閑村といったイメージであったが、近年の研究によって変化しつつある。古代から中世にかけては大橋川を挟んで、北は島根郡法吉郷末次を中心とする地域と、南は意宇郡山代郷白潟を中心とする地域として知られていた。

未次 「末次」の名は『出雲國風土記』に記載されている須衛郡久社に由来する。戦国時代には末次氏が治めており、尼子復興戦では尼子・毛利両軍の争奪戦の舞台となった。また、毛利時代には末次氏が毛利氏から末次森分や市屋敷を宛がわれていることから、末次庄内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたと思われる。

白潟 「白潟」は『雲陽人數録』によると、周辺に民家もなく白砂であったことから、白砂の土地を「白潟」というようになったとされ、中世の大橋川沿岸には港湾を示す「津」「潟」の地名が集中していたとされる。中国の明代に著された『籌海圖編』(明の嘉靖41年:1562年)には出雲地方の港湾の一つとして「失喇哈町(白潟)」の名があり、日本海から穴道湖内奥部に至る水運ルートが存在していて、「白潟」が重要な港湾であったと考えられる。また、毛利氏が河村又三郎という人物を白潟・末次の磨師・塗師・鞍師などの司に任せていることからも、末次・白潟に商人・職人の集団の存在が伺える。

『島根県史』によるとこの両方の集落を繋ぐ橋が架けられていたとされ、貞和年間(1345年~1349年)の書状の中に「白潟橋」という名が見られる。白潟橋は尼子時代には「からから橋」と呼ばれ、松江開府以降は様々な名前を変えて、現在では「松江大橋」と呼ばれている。

「末次」「白潟」「中町」の周辺にも5名(村)
「奥谷・菅田・中原・末次・黒田」があつたとされ、この5名は家屋が点在するような村落であったと思われる。

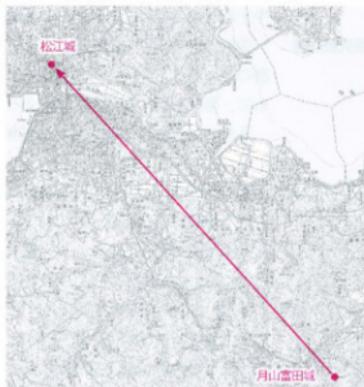
このように開府以前は「閑村」ではなく、市場機能・流通機能・生産機能を兼ね備えた集落が存在したため、この一帯を堀尾氏が城下町建設を決めた一因とも考えられる。

3. 松江入府以前の堀尾吉晴・忠氏

堀尾吉晴・忠氏父子 関ヶ原の戦いの戦功により堀尾忠氏は、出雲・隠岐両国の藩主として出雲国に入国し、当初は月山富田城に入城した。



第4図 寛永出雲国絵図(島根大学附属図書館蔵)



第5図 富田城・松江城位置図(1:20万)

富田城

富田城は文治年間（1185年～1190年）に守護佐々木氏が館を構えたことに始まる。その後、南北朝時代に京極氏が守護となり、守護代として尼子氏が入城し、毛利氏に降伏・開城するまで約170年間尼子氏の居城であつた。

尼子期

尼子期は山頂部と山腹から山裾に設けられた曲輪群で構成され、それ以外の城域は普請が異なる曲輪で構成されていた。

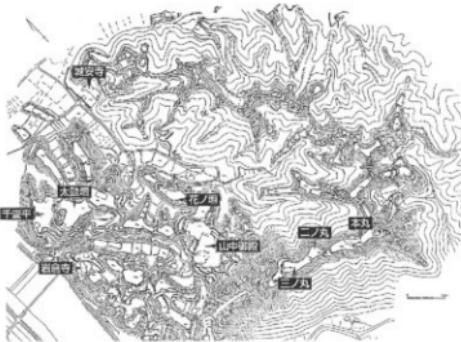
毛利期

吉川広家

毛利期は拡大した城域を限られた兵力で守備できるよう整理縮小したと思われる。その後豊臣期に入り、毛利一族である吉川広家が安芸北部・伯耆西部・出雲東部・隠岐の4カ国にまたがる12万石の太守として、富田城に入った。広家は富田城が領国の中に偏り、隠岐への渡海にもまた、領國經營にも不便を感じ、米子に本拠地を移すことを計画し、工事に取り掛かつた。しかし、関ヶ原の戦い後、毛利は防長2カ国に減封され、吉川氏も岩国へ移っていった。

堀尾期

堀尾期は山頂部を含め山裾部の山中御殿なども改修を行っているが、当時の政治状況として豊臣恩顧の大名が領国周辺に存在していたために、吉川広家が残した富田城をそのまま使い続けるわけにはいかなかったと想像される。入国して3年後には城地移転の許可が幕府から下りており、早くから堀尾氏は城地移転を考えていたことが伺える。



第6図 富田城縄張図
(寺井毅『全国城郭縄張図集成』下より転載)

「兵農分離」「商工（農）分離」政策

「商工（農）分離」政策 中世においては土着性を重視した郷村社会、国人領主を中心で、家臣団は分散して在所していることが多く、城下にはそれほどの居住空間を必要としなかった。そのため富田城下も飯梨川に沿った南北に細長い狭隘な山間部の谷間に位置していた。しかし戦国時代以降、特に織豊期以降は軍事を含めた様々な観点から、郷村社会から軍事力のある武士階級を切り離し、城下に住まわせる「兵農分離」が進んだために、城下には広い武士層の居住空間が必要となった。また、生産活動から離れた武士層の大量消費を支えるために、商工業者の城下への移転も必要となつた。そのため狭隘な富田城下では多くの家臣団や商工業者を居住させることが困難となり、広い居住空間が確保できる平野部に移転が迫られたのではないだろうか。

軍事的観点から

富田城は天然の要害を最大限に活用した堅牢で、難攻不落の典型的な中世の山城であった。尼子時代の富田城の縄張りは丘陵上に設けた曲輪群から矢矢などで攻撃する戦術、いわゆる挟撃による殲滅戦を想定した曲輪配置で、戦時には籠城のために曲輪の新設・拡大が絶えず行わ

れ、敵方の攻撃の拠点になりそうな尾根筋などを前もって城域に取り込み拡大させていった。しかし、天文12年（1543年）に鉄砲が伝来してから戦術的に大きく変化する。『懐橘談』や『雲陽大数録』などでは堀尾氏の城下移転の最大の理由は、月山は周辺の山々から見下される位置にあり、弓矢での攻撃には対応できるが、鉄砲攻撃による備えが不十分であるため移転したと記されている。このように軍備の変化によって移転を余儀なくされたのではないだろうか。

飯梨川の水運 （3）飯梨川の河床の変化と水運の衰退

尼子時代の飯梨川は現在よりも水量が豊富で、水深も深かったと思われる。尼子氏の経済力は中国山地から運び出される鉄材や木材を飯梨川の水運によって中海を経由して、安来や美保関から諸国へと運び出すことによって支えられていたと言つても過言ではない。しかし、飯梨川上流の中国山地の山間部の開発が進み、鉄穴流しによる砂鉄採取のために大量の土砂が飯梨川下流域に流れ込むことによって、河床が高くなり、河口の沖積を加速させた。堀尾入国期には水深が浅くなることによる水運機能の低下だけではなく、洪水や堤防決壊などの自然災害の可能性が高くなり、徹底的な治水対策の必要性に迫られた。水運機能の低下は大量消費社会に移行しつつあった近世城下町にとっては大きな打撃となり、自然災害等の危険性を合わせて考慮すると、城下町移転を速やかに行わなければならぬと考えたのではないだろうか。

位置的な欠点 （4）領国經營における位置的な欠点

堀尾氏の領地となった出雲・隠岐2カ國の中で富田城下は東端に位置しているため、領国支配を考えると領内中央部に政庁を置きたいと考えたのではないかだろうか。前代の吉川広家も富田城に入城したが、領国の西端に当たるため、領内の中央に近い米子に政庁を移そうとしていた。堀尾時代には米子は領内ではなかったので、それ以外のところで探す必要があった。

以上のようなことから、領内のほぼ中央部で、ある程度の広い居住空間が取れる平野を持ち、市場機能・輸送機能を兼ね備え、軍事的にも優位な場所を搜し求めた結果、末次・白潟を含めた現在の松江周辺が移転の候補地として挙げられたのではないかだろうか。

5. 城地の選定とその計画について

床几山 城地の候補地に挙げた白潟・末次を実見するために堀尾吉晴・忠氏父子は意宇郡乃木村の元山（床几山）から当該地を望んだ。吉晴は左手に見える荒隈山に城を築きたいと考えたが、忠氏は荒隈山では台が大きすぎ、天守も五重でなければ構同然に小さく見える。五重の天守をつくるには24万石では難しく、50万石以上ないと維持しにくい。それよりも右手に見える亀田山は、前面の大橋川が濠の役目を果たし、東西両側は沼地で敵が陣を築くことが難しく、後側は山続きで白鹿山に遠見を置けば、より堅固な城になると主張した。この段階では結論が出ないまま藩主忠氏が急死し、その後吉晴が忠氏の遺志を継ぐ形で亀田山に決定した。

城郭予定地の亀田山（通称極楽寺山）にはその当時、極楽寺・法眼寺・若宮八幡宮・須彌都久神社・荒神などの寺社・祠があったが、若宮八幡宮を除いて城下各地に移された。この若宮八幡宮に関しては吉晴の八幡信仰によるものと推測される。亀田山の山腹や山裾には寺社以外に農民・漁民の家が点在し、周辺には水田や沼沢が広がっていたという。

小瀬甫庵 『島根縣史』によると築城に際しては軍学にも精通している小瀬甫庵が御張りを担当し、吉



第7図 富田川と富田城位置図(1:50,000)

稻葉覺之丞 晴自身も築城に熱心で、家臣を変装させて諸国に派遣して城地を視察させていたとも言われ、
「普請上手」と呼ばれるほど土木技術に長けていた。それは家臣の稻葉覺之丞の功績によるもの
のが大きいとされる。覺之丞は秀吉の時代、吉晴が請け負った土木工事における材料運搬などを
迅速かつ、効率的・経済的な方法で成し遂げ、秀吉を感嘆させたという。また徳川幕府より
城地移転の許可を得てから（1603年：慶長8年）、工事着工まで（1607年：慶長12年）の
4年間は設計や工費の準備に費やされたものと思われる。^[20]

6. 松江城築城と城下町の建設について

松江城と城下町の建設は、1607年（慶長12年）から1611年（慶長16年）の5ヶ年にわたりて行なった。築城に際しては吉晴自ら松江に赴き、富田城は重臣堀尾河内守の留守居役とした。初年度の1607年（慶長12年）はまず城郭予定地の北側、現在の松江護國神社のある丘陵に吉晴自身の常駐のための仮御殿（上御殿という）を建設した。この付近は1987年（昭和62年）に松江市教育委員会が発掘調査を行い、建物跡・土坑・小鍛冶遺構が検出され、肥前系磁器や土師器皿などが出土したが、残念ながら吉晴当時の遺構・遺物は確認されなかった。^[21]

そのほか本丸・二之丸の地均し工事、城下では物資運搬のための道路を整備・新設を行い、それまで竹橋であった「からから橋（現在の松江大橋）」を長さ84間（約153m）の木橋に付け替えた。そして町人屋敷地は富裕町人の屋敷を基準にして天神町周辺の町割を行い、武家屋敷地は殿町・母衣町・中原町の造成を行い、年末に大部分が竣工し、今後造成される内堀との境界とした。築城に関しては重臣を総奉行に任せ、その下に4奉行（濠方・石垣方・大方方・運送方）を置いてそれぞれの任務に専従させ、家老も交互で工事場を巡回し、弓組や鉄砲組の足軽が警邏にあたり、石工や抜夫、木工、泥工、瓦工などは大坂城築城の経験がある者を採用し工事にあたった。^[22]

第2年度（1608年：慶長13年）は、亀田山では本丸の石垣工事、天守台の土台と石垣工事と内堀工事を行った。石垣に使用された石は10数万個に及び、その中でも堅致なものは松江城や三之丸に使用し、それ以外は堀川や武家屋敷に使用された。これらの膨大な石は、嫁ヶ島・川津・大井・大海崎などから切り出され、これらを運搬する労力は工事における全労働力の半分以上を占めたと考えられ、その多くは水路によって運ばれた。^[23]

内堀工事は亀田山と城山の中間に宇賀山を掘削して築かれた。現在、塩見縄手と呼ばれるところである。幅は堀のみのところで平均35間（約63m）、道路や屋敷地を含めると幅90間（約90m）、長さ130間（約234m）を測る。掘削土量は3万m³にも及び、その廃土で南・北田町・中原町の沼沢地を埋め立てたと言われた。



第8図 松江城測量図

初年度

第2年度

内堀工事

その廃土が盛土に使われていたことが本調査地でも判明した。これは調査地では黒色粘質土層の上層にある黄色土に相当する。宇賀山には、古代の横穴墓などが存在していた可能性があり、本遺跡やその他の松江城下町遺跡の盛土層から須恵器の裏片が出土するのはそのためと思われる。

初年度に着工した殿町・母衣町・中房町の武家屋敷が竣工し、一部の築城に携わる武士が移住を開始した。⁽³⁰⁾

第3～5年度 第3年度（1609年：慶長14年）には天守閣、大手口の枠形や正面の堀、石垣、三之丸御殿の建設が始まり、第4年度（1610年：慶長15年）には天守閣及び堀や三之丸が竣工し、第5年度（1611年：慶長16年）にすべての武家屋敷が完成し、富田城下からの移住が完了した。⁽³¹⁾

7. 城下町の町割についてと発達について

堀尾期

城下町の建設は松江城築城と並行して行われた。堀尾期（1607～1633年）の町割は「堀尾期松江城下町絵図」によると、松江城の本丸、二之丸の周囲に内堀を廻らし、その南側に三之丸や御殿部屋や花畠がある。そして外堀に囲まれた地区を「内山下」（現在の殿町・母衣町）と呼び、この一帯が武家町の中心となる。殿町は藩内で1000石以上の重臣が多く居住する地域で、特に本調査地を含めた松江城東側一帯は重臣の屋敷が並んでいた。また、東側内堀沿いと内山下の入り口となる京橋北詰には防衛のための勢溜がつくられ、そこから大手前へ抜けれる道筋に鉄砲衆を持つ重臣が配置されていることから、重要で主要な道筋であったと想像できる。

母衣町

母衣町は殿町の東側に位置し、戦場で母衣をつけることが許された比較的上級の武士が居住した。外堀沿いに堀尾因幡をはじめ、重臣の邸宅が数軒配置されている。500石～1000石級の中級家臣が外堀や大手通に面したところに配置され、100石～500石級の家臣がその周辺に多く居住する。

内中原町

内中原町は殿町の西側に位置し、内濠西側～四十間堀～京橋川に開まれた一帯を指す。ここは100石～500石級の家臣が多く居住し、京橋川対岸との通路に筋造橋やその北側に土塁をつくって防御性を高めている。

田町

「内山下」の外側にも武家町が広がり、田町、北堀町・奥谷町・外中原町・雑賀町などには中級から下級の武士が居住していた。田町は米子川の東側に位置し、東南隅には家臣で最も禄高の多い「堀尾修理」の屋敷地があり、東端にはそれに次ぐ「堀尾因幡」の下屋敷があり、町の北側・東側は沼地に面するところに土手を築いている。「堀尾修理」「堀尾因幡」の両屋敷を除くと、中級藩士の屋敷地が立ち並ぶ。⁽³²⁾

奥谷町・外中 奥谷町は、重臣の下屋敷や中級藩士、家老与力などの屋敷地、外中原町にも中級藩士や重臣原町・雑賀町の与力の屋敷地が存在した。また松平期には足軽町であった雑賀町は、絵図では東西に区割られているのに対し、実際には南北に区割られており、堀尾期には足軽の屋敷地であったかどうか定かではない。



第9図 堀尾期松江城下町絵図＜堀尾期＞
(島根大学附属図書館蔵)

町屋

町屋は外堀の外側に沿って配置されている「末次」周辺と、大橋を渡って南側の「白潟」周辺を基本に町割が行われている。「末次」周辺は、外堀南側に末次町、東側の米子川沿いには米子町、北堀沿いに北堀町を配置している。さらに末次町から南へ大橋を渡った「中町」「天神町」「駄町」へと南側に続いている。

寺院

寺院はその多くが「中町」「天神町」の東側、寺町周辺に集中して配置されている。城下の中では南側に街道からの出入り口付近に配置されている。寺院は戦国時代にしばしば陣屋として使われたように、戦時においては防衛及び戦力の集結場所として役割を果たすと考えられる。

このように松江城下町は町全体で防御する“懸構え”的構造で、身分・階級によって居住区分が別かれている。

京極期

京極期(1634～1638年)の町割は基本的に堀尾期の町割を踏襲しているものの、若干の手が加わっている。まず松江城東側の内中原町の中ほどにあった中堀を埋め立てて平地にしている。

次に三之丸にかかる橋が堀尾期では5本あったのに対して、京極期では3本になっている。『島根県史』によると京極期に三之丸の補修を行ったことから、それらに付随したものと思われる。

また、「末次」東端の「茶屋屋敷」とされていた所がなくなり、大きな屋敷剤となっている。加えてその東側にあった堀が埋め立てられている。

松平期

松平期になると町割が大きく変化する。まず堀である。大きな特徴として堀の幅が狭くなり、深さが深くなることが挙げられる。京極期まで四十間(約72m)あったとされる四十間堀も一部を除いて狭くなり、その代わりに深さを深くしている。同様に塩見繩手の堀や三之丸南側の堀、京橋川も堀底を浚えて深くしている。

また、堀尾・京極期の京橋川入口付近には、船の係留地と思われる場所がなくなっている。そして足輕町として雑賀町が成立するのもこの松平期になってからである。



第10図 宽永年間松江城家敷町之図
<京極期> (丸亀市立資料館蔵)



第11図 松江城下町絵図<松平期>
(島根大学附属図書館蔵)

8. 絵図による調査地の変遷

調査地は松江城の北東側、惣門橋の東詰めの内濠沿いに位置する。堀尾・京極・松平のいずれの時期も重臣の邸宅が配置されていた。

堀尾采女

堀尾期は「堀尾期松江城下町絵図」によると、まず北側に「堀尾采女」という名が見られる。この「堀尾采女」は「堀尾民部」の息子で、その「堀尾民部」は松江開府の祖堀尾吉晴の甥にあたり、「采女」自身は藩主忠晴とは又從兄弟の関係にある。『堀尾采女』は『堀尾山城守給帳』によると4000石、鉄砲衆50人が与えられ、藩内では「堀尾修理」(5000石)、「堀尾内幡」(4250石)に次ぐ3番目の禄高である。屋敷地は現在の殿町大通りまで広がり、調査地は屋

敷地内の西側半分にあたる。

「堀尾采女」邸の南側には「堀尾右近」邸があり、500石を給されている。

佐々九郎兵衛 京極期は『京極期松江城下町絵図』によると、「佐々九郎兵衛」という名が見られる。「佐々九郎兵衛」は小姓として主君忠高の側にいて、京極氏が松江に来るとともに、禄高も550石から8100石となり、2年後には家臣団改革で1万石となつた重臣で、忠高が最も信頼した家老の一人であった。^[40] その「佐々九郎兵衛」は忠高の死後、京極氏が松江から播磨龍野に移り、その後、讃岐丸亀に移封された時、丸亀城の先手城受取りの任に当たっている。^[41]

乙部九郎兵衛 松平時代の『文久年間城下絵図』では「乙部九郎兵衛」が4250石で入っている。「乙部家」は松江藩松平氏初代藩主直政に仕えた可正に始まる。可正の父勝政が小早川秀秋に仕えた後、結城秀康に800石で召抱えられ、嫡子である可正是300石を賜る。その後勝政の死後、可正が跡を継ぎ800石となり、大坂の陣では秀康の子忠直に従って大きな武功を立て、一躍名を馳せた。その後、忠直の弟直政の御附家老となり、直政に従って大野・松本を経て松江に入る。人府後、5000石を賜り、大膳家・柳多家・朝日家・三谷家・神谷家とともに「代々家老」(代々家老になる家)を務める家柄となり、三谷家・神谷家と合わせて仕置役となつた。また、京極氏より松江城の受取り役にもなり、その後代々家老として松江藩を明治まで支えた。^[42]

朝日丹波 「乙部」家の南側は「朝日」家である。「朝日」家は松江入府の頃は「朝日丹波重政」といい、遠江国の生まれで、初め狩田千助と称して徳川家康に仕え、武田氏との戦いで戦功をあげ、家康から「朝日」という名を賜つた。後に結城秀康の配下となり、名を「丹波」と改め、松平直政の守役となつた。その後直政の配下となり、松江移封後は7000石を賜つた。朝日家は乙部家らとともに代々家老を務める家柄となるが、中期頃は振るわず、7代藩主治郷の治世に郷保が出て、御立派の改革と呼ばれる藩政改革の中心的な役割を果たすようになる。^[43]

絵図による調査地は以下のよう変遷をたどる。

調査地	堀尾期	京極期	松平期
北屋敷	堀尾采女	佐々九郎兵衛	乙部九郎兵衛
南屋敷	堀尾右近		朝日丹波

明治維新

明治維新になると、版籍奉還により藩主松平定安が藩知事に任命され、松江城下から出て「乙部」家の屋敷に住むようになり、^[44] 乙部家は石橋総門の下屋敷を本家とした。その後、廃藩置県により定安が藩知事を解任され、東京に移住することになると、



第12図 堀尾期絵図
(調査地拡大)



第13図 京極期絵図
(調査地拡大)



第14図 松平期絵図
(調査地拡大)

調査地付近は細かく分筆され、現在の町割に近い状態になった。「松江市街二分間図」(明治6年)や『古券人帳』によると、家老屋敷があつた殿町西側では屋敷地ごとに分筆されたところもあり、町屋が多くなっていく。また現在、調査地東側にある細い道(中ノ丁)は家老屋敷のほぼ中央、屋敷地を東西に分断するように南北に走っているが、この「二分間図」にも記載されていることから、屋敷地の分筆時にできたものと思われる。

註

- (1) 松尾 寿『松江ふるさと文庫5 城下町松江の誕生と町のしきみ—近世大名堀尾氏の構いた都市デザイン』松江市教育委員会 2008年
- (2) 「松江市誌―市制施行100周年記念―」松江市 1989年
- (3) 桃好裕『出雲私史』博広社 1892年
- (4) 『島根縣史 尼子毛利時代 下』島根縣内務部島根縣史編纂掛 1929年 ※ただし、本書に引用した事項の信憑性については、諸説があるものである。
- (5) 野津詰一郎『松江市誌』名古山出版 1941年
- (6) 『日本城郭体系11 鳥取・鳥根・山口』新人物往来社 1980年
- (7) (6)と同じ
- (8) (6)と同じ
- (9) 島田成矩『松江城物語』山陰中央新報 1985年
- (10) 山根正明『松江市ふるさと文庫6 堀尾吉晴 松江城への道—浜松、富田、松江、城曾請の軌跡—』松江市教育委員会 2009年
- (11) (10)と同じ
- (12) 井上寛司「中世西日本海地域の水運と交流」「海と列島文化 第2巻日本海と出雲世界」小学館 1991年
- (13) 岡弘三「中世のプレ松江」「松江藩の時代」山陰中央新報 2008年
- (14) (10)と同じ
- (15) (1)と同じ
- (16) 松江歴史館学芸員 西島太郎氏のご教示による。
- (17) (6)と同じ
- (18) (10)と同じ
- (19) (10)と同じ
- (20) (15)と同じ
- (21) (10)と同じ
- (22) 河井忠親『松江城』松江今井書店 1967年
- (23) (4)と同じ
- (24) (9)と同じ
- (25) (15)と同じ
- (26) (4)と同じ
- (27) (4)と同じ
- (28) 『史跡松江城上御殿跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 1987年
- (29) (4)と同じ
- (30) (4)と同じ
- (31) (4)と同じ
- (32) (4)と同じ
- (33) (4)と同じ
- (34) (4)と同じ
- (35) (15)と同じ
- (36) 西島太郎『松江市ふるさと文庫8 京極忠高の出雲國・松江』松江市教育委員会 2010年
- (37) (36)と同じ
- (38) (36)と同じ
- (39) (15)と同じ
- (40) (36)と同じ

- (41)『香川県史 年表 別編Ⅱ 近世』香川県 1991年
- (42)・玉木 熊『乙部家老米原一松江藩を支えた家老』2009年
- (43)・伊原古々園『出雲國人物誌』伊原博士顕彰会事務局 1957年
- (44) (43)と同じ

参考文献

- ・乾 隆明『松江藩の時代』山陰中央新報社 2008年
- ・乾 隆明『松江ふるさと文庫3 松江藩の財政危機を救え－ふたつの藩政改革とその後の松江藩』松江市教育委員会 2008年
- ・林 正久『松江平野の地形とその形成過程』島根大学教育学部教授『絵図の世界－出雲国・隱岐国・桑原文庫の絵図－』島根大学附属図書館編(有)ワン・ライン 2006年
- ・広江耕史「島根県における中世土器」『松江考古第8号』松江考古学講話会 1992年
- ・『島根県遺跡地図1（出雲・隱岐編）』島根県教育委員会 2003年
- ・『出雲・隱岐の城跡』島根県教育委員会 1998年
- ・『元城跡』松江市教育委員会 1982年
- ・『一般国道9号線松江道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書X（中竹矢遺跡）』島根県教育委員会 1992年
- ・『石台遺跡』島根県教育委員会 1986年
- ・『天満谷遺跡』「北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1987年
- ・『黒田館跡』松江市教育委員会 1984年
- ・『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 1988年
- ・『黒田町遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1995年
- ・『二反田古墓』松江市教育委員会 1987年
- ・『岩穴平遺跡 稲葉城跡』松江市教育委員会 1987年
- ・『第2卸商業団地造成工事に伴う 袋尻遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1998年
- ・『ソフトビジネスパーク建設に伴う大佐遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1999年
- ・『上浜・J1号墳他発掘調査報告書』松江市教育委員会 1993年
- ・『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社 1997年
- ・『大手前通りの歴史を調べる会』調査結果報告書』大手前通りの歴史を調べる会 2004年

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

松江市によって計画された松江歴史館整備事業(当時、松江市歴史資料館(仮称)整備事業)は、主に近世、近代の歴史資料を中心に収集、保管、展示し、市民や観光客に城下町松江の歴史や文化に親しんでもらうことを目的とするもので、平成14年度基本準備委員会が発足し、その建設予定地は松江城の東側、旧市街地の一角とされた。

この予定地は松江藩の初期から幕末まで、歴代の重臣等が屋敷地を与えられた区画の一部であることが、絵図史料によって知られている場所であった。しかし、当時は開発により既に屋敷地の遺構は消滅しているのではないかという見解もあった。このため遺跡の有無を確認するため、開発予定地の北西にあった市有地において平成18年2月から試掘調査を実施した。結果、城下町の複数の遺構面を確認し、松江城下町遺跡(殿町287番地)と命名した。この遺跡の取扱いについて関係部局と市教育委員会は協議を行ったが、計画変更は困難との結論に達した。平成18年4月12日に文化財保護法上の手続きがなされ、島根県教育委員会から「工事着工前に発掘調査を行うこと」との回答を受け、平成18年4月から財団法人松江市教育文化振興事業団により、市有地で計画予定地の約3分の1にあたる範囲において発掘調査を実施することとなった。この調査は平成19年3月までの約一年間を費やし完了した。この後、島根県教育委員会と遺跡の取扱い協議を行い、平成19年3月30日に「記録保存はやむを得ないこととする」との回答を受けた。

一方この間、建設予定地の残りの部分の用地買収、家屋解体が進み、平成19年4月から解体の終了した土地について随時、試掘調査を実施している。この結果、南側の予定地についても遺跡が広がることが確認されることとなり、松江城下町遺跡(殿町279番地外)として、平成19年8月9日文化財保護法上の手続きがなされた。島根県教育委員会から「工事着工



第15図 開発範囲図 1:5000

前に発掘調査を行うこと」との回答を受け、引き続き財団法人松江市教育文化振興事業団により発掘調査が行われることになった。

この二つの調査は、試掘調査などの限られた範囲での調査を除くと、松江市としては初めての大規模な松江城下町の発掘調査であった。発掘調査を進めていくと、複数の遺構面は城下町造成当時の堀尾期から始まって、嵩上げされながら現代に至ったことが判明し、嵩上げごとの多数の遺構、遺物も検出され、現存状況が大変良好であることも分かった。また、通常大手前線（城山北公園線）の拡幅工事でも城下町遺跡の遺構が確認されつつあり、松江城下町遺跡の存在は一躍注目を集めることになった。

のことから、県内外の有識者及び島根県教育委員会等の指導を受けながら、発掘調査を続けるとともに、複数回の現地見学会や松江市立鹿島歴史民俗資料館、松江郷土館での調査成果と遺物の展示会、広報資料の配布、学校への山前授業など、広く遺跡や遺物の広報活動を行った。

一方、この調査状況及び成果に対して島根考古学会、島根史学会、日本考古学協会、文化財保存全国協議会の関係団体の他、市民団体からも島根県教育委員会教育長、松江市長、松江市教育委員会教育長に対して遺跡の保存等を求める要望、あるいは再垂望という形で相次いで文書が提出された。この遺跡保存の要望に対応すべく、松江市教育委員会は島根県教育委員会及び開発部局と協議を重ね、歴史館建物を嵩上げする工事設計の変更を行い、遺構の大半を地下保存することとした他、遺構の一部の歴史館床面下での地下展示、上層の剥ぎ取り断面、屋敷境遺構の展示等を行うこととし、遺跡保存を求める各団体に回答を行った。

また、松江市議会に対しても、「歴史館建設に反対する陳情書」と「歴史館建設促進にかかる陳情書」が提出された。この二つの陳情は8月18日臨時議会において「歴史館建設に反対する陳情書」については不採択、「歴史館建設促進にかかる陳情書」については採択とされた。平成20年8月15日に発掘調査を終了した松江市教育委員会は、島根県教育委員会へ遺跡の取扱いについて協議を行った。これに対し島根県教育委員会からは補足調査を求める回答が届き、継続して調査を行うこととなった。

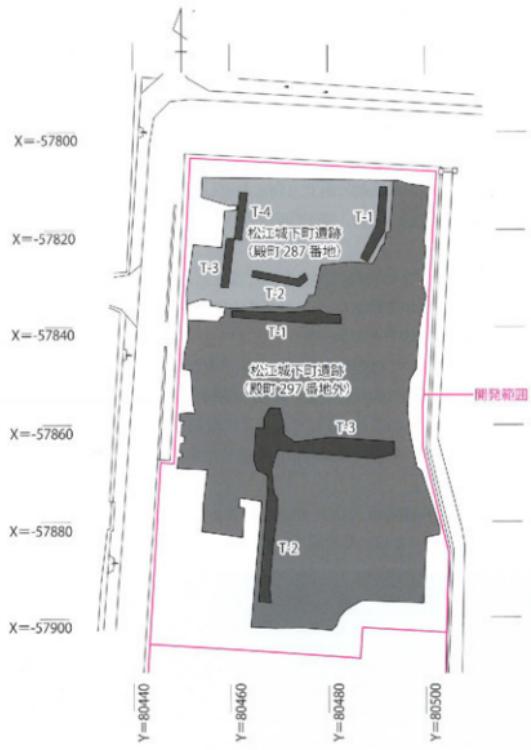
こうした中、調査地南側の南屋敷部分で最終面としていた遺構面の下層にさらにもう1つの遺構面が存在することが分かり、この部分については松江市教育委員会文化財課が直管で発掘調査を行うこととなった。

平成20年11月27Hに補足調査を完了し、平成20年12月8H、再度取扱い協議を行った。この協議で松江市教育委員会は、「最終遺構面について、工事施行に際してあらかじめ保護盤上を設けること、及び歴史資料館の計画高を22cm嵩上げすることにより、極力地下保存する」、「調査成果について、遺構の一部を移設展示するとともに、CGやビデオ等最新の技術を使って解りやすい展示となるよう工夫を凝らし、城下町の姿を復元・学習できるように努める」、「近世城下町への关心を高めるとともに調査報告会やシンポジウム等を通じて、発掘調査の対象や城下町遺跡の保存・活用について、市民、研究者をはじめ関係者とともに検討を進めること」という意見書を提出した。

平成20年12月11日島根県教育委員会から「建物下に保存される遺構や現状保存区域については工事に際して影響が出ないよう十分配慮すること」、「遺跡の調査成果については、市民の关心も高いことから、種々工夫をしながら広く展示等の活用をすること」の意見が付いた回答が出された。松江市教育委員会は開発部局に、事業の実施にあたって「分配権するよう通知を行い、文化財保護法上の手続きについては完了することとなった。こうして松江歴史館建設は実施されることとなり、同12月工事に着手している。

註

- ・追加調査の経過は第6章に詳述する。
- ・地下保存の範囲については本章第4節と第17図を参照されたい。



第16図 調査範囲及び調査区位置図 1:1000

第2節 松江城下町遺跡（殿町287番地）の試掘調査と発掘調査の経過

試掘調査

松江歴史館建設予定地内の北西にあたる日銀松江支店長舎跡地において、平成18年2月13日から平成18年3月17日まで試掘調査を行った。調査は建物の基礎や解体等の影響が少ない場所を選んでトレンチを4本（T-1～T-4）設定し行った。

T-1は敷地内の東端に南北方向に設定した。トレンチ中央部分は解体時の影響と思われる搅乱が大半を占めるが、南北両端で造成土と思われる山土を確認した。明確な遺構は検出されなかったが、肥前磁器や在地陶器の布志名焼などが出土している。

T-2は敷地内の南端に東西方向に設定した。トレンチ東端から礎石と思しき大形の石が検出され（L=1.50m付近）、中央部分からは廃棄土坑と思われる掘り込みを確認した。遺物は在地陶器の布志名焼や肥前磁器などが出土している。

T-3は敷地内の西端に南北方向に設定した。トレンチ北端から礎石と思しき大形の石が検出され（L=1.80m付近）、肥前陶磁器類や在地陶器のほか、下層付近から漆器の椀と蓋が出土した。

T-4はT-3の北側に南北方向に設定した。トレンチ中央に表層から掘り込まれた廃棄土坑らしき遺構が複数あり、トレンチの大部分を占めた。下層には山土の盛土層が見られたが、明確な遺構は確認できなかった。

試掘調査においては明確な遺構を検出できなかったが、遺構の可能性があるものは確認できた。また、江戸時代の比較的古い時期の遺物も出土した。

なお、平成18年3月16日には松江市教育委員会による指導会を行い、どのトレンチも搅乱が見られるが、松江城築城時に山を削した土の盛土の可能性と礎石の可能性を指摘された。

発掘調査

発掘調査は日銀松江支店長舎跡地を主とする松江城下町遺跡（殿町287番地）について、平成18年4月18日から平成19年3月17日まで行った。



松江城下町遺跡（殿町287番地）発掘調査の指導会の様子

調査は廃土処理の関係上、東西に2分割して行い、最初に西側から掘り始め、東側に廃土を置く方法をとった。西区は複数の遺構面と土坑や石積方形土坑、木枠方形土坑などが検出され、肥前陶磁器や土師器皿などが多く出土した。

東区の調査は1月初めから行った。調査の結果、江戸時代初頭の遺構面と幕末から明治にかけての遺構面が確認され、この2つの遺構面の間からも遺構が検出された。江戸時代初期の遺構面（平成18年当時はIV期と呼称し、本報告書では最終遺構面としている）は、旧表土と思われる黒色粘質土の上に山土を盛し形成された遺構面で、木枠方形土坑や礎石などを検出し、肥前陶器や中国磁器、木製品などが出土した。出土した陶磁器類から江戸時代初期の遺構面と判断した。幕末から明治にかけての遺構面（平成18年当時はI期と呼称し、本報告書では上面の遺構面としている）は同じように山土を盛土して形成された遺構面で、土坑や石積溝などを検出し、肥前陶器や在地磁器などが多く出土したことから、遺構面の時期を判断した。

この2つの遺構面の間からも石積方形土坑や石列、礎石などが検出され、肥前陶磁器や在地陶器、土器などが出土したが、調査当時に遺構面の確証が得られず、複数の遺構面が存在するとの推測に留まった。

以下は発掘調査に関する経過を時系列ごとに述べておく。

平成18年8月31日に島根県教育委員会を交えての指導会を行い、松江城下での大規模な発掘調査は稀なことから、綿密な調査の必要性と現地見学会の開催を行うよう指導を受けた。また、同年10月18日には国立米子高等専門学校の和田嘉有教授による指導会を行い、検出された礎石立ちの角柱（SS03・04）についての意見を伺い、この角柱は門柱の可能性があり、本遺構が北側を意識したつくりになっているとの指摘を受けた。

同年10月21日には大手前線拡幅予定地内の松江城下町遺跡（だるま堂跡地）と共に現地見学会を開催し、延べ100人近い見学者が集まった。

第3節 松江城下町遺跡（殿町279番地外）の試掘調査と発掘調査の経過

試掘調査

松江歴史館建設予定地内において、平成18年度に発掘調査を行った松江城下町遺跡（殿町287番地）以外の南側を主とした範囲においても遺構の存在が疑われたため、遺構有無確認の試掘調査を平成19年4月9日～8月9日に行った。調査は家屋解体が終了した場所にトレチチを2本（T-1・T-2）を設定し行った。

以下、調査経過と概要を述べる。

松江城下町遺跡（殿町287番地）の南端に近接する場所の東西方向にT-1（24m×2m）は設定した。ここからは2面以上の整地面（遺構面）を確認することができ、礎石と思しき大形の石や石列、廐棄上坑などを検出した。遺物は肥前陶器や中国製磁器、土師器皿などが出土した。

T-2（41m×2m）は松江歴史館建設予定地内の南側の範囲中央付近に南北方向に設定した。ここからは4面の整地面（遺構面）を確認し、水路とみられる石積溝や屋敷境の石積溝などを検出した。遺物は17世紀前半の肥前陶器や中国製磁器、土師器皿などが出土した。

T-3（25m×3m）はT-2に直交する形に設定した。ここでは明らかな整地面を見つけることはできなかったが、旧表土と思われる黒色粘質土を検出した。遺物は下層から土師器皿が出土している。

その他、平成19年7月25日に島根県教育委員会、同31日には島根大学の渡邊貞幸教授を交えての調査指導会を行った。

発掘調査

発掘調査は松江城下町遺跡（殿町279番地外）発見の手続きがなされた後の平成19年8月10日から平成20年8月14日まで行った。なお、調査地の現況は、住宅等の建物の解体・撤去がすべて終了しておらず、解体工事の進捗状況に合わせて調査を行わざるを得ない状況であった。このため、本来は座標による調査グリッドを設定すべきであったが、現存する建物の区画及び更地部分ごとに調査区を設定して行った。実際に設定した区画は、松江城下町遺跡（殿町287番地）と松江城下町遺跡（殿町279番地外）の北側が同一遺構（屋敷）となることから1区とし、その他を2～8区と設定していく。調査はまず、調査地の中央付近で屋敷地を区切る東西方向の屋敷境の石積溝が検出され、絵図面にも見られる北側の屋敷と南側の屋敷が明確に別かれていることが分った。各屋敷が生活の場として機能した遺構面は、いずれも4面見つかっており、第4面の下からは、城下町建設時の飯場とも思われる鍛冶の痕跡を現す面も見つかっている。なお、各面において多くの遺構、遺物を検出しているが、それらの詳細は後述する第4章（北屋敷）、第5章（南屋敷）、第6章（南屋敷第4遺構面）、第7章（第4遺構面以前）を参照して頂きたい。

以下、発掘調査に関する経過を時系列ごとに述べておく。

平成19年7月25日に島根県埋蔵文化センターの西尾克己氏、守岡正司氏、阿部賢治氏による指導会を行う。調査地の中央で検出した石積溝は屋敷境を示す遺構との指摘を受けた。

同年7月31日に島根大学の渡邊貞幸教授による指導会を行う。

同年8月5日に島根考古学会の要望により、現場見学会を行い、約50人の参加者が集まる。

同年9月21日に（財）米子市教育文化事業団の佐伯純也氏、津和野町教育委員会の宮田健一氏、島根県埋蔵文化財調査センターの西尾氏による指導会を行う。南の屋敷で検出している礎石列は朝日家の主屋ではないかとの指摘を受ける。

同年 19 年 10 月 10 日に大阪城天守閣の松尾信裕館長、島根大学の渡邊教授、島根大学ミュージアムの会下和宏准教授らを交えての調査指導会を行い、北屋敷第 1 遺構面の大形石積方形土坑が地下蔵である可能性と屋敷境溝が造成の度に嵩上げしていることが分かるので土層の剥ぎ取りを行うようにとの指導を受けた。

同年 11 月 16 日～平成 20 年 2 月 3 日まで鹿島歴史民俗資料館で「松江城下を掘る」展が開催され、松江歴史館予定地内及び大手前線拡幅予定地内の調査成果と遺物を公開した。

平成 20 年 1 月 12 日に現地見学会を開催し、延べ 100 人の参加者が集まった。

同年 3 月 4 日には島根大学の酒井哲弥准教授による指導会を行い、自然堆積層と人為的な造成上の違いを地質的な見地から小範囲の浸水の痕跡が見られる等の指導を受けた。

同年 4 月 4 日に島根大学の小林准士准教授に出土文字資料の指導を受けた。

同年 4 月 19・20 日に南屋敷第 1 遺構面から出土した祈祷具（箱）を松江郷土館で速報展示して公開し、述べ 430 人の見学者があつた。

同年 5 月 31 日には島根考古学会の要望により、現地見学会を開催した。同日、講演のため来松されていた大阪城天守閣の松尾館長が見学され、最下面の遺構の保存状態が良いことから、建築の専門家に見てもらうよう指導を受けた。

同年 8 月 8 日に松江市文化財保護審議会委員の建築（足立正智氏・和田嘉宥氏）、近世史（小林准士氏・乾隆明氏）、考古学（渡邊貞幸氏）の専門家による調査指導会を行う。

同年 8 月 9 日に現地見学会を開催し、延べ 110 人の参加者が集まった。

同年 8 月 15 日には現地指導会を行い、島根県教育委員会から庭園・建築などの専門家による遺跡の評価を受けるようにとの指導を受ける。

同年 8 月 22 日に立正大学の坂詰秀一名誉教授、池上悟教授による現地視察があり、堀尾期の遺構の保存状態が極めて良いこと、城下町の都市計画の様子が分かる貴重な資料であるとの指摘を受ける。

同年 9 月 1 日に日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会による現地視察があった。

同年 9 月 3 日には京都造形芸術大学の仲隆裕教授による現地指導会を行い、庭園の専門家



松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）指導会の様子

の見地から遺構の評価を受ける。その際、検出した池は改修された可能性があることや庭園様式が戦国期から江戸期へ変化する過渡期となるものなので貴重な資料であるとの指導を受けた。

同年9月6日に東北芸術工科大学の田中哲雄教授による現地指導会を行い、近世考古学の立場から遺跡の評価を受ける。その際、池の護岸は自然石風の石垣と割石の石垣と2時期あるのではないかとの指導を受けた。

同年9月8日には日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会の近藤英夫委員長、橋口定志事務局地長による現地視察がある。

同年9月13日に現地見学会を開催し、延べ70人の参加者が集まる。

同年10月1日に松江市教育委員会による南屋敷最下面の追加調査（調査時は第5遺構面としていたが、本報告書では第4遺構面として扱っている）を開始する。

同年10月4日に現地説明会を開催し、延べ170人の参加者が集まる。

同年11月7日に岡山市教育委員会の乗岡実氏、鳥根県古代文化センターの西尾克己氏を交えての現地指導会を行う。

同年11月10日に島根大学の小林准教授による現地指導会を行う。

同年11月13日に大阪城天守閣の松尾館長、島根大学の渡邊教授、島根大学の酒井准教授、松江市文化財保護審議会委員の乾氏、足立氏を交えての現地指導会を行う。

同年11月15日に現地見学会を開催し、延べ160人の参加者が集まる。

また、同日、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会の橋口氏、馬淵和雄幹事、富山直人幹事の現地視察が行われる。

11月27日、発掘調査が終了する。



松江城下町遺跡（殿町279番地外）現地説明会の様子

第4節 工事の変更と保存範囲

同章第1節「調査に至る経緯」に概要を示したとおり、最下層で確認された城下町形成当初の遺構面についてはその重要性に鑑み、工事計画を変更して遺構の大半を地下保存することとなった。ここでは工事の変更にかかる経緯について述べる。

まず、歴史館建設設計については、平成17年3月に基本計画が決定され、翌年の3月には基本設計、次いで平成20年3月には実施設計が決定された。この間、松江市においては初めてとも言うべき近世城下町の発掘調査が、平成17年12月の試掘調査の後、平成18年4月から本格的に開始された。

当初、現市街地下では大半の遺構がすでに破壊されているだろうという大方の予想であったが、調査が進むにつれてその予想を大きく覆す成果が次々と上げられることとなった。特に調査終盤に確認された礎石建物跡や庭園遺構の保存状態の良さは周囲の注目を集めることとなり、これにより、各方面から遺跡保存の要望が提出されることとなった。

まず、平成20年7月1日に島根考古学会から提出された要望書を始まりとして、同年8月1日同じく島根考古学会から再要望書が、さらに同月8日には島根史学会からも要望書が提出された。また市民団体からは歴史館建設反対にかかる陳情書も寄せられるなど、遺構の保存を望む意見が松江市に対して多数寄せられた。

これに対して、事業主体である松江市観光振興部は、松江市教育委員会との協議の結果、展示施設の設計を変更し、最下層の遺構の一部を見せる地下展示施設の増設、屋敷境の平面表示設置を行うこととしたうえで、①建物の構造上基礎杭が不可欠であること、②床面の嵩上げはバリアフリーに支障が出るうえ景観条例にある屋根の高さの制限に抵触し、要望に沿うような全体的な計画変更是困難である旨を回答した。

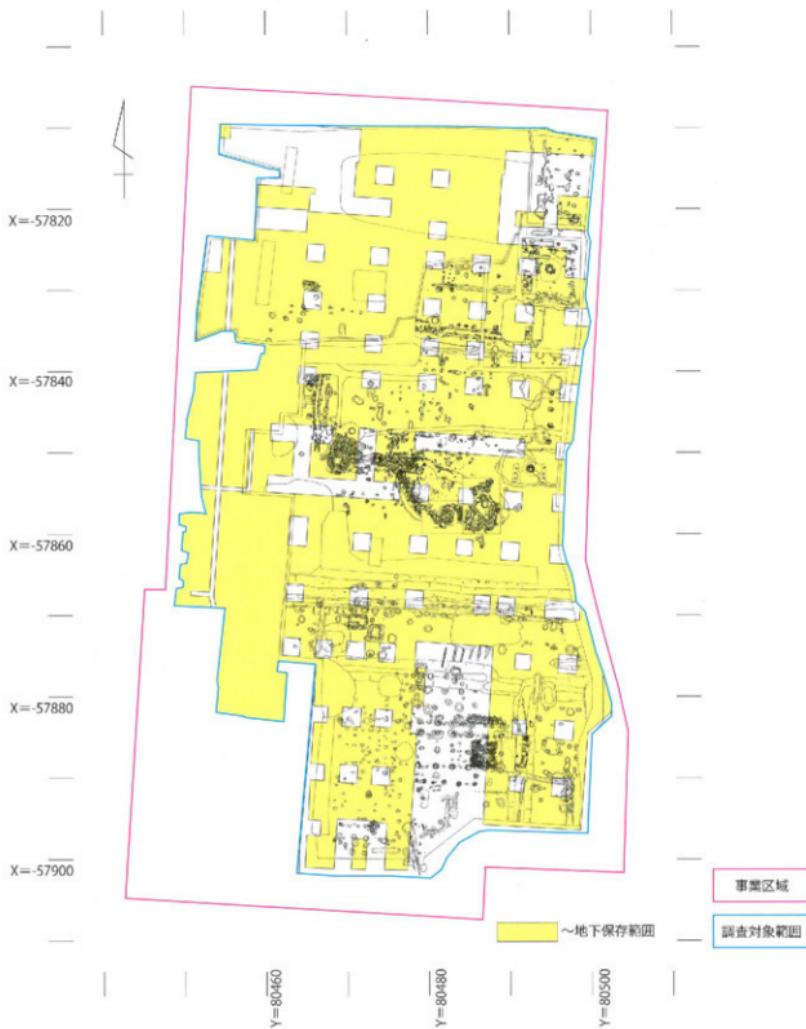
しかし、その後も遺跡保存の要望は強く、平成20年9月8日には市民団体の城下町松江の景観と町づくりを考える会及び松江城大手前通り拝顔に反対し美しい町並みを保存する会から、また同月13日には文化財保存全国協議会から遺跡保存にかかる要望書が提出され、各方面から遺構の保存に努めるよう意見を受けることとなった。これらに対し、松江市観光振興部、松江市教育委員会、島根県教育委員会において協議を重ねた結果、遺跡保存に最大限配慮し、かつ景観条例とも整合を取って、整備地盤を現行計画から22cm嵩上げして遺構の約7割を地下保存する設計変更案を平成20年9月25日の記者発表で表明した。なお、この間新たに調査区南側の屋敷地において発見された最下層の遺構面についても追加調査（第6章）することを併せて表明している。

しかしながら、地下保存決定後も平成20年10月10日に城下町松江の景観と町づくりを考える会及び松江城大手前通り拝顔に反対し美しい町並みを保存する会から陳情書が、同月22日に島根考古学会から、同月24日には日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会から要望書が提出され、さらなる計画の見直しが求められた。このため、関係機関で協議を重ねたが、これ以上の設計変更是目標とする歴史館の展示能力や機能が確保できなくなるなど、遺跡の保存と歴史館建設の意義を総合的に判断して、平成20年11月28日に市長会見を行い、上記の計画のとおり歴史館建設を実施することを表明している。

なお、最終的な取り扱いは同章第1節で述べたとおり、平成20年12月11日に島根県教育委員会からの回答をもって、工事着手に至っている。

これにより、最終遺構面から30cmの保護層を真砂上により確保したうえで、調査対象区域

(3,890m²)に対し、地下ピット、地中梁、基礎杭により止むを得ず掘削が及ぶ範囲(995m²⁽⁴⁾)を除いた2,895m²(調査対象区域に対して約74%)が地下保存されることとなった(第17図)。また、掘削される範囲の礎石等については持ち帰り、将来においても検証ができるよう保管している。



第17図 最終遺構面の地下保存範囲 (1/600)

註

- (1) 調査時に設定した区名の表記については、煩雑になることから本報告では記載していない。
- (2) 島根考古学会「松江市歴史資料館建設に伴う松江城下町遺跡の保存と活用に関する要望」についての経緯『島根考古だより第 95 号』2008 年 8 月、大橋泰夫「松江市歴史資料館建設に伴う松江城下町遺跡の保存と活用に関する活動について』『島根考古学会誌第 27 集』島根考古学会 2010 年 3 月に詳細は掲載。
- (3) 日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会「埋文委ニュース第 54 号」「有限責任中間法人 日本考古学協会会報 № 165」有限責任中間法人日本考古学協会 2008 年 12 月、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会「埋文委記録」「有限責任中間法人 日本考古学協会会報 № 166」有限責任中間法人日本考古学協会 2009 年 3 月 に詳細は掲載。
- (4) 調査範囲における最終遺構面に影響を及ぼす面積を示す。
- (5) 事業区域面積 (5,343.43m²) に対しては約 81%が地下保存されている。

第3章 殿町 287 番地調査（北屋敷）の概要

第1節 基本層序：上層堆積状況と遺構面

殿町 287 番地 本調査地は松江歴史館建設予定地内の北西部約 945m²にあたり、日本銀行松江支店が大正 7 年（1918）に松江市殿町に開設して以降、平成 15 年まで日本銀行松江支店長舎として使用されていた。本調査地は平成 17 年度に財團法人松江市教育文化振興事業団が住宅解体後に建物の基礎の影響が少ないと想われるところの試掘調査を行った。その結果、明確な遺構の痕跡は確認できなかったものの、上層からは在壇陶器の布志名焼や土器類、瓦など、下層からは肥前の大河内焼や土器類、漆椀などを含む木製品が出土した。

これらの試掘調査の結果に基づき、平成 18 年度は敷地内の南東側にある庭部分を除いて全面調査を行った。この南東側の庭部分についてはこの時点では、樹木や灯籠等の取り扱いについて協議中であったために、調査ができなかつた。

本調査は調査区を東西 2 分割し、最初に西側から調査を行い反対側の東側に廃土を積み上げて、西側の調査が終了すると、そこを埋め戻し東側の廃土を西側に積み上げる方法で行った。

発掘調査の段階で確認できた遺構面は上面と最終面の 2 面で、調査当時に複数の遺構面があるとの認識がなかつたため、上面と最終面との間で検出した遺構に関しては随時精査を行つた。

基本層序 そして基本層序となる土層断面の位置は堆積状況が確認しやすい南東側部分の壁面（第 19 図：A-A'）とし、十層断面図（第 18 図）を上層から下層へ向かって説明する。また、これ以後の遺構面の記述については上面の遺構面、最下層の最終遺構面、その間に検出された遺構群のある中間層とした。

発掘調査はまず重機による表上層と搅乱層の掘削から行つた。この掘削部分は第 18 図の 1 ~ 14 層までの礫や炭が混じた層で、近現代の陶磁器類や瓦のほか、陶製の土管やガラス瓶などが出土した。これらの層や遺物は支店長舎に関係するものと判断した。

上面の遺構面 これらの表上層や搅乱層を除去すると、東側中央部分を除いてほぼ全域に黄色や橙黄色の山土が確認され、その上面から廃棄土坑や石列などが検出されたため、遺構面と判断した（上面の遺構面）。この遺構面は第 18 図では 16 ~ 18 層に相当し、21・27 層の上に 0.15 ~ 0.50m 程度盛りして形成しており、標高では 2.10 ~ 2.30 m を測る。

中間層 中間層からは石積方形土坑や石列、礎石を伴う建物跡などを検出したが、現地調査の段階では遺構面として捉えることができなかつた。整理段階で遺構の検出レベル（1.50 ~ 1.80m）や周囲の土層断面図等を検討した結果、複数の遺構面が存在する可能性も考えられたが、現地で把握できていないため、遺構面として記述はしなかつた。

最終の遺構面 次に遺構面として確認できたのは木枠方形土坑や廃棄土坑、石列などが検出された面を遺構面（最終遺構面）とし、標高 1.20 ~ 1.00 m を測る。この遺構面は第 18 図の上層断面では、89 層の上に 80 層を約 30cm 前後盛土をして遺構面を形成していた。

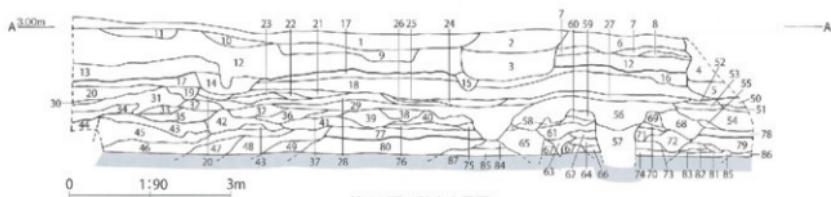
第 18 図での最下層である 87 層の黒色粘質土上面の標高は 0.88 ~ 0.94m を測り、広範囲で確認された。この黒色粘質土層内にはアシ・ヨシなどの植物の根が多く含まれ、この層上面からは流木と思われる木が出土したが、遺構は確認されず、陶磁器類なども出土しなかつた。この層は地下水位が高く、木質が遺存しやすいため、この周辺が湿地帯の土層であった可能性が高い。

本調査区の上層堆積を観察する中で、生活の痕跡を示す炭や炭化物を含んだ生活層を特定することができなかつたため、現段階では遺構が検出された盛上層上面を遺構面としている。

また、盛土による嵩上げが繰り返されていることが確認できた。調査結果から、江戸時代初期の標高が最終面の1.20～1.00mと考えられ、現地表面の標高が2.80m前後を測るため、約400年間にわたって1.80m前後の土を何度も嵩上げしていたことになる。『島根縣史』(1929年)によると松江城下町は盛土によって造成されたと記されており、盛土の様相は殿町279番地外の調査や他の松江城下町遺跡発掘調査でもそのことが確認されている。周辺の地元住民の方のお話によると、つい最近まで、大雨などによる浸水後、増改築する際には床面を嵩上げするとお聞きした。盛土による嵩上げは江戸時代から現代まで通じて行われていたことになる。



基本層序土層断面



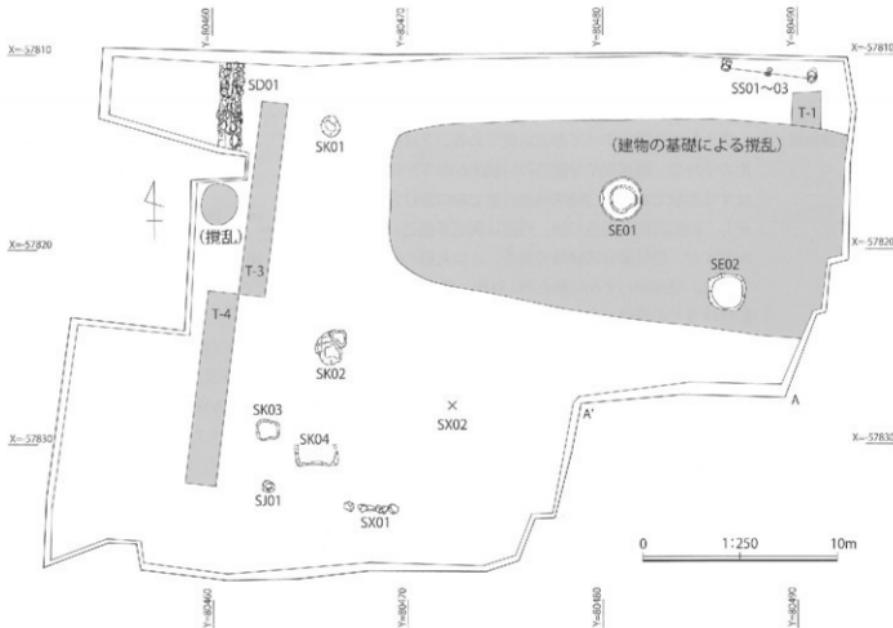
第18図 基本土層図

1. 黒色土+絆色砂質土(板土)	21. 黄褐色土	41. 細緻褐色土	61. 黒色土	81. 黄褐色土
2. 黑色土+絆褐色砂質土+縞	22. 灰色土	42. 稚白土	62. 黃白土	82. 稚白色土
3. 細緻褐色土(縞を含む)	23. 細緻褐色土質土	43. 稚褐色土	63. 細緻褐色質土	83. 細緻褐色土(山土)
4. 稚褐色土	24. 細緻褐色土	44. 細緻褐色土	64. 細緻褐色質土	84. 細緻褐色白土
5. 細緻褐色土(やや粘質)	25. 灰色土	45. 黄白色土	65. 稚褐色土質土(ブロック混じり)	85. 細緻褐色粘質土(シルト)
6. 稚褐色土	26. 稚白色土	46. 細緻褐色土	66. 稚褐色細粒粘質土	86. 細緻褐色粘質土(シルト)
7. 細緻褐色土	27. 灰色土(山土)	47. 細緻褐色土	67. 稚青灰色土	87. 細緻褐色質土(シルト)
8. 黑色土(縞を含む)	28. 灰褐色土	48. 細緻褐色質土	68. 細緻褐色土質土(縞混じり)	
9. 稚褐色土(縞を含む)	29. 灰褐色土(山土)	49. 稚褐色土	69. 黃褐色土	
10. 稚褐色土	30. 灰色土	50. 黄色彩質土	70. 黑色土	
11. 黄褐色土(黒土)	31. 細緻褐色土	51. 黄白色沙質土	71. 細緻褐色土	
12. 稚褐色土(黒土)	32. 稚褐色土	52. 稚褐色土	72. 稚褐色土(縞混じり)	
13. 稚褐色土(やや明るめ)	33. 黑色土	53. 稚白色土	73. 黄白色土	
14. 細緻褐色砂質土	34. 稚褐色土(縞混じり)	54. 稚褐色土(やや粘質)	74. 灰色土	
15. 細緻褐色土	35. 灰色土	55. 黄褐色土	75. 稚褐色急土	
16. 黑色土(山土)	36. 黄褐色土	56. 黄褐色土(山土)	76. 黑色土	
17. 細緻褐色土(山土)	37. 灰褐色土	57. 細緻褐色土	77. 細緻褐色急土(山土)	
18. 稚黃褐色土(山土)	38. 灰色土(山土)	58. 黄白色土	78. 稚灰褐色土	
19. 黄褐色土	39. 黄褐色土	59. 深黄褐色土	79. 黄褐色質土(シルト)	
20. 黄褐色土	40. 深黄褐色土	60. 深褐色土	80. 細緻褐色土(山土)	

第2節 上面の遺構面

上面の遺構面　上面の遺構面は第18図の16～18層の上面で形成された遺構面で、標高2.10m～2.30mを測る。調査西側中央付近から南側にかけて、直径0.10～0.20m、長さ2.20m前後の杭が垂直に、もしくは斜めに打ち込まれていた。これらの杭の材質は松と思われ、先端部を鋭利に加工したものがほとんどで、軟弱な地盤に使用する基礎杭と考えられる。また、調査区東側中央部分の東西長約23.0m、南北長約10.5mの範囲は、標高2.80～1.00m付近まで大型の礫やブロック片などを大量に含んだ搅乱部分であった。これは建物の基礎あるいは解体に伴う搅乱によるものと考えられ、これによって多くの遺構が削平されたと思われる。周辺の方の話によると、日銀支店長宅は取り壊し直前には東側に建物があったが、それ以前は西側に建物があったとのことで、これらの基礎杭や搅乱はその支店長宅の建物に関係すると推測された。

この遺構面からは土坑SK01～04・SJ01、石積溝SD01、石列SX01、礎盤石SS01～03、井戸跡SE01・02、胞衣容器出土地点SX02が検出された。遺構内や遺構面からは在地陶器の布志名焼や、型紙絵付、銅版絵付の肥前系磁器、焼鉢や七輪などの土器、瓦などが多く出土した。



SK01：土坑（第20図）

SK01 北側で検出された用途不明土坑である。遺構の規模は不明瞭な部分が多いため正確には分からぬが、上端の南北長が0.93m、下端が0.30m、深さ0.25mを測り、形状はやや不整円形を呈する。埋土の堆積状況は暗褐色土層1層で、埋土からは布志名焼や产地不明の焼締陶器、肥前磁器や七輪道具などの土器、瓦などが10数点出土したが、いずれも小片であった。

SK01 出土遺物（第21図）

国産陶器 産地不明の国産陶器の火鉢と思われる口縁部である。無釉で硬質に焼き締められている。表面は陰刻で幾何学模様を刻み、裏面はナデや指頭圧痕などの調整痕が残る。

SK02：廃棄土坑（第22図）

SK02 中央付近で検出された廃棄土坑である。遺構の規模は長さ1.50～1.70m、深さ0.22mを測り、平面形は複数の土坑が重なり合つた形で、不整な円形を呈している。埋土から布志名焼の碗や皿、土鍋や羽釜などの調理用具、肥前磁器の碗や蓋、土器の皿や七輪、瓦などが50数点出土したが、ほとんどが破片であった。

SK02 出土遺物（第23図）

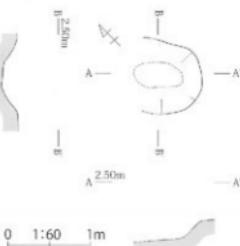
国産陶器 出土した陶器はすべて布志名焼である。2は端反形の小杯で、腰部がやや膨らみ口縁部がわずかに外反する形状である。口縁部外付付近で釉の掛け分けをし、内面は明黄褐色の釉、外面は極赤褐色の釉を施すが、脛付部分は無釉である。3は丸形の中碗である。腰部がわずかに膨らみ、外側に開きながら立ち上がる形状で、外面は透明釉を施すが、絵付けなどの模様はなく、見込部にハマの痕跡が残る。

4は皿もしくは碗の高台部である。外面は透明釉を施し、見込部分は三彩による絵付を施す。やや軟質で、一見すると京焼風にも見える。5は平形の小皿である。内面から外面口縁部付近まで鉄釉を施し、底部は回転糸切り痕が残る。形状は灯明皿と類似しているが、口縁部に使用痕である油煙痕は見られない。6は端反形の小皿である。腰部がやや膨らむ形状で、表面は透明釉を施し、見込部に鉄釉で草花模様を描き、ハマの痕跡が5つ残る。

7は丸形の土鍋で、脚はなく片側が欠損しているが両側に紐状の把手が付く形状である。内面から外面口縁部まで施釉し、外面下半は煤が付着し、見込部分にも焦げたような痕跡が残る。

8は底部が欠損した羽釜である。内面から外面の鶴部分にかけて透明釉を施し、外面の鶴部分より下に大量の煤が付着する。

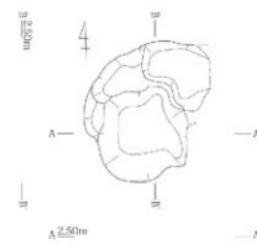
9は火鉢類の焜炉である。やや胴部が膨らみ、底から口縁部に向かってほぼ垂直で立ち上がる形状である。外面には回転ヘラ削り痕が、内面には回転ナデの調整痕が残る。口縁部には通風孔と飾り窓があり、内側には鍋や土瓶などの加熱用具を支える突起がある。高台部以外の



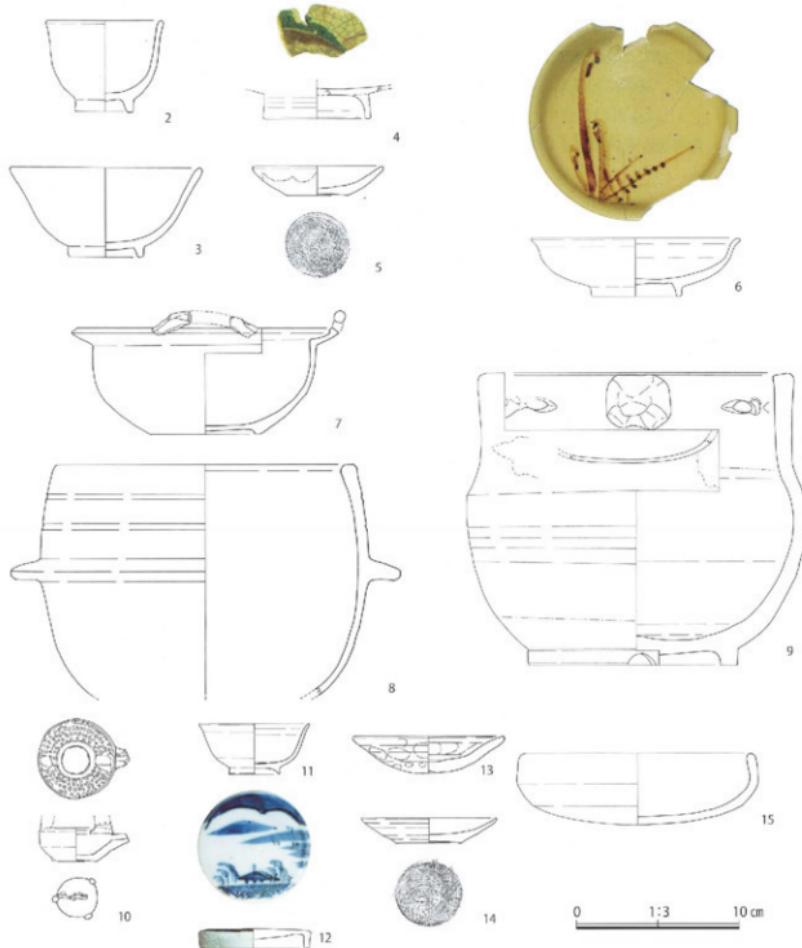
第20図 SK01 平面図・断面図



第21図 SK01 出土遺物



第22図 SK02 平面図・断面図



第23図 SK02出土遺物

外面と内面上部に白濁釉を施し、内面の胸部付近に少量の煤が見られる。

10は持ち手部分を欠くが、ミニチュアの丸形の跳子と思われる。表面は透明釉を施し、上面はその上から緑釉を斑点状に施す。底部に脚もしくはハマの痕跡が3つあり、底部中央に墨書きらしき痕跡が見られる。

出土した磁器はすべて肥前磁器である。11は端反形の小碗で、腰部がやや膨らみ、口縁部がわずかに外反する形状である。内面口縁部付近に2条の圈線と見込部に模様、外面に草花模様をコバルトで描く。

12は蓋物蓋で、合子の蓋と思われる。外面は呉須で風景画を描く、口唇部は無釉である。

土器 13・14は土師器皿である。13は手づくね成形によるもので、内外面に指頭圧痕が残る。口唇部には油煙痕が見られるため、灯明皿として使用されている。14はロクロ成形によるもので、底部に回転糸切り痕が残る。口縁部に油煙痕は見られない。

15は小形の焰燈で、耳が付かず、丸底の形状である。外面底部付近は回転ヘラ削り、口縁部外側から内側にかけては回転ナデの調整痕が、見込部には斑点状の焦げたような痕が残る。

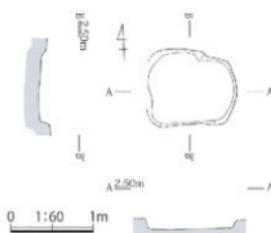
SK03：廃棄土坑（第24図）

SK03 南側で検出された廃棄土坑である。遺構の規模は上端の長軸が東西長1.20m以上、短軸が南北長0.95m、下端の長軸が東西長1.05m、短軸が南北長0.85m、深さ約0.08mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。埋土からは布志名焼の碗類、皿類、鉢類のほか、肥前窯器の碗類や土師器皿、七輪などが80数点出土したが、すべて破片で小片が多かった。

SK03 出土遺物（第25図）

国産陶器 出土した陶器はすべて布志名焼である。16は中碗の蓋で、全面に透明釉を施し、内面の天井部分に蛇の目日剥ぎの痕跡が残る。

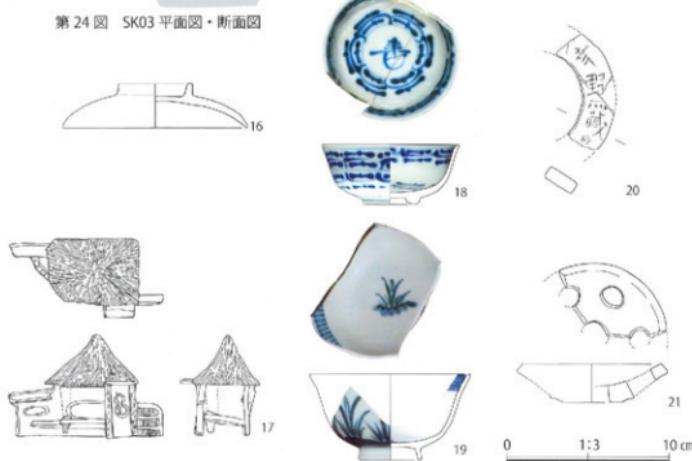
17は遊戯具の箱庭道具の一種で、庵もしくは東屋を模したと思われる。一部に白濁釉を施し、底の部分に墨書きの痕跡が残る。



第24図 SK03 平面図・断面図



SK03 完掘状況



第25図 SK03 出土遺物

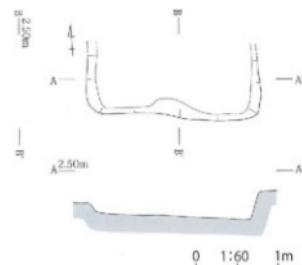
国産磁器

出土した磁器はすべて肥前磁器である。18は端反形の小碗で、腰部がやや膨らみ口縁部がわずかに外反する形状である。豊付部以外全面透明釉を施し、見込部に「壽」、内外面にも模様をコバルトで描く。19は端反形の中碗である。腰部がやや膨らみ、口縁部がわずかに外反する形状で、豊付部以外に全面透明釉を施し、見込部分には草花模様、内面口縁部には格子区画、外面に模様をコバルトで描く。

土製品

20は窯道具の脚付輪ドチと呼ばれるもので、表側に「幸口藏」と墨書きがある。

21は小皿である。貫通した穴があり、七輪の部品の目皿と呼ばれるものである。



第26図 SK04 平面図・断面図

SK04

南側で検出された廃棄土坑である。北側が削平されているため正確な規模は不明だが、現状での規模は上端の長軸が東西長2.15m、短軸の南北長が0.75m以上、下端の長軸が東西長1.90m、短軸の南北長が0.70m以上、深さ0.15mを測り、平面形が隅丸方形を呈する。埋土から石や平瓦、桟瓦などが出土したが、陶磁器類は小片のみであった。



SK04 遺物検出状況

SE01

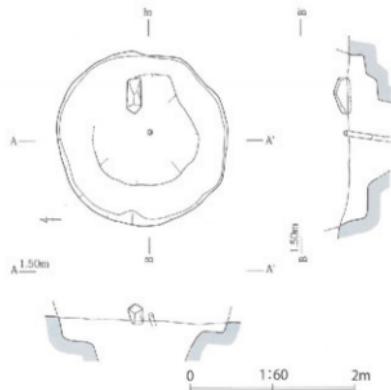
中央付近から検出された井戸で、それを廃棄したものである。上層部分は建物の基礎による搅乱を受けており、検出面の標高は低いが、本来は上層から掘り込まれていたと思われる。検出面には長さ0.20×0.40mの大來待石があり、中央に直径5cm程度の竹が突き刺さるように立っていた。土坑の断面形は2段掘りで、上段の上端が直径2.10m、下端が直径1.95m、下段の上端が直径1.35mを測り、平面形は円形を呈する。なお、下段の下端以下は、壁面がもろく、崩れる危険があつたため、確認できていない。

埋土からは布志名焼の碗や皿、鉢、肥前磁器の碗や瓶、瓦などが多く出土した。

調査当初は陶磁器や瓦などの破片が多く出土したことから「廃棄土坑」と考えていたが、後に突き刺さった竹は井戸埋めの儀式などに使われる「息抜き用の竹」と思われるため、本来は井戸であったものを廃棄する時に陶磁器等と一緒に埋めたと考えた。

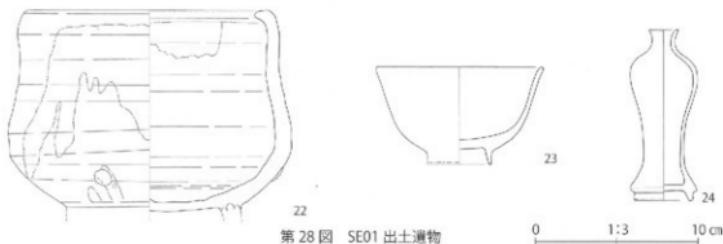
SEO1 出土遺物（第28図）

出土した陶器はすべて布志名焼である。22は火鉢類の焜炉で、形状は胴部下方が膨らみ、中央部分でくびれ、口縁部までわ



第27図 SEO1 平面図・断面図

国産陶器



第28図 SE01出土遺物

0 1:3 10 cm

すかに内傾しながら立ち上がり、端は内側に突出する。通風孔は見られず、高台部以上の外面部と内面上部に白濁釉を施し、内面に焦げた痕が残る。

国産磁器

出土した磁器は肥前磁器である。23は端反形の中碗で、吳須で笹・鳥などの模様を、見込部には千鳥文を描く。

24は色絵の瓶子形の御神酒徳利である。瓶子形で輪高台を持ち、形状は胴部下がくびれ、肩部が膨らみ、口縁部がすぼまる。外面に「御神前」と肩部に花柄模様を朱色で描く。

SE02：井戸（第29図）

SE02

中央付近から検出された井戸で、それを廃棄したものである。これもSE01と同じく、土坑上層部分は建物の基礎による擾乱のため削平されているが、本来は上層から掘り込まれていたと思われる。土坑の断面形は2段掘りになっており、遺構の規模は上段の上端が直径1.85m、下端が直径1.62mを測る。下段は上段から0.25mのところから掘り込まれ、上端が直径0.75mを測り、平面形は上下段ともほぼ円形に近い形を呈する。下段の壁際から桶のタガのような竹を3段目まで検出したが、これは桶の木の部分を抜き取ったためにタガの部分だけが残ったものと思われる。それ以下は崩落の危険性があったため掘り下げられず、下端は確認できなかった。

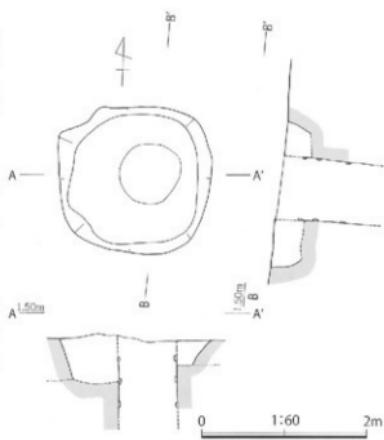
下段以下の埋土からは布志名焼の碗や皿、鉢など、肥前磁器の皿や段重などが出土したが、上段の埋土からは陶磁器や瓦の小片が出土しただけであった。

SE01と同じく当初は“廃棄土坑”と考えていたが、後に桶のようなものを枠に使った井戸を廃棄したものと思われる。

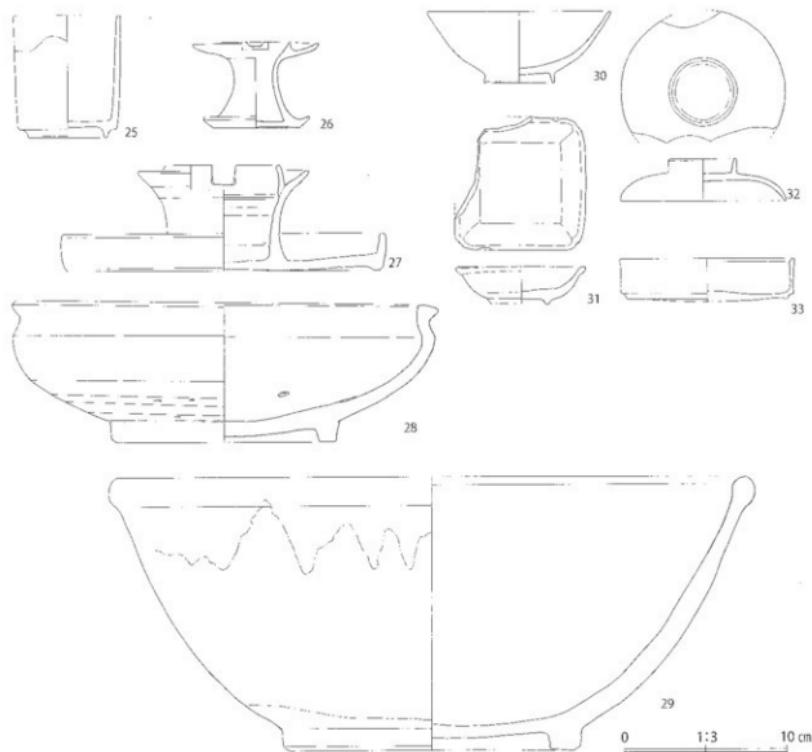
SE02出土遺物（第30図）

国産陶器

出土した陶器は布志名焼である。25は筒形の小碗で、高台付近からほぼ垂直に立ち上がる形状である。灰釉で全面を施釉し、口縁部付近で緑色釉を重ね塗りをする。



第29図 SE02平面図・断面図



第30図 SE02出土遺物

国産磁器

26・27は器台の一種の灯明皿である。26は容器付灯明受皿で、形状は口縁の内側に受けを廻らし、台部が容器状になっている。上部の皿の内面に切込が1ヶ所見られ、底面と台部内面以外に透明釉を施すが、口縁部が欠損している。27は大きくせり出した台皿に26のような口縁の内側に受けを廻らし、切込が2ヶ所見られ、台部に容器の台付灯明受皿が付いた形状である。台部底面以外は透明釉を施す。

28はすっぽん口の水盤である。胴部がやや膨れ、頸部付近がくびれ、口縁部が肥厚し外側にやや突出する形状である。内面から外面胴部下付近まで白濁釉を施し、胴部下から高台部までは無釉である。胴部下半にはヘラ削りの痕が、見込部内面にはハマ痕が6ヶ所残る。

29は大形の鉢である。高台部から外側に開き気味に立ち上がり、口縁部が玉縁状になる形状で、釉薬は内面に白濁釉、外面に緑色釉を掛け分けし、口縁部分は重ね塗りをしている。

31は瀬戸・美濃磁器、それ以外は肥前磁器である。30は平形の中碗である。高台部から口縁部まで直線的に立ち上がる形状である。外面は型紙絵付で鳥や花などの模様を描く。

31は方形小皿である。型打成形で、“手塩皿”と呼ばれるものである。中の模様は型押模様

で、見込部には菊花文、側面には青海波や紗綾形文を描き、その上からコバルトで色塗りする。

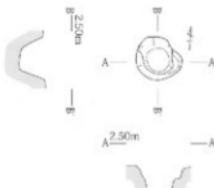
32は口径から中碗類の蓋と思われる。形状はやや肩部が張り出し、外面は型紙繪付で鳥や花などの模様を描く。30と同種の岡柄であることからセット関係の可能性があるが、やや碗の口径に対して蓋の口径が小さい。

33は段重で底部中央がやや膨らんで厚く、高台部と胴部の境を明瞭にし、そのまま垂直に立ち上がる形状である。口唇部には次の段重を受けるために段差がつけられている。

SJ01：土器埋設遺構（第31図）

SJ01

南側から検出された水盤設置用の土坑である。遺構の規模は上端が直径0.55～0.60m、下端が直径0.25～0.30m、深さ0.40mを測り、平面形は不整円形を呈する。土坑の直上から布志名焼の水盤が出土し、その水盤が土坑と隙間なく設置されており、傍らに固定のための漆喰が添うように検出されたことから、手水鉢として水盤を利用し、それを設置するための土坑と思われる。

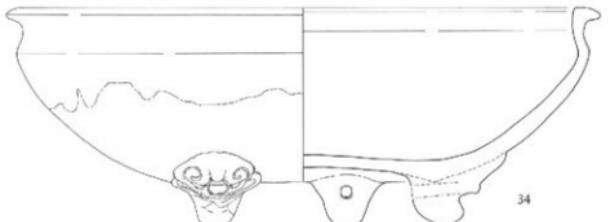


SJ01出土遺物（第32図）

国産陶器

34は布志名焼のすっぽん口の水盤である。本来、水盤は通常盆栽や花器に使用されることが多いものである。口径が48cmと大形で、胴部は膨らみながら立ち上がる。頸部付近はくびれ、3脚に、動物の頭のようなものを模る。内面から外面胴部上付近まで施釉し、内面見込部分にハマ痕が見られる。

第31図 SJ01 平面図・断面図
0 1:60 1m



第32図 SJ01出土遺物

0 1:4 10 cm

SD01：石積溝（第33図）

SD01

北側から検出された石積溝である。形状は南北に直線状に走り、規模は南北両側が外壁や樹木保護のため拡張できず正確ではないが、現状で長さ南北長4.50m以上、石積外幅1.20m、深さ0.15mを測る。溝の石は側面に大海崎石を1段ないし2段積み、底石は見られなかった。石積内幅は0.10～0.20cmを測る。用途としては区画溝、雨落ち溝などが考えられる。

埋土から布志名焼の碗や蓋、肥前磁器の碗や土器皿や窯道具などが60数点出土したが、破片が多くかった。

SD01出土遺物（第34図）

国産陶器

出土した陶器はすべて布志名焼である。35は浅半球形の小碗で、腰部が丸みを帯びて立ち上がる。内外面共に透明釉を施し、表面に貫入が見られる。36は浅半球形の大碗である。高

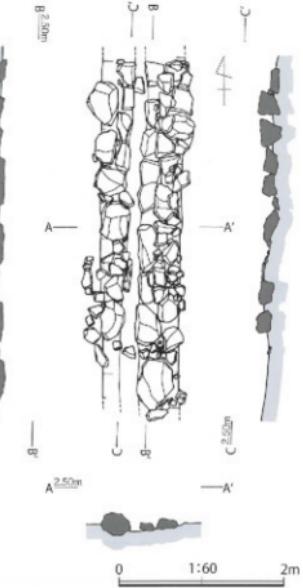
台部以外に縁軸を施し、高台部は削出しで高台内部や高台脇に回転ヘラ削り痕が残る。

37は山形の蓋で、つまみが欠損しているが土瓶の蓋と思われる。外面に透明釉を施し、外面には模様などは見られず、内面は無釉である。外面天井部に空気抜き用の穴が1穴見られる。38は空気抜き用の穴が見られないが、形状から土瓶類の蓋と思われる。丸いボタン状のつまみが付き、内面は無釉で、外面は緑色釉を施し、その上から白濁釉をイッチャン掛けで模様を描いている。

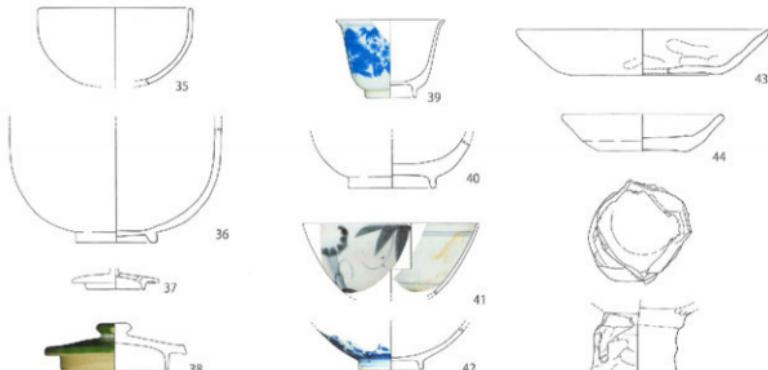
国産磁器
出土した磁器は肥前磁器である。39は端反形の小碗で、外面はコバルトによる銅版絵付を施す。40は陶胎染付の丸形の中碗である。高台脇から丸みを帯びて立ち上がる形状で、豊付以外全面透明釉を施し、表面には貫入が見られる。41は平形の中碗である。内面は3条の囲線、外面に草花模様を描く。42は平形の碗である。外面はコバルトによる型紙絵付で模様を描く。

土師器皿
43・44は土師器皿である。43は手づくね成形によるもので、やや大ぶりで指頭圧痕やナデ調整の痕が残る。口縁部に油煙痕は見られなかった。44はロクロ成形によるもので、底部に回転糸切り痕があったと思われるが摩滅して不明である。口縁部に油煙痕があり、灯明皿として使用された。

土製品
45は窯道具の円筒状の焼台である。陶器の底部が釉薬で融着している。

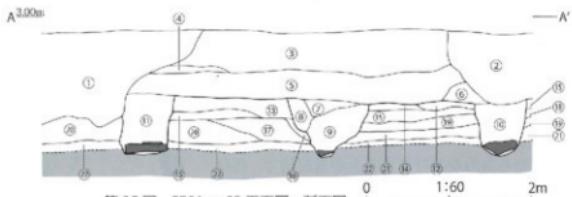


第33図 SD01 平面図・断面図



第34図 SD01出土遺物





- | | | | | | |
|------------|------------|----------|-----------|-------------|--------------|
| 1. 黄色土(泥炭) | 5. 黒色土 | 9. 淡灰色土 | 13. 紫青褐色土 | 17. 黄色～黄色土 | 21. 灰色土 |
| 2. 黑色土(泥炭) | 6. 稲穂色土 | 10. 黄褐色土 | 14. 深色砂質土 | 18. 灰褐色土 | 22. 黑色土(シルト) |
| 3. 黄色土(泥炭) | 7. 黄色土(山土) | 11. 楊色土 | 15. 黄褐色土 | 19. 楊色土(山土) | |
| 4. 茶褐色土 | 8. 茶褐色土 | 12. 深褐色土 | 16. 灰色土 | 20. 黄色土(山土) | |

SP01～03：礎盤石（第35図）

SP01～03 北側から検出された礎盤石である。最終遺構面検出のSB02の下層から3石検出され、調査当初はSB02よりも古い礎石と思われたが、背後にある土層断面の観察により、上層から掘り込まれたピット内の礎盤石と確認された。また、ピットが掘り込まれた面は現地表面の下、標高1.90～2.10 m付近であり、これらから上面の遺構面に相当すると判断した。



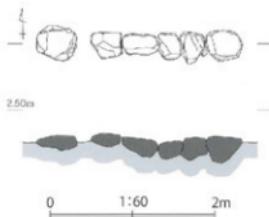
SP01～03 検出状況

ピットの規模は調査区を北側に拡張できなかつたため正確には分からぬが、土層断面からそれぞれ上端が直径0.60～1.00 m、深さ0.70 mと推測される。

礎盤石は西側からSP01・02・03とし、01は方形状のピットに平らな石を1石、02では円形状のピットに平らな石を1石、03には円形状のピットにあまり平らではない石を1石置いている。これら礎盤石の間隔は1間幅2.20 mを測る。周辺からこれに対応するピット等は検出できなかつたが、建物跡と考えられる。

SX01：石列（第36図）

SX01 南側から検出された石列である。東西長2.55 m、南北長0.45 mの範囲に6石が配されたもので、1列に並んでいるが、最も西側の石がやや少し離れて、それ以外は石と石が接している状態で検出された。石材は大海崎石で、上面はやや平らになっている。遺構内や周辺からの遺物は出土しなかつた。



第36図 SX01 平面図・断面図

SX02：胞衣容器出土地点

SX02

南側で検出された胞衣容器と思われる土器が出土した所である。2つの土師器皿が口を合わせて潰れた状態で出土し、その脇にミニチュアの壺が1点共伴していた。調査当初は遺構ではなく遺構面の出土遺物と考えていたが、出土状況を写真等で検討した結果、土師器皿の周囲に掘り込みらしき痕跡が認められた。殿町279番地外の調査において土坑内から出土した木箱（第116図 SK04）に納められた胞衣皿と形状や出土状況が類似することから、これらも木箱に納められ土坑に埋納された胞衣皿で、木箱が消滅した可能性がある。

SX02出土遺物（第37図）

国産陶器

46は47・48の土師器皿の脇から出土した布志名焼と思われるミニチュアの壺である。頸部が欠損しているが、形状から偏平形の髮油壺であろう。底部以外は透明釉を、頸部付近はその上から赤褐色の釉を施し、底部には回転糸切り痕が残る。

土師器皿

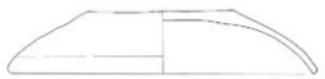
47は蓋として、48は身として使用されたと思われる土師器皿である。2つとも同様のつくり方で、外面底部から口縁部付近まで回転ヘラ削り痕、内面は回転ナデ痕を残す。



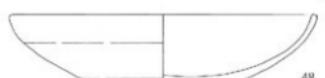
SX02 検出状況



46



47



48

第37図 SX02出土遺物

国産陶器

上面の遺構面遺構外出土遺物（第38～40図）

以下は上面の遺構面で遺構外から出土した遺物である。陶器は一部に肥前や備前などの搬入品が混ざるが、在地産である布志名焼が大部分を占める。磁器は19世紀代の瀬戸・美濃産が少量含まれるが、肥前が大部分で、貿易磁器などは見られない。土器は皿類のほか七輪などの大型製品も見られる。

49は肥前陶器の碗である。高台脇が外側に開きながら緩やかに立ち上がる形状を呈し、高台は兜巾高台と呼ばれるもので、中心部が円錐状に突出した削り残しが見られる。高台付近は露胎で、高台部分以外は外面に白濁釉、内面に黄色釉を施す。50は備前系の端反形の小杯である。腰部がやや膨らみ、口縁部がわずかに外反する形状である。胎土は朱泥で、高台内に「備前陶森」の窯印が見られる。

51～60は布志名焼である。51は丸形の小碗である。腰部が膨らみ口縁部に向かって立ち上がる形状で、高台部分以外に船釉を施す。52は腰張形の中碗である。腰部が張り出し、口縁部に向かって立ち上がる形状で、全面に透明釉を施した後、内面は刷毛で模様を描き、外面は陰刻で笠模様を刻む。53は半球形の中碗である。腰部が丸みを持ちながら立ち上がる形状で、全面に透明釉を施した後、外面に瓜らしき模様を陰刻する。54は呉器形の中碗である。腰部が丸みを持ちながら立ち上がる形状で、全面に透明釉を施し、見込部にハマ痕が4つ残る。



第38図 上面の遺構面 遺構外出土遺物（1）

0 1:3 10cm

55は腰張形の小环と思われるが、口唇部がほぼ水平に加工され、また、無釉であるため、合子などの合わせ口の製品の可能性もある。

56は台付光明受皿である。口縁部に受けを廻らし、台部が容器になっている。内面に切込が1ヶ所見られ、底面と台部内面以外に釉を施す。57は受付皿である。口縁部に受けを廻らし、切込が1ヶ所見られる。底部に回転糸切り痕が残り、内面から外面口縁部付近まで飴釉を施すが、口縁部に油煙痕は見当たらない。

58は胴丸形の小形の壺である。胴部中央が膨らみ頸部はくびれ、口縁部が短く立ち上がる形状で、高台部以外に灰オリーブ色釉を施す。

59は中形のすっぽん口形の水盤である。高台部から開きながら立ち上がり、頸部で段をつくり、口縁部が肥厚し、外側に突出する形状である。高台部付近はヘラ削りの痕が、内面にはハマの痕跡が残る。釉薬は内面が黄釉で外側が飴色釉、口縁部に深緑釉を掛け分けをしている。60は大形のすっぽん口形の水盤である。高台部から外側に開き気味に立ち上がり、頸部付近でくびれ、口縁部が肥厚する。胴部下半にヘラ削り痕が、見込部にハマの痕跡が7つ残る。

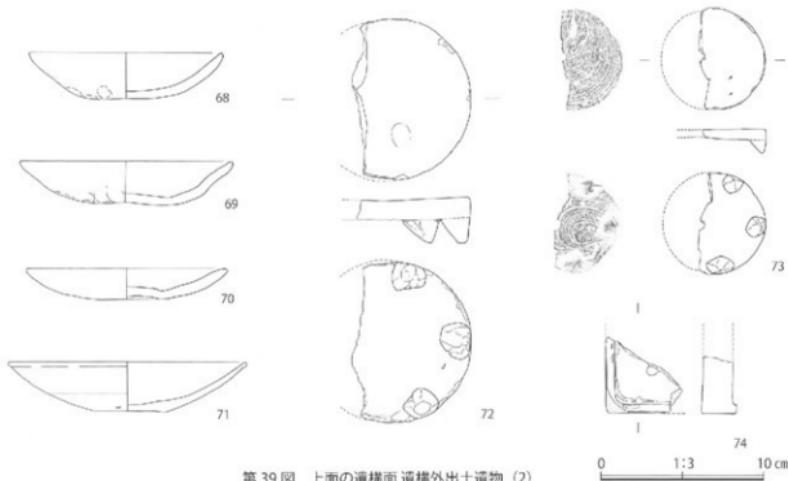
国産磁器

62・63は済戸・美濃磁器で、それ以外は肥前磁器である。61は無稜杉形の白磁の小碗で、やや高台が高く、外側に開きながら口縁部に向かってほぼまっすぐに立ち上がる形状である。

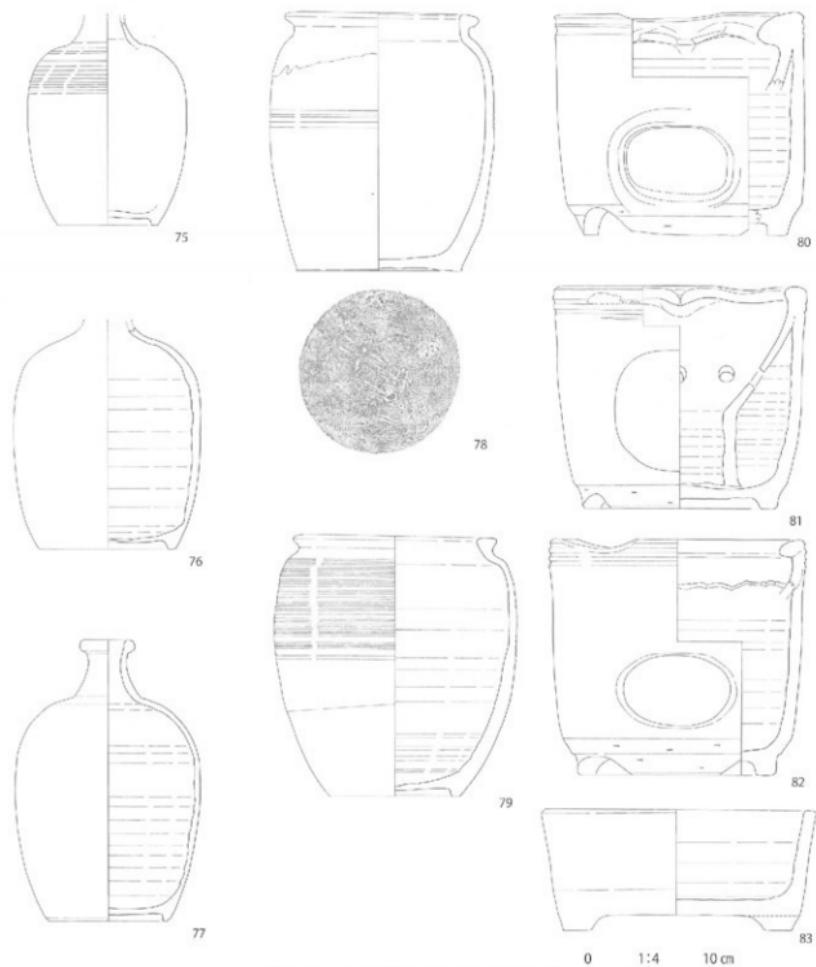
62は型打成形の輪花皿である。模様は型押で見込部に松竹梅、側面に魚の尾のような模様を描き、その上からコバルトを塗る。また高台内に「萬王」と窯印が見られる。63は型打成形の隅切方形皿である。模様は型押で見込部に花弁、口縁部付近に紗綾模様を描く。

64は丸形で底部が広い小皿である。見込部に蛇の目釉剥ぎが見られ、高台内部は蛇の目凹形高台で、内面口縁部付近に雲模様を描く。65は隅丸長方形皿である。内面は型紙絵付による松竹梅模様や「福」「壽」などの吉祥文字、外面に草花模様を描き、見込部分にハマの痕跡が4つ残る。

66は中碗の蓋である。高台部から外側に開きながら口縁部に向かって伸びる形状で、外面と高台内に風景画を、内面にも模様を描く。



第39図 上面の遺構面 遺構外出土遺物(2)



第40図 上面の遺構面 遺構外出土遺物 (3)

- 土師器皿** 67は小形の御神酒徳利である。やや首長で胴部があまり張り出さない形状である。
- 68～71は土師器皿である。71は推定口径14.5cmを測るやや大形の皿で、底部付近は回転ヘラ削り痕、胴部付近より上は回転ナデ痕を残す。見込部に煤もしくは墨のような痕が残る。
- 69～71は風化により調整痕等が見えづらいが、手づくね成形によるものと思われる。
- 土製品** 72・73は脚付輪ドチと呼ばれる窯道具で、表裏面共に回転糸切り痕があり、切り離し後、脚を4～5足つけている。
- 石製品** 74は赤間産の硯石である。全体的に暗赤褐色を呈し、使用痕と思われる擦痕が見られる。

国産陶器

75～77は撫肩形の中瓶である。高台部は削出しで、胴部がやや膨らみ肩部が緩やかに立ち上がる。77の口縁部は玉縁状を呈する。外には緑色釉を施し、76の胴部は「廣江合名会社」、77の胴部に「石橋」「田中」「子池三七二」と白濁釉で書かれている。『通い徳利』と呼ばれるものである。

78・79は寸胴形の中壺である。胴部はあまり膨らまずに立ち上がり、頸部がくびれ、口唇部が肥厚し、外側に突出する形状である。78は透明釉を全体に施した後、口縁部に鉄釉を重ね塗りをしている。79は透明白釉を全体に施した後、胴部下に印刻で模様を描く。

80～83は火鉢類である。80～82は七輪の五徳部分が合したもの、またはその痕跡を残し、胴部下方に窓があり、通風を良くする。83は瓦質土器の方形の火鉢で、足は4足と思われる。

上面の遺構面について

上面の遺構面では廐棄土坑以外、明確に用途が判明した遺構は少なく、どのような建物が建っていて、どのような生活であったかなど詳細については不明な点が多い。出土遺物から、在地陶器である布志名焼や銅版絵付、型紙絵付の肥前磁器が大半を占めることから、遺構の時期は19世紀後半、幕末～明治の時期と考えてよいだろう。その時期は家老屋敷が明治の廢藩置県・秩禄処分以降に分筆された時期にあたり、遺構面の時期は分筆以後から口銀支店長舎建設によって埋没するまでの時期に相当する。

遺物は陶器では稀に17世紀前半の肥前陶器が含まれるが、布志名焼の比率が圧倒的に高く、丸皿や通い徳利など生活雑器が顕著に見られる。磁器では銅版絵付や型紙絵付などの肥前磁器が大多数で、江戸末の在地産磁器である意東焼や塙谷焼はほとんど見られなかった。陶磁器は様々な器種が出土したが、産地別で見ると在地産、肥前産と比較的まとまりを持っている。十器では十師器皿が手づくね成形やロクロ成形のほかに、ヘラ削り調整されたものが見られるが、他の遺構面では出土していない。また窯道具類が多く見られるのも特徴だが、なぜ窯道具が出土するかは分からない。加えて七輪など大型製品も多く見受けられる。

また布志名焼の窯の中で「報恩寺窯」という窯があり、これは「乙部家」の御用窯として大保年間(1839～1844年)に開窯し、乙部家の台所用具を燒くという名目で藩から許され、昭和18年頃に廐窯となった。この遺構面から出土する布志名焼にも報恩寺窯の製品が含まれている可能性がある。

このようにどちらかといふと、幕末の家老屋敷の様子というよりは、それ以後の明治に入つてからの生活の様相の一端を示すものが大半で、明治期の生活を知る上で貴重な資料と言えるのではないだろうか。

第3節 中間層の遺構面

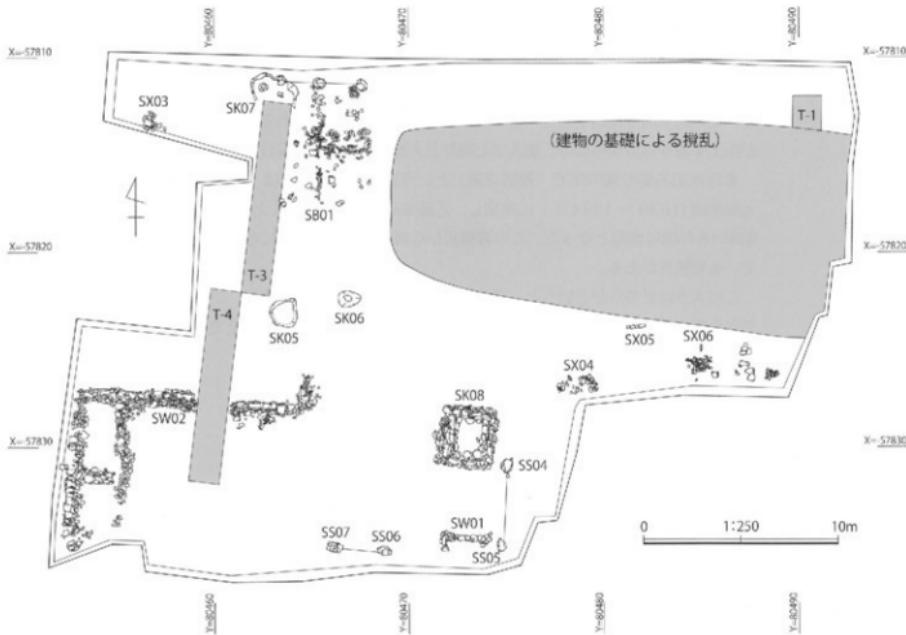
中間層

ここでは上面の遺構面と最終遺構面の間で検出した遺構群の説明を行う。前述のように上面の遺構面と最終遺構面の間は遺構面の把握がでておらず、検出した遺構毎に精査を行った。この中間層は標高 1.40m ~ 1.80 m の間にあたり、土坑が 4 穴（そのうち廃棄土坑が 2 穴 SK05・07、栗石土坑 SK06、石積方形土坑 SK08、石列 SX05、礎石跡 SS01 ~ 04、建物跡 SB01、集石遺構 SX04・06、石積遺構 SW01・02、廃棄遺構 SX03 を検出した。

このように多くの遺構が検出されたが、遺構に伴う遺物が少なく、時期が特定できた遺構は少なかったが、検出状況や遺構のレベル、出土遺物などから複数の遺構面が存在した可能性が考えられる。しかし現地調査の段階では、層序関係などから遺構の時期の上下関係を完全に把握できなかった。また、遺構内の出土遺物や検出状況などから、時期的に上面の遺構面に当てはまりそうな遺構についても、検出されたのがこの中間層のため、ここで記述することにした。

遺構内及び遺構面からの出土遺物は在地陶器の布志名焼のほか、17世紀前半の肥前陶磁器、土器、瓦などであり、この中間層はかなりの時期幅をもつていてことになる。

また調査区東側の中央付近は上面から続く建物基礎の搅乱の影響を受けているため、この中間層でもこの部分については多くの遺構が削平されたと思われる。



第41図 中間層 全体平面図

SK05：廃棄土坑（第42図）

SK05 中央付近で検出された廃棄土坑である。規模は上端東西長1.35m、南北長1.30m、深さ0.25mを測り、平面形は不整隅丸方形を呈する。埋上から石や瓦類が多く出土したが、陶磁器類は布志名焼の火鉢や肥前磁器の小片がわずかに出土した。瓦は破片ばかりで120数点を数え、そのうち平瓦が最も多く、次いで棧瓦が多く出土した。

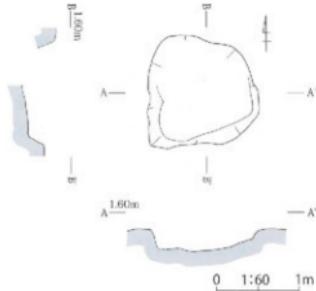
出土した布志名焼の火鉢の時期や遺構の上層が搅乱していることから考えると上層からの掘り込まれていて、その上層が削平された可能性が高い。

SK05 出土遺物（第43図）

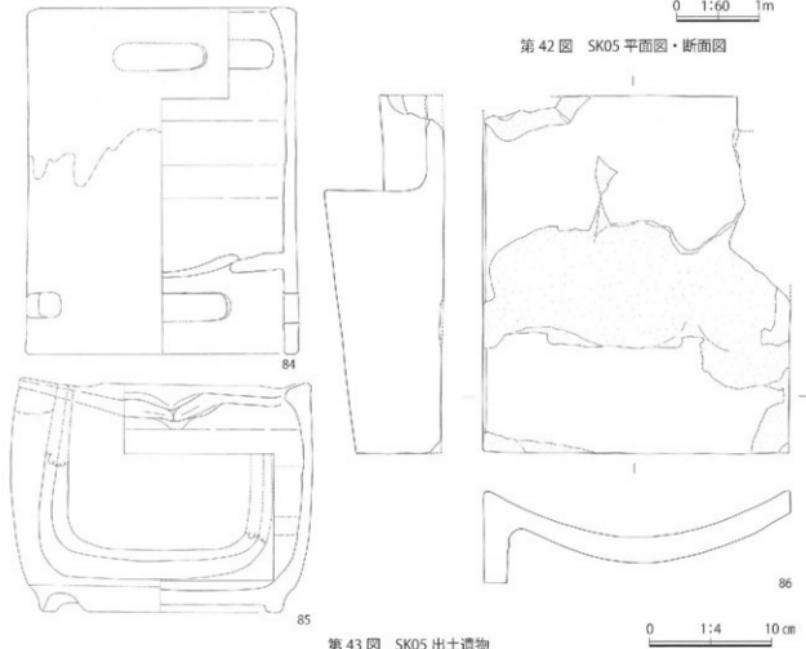
国産陶器 84は布志名焼の火鉢である。通風孔は見られず、持ち手部分が3ヶ所ある。形状は円筒形を呈し、高台部は四形で、底部中央は穴が開いた状態から、円盤状の粘土板を填め込むつくり



SK05 遺物出土状況



第42図 SK05 平面図・断面図



第43図 SK05 出土遺物

である。外面から内面上部に掛けて黄色釉を施し、口縁部にはその上から線釉を重ね塗りしており、内面には煤が付着している。

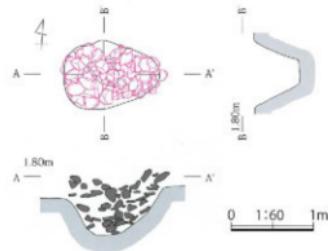
土器 85は素焼き土器の焜爐である。全体の形状は寸胴形の円筒状を呈し、胴部の一側面が大きく開いた通風孔になっている。通風孔の下部分は舌状にわずかに突出し、口縁内部に瓶類などを設置するための突起が見られる。

瓦 86は袖瓦である。袖瓦は切妻屋根の破風部分の棟瓦葺で主に使用されることが多く、86は右側に袖部分がある。切り込みは後方に付き、棟部分ではなく、平瓦に袖部分がついた形状で、前部分に菊花状のスタンプが見られる。

SK06 (第44図)

SK06 中央付近から検出された栗石を詰めた土坑である。遺構の規模は上端が東西長1.16m、南北長0.86m、深さ0.43mを測る。平面形は上端が楕円形、下端が円形を呈する。土坑内は上層が0.20~0.30m大の石を、下層がこぶし大の石を詰め込んだ状態であった。これは礎石の沈下を防ぐために行われたと思われるが、礎石は確認できず、またこれに対応しそうな他の土坑や礎石も見当たらなかった。

本遺構から遺物は石以外に出土しなかった。



第44図 SK06 平面図・断面図



SK07 : 庵窯土坑 (第45図)

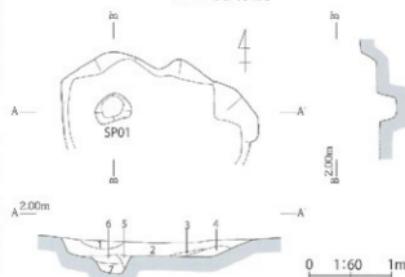
SK07 北側から後述するSB01の礎石下から検出された廃棄土坑である。遺構の規模は南側が削平されていたため正確には分からぬが、現存で東西長2.35m、南北長0.7m以上、下端が長軸東西長2.10m、短軸南北長0.85m以上、深さ0.2mを測り、平面形は不整形方を呈する。埋土から肥前陶磁器や土器、瓦、木製品が出土した。

また、土坑内のやや西寄りの位置からピットSP01を1穴検出した。規模は上端径0.35~0.45m、下端径0.25m、深さ0.23mを測り、形状は不整円形を呈する。このピットの埋土から遺物は出土しなかった。

SK07 出土遺物 (第46~48図)

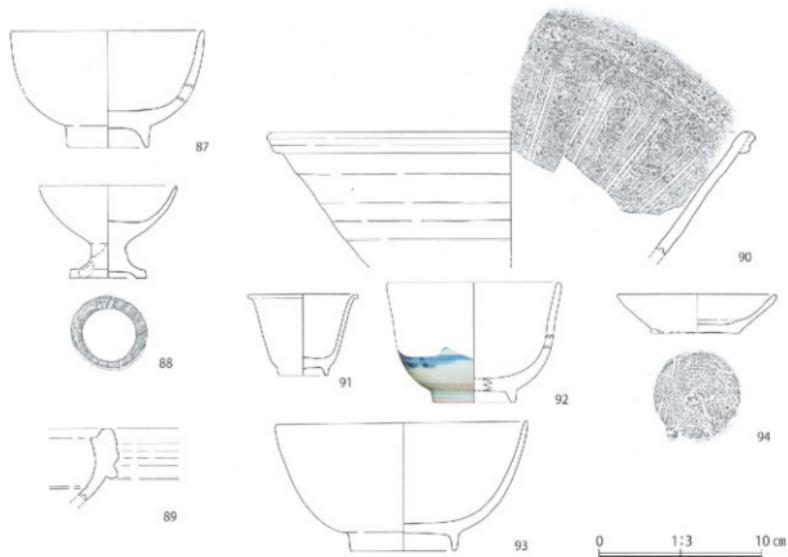
国産陶器 87は肥前陶器の京焼風の呉器形中碗で、断面撥形の高い高台を持ち、腰部が張り出し口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる形状である。疊付部以外を全面施釉し、表面に貫入が見られ、見込部に砂目の痕跡が残る。

88は肥前陶器の伝飯器である。小杯に台がついたような形状で、高台は一度回転糸切りで

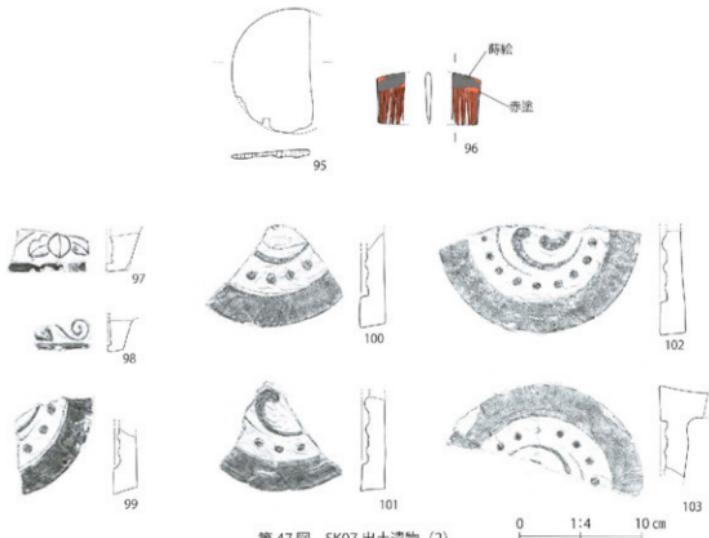


第45図 SK07 平面図・断面図

1. 桐黄色土 2. 黒褐色土 3. 洋白色砂質土 4. 雜色砂質土
5. 雜灰褐色土 6. 黑褐色土(やや堅め) 7. 黑褐色土



第46図 SK07出土遺物(1)



第47図 SK07出土遺物(2)

切り離された後、凹形に削り込んだ輪高台になっている。

89・90は描鉢である。89は上野・高取の口縁部外沿形で、口縁端部を折り返して貼り付けて口縁部を厚く加工し、そこに2条の凹線を廻らし、口縁内部にも1条の凹線を廻らす。胎土は長石などの混じりものが多く、全体的に粗い感じがする。無釉で焼き締めているが、所々自然釉が付着している。90は須佐庄津の口縁部外沿形で、口縁端部を折り返して貼り付けて口縁部をやや厚くし、そこに1条の凹線を廻らす。胎土はやや粗で、撰目は7本1単位、無釉で焼き締めている。

国産磁器

出土した磁器はすべて肥前陶器である。91は白磁の輪反形小碗で、口縁部がわずかに外反し、口縁端部に小さな玉縁を持ち、脣付部に砂が付着する。92は陶胎染付の丸形中碗である。腰部はわずかに膨らみ、頸部に若干のくびれを持ち、口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる形状を呈する。脣付部以外を透明釉で施し、その上から眞須で絵付し、表面には貞人が見られる。93は白磁の丸形大碗である。腰部が膨らみ、わずかに外に開きながら立ち上がる形状で、口唇部に口銷を施す。

土器

94はロクロ成形による土師器皿である。底部に回転糸切り痕が残り、口縁部に油煙痕は見られない。

木製品

95は曲物の底板である。漆や柿渋などは塗られておらず、侧面・断面に目釘のような痕跡はないが、表面に留具のような痕跡が見られる。96は漆器の櫛である。形状は方形で、頂部が弧状を呈する。全体に赤漆が塗られ、その上から金泥による蒔絵を施す。

瓦

97・98は軒平瓦の瓦頭部分で、97は中心飾の三葉部分、98は中心飾から伸びた左巻きの唐草文様の部分である。99～103は軒丸瓦の瓦頭部分で、いずれも左巻き三つ巴紋で外側に珠文を配するもので、珠紋の数が102が16個、103が20個と推測される。

SK08：石積方形土坑（第48図）

SK08

南側から検出された石積方形土坑である。規模は外法が東西2.80×南北3.20m、内法は東西1.70×南北1.90m、高さは一番下の石から頂部まで0.85mを測り、右は2段から4段積まれている。内側に大形の石の面を揃えて配置し、その後ろ側に裏込め石となる小形の石を入れて、内側には一段下にステップとなるような石を配置した。明確な掘り方は確認できなかったが、周囲の上層断面等から約4m四方の掘り方があった可能性があり、掘り込み面が検出面よりもやや上層であったと推測される。

また、床面中央のやや北寄りの位置から、直径1.00m前後、深さ0.20mを測る円形のピットSP02が検出されているが、石積方形土坑との関連は不明である。

この石積方形土坑の用途としては、埋土下槽で砂質土が堆積していたことから、水に関係する施設、例えば貯水施設や水洗い場などが考えられるが、確証は得られなかった。

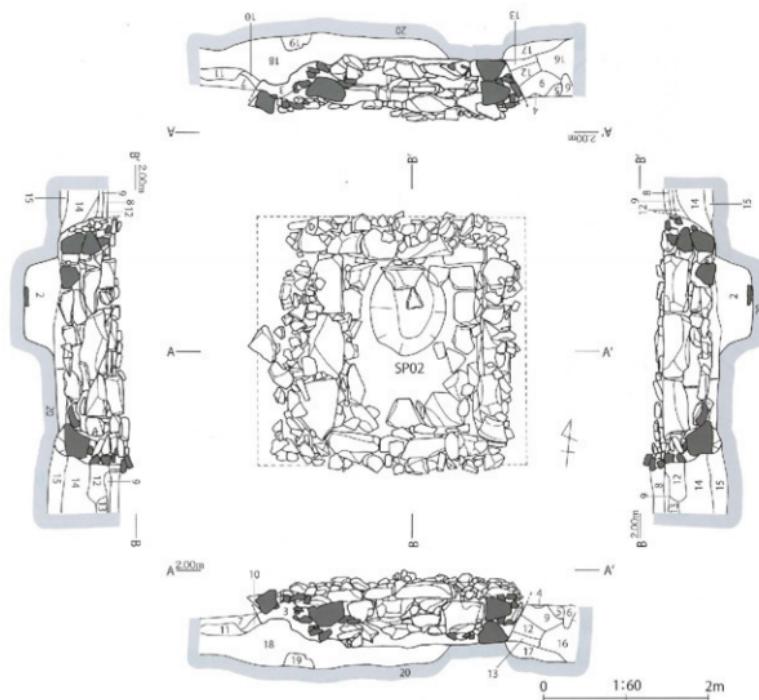
埋土上層から瓦や布志名焼や肥前陶器などが出土した。これらは埋没時もしくはそれ以降を示す遺物であり、遺構の築造時期を示すような遺物は出土しなかった。

SK08出土遺物（第49・50図）

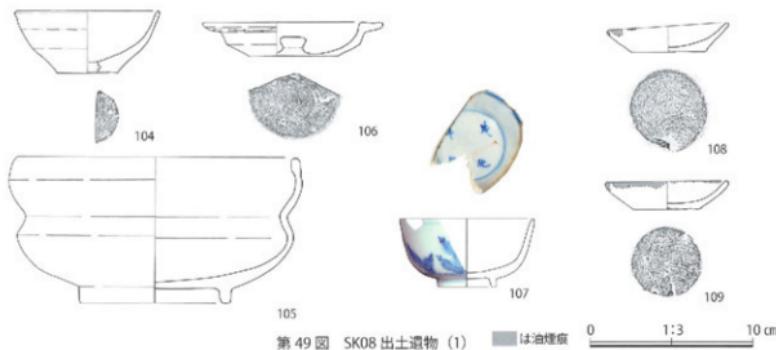
国産陶器

104・105は肥前陶器である。104は平形の小碗で、外側に開きながら立ち上がる形状である。底部に回転糸切り痕が残り、高台部以外は灰釉を施す。105は脚輪形の大碗である。腰部が外に開きながら立ち上がり、胴部中央でくびれ、再び膨らみを持ちながら口縁部に向かって立ち上がる形状である。脣付部以外、全面透明釉を施す。

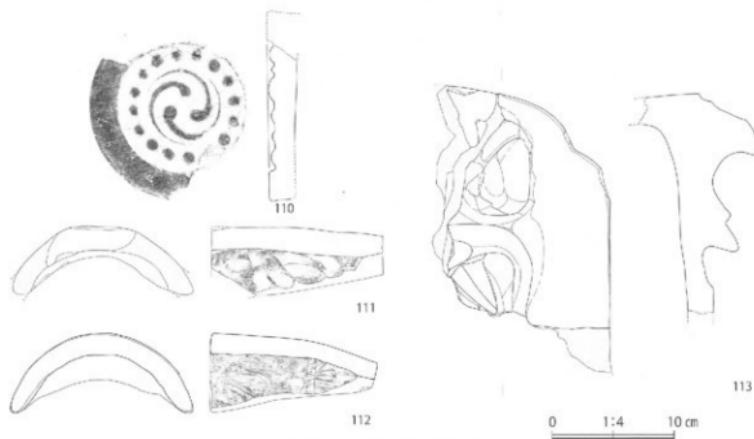
106は布志名焼の蓋である。口縁部が袖のように外側に突出し廻り、丸いボタン状のつ



第48図 SK08平面図・断面図



第49図 SK08出土遺物(1)



第50図 SK08出土遺物(2)

まみが中に付く形状である。内側は鉄軸を施すが外側は無軸であり、胸部下はヘラ削り痕が、底部には回転糸切り痕が残る。

国産磁器

107は肥前磁器の丸形の小碗である腹部に丸みをもちら立ち上がる形状で、見込部に「成化年製」銘、外面に草花模様を描く。

土師器皿

108・109は上師器皿である。ロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残り、口縁部に汕煙痕があり、灯明皿として使用した。

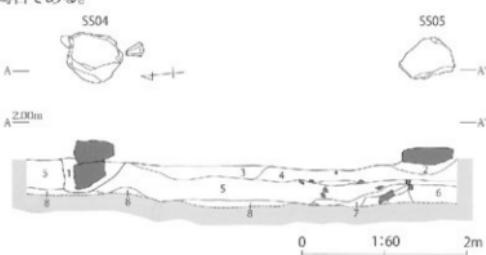
瓦

110は軒丸瓦の瓦頭部分で、模様は左巻き三つ巴、珠文を16個配する。111・112は棟込瓦である。棟込瓦は本瓦葺の大棟などを葺く時に使用される瓦である。113は鬼瓦の左部分と思われる。

SS04・05

SS04・05：礎石（第50図）
南側から検出された南北方向を軸とする礎石である。それぞれの頂部を平らに加工し、南北に1個ずつ配置している。北側の石をSS04、南側の石をSS05とし、それぞれの石は $0.70 \times 0.50 \times 0.20$ mを測る大海崎石である。

SS04は直径1.00m、深さ0.35mの土坑の中に同様の大きさの石を置いてそれを根石とし、その上に石を設置していた。SS05は直径0.80m、深さ0.29mの土坑に設置している根石と思われたが、周囲の土層を検討した結果、本来は黄色土層の上に置かれていた石が沈んだため、土坑の中に入ったように見え



1. 黄緑色土 2. 橙色土（山土）3. 灰色土 4. 灰褐色土 5. 黄白色土（山土）
6. 雪灰褐色土 7. 雪褐色土 8. 暗灰色土

第51図 SS04・05平面図・断面図

たと推測した。

2つの石の間隔は 4.10 m を測るが、その他に対応しそうな礎石や土坑等は検出できなかつた。本遺構の検出面から遺物は出土しなかった。

SS06・07 (第 50 図)

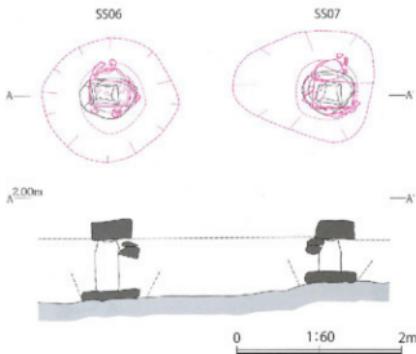
SS06・07 南側で検出された東西方向を軸とする礎石で、その構造は礎石と礎盤石と角材からなるものである。礎石と礎盤石の間に角材が立てられており、東側から SS06・07 とした。

礎石となる石はすべての面に工具による加工痕をもつ。SS06 は $0.50 \times 0.32 \times 0.23$ m を測る長方形の来待石が置かれている。その下には大きさ $0.30 \times 0.23 \times 0.35 \sim 0.50$ m のクリの木と思われる角材が立てられている。この角材にはホゾ穴のような加工痕があり、また角材と来待石の間に栗石のような小形の石が見られた。

さらに角材の下に $0.70 \times 0.50 \times 0.15$ m 大の平らな大海崎石を置いて礎盤石としている。SS06・07 の礎石の間隔は一間幅 2.70 m を測る。

おそらくは角材が支えの役割を果たしていると思われ、これは蟻獨立ちと呼ばれる柱の沈下防止の手法の一つと考えられる。

背後にある土層断面の観察から、大海崎石や角材を設置するために土坑を掘り込んだ可能性も考えられるが、どこから掘り込まれたか正確には分からず、遺構に伴う遺物も出土しなかった。



第 52 図 SS06・07 平面図・断面図



SS06・07 検出状況。

SB01：建物跡（第 53 図）

SB01 北側から検出された礎石、石列、集石を含む建物跡と思われる遺構である。東西方向を軸とした礎石を西側から礎石 1・2・3 とし、大きさは 3 石とも $0.60 \times 0.80 \times 0.15$ m を測り、頂部を平らに加工している。石と石との間隔は 2.00 m を測る (A - A')。

石列は礎石 2 に直交する南北方向に 1 列 (石列 1 : B - B')、礎石 1 ~ 3 に平行する東西方向に 2 列 (石列 2 : C - C'・石列 3 : D - D') の計 3 列を検出した。石列 1 は長さが礎石 2 を含めて 6.00 m、石列 2・3 は礎石 1 ~ 3 の南側 2.60 m、3.30 m のところに位置し、長さは 2.90 m、3.00 m を測る。

また、礎石 3 の南側に直径 $0.50 \sim 0.65$ m の楕円形の範囲に 20cm 大の石が集まつた遺構 (集石 1) を確認した。この遺構は礎石下の栗石と思われるが、礎石は検出できなかつた。



第53図 SBO1 平面図・断面図

これらの遺構は建物の基礎の一部と考えられるが、それがどのような建物であったのか、具体的な建物の構造などは分かっていない。

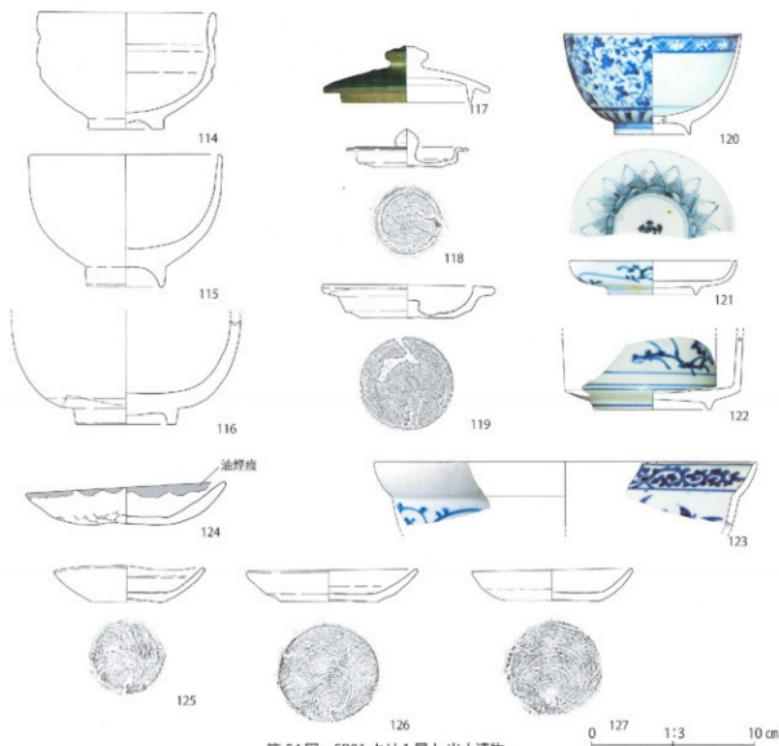
遺物は遺構面から肥前陶磁器類が出土し、遺構面上1層では布志名焼、肥前陶磁器類、瀬戸・美濃磁器、貿易磁器などが出土した。

SBO1 出土遺物（第54・55図）

以下は遺構面上1層中の出土遺物である。

国産陶器

114～116は碗類である。114は瀬戸・美濃陶器の脚錐形の中碗で、腰部から外側に開きながら立ち上がり、胸部中央からほぼ垂直に立ち上がる形状で、胸部に2条の凹線をもつ。疊付部以外、全面に灰釉を施し、見込部に灰釉の上から鉄釉で模様を描く。115・116は肥前陶器である。115は呉器形中碗である。高台の断面形が撥形を呈し、腰部は丸みをもちなが



第54図 SB01より1層上出土遺物

ら口縁部に向かって立ち上がる形状を呈する。全面に透明釉を施し、ところどころ表面に貫入が見られる。116は腰張形の大碗である。腰部がやや張り出し丸みをもちながら立ち上がる。高台部は露胎で、それ以外は灰釉を施す。

117～119は布志名焼の蓋である。117は山形の蓋で、土瓶に使われていたと思われる。つまみは丸いボタン状を呈し、外面は深緑釉の上から白釉のいっちゃん掛けを施し、内面は無釉である。118・119は壺蓋と思われる。底部に回転糸切り痕が残り、中央につまみが付く。118は擬宝珠形のつまみが外に出ているのに対して、119は丸いボタン状のつまみが中に入り込んでいる。

国産磁器

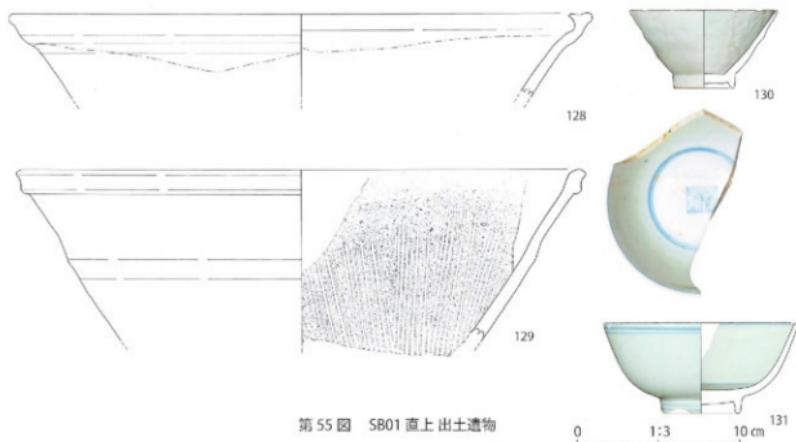
出土した磁器はすべて肥前磁器である。120は丸形中碗で、腰部がわずかに膨らみながら口縁部に向かって立ち上がる形状である。見込部には二重闇線内に五弁花のコンニャク印判、口縁部内面に四方襷区画、外面に草花模様を描く。

121は盤形の小皿である。腰部は張り出し口縁部に向かって垂直に立ち上がる。見込部に五弁花のコンニャク印判、内外面に模様を描く。

122は腰部無加工の段重で、腰部に明瞭な区別をつける。外面に草花模様を描く。

貿易磁器

123は中国磁器で、景德鎮窯系の青花鉢である。口縁部が屈曲し段を持つ形状で、内面に



唐草模様を描く。

124～127は上師器皿である。124は手づくね成形で指頭圧痕などの調整痕が残る。口縁部に油煙痕があり、灯明皿として使用した。125～127はロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。いずれも口縁部に油煙痕は見られない。

以下は床面直上層から出土した遺物である。

国産陶器

128・129は鉢である。128は肥前陶器の口縁部無装飾形で、口縁端部が内傾して内側に突出し、その下に凹線が廻る形状で、口縁部のみに鉄釉を施す。129は須佐唐津の口縁部外帯形で、口縁部を折り返して貼り付けて外側に肥厚する。凹線が1条廻る形状である。摺目は8本が1単位で、無釉で焼き縮めている。胎土は長石などが含まれやや粗である。

国産磁器

130は肥前磁器の平形の小碗で、縞で草花模様を描き、高台内疊付には砂が付着している。131は丸形の中碗である。腰部がやや膨らみ外側にわずかに開きながら立ち上がる形状で、見込部に四角区画で「福」、高台内に「太明」の銘が入る。

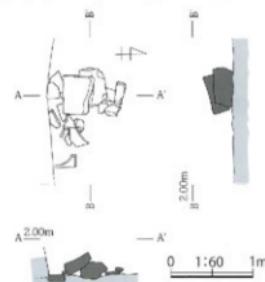
SX03：廃棄遺構（第56図）

SX03

北側でSBO1の西8.5mの所に位置する廃棄遺構で、來待石と瓦を検出した。來待石は大形で加工痕が見られ、陶磁器類は出土せず、棟瓦や丸瓦、來待石が出土した。この出土した瓦や來待石から、上面の遺構面の遺構である可能性が高く、土坑のプランなどは検出できなかったが、おそらくは瓦や來待石の廃棄に伴う遺構と思われる。



SX03 検出状況



第56図 SX03 平面図・断面図

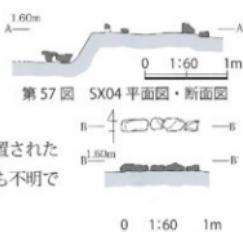
SX04：集石（第57図）

SX04 南側から検出された集石遺構である。2.15 m × 1.00 m の範囲に、石が散乱した状態で検出されたが、規則性は見られない、周辺から遺物は出土しなかった。遺構の用途・性格などは不明である。



SX05：石列（第58図）

SX05 南側から検出された石列である。SX04・06のおよそ中間に位置し、1.00 m × 0.20 m の範囲に 4 つの石が 1 列に並んだ状態で検出した。遺構には掘り込まれた様子はなく、設置されたような状態であった。周辺から遺物は出土せず、遺構の性格も不明である。



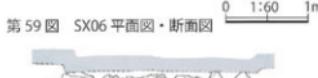
SX06：集石（第59図）

SX06 南側から検出された集石遺構である。SS06 から約 8.50 m 東側に位置する。規模は東西長 4.50 m × 南北長 1.75 m の範囲で、集石が東西に 1 ケ所ずつ（集石 1・2）とその間に中形の石を 10 数個検出した。



東西両側の集石は礎石下の栗石の可能性があり、この間の距離は 3.40 m を測るが、礎石らしき石は見つからなかった。その間の石は散乱したように見え、規則性は感じられない。

周辺から遺物は出土せず、遺構の用途・正確なことは不明である。

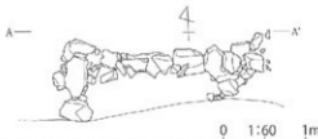


SW01：石垣（第60図）

SW01 南側から検出された石垣遺構である。遺構の規模は東西長 2.50 m、南北長 0.30 m、高さ 0.30 m を測り、石は 1 段ないし 2 段に積まれている。平面形は西端で南側に方向を変えるため、逆一字字状になる。南側は調査区外になるため全容は掴めなかった。

本遺構は北側と西側に面が揃っていることから、北側と西側を意識していると考える。

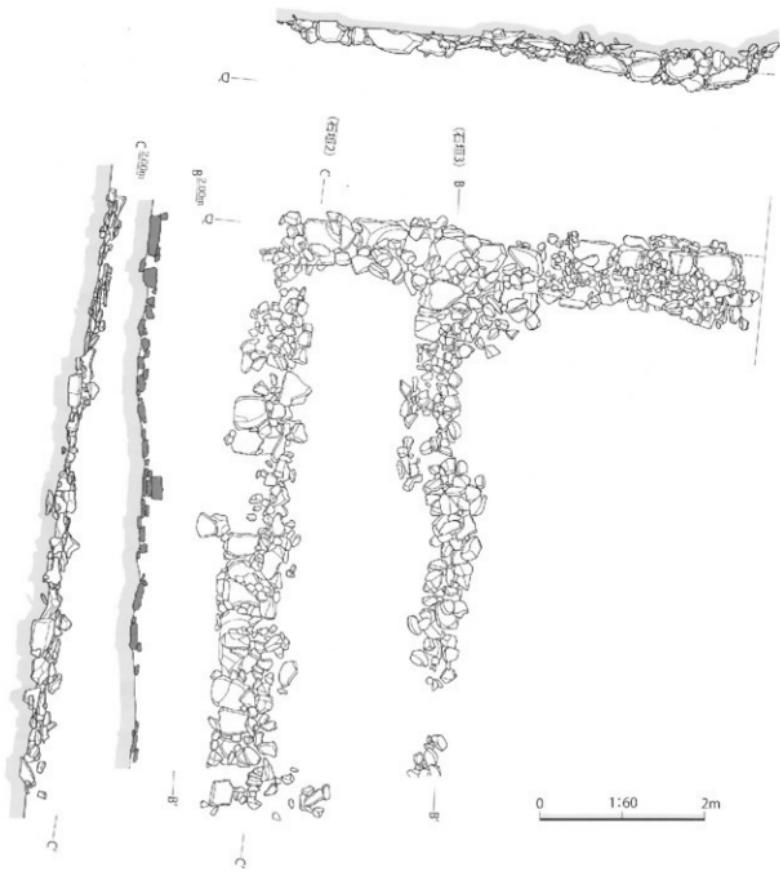
埋土や遺構に伴って遺物は出土しなかった。



第60図 SW01 平面図・断面図



SW01 検出状況



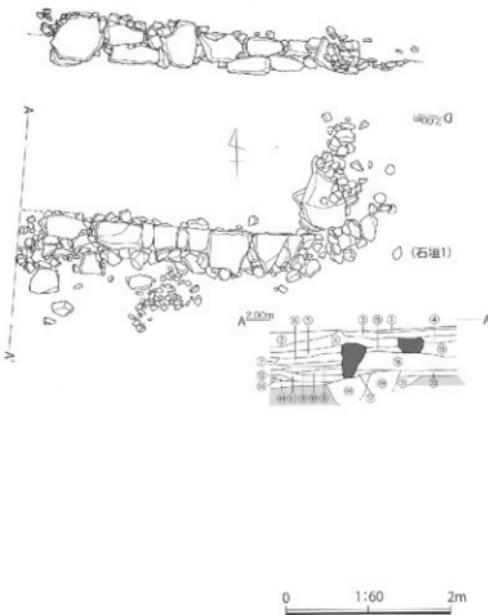
第61図 SW02 平面図・断面図

SW02：石垣（第61図）

SW02 南側から検出された石垣構造である。本構造は主軸となるのが東西方向の石垣1であり、その石垣1の西端を基点とした南北方向の石垣2、さらに1.8m東に位置する南北方向の石垣3で構成されており、石はすべて大海崎石を使用している。

石垣1は西端が現代のコンクリート製の溜柵で一部削平されていたため、長さが現状で約11.40m、幅0.65m、高さは最も高いところで0.70mを測るが、西側に行くほど頂部の高さが徐々に低くなり、最も低いところでは最高部から約0.20m前後下がる。これは上の石が崩落、もしくは抜き取られた可能性が考えられる。

また、石垣1は東端から北側へ方向を変えるため、平面形は全体では逆L字形を呈する。この北側へ向かう石垣より以北は確認できなかったが、まだ続いていくような感じを受けた。



- | | | | | |
|--------------|--------------|----------------------|-------------|-----------------|
| 1. 黄褐色土 (山土) | 6. オリーブ黄色土 | 11. 灰色土 | 16. 灰色土 | 21. 白色砂質土 (シルト) |
| 2. 深白色土 | 7. 暗褐色土 | 12. 黄色土 | 17. 灰色～褐色土 | |
| 3. 細茶褐色土 | 8. 深灰色土 | 13. 褐褐色土 | 18. 砂灰褐色粘土土 | |
| 4. 單黃褐色土 | 9. 橙黄色土 (山土) | 14. 橙色～深白色～深灰色土 (山土) | 19. 褐褐色土 | |
| 5. 淡灰深色砂質土 | 10. 茶色土 | 15. 灰白色砂質土 | 20. 赤褐色土 | |

14層上面がそれぞれ遺構面として考えられ、約0.45mの高低差が生じていたと考えられる。遺構周辺や検出面から遺物は出土せず、遺構の時期を特定することはできなかった。

おそらくは上層部の現代の建物によって破壊された可能性がある。

この石垣1は石の面を北向きに合わせており、北側を意識して“見せる”ようなつくりになっている。

これに対して石垣2・3は南側が調査区外となるため正確な規模は分らないが、残存するもので石垣2が南北長6.70m、幅約0.80m、高さが一番下の石から高さ0.20mを測る。石垣3は南北長4.70m、幅約0.70m、高さが一番下の石から0.20mを測る。北端から2.00m付近で中心軸が西へ0.50m程度ずれている。

平行して走るこの石垣2・3は石垣1とは異なり、20cm大の石を直線的に並べており雑然とした感じを受ける。

石垣1は壁の役割であったのに対し、2・3は建物基礎の石列の可能性が考えられる。

また、土層断面からこの石垣1を境にして、南北で遺構面の高さが異なる可能性が考えられる。現地調査では分からなかったが、南側の15層上面、北側の

中間層遺構出土遺物（第 62～65 図）

国産陶器

132 は布志名焼の丸形中碗で、腰部に丸みをもちながら立ち上がる形状である。全面に鉄軸を施し、口縁部には鉄軸の上から鉄軸を施す。

133～136 は肥前陶器の碗である。133 は中碗で、腰部に丸みを持ちながら立ち上がる形状である。高台付近は露胎で、それ以外は透明釉を施す。134 は中碗である。腰部に丸みを持ちながら立ち上がる形状で、全面に白濁釉を施す。135 は腰張形の中碗で、高台付近は露胎、それ以外は深緑釉を施し、口縁部には上から鉄軸を、外面には刷毛で黄釉を施す。136 は端反形の中碗で、腰部がわずかに膨らみながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する形状である。高台付近は露胎で、それ以外灰釉を施し、見込部に灰釉の上から鉄絵を描く。

137 は布志名焼の端反形五寸皿である。腰部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する形状で、置付部以外に灰釉を施し、見込部に灰釉の上から二彩の絵付を施す。

138 は瀬戸・美濃陶器の小皿である。基筒底で、底部以外、黄釉を施す。

139～145 は肥前陶器の皿である。139 は高台部以外灰釉を施し、見込部に灰釉の上から鉄絵を施す。140 は丸形の小皿で、腰部に丸みをもって立ち上がる形状である。高台付近は露胎で、内面は緑釉を、口縁部には緑釉の上から鉄軸を施す。141～144 は折線形の小皿で、外側に開きながら立ち上がり、口縁部内側に溝をもつ形状である。高台は兎巾形高台で、周囲は露胎で外側胴部上から内にかけて灰釉を施し、見込部に砂目の痕跡が残る。145 は五寸皿で、腰部がやや膨らみ、頸部がわずかにくびれ、内面に段をもつ形状である。費付以外灰釉を施し、見込部に貫入が見られる。見込部と高台脇に砂口の痕跡が残る。

146 は肥前陶器の蓋で、底部に回転糸切り痕が残り、つまみが円筒状になっており、外面に化粧土を塗る。

147～149 は小形製品である。147 は瀬戸・美濃陶器で後直形の水滴である。注口部と把手部分は欠損しているが、注口の辺りに貫通した穴が見られ、底部には回転糸切り痕が残る。148 は肥前陶器で肩衝形の小壺である。全面に灰釉を施した後、その上に鉄軸や銅線軸を施す。肩部に穿孔をもち、底部には回転糸切り痕をもつ。149 は在地陶器のミニチュアの肩丸形瓶もしくは徳利である。胴部上半のみ黄釉を施し、底部に回転糸切り痕が残る。

150・151 は搗鉢である。150 は肥前陶器の口縁部無装飾で、口縁部が内傾し内側に突出する形状で、摺目が 8 本 1 単位で、口縁部に鉄軸を施す。151 は備前系の口縁部外沿形で、口縁部が肥厚し、内面に 2 条、外面に 1 条の四線が廻り、摺目が斜めに走る。

152 は肥前陶器の壺の底部片である。外面に鉄軸を施すが、内面は無釉である。

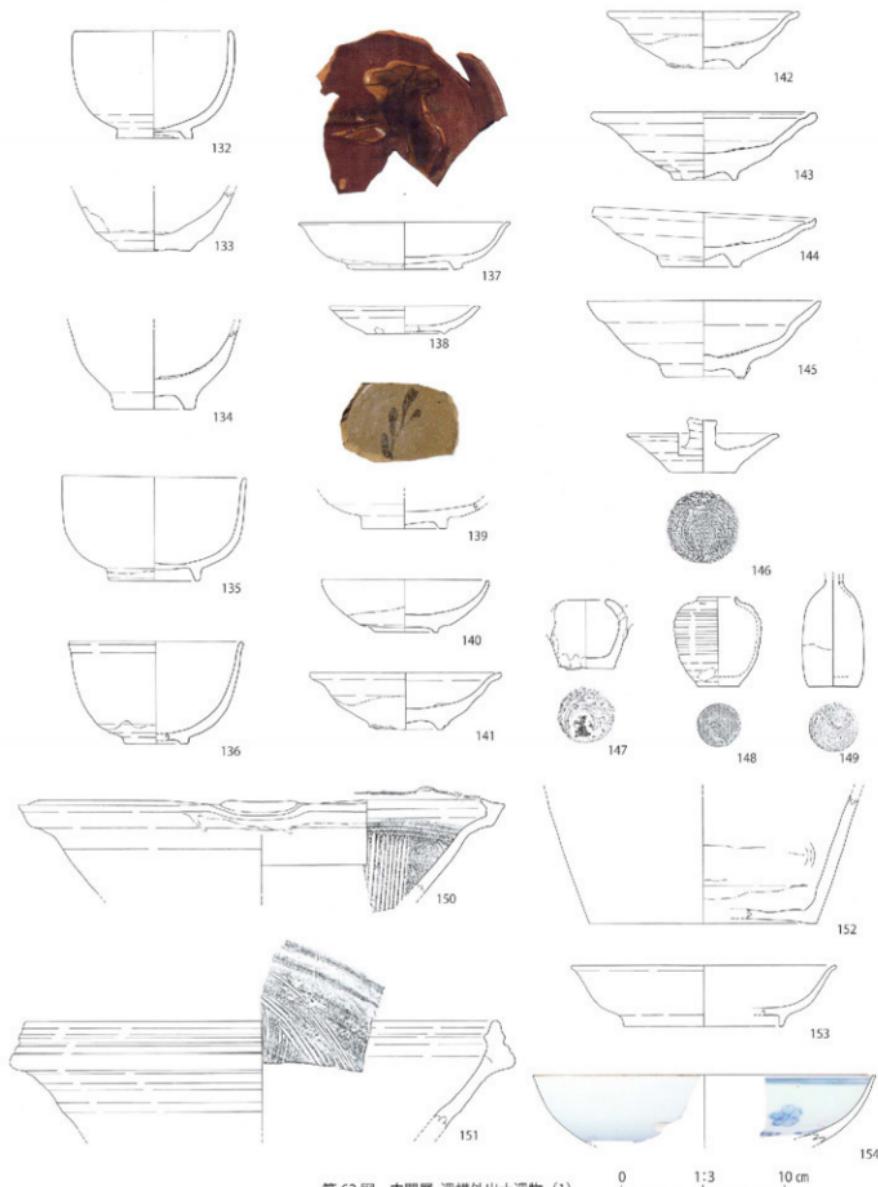
153 は中国製白磁の端反形五寸皿である。腹部は丸みを持って立ち上がり、口縁部が外反する形状である。154 は肥前陶器の丸形中皿である。腰部に丸みをもちながら立ち上がる形状である。外面に花草模様を描き、口縁部に鉄軸を施す。

155・156 は胴部下にヘラ削り痕が残る十師器皿である。157～166 は手づくね成形によるもので、指痕・圧痕が残る。158～166 は口縁部に油煙痕が見られるため、灯明皿として使用されていた。167～172 はロクロ成形の十師器皿である。底部には回転糸切り痕が残る。171・172 は口縁部に油煙痕が見られるため、灯明皿として使用している。

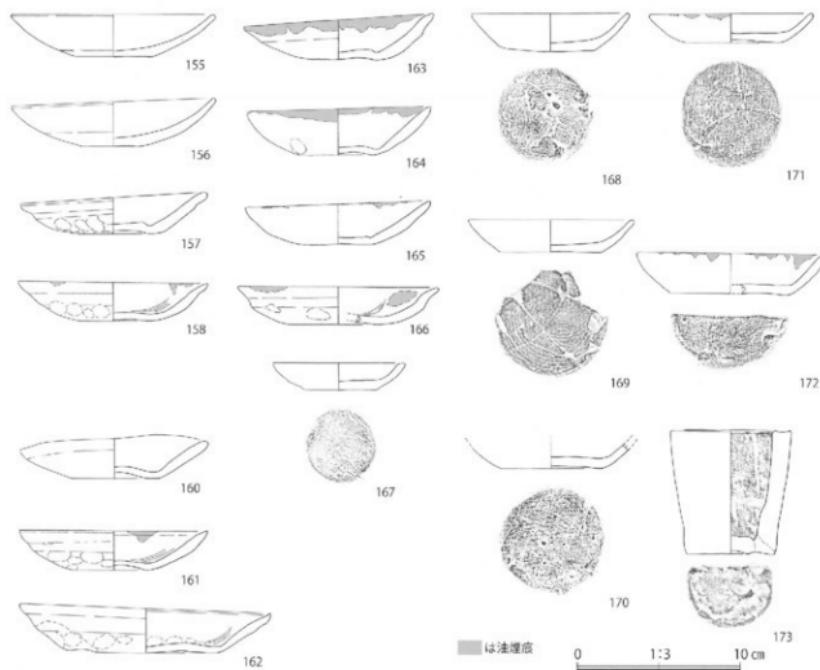
173 は焼塩壺で、約半分が残存するが、刻印銘の有無は不明である。芯材に粘土生地を巻きつける板作りで、底部を塞ぐ粘土塊は外側から挿入して指で押し付けている。詳しくは第 9 章「松江城下町遺跡（犬町 287 番地・297 番地外）山上の焼塩壺について」を参照されたい。

貿易磁器
国産磁器

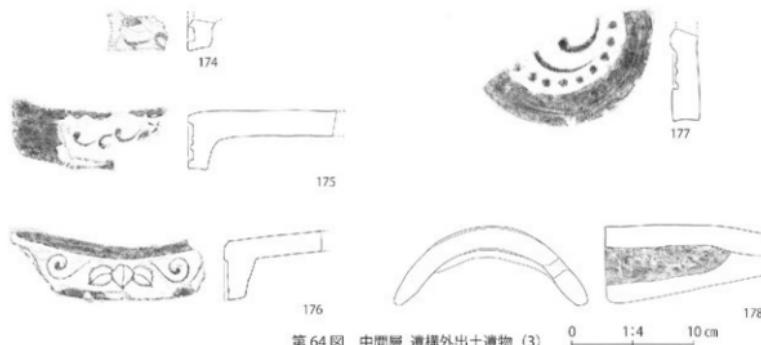
土器



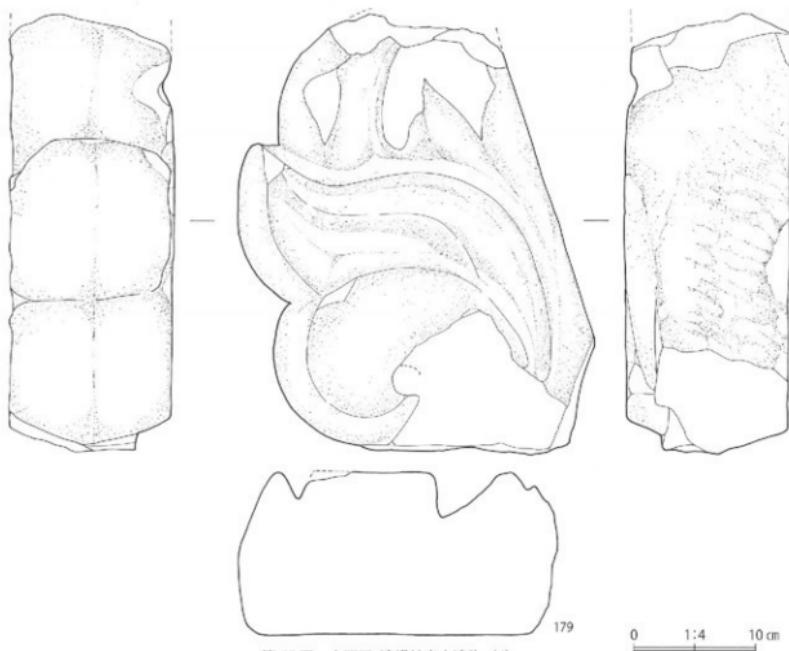
第62図 中間層 遺構外出土遺物（1）



第63図 中間層 造構外出土遺物（2）



第64図 中間層 造構外出土遺物（3）



第65図 中間層 遺構外出土遺物(4)

瓦

174～176は軒平瓦の瓦頭部分で、175は中心飾から延びる唐草部分、176は中心飾の三葉と両側に唐草が伸びている。177は軒丸瓦の瓦頭部分で、左巻きの三つ巴紋、珠文は推定で20個数する。178は棟込瓦である。

石製品

179は用途不明の石製品である。材質は来待石製で、非常に重く大形である。

中間層の遺構面について

中間層から検出された遺構は形状としては明確なものが多いものの、用途がはっきりしている遺構は少なかった。SB01のように建物跡を思わせる遺構が検出されたものの、どのような建物で、どのような間取りであったかは判断できなかった。また SW01・02・SS04・05のように北側を意識した遺構の配置になっていることから、北側に何らかの意図を持って“見せる”といった目的があったのではないかと想像される。

複数の遺構面の可能性をもつこの中間層は、出土遺物が肥前陶器では17世紀前半の砂目皿から18世紀前半の京焼風陶器が見られ、共作する肥前系磁器は少ない。若干、19世紀代の布志名焼が見られるものの、全体として17世紀前半～18世紀前半の遺構面と考えたい。産地別で見ると肥前産が大きな割合を占め、備前産や瀬戸・美濃産も少ないながらも含まれるようになる。

第4節 最終遺構面

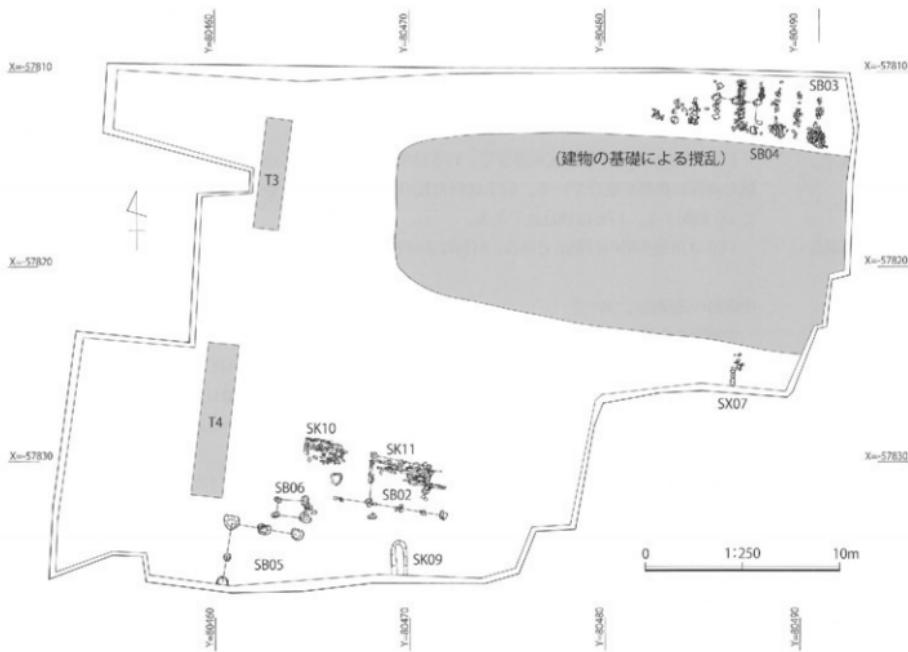
ここでは最下層で検出された遺構を最終遺構面として説明を行う。最終遺構面は第18図の第89層黒色粘質土の上に出土したブロックを多く含んだ第82層黄色土、もしくは黄褐色土を盛上して形成された遺構面で、標高1.0m前後～1.2m付近から遺構が検出されている。土坑が3個（うち廐棄土坑SK09）、木棒方形土坑SK10・11、石列SX07、建物跡SB02～04が検出された。遺構及び遺構面から出土する遺物は、肥前陶磁器、貿易磁器、土師器皿、瓦、木製品などである。

調査区東側中央部の大部分（東西長約23.0m、南北長約10.5m）はまだ上面から続く建物基礎の搅乱の影響を受けているため、この遺構面でも多くの遺構が削平されたと思われる。

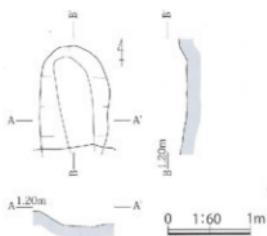
SK09：廐棄土坑（第67図）

SK09

南側から検出した廐棄土坑である。南側が調査区外のため正確な規模は分からぬが、上端が長軸東西長0.75m、短軸南北長が1.25m以上、下端が長軸東西長0.42m、南北長が短軸南北長で1.12m以上、深さ0.10m前後を測り、平面形が細長い円形を呈する。埋土から肥前陶器、漆製品や下駄などの木製品のほか、型紙絵付や釉薬を掛け分けた肥前磁器の瓶の胴部片などが出土したことから、上層から掘り込んだ別土坑が重複していた可能性が考えられる。



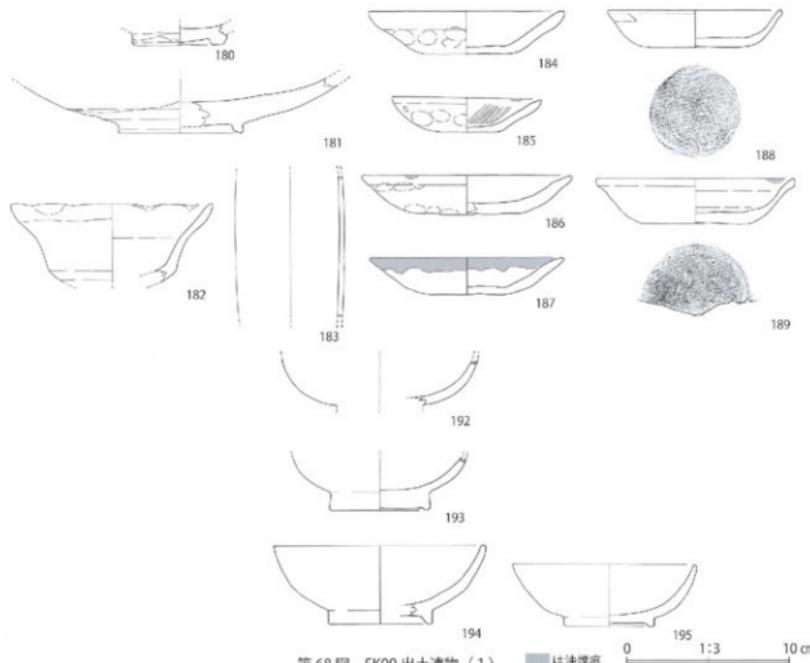
第66図 最終遺構面 全体平面図



第67図 SK09 平面図・断面図



SK09 遺物出土状況



第68図 SK09 出土遺物(1)

■は油煙痕

0 1:3 10 cm

SK09 出土遺物(第68~70図)

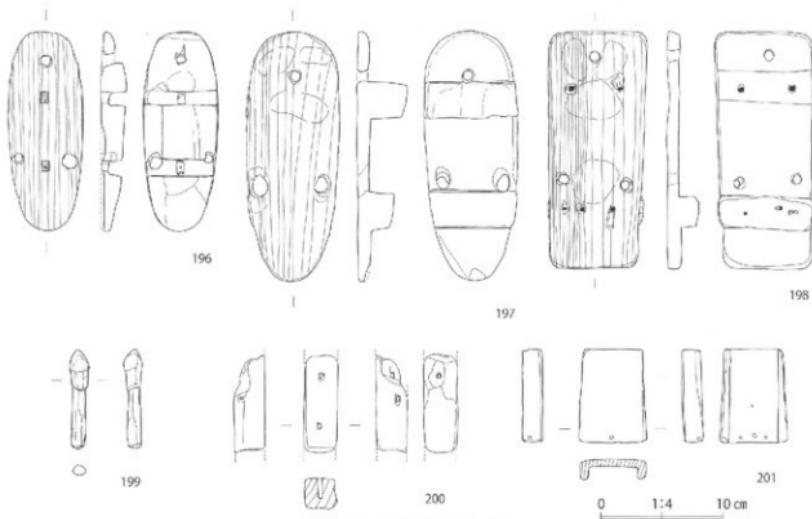
国産陶器

180は瀬戸・美濃陶器の碗の底部片で、高台付近部は露胎、織部黒もしくは黒織部と思われる。181は肥前陶器の大皿である。外側に大きく広がる形状で、高台部付近は露胎、内面に灰釉を施し、その上から鉄絵を描く。

182は産地不明の匂干形の鉢で、腰部がやや膨れて胴部がくびれ、口縁部が広がり波状を呈する。内面に白化粧土を施し、外表面は口縁部下から無釉である。

国産磁器

183は肥前磁器の瓶の胴部片である。外表面は釉薬を掛け分けし、内面は無釉である。19世紀後半のものと思われる。



第69図 SK09出土遺物(2)

土器

184～187は手づくね成形で指頭圧痕などの調整痕が残る。

185～187には油煙痕があり、灯明皿として使用した。188・189はロクロ成形で、底部に回転糸切り痕が残り、口縁部に油煙痕は見られない。189には煤が付着する。

木製品

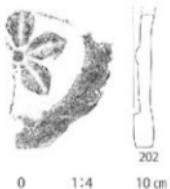
190～195は漆器の椀である。外側に黒漆、内側と模様に赤漆を使用する。使用されている材はすべてトチノキで、木取りは195は柾目取りで、それ以外は板目取りである。赤漆には195にはベンガラを、それ以外には朱が使われて、下地に炭粉を用いている。191～193は草木模様を描き、193には見込み部分に2.5cm四方の焼き焦げた痕が残る。194は鶴亀文様や山などの風景を、195は蓬莱紋を描く。

196～198は下駄である。196は丸形の差込下駄で、歯の部分は欠損し、後緒穴は左側がやや前方に見られる。前緒穴周辺に指の痕跡が残り、歯を留めるホゾ穴が中央に2つある。小形で子供用とも思える。197は丸形の連歎下駄である。後緒穴が中央に向かって斜めに穿孔し、前緒穴周辺に指の痕跡が残り、後歎の減り方が激しい。198は角型の連歎下駄である。歯を補修するための目釘痕が見られ、前緒穴周辺には指の痕跡が残る。

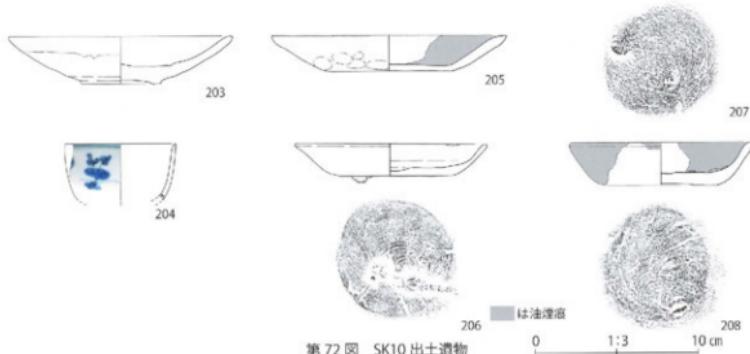
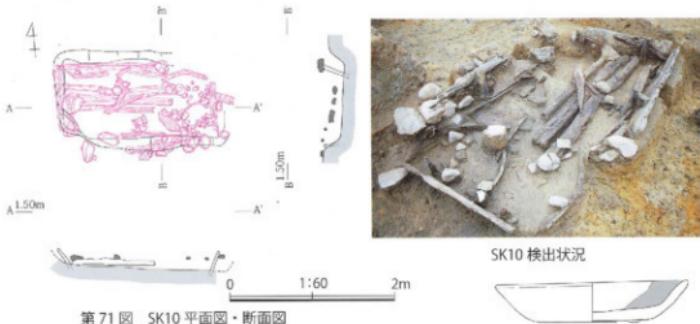
199は遊玩具の人形の一種か祭祀関連の陽物形と思われる。200は表側に方形状の穴が2穴あり、側面にも穴が1穴ある。建具の一部と考えられる。201は平面形が台形状を呈し、表面に目釘が1本、裏面に目釘穴が3穴あり、建具の一部ではないかと考えられる。

瓦

202は軒丸瓦の瓦頭部分で、文様は四角形の中房を持つ桔梗紋である。



第70図 SK09出土遺物(3)



SK10：木枠方形土坑（第71図）

SK10

南側で検出した木枠方形土坑である。板材と杭でつくられ、外法 2.00 m × 1.09 m を測り、形状は長方形を呈する。板材は青灰色砂質土まで掘り込んでつくられているが、土坑そのものの掘り方についてはどこから掘り込まれたかは不明である。板材は東西両側がほぼ垂直に差し込み、その内側に杭を打ち込んで支えとしている。また、南北両側がやや斜めに差し込むように据えられ、その外側は固定のための石を置いた。板材の多くはホゾ穴や切込みがある加工品が多く、建築部材の転用品もしくは再利用品と思われる。杭は木の皮が付いたものが大半で、下端部は先端を尖らせて打ち込んでいる。ところどころに板材と壁面の間に裏込めの砂質土を使用している。埋土から肥前陶器や貿易磁器、土師器皿などが出土した。

SK10出土遺物（第72図）

国産陶器

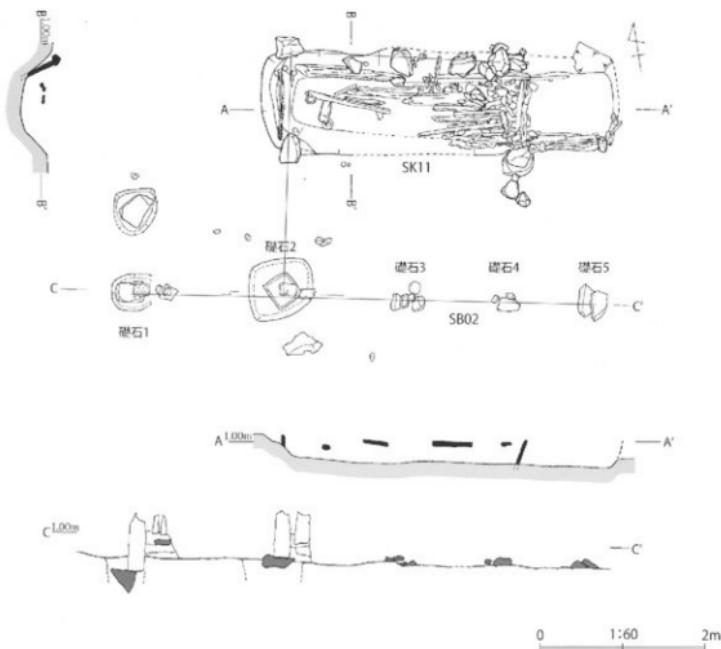
203は肥前陶器の平形小皿である。外側に開きながら立ち上がる形状で、高台は片薄高台、高台付近は露胎、内面から胴部付近まで灰釉を施し、見込部には胎土目が残る。

貿易磁器

204は貿易磁器の青花の丸形小碗で、胴部が膨らみながら立ち上がる形状で、外面に草花模様を描く。

土器

205は手づくね成形で指頭圧痕が残り、口縁部に油煙痕があり、灯明皿として使用していた。206～208はロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残り、208・209は口縁部に油煙痕があり、灯明皿として使用していた。



第73図 SB02平面図・断面図

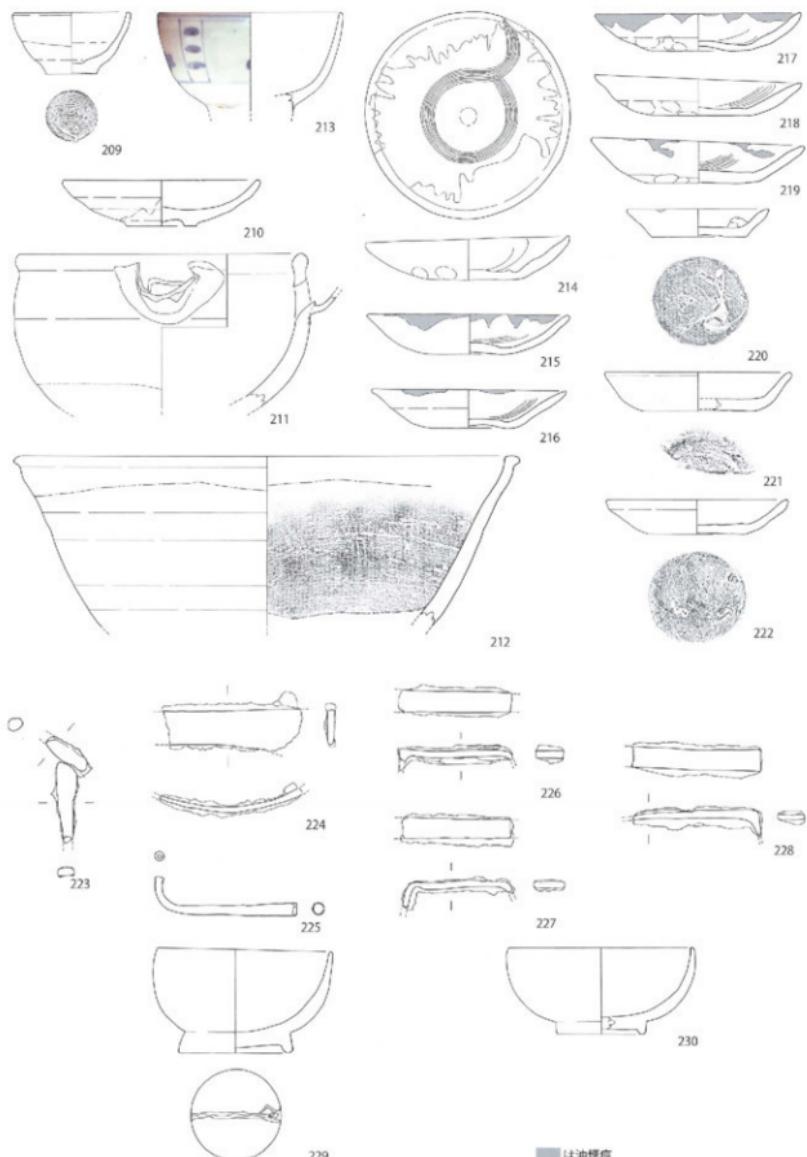
SB02：建物跡 SK11：木枠方形土坑（第73図）

SB02 南側で検出した木枠方形土坑を伴う建物跡である。木枠方形土坑は SK12 と同じく板材と杭でつくりられ、木枠部分の外法 2.95×0.95 m を測り、形状は長方形を呈する。板材は青灰色砂質土まで掘り込んでいるが、土坑そのものの掘り方についてはどこから掘り込まれたかは不明である。板材は東西両側にほぼ垂直に差し込み、その内側に杭を打ち込んで支えとし、南北両側はやや斜めに差し込むよう据え、その外側は固定のための石を置いていた。板材はホゾ穴や切込みなどがある加工品が多く、建築部材の転用品もしくは再利用品と思われる。杭は木の皮があるものが多く、下端部は先端を尖らせ打ち込んでいる。ところどころに板材と壁面の間に裏込めの砂質土を使用していた。全体は SK12 と比べ雑な作りである。埋土から肥前陶器や木製品、鉄製品などが出土した。

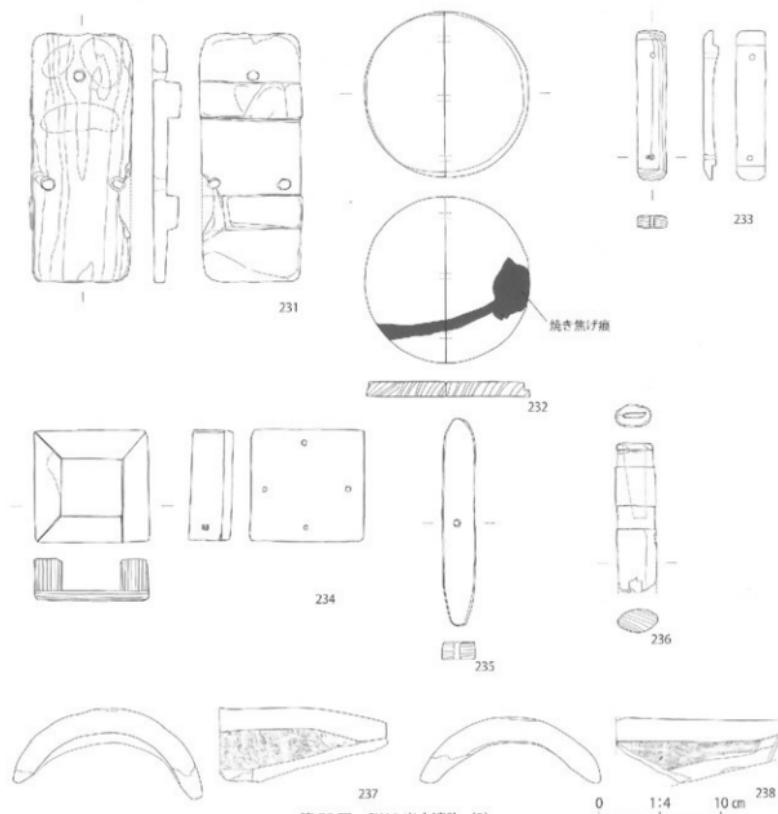
さらに南側から礎石立の柱材、礎石と思われる石が 1 列になって検出された。

礎石 1 は上端径 0.50 m 前後、深さ 0.50 m 以上を測る不整円形のピットの中に、五輪塔の火輪の頂部を下にして礎盤石とし、 0.20×0.15 m の柱材を据えたものである。この柱材の東側すぐ傍に 10cm 前後の角材が添柱のように 2 本建っていた。この添柱のような角材は直に地面に置かれ、礎石 1 の検出面よりも高い位置に角材の底部があることから、この添柱のような角材が礎石 1 とは別の遺構の可能性もある。

礎石 2 は $0.40 \times 0.38 \times 0.08$ m の石の上に 0.15×0.20 m の角材を乗せ、礎石 1 と同じ



第74図 SK11出土遺物（1）



第75図 SK11出土遺物(2)

ように東側のすぐ傍に 0.15×0.20 m の角材が添柱のように建っていた。この角材は直に地面に置かれ、礎石 2 の検出面よりも高い位置に角材の底部が当たることから、この添柱のような角材が礎石 2 とは別の遺構の可能性も考えられる。この礎石 1・2 は様相が似ており、一対の遺構の可能性も考えられる。

礎石 3 は $0.20 \times 0.10 \times 0.05$ m の石を数個置いて、その上に 10cm 前後四方の柱材を据えている。礎石 4・5 は $0.18 \times 0.30 \times 0.10$ m 前後の石が数個置かれていたが、柱材は見つかなかった。礎石 1～5 の間隔は西から一間幅 1.80m、1.57m、1.25m、1.05m を測る。

これらの礎石は上層から掘り込まれた杭穴に礎盤石として置かれた可能性がある。また、木枠方形土坑の周囲にある石と平面的には建物跡に符号する。柱穴の様相や間隔もまちまちであることから簡易的な構造の建物の中に木枠方形土坑がつくられたと想定される。

SBO2 出土遺物 (第 74・75 図)

国産陶器

出土した陶器はすべて肥前陶器である。209 は杉形の小碗で、外側にわずかに開きながら立ち上がる形状である。高台付近は露胎で、内面から外面胴部付近まで灰釉を施し、底部には

回転糸切り痕が残る。

210は丸形の小皿である。膨らみながら立ち上がる形状で、高台は兜中高台である。高台部は露胎で、内面から外面口縁部付近まで灰釉を施す。口縁部に油煙痕があり、灯明皿として使用した。

211は口縁部直下に注口を持つ片口鉢である。胴部が膨らむ形状を呈し、内面から制部下まで白瀬釉を施す。

212は口縁部無装飾の植鉢である。口縁部がやや肥厚する形状で、口縁部に化粧土を施す以外は無釉である。内面の指目は磨耗が顕著である。

国産磁器

土器

213は肥前磁器の丸形中碗である。腰部が膨らみ立ち上がる形状で、外面に花模様を描く。

214～222は十器皿である。214～219は手づくね成形で、指頭圧痕が見られる。220～222はロクロ成形によるもので底部に回転糸切り痕が残る。すべて口縁部に油煙痕があり、灯明皿に使用した。

鉄製品

223は用途不明で、2本の釘が銷びついているように見える。224も用途不明で、薄い鉄板状を呈し、銷とと一緒に石がついている。225は煙管である。真鍮製で雁首の部分で、火皿部分は欠損している。226～228は鏃である。

木製品

229・230は漆器の椀である。229は外側に黒漆、内側、模様は赤漆を使用し、その赤漆は朱である。下地には炭粉を用いている。材はカエデで、木取りは柾目取りである。形状は上庄で大きく丸んでおり、外面に模様を描き、高台はやや高く、高台内には引抜き傷のような刻印が見られる。230は内外とも黒漆で、下地に炭粉を使用している。材は広葉樹系で、木取りは柾目取りである。高台内に引抜き傷のような刻印が見られる。

231は角型の連歛下駄で、後歛の消耗が激しく、前歛穴周辺には指の痕跡が残る。232は曲物の底板で、断面に目釘が3ヶ所あり、周縁に段差を持つ。裏面に焼き焦げが見られる。233は上下両端が丸く、裏面は弧状に加工され、表面に目釘1本と目釘穴1穴がある。建具の一部と思われる。234は舟形で、底板と側木を組み合わせ、底板に目釘が4本あるが、用途不明である。235は細長い梢円形状で、中央に0.4cmほどの軸孔が1穴見られ、糸巻きの横木と思われる。236は柄と思われる。上端に茎孔と、上部と中央に凹みがある。

224・225は棟込瓦である。

SB03・04：建物跡（第76図）

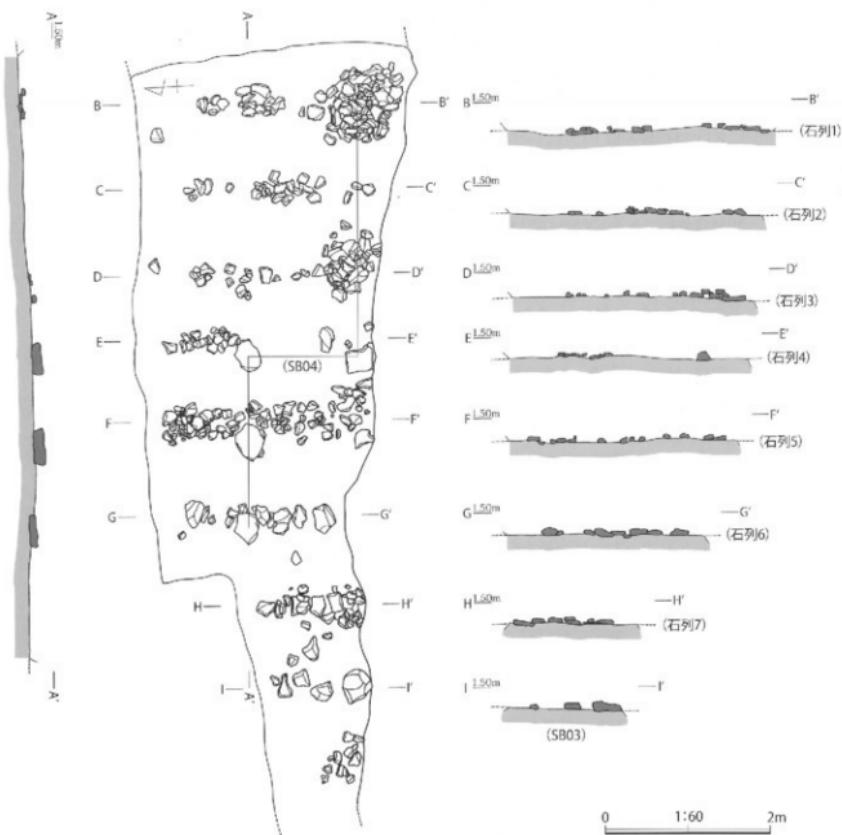
SB03・04

北側から検出した礎石と石列群である。西側は搅乱を受け、南側は削平されているため正確には分からぬが、現存で東西長8.00m、南北長2.80mの範囲に南北方向を軸とした石列8列（石列1～7:SB03）と東西方向を軸とした礎石3石（礎石1～3:SB04）を検出した。

石列は現存で最長の南北長が2.50m（石列5）、石列の間隔は一間幅1.00～1.20mを測る。SB03は屢敷地の外壁と想定できる傍から検出されたことから、門長屋のような建物の基礎ではないかという指摘があり、そうであれば土間ではなく板敷きの建物が考えられる。

SB04は礎石1～3が石列4～6にかけて、大きさが0.50m前後の頂部を平らに加工した石であり、その間隔は西から一間幅1.10m・1.00mを測る。また石列1・3の南端に集石があり、礎石下の栗石と思われるが、礎石ではなく、その間隔はそれぞれ一間幅1.00m前後を測る。これららの礎石に対応するような他の石は検出できなかった。

SB03・04は別々の建物跡と考えられる。検出面からは土器皿の小片が出土しているが、岡化には至らなかった。そのため、両遺構の前後関係は分からなかった。



第76図 SB03・04平面図・断面図

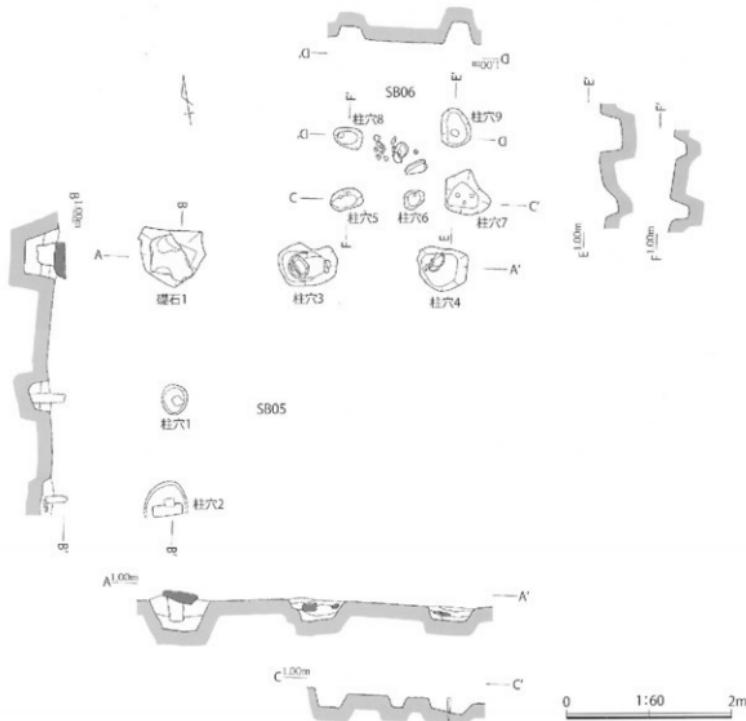
SB05・06：建物跡（第77図）

南側で検出された建物跡と思われる遺構である。

SB05

SB05は礎石や礎盤石で構成される建物跡である。礎石1は北西隅から検出され、礎石の大きさは $0.70 \times 0.37 \times 0.12\text{cm}$ を測り、石の頂部を平らに加工し、その下に直径 0.70m 、深さ 0.40m の不整円形を呈する土坑があり、その中に $0.20 \times 0.30 \times 0.25\text{m}$ の石を置いてそれを根石としていた。

礎石1の南側から検出された柱穴1は幅 10cm 前後の角材が残存していた。柱穴2は柱穴1のさらに南側から検出され、そのピットの中に $0.40 \times 0.15 \times 0.05\text{cm}$ の石を置いて礎盤石とし、その石の上に幅 15cm 前後の角材が残存していた。礎石1・柱穴1・2の間隔は北側から一間幅 1.70m 、 1.40m を測る。



第77図 SB05・06平面図・断面図

礎石1・柱穴1・2に直交するように礎石が検出された。柱穴3は長軸東西長0.64m、短軸南北長0.50m、深さ0.37mを測る楕円形を呈するピットであり、その中に $0.27 \times 0.16 \times 0.11$ m大の石とその下にも $0.27 \times 0.11 \times 0.04$ m大の石を検出したが、柱材ではなく礎盤石と思われる。柱穴4は長軸東西長0.61m、短軸南北長0.51m、深さ0.20mを測る不整円形を呈するピットであり、その中に大きさ0.15m前後の石を数個入れてその上に頂部を平らにした石を乗せた状態で検出された。これも柱材ではなく、礎盤石と思われる。礎石1・柱穴3・4の間隔は東西軸西側から一間幅1.70m、1.65mを測る。これらは一連の建物跡と考えられるが一間の長さが不統一であり、礎石、礎盤石とそれぞれ柱の様相が異なるため、どのような建物が建っていたかは分からぬ。

SB06 SB06は柱穴3・4の北側から検出された（柱穴5～9）。上端径0.40cm前後のピット内に直径0.05m前後の細長い先端を尖らせた杭が1～3本打ち込まれていたが、規則性は見られなかった。東西軸の柱穴5・6・7の間隔は西から一間幅0.85m、0.60m、柱穴5・6の間隔は1.35m、南北軸の柱穴5・8の間隔は0.80mを測り、柱穴7・9の間隔は0.85mを測る。

規模はそれほど大きくなく、また、細い杭が残っており一間の長さも短い。簡易的な構造物

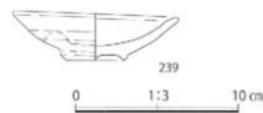
があった可能性が示唆される。

また両遺構の検出面直上から遺物は出土しなかった。

SX07：石列（第 78 図）

SX07 調査区東側南東隅から検出した石列である。遺構面を形成する黄色土のくぼみに黒色粘質土が入り込み、石が置かれた状態であった。石が 1.50 m × 1.00 m の範囲で南北方向を軸に 1 列、7 個並んだものと、西側にややずれて、あまり規則性が見られない石列で構成されている。遺構直上から上師器皿の小破片や肥前陶器皿が出土したが、遺構の性格・用途等は不明である。SX07 出土遺物（第 79 図）

国産陶器 239 は肥前陶器の丸形の小皿である。わずかに膨らみながら立ち上がる形状で、高台部は兜巾高台である。高台付近は露胎、内面から外面胴部付近まで灰釉を施し、見込部に胎土目が残る。



第 78 図 SX07
平面図・断面図

SX07 検出状況

第 79 図 SX07 出土遺物

最終遺構面遺構外出土遺物（第 80 図）

以下は最終遺構面で遺構外から出土した遺物である。

国産陶器 240 は肥前陶器の端反形中碗である。腰部で膨らみながら立ち上がり口縁部が外反する形状で、内面から外面胴部付近まで白化粧土を施し、その上から灰釉を施す。
241 は肥前陶器の折縁形の小皿である。外側に開きながら立ち上がり、口縁内側に溝が廻る形状である。高台は兜巾高台で、高台付近は露胎、内面から外面口縁部付近まで灰釉を施し、内面の見込みに胎土目が残る。

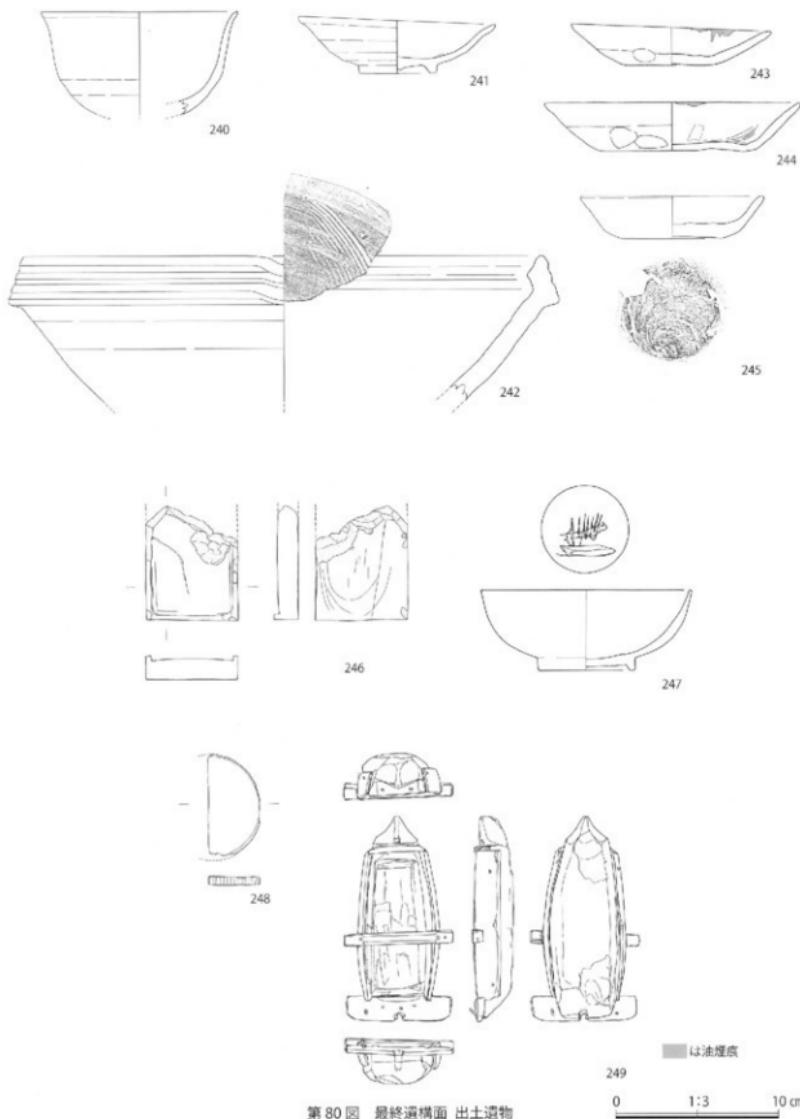
242 は備前陶器の口縁部外帯形擂鉢で、口縁部が肥厚して 3 条の沈線が廻り、指目が斜めに走る。

土器 243・244 は手づくね成形で指頭圧痕が残り、245 はロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。すべての口縁部に油煙痕があることから、灯明皿として使用していたものである。

石製品 246 は産地不明の硯である。
木製品 247 は漆器の椀である。外面に黒漆、内面と模様に赤漆を使用し、赤漆には朱を下地には炭粉を用いている。材はトチノキで、木取りは板目取りである。草木模様を描き、葉脈部分は引抜き技法を用いている。内面見込部に 5cm 四方の焼き焦げが、高台内に引抜き傷が見られる。
248 は曲物の底板あるいは蓋板と思われる。側面に目釘やその痕跡は見られなかった。249 は組合せ式の舟形木製品である。様々なパーツに別かれて出土した。

最終の遺構面について

最終の遺構面では建物跡を思わせる遺構が 3 つ検出されたが、その全容は明らかにできなかった。SBO4 は石列を用いた建物と思われ、家老屋敷地内の全体の配置から考えると、外壁



第80図 最終遺構面 出土遺物

の傍らにすることや、屋敷地の前部分に当たることから、門長屋や馬屋のような建物が想像されるが、それを断定できる証拠はない。

SB05は礎石や礎盤石を用いており、また比較的太い角材が残存していた。ここは建物の一角であったかもしれない。それに対してSB06は比較的小さな土坑とその中に細い杭が打ち込まれ、その間隔も狭いことから建物が建っていたとは考えにくい。どちらかというと簡易的な構造物ではないかと想像される。SB02は木枠方形土坑を作った建物と推測されるが、どのような建物の構造であったかは分からぬ。

SK12ははっきりとした用途は分からぬものの、用いられた木材やつくりから恒久的なものというよりは簡易的、一時的なものではないかと思われる。

全体的には遺構の密度は低く、空間地であった可能性も考えられる。

出土遺物の点から言うと、肥前陶器では17世紀初頭の胎土日の皿や17世紀前半頃の備前陶器の擂鉢が見られ、磁器では中国製の景德鎮窯や漳州窯のものがほとんどである。これらから最終遺構面は江戸時代初期、堀尾期の遺構面と考えられる。ただしSB02内の木枠方形土坑から出土した213は17世紀中頃の肥前磁器で、時期的に新しい遺構であった可能性があるが、全体としては江戸時代初期と考えてよいのではないだろうか。

木製品のうち、漆椀についての詳しい分析結果は、第9章「松江城下町遺跡出土漆器資料の材質・技法に関する調査」を参照されたい。本遺跡出土の漆椀は、使われている材ではトチノキが多く、赤漆は朱が使われているものが大半である。また下地に炭粉を用いて、漆は1回だけ塗られている。引摺き技法や高台内刻印など江戸時代初期の様相を示す痕跡が多く見られた。

第5節 小結

まず各遺構面の年代観をまとめておきたい。

上面の遺構面は幕末期の特徴的な遺物である肥前磁器の広東碗や壺反碗がほとんど見られず、明治期の布志名焼や銅版絵付や型紙絵付の肥前磁器が多く見られることから、19世紀後半の明治に入ってからの遺構面と考えられる。ゆえに、検出された遺構の大半が家老屋敷とは関係ない明治期の遺構と思われる。ちなみに明治維新以後、版籍奉還で藩主松平定安が知事に任命され、一時は藩主家族がこの乙部屋敷に住むことになり、乙部家の人々は石橋総門の下屋敷を住まいとした。その後、鹿児島県により定安が知事を解任され東京に移り住むことになり、秩禄処分が行われ、この周辺が細かく分筆された。明治6年の『松江市街二分間図』（広島大学所蔵）では殿町周辺が細かく分筆されていることが伺える。調査地付近は絵図が水濡れによる破損で伺い知ることができないが、周辺の状況から細かく分筆された可能性は高く、上面の遺構面としてはこの分筆前後と考えたい。

中間層の遺構面の遺物を概観すると、いくつかの時期に別けられる。一つは、肥前陶器では141・142の折線形で見込に砂目が残る皿や、128・150の肥前陶器の口縁部が内側に突出する擂鉢などは17世紀前半頃と比定できる。次に87・115の高く撥形の高台を持つ肥前陶器の碗が17世紀後半～18世紀前半に比定され、肥前磁器では120の口縁内部に四方襖文のある碗や121の見込に五弁花のコ



第81図 京極期松江城下町絵図(島根県立図書館蔵)
の調査地付近

ンニヤク印判を持つ皿などは18世紀前半に比定できる。以上のことから、およそこの中間層は17世紀前半～18世紀前半の遺構面と考えられ、遺構の検出状況からも複数の遺構面を含む可能性がある。SK05・06、SX03は上面の遺構面から掘り込まれた遺構であった可能性が高く、SK08の掘り込み面も上層からの掘り込みの可能性が高い。このSK08の右横方形土坑は次年度の松江城下町遺跡(殿町297番地外)でも多数検出され、幕末期の第1遺構面の遺構として取り上げられている。規模の違いはあるが、形状や石材や積み方など類似点が多く、本遺跡の場合も同じ時期につくられた可能性が高い。

また、注目すべきはSS06・07の礎石やSW01・02の右坑が北側を意識して配置されていることである。SW01・02は石の面を北側に崩している。特にSW02は整然と積み上げられ、また、北側に向きを変えて囲むようになっており、明らかに北側を意識したつくりになっている。これは京極附松江城下町絵図を見ると、調査地である「佐々邸」の北西隅が鍵の手状になつておらず、その部分がSW02にあたるのではないかという意見もあった。SW02の北側部分は遺構がなく、空閑地であった可能性がある。SW02の北側に「勞溜り」と呼ばれる軍勢が集まり控える防衛上の広場のような空間があるとすれば、この絵図と符合する。土層等を検討した結果、可能性としては考えられる。

最終遺構面の遺物を概観すると、肥前陶器では203・239・241などの見込に胎土目が残る皿や、181の絵唐津などから、最終遺構面は17世紀初頭に比定でき、堀尾期に相当する。肥前陶器はSB02内の木枠方形土坑内出土の213だけで、それ以外は中国磁器であり、その他の土器皿や漆椀なども江戸時代の初期の様相を示すものが多く出土している。

本調査地は遺構の密度が低く、建物跡としてSB02・03が検出されたが、明確な構造を示す建物跡などは検出されず、またSK10のような簡易的なつくりの遺構が検出されるなど、屋敷地の母屋部分とは異なる部分であったと考えられる。

他の遺物で十師器皿を見ると、本遺跡では遺構面ごとの明確な違いはあまり見られないが、大きく別けて最終面では手づくね成形が多く、中間層ではロクロ成形と手づくね成形が同じように共存し、上面の遺構面ではロクロ成形が多く、ヘラ削り調整の皿も出土した。特に最終遺構面から出土した土器器皿のほとんどが灯明皿として使用されていたのに対して、時代が新しくなるほどその比率は低くなる。おそらくは生活様式の変化があったのではないだろうか。また、灯明皿が素焼きの上器から陶器へ移行したとも考えられ、上面の遺構面では陶器の灯明皿が出土している。はっきりとは断言できないものの、ある程度の違いが出てくるのは確かである。

瓦は最終面ではSK09出土の202桔梗紋の軒丸瓦やSK11出土の237・238の棟込瓦だけであり、中間層では三つ巴紋の軒丸瓦や三葉と唐草文様の軒平瓦などが見られ、上面の遺構面になると、平瓦や棟瓦などその数が逆に増えてくる。これは建物の屋根に葺かれているかどうかの違いと考えられる。本遺跡周辺では最初の頃には瓦葺の建物はほとんどなく、時代が新しくなるにつれて、徐々に瓦葺の建物が増えていることを示しているのではないだろうか。

出土遺物から各遺構面の年代観をまとめると以下のようになる。

遺構面	遺構面の概要	他の調査区との対応	時期
調査前地表面	日銀松江支店長舎が存在していた。		現代
上面の遺構面	遺物は19世紀後半が中心。明治期の遺構と思われる。遺構内からの出土遺物には肥前磁器の広東碗は存在しない。型紙絵付や銅版絵付の肥前磁器が多い。在地陶器である布志名焼は明治期以降のものが大半である。SD01は明治6年以降の屋敷境の消の可能性がある。	殿町297番地外の第1遺構面もしくは、それより上位。	19世紀後半
中間層	一括での調査を行った。遺構は随時精査を行う。遺構内遺物については17世紀後半～18世紀前半の遺物が中心である。18世紀後半～19世紀初頭の遺物（肥前磁器の外青磁や広東碗）が見られない。また17世紀中頃の遺物（初期伊万里）が少ない。	殿町297番地外の第1～第3遺構面に対応する。	17世紀後半～18世紀前半
最終遺構面	磁器は中国産のものが中心で、肥前磁器はほとんど見られない。肥前陶器は砂目のものが多く胎土目が中心である。江戸時代初頭の備前産の播鉢が見られる。	殿町297番地外の第4遺構面に対応するか。	17世紀初頭
地山			

○上面の遺構面 — 19世紀後半 屋敷地が分筆された前後の遺構面である。陶器では布志名焼、磁器では型紙絵付や銅版絵付の肥前磁器が中心となる。土師器皿ではロクロ成形が多く、やや大形のヘラ削り調整の土師器皿も見られる。瓦は平瓦や棟瓦が非常に多く出土する。窯道具もいくつか見られる。

○中間層 — 17世紀前半～18世紀前半 屋敷主としては「堀尾」「佐々」「乙部」のいずれも当てはまる。肥前陶器の砂目皿や京焼風が見られ、肥前磁器では五弁花のコンニャク印判が見られるが、比率的には磁器の割合が低い。土師器皿はロクロ成形と手づくね成形とが同じ様な比率である。

○最終遺構面 — 17世紀初頭 屋敷主としては「堀尾采女」の時期に相当する。肥前陶器では胎十目皿や絵唐津が見られ、磁器では中国磁器が少量ながらも見られる。土師器皿では手づくね成形が多くなり、丸明皿として使用されているものが多い。瓦では棟込瓦が多く見られた。

註

(1)布志名焼は安永9年(1780年)に布志名村(現松江市大島町)で開窯された松江藩の御用窯が始まりで、その後、民窯としても発展し、現在に至っても焼かれている。

(2)原宏「島根のやきもの」『日本やきもの集成 8 山陰』平凡社 1981年

表1 殿町 287番地(北屋敷) 陶磁器・土器遺物觀察表

遺物番号	被構名	材質	器種	器形	量(㎝)				年深地	几脚脚	備考	
					口径	底径	高さ	その他				
1	SK01	陶器	六角	平形	-	-	-	-	不明	-	堆積陶器。外側に模写学模倣の刻印。	
2	SK02	陶器	小杯	端反形	7.0	3.5	6.6	-	布志名	-	内外面削り分け。	
3	SK02	陶器	中瓶	丸形	11.6	4.5	9.5	-	布志名	-	削削削。見込みにハマ底。	
4	SK02	陶器	-	-	-	-	-	-	布志名	-	やや伏れ。底無地に削印。	
5	SK02	陶器	小皿	平形	7.9	3.9	1.8	-	布志名	-	底部削り。底部は凹凸状。	
6	SK02	陶器	小皿	端反形	12.8	5.3	3.6	-	布志名	-	見込みに模倣の草文、ハマ底。	
7	SK02	陶器	十輪	丸底無足	15.6	6.8	6.5	-	布志名	-	紐状双耳把手。外側にスス付。	
8	SK02	陶器	別茶	筒形	18.3	-	-	-	布志名	-	外底に白化物・スス付。	
9	SK02	陶器	望炉	円筒形	19.1	12.7	17.8	-	布志名	-	口縁部に通風孔。外側は凹凸状。	
10	SK02	陶器	鍍子	丸形	2.4	2.0	-	-	布志名	-	底部に削りハマ底。底面あり。ニヒニア。	
11	SK02	陶器	小碗	端反形	6.8	3.2	3.1	-	肥前	-	1850年代以降。草花模様。	
12	SK02	合掌蓋	丸形	-	6.6	1.2	-	-	肥前	V	風巻底。	
13	SK02	土器鉢	小(手)	直筒形	9.4	2.0	2.3	-	-	-	赤色系。底無。	
14	SK02	土器鉢	手(小)	直筒形	8.4	4.0	2.6	-	-	-	赤色系。底部は削削糸切り。	
15	SK02	土器	焰焼	無足・底丸	14.0	-	-	-	-	-	見込みに底点状焦げ跡。也部は削削へく削り。	
16	SK03	陶器	中瓶	丸形	11.4	-	2.7	つまみ付	布志名	-	蛇口・日鉢剥ぎ。	
17	SK03	陶器	高台瓶	束形	9.5×4.9	4.9	6.5	-	布志名	-	直筒形・底削り。底面あり。直筒形。	
18	SK03	陶器	小瓶	端反形	8.4	3.5	3.7	-	肥前	-	見込みに「等」。1860年代以降。	
19	SK03	陶器	中瓶	端反形	9.8	3.8	5.3	-	肥前	V	見込みに草文。	
20	SK03	土器	高台瓶	-	9.8	-	-	-	在原系	-	表面に黒黄釉あり。素口露口口。	
21	SK03	土器	盆	圓形	8.1	3.8	-	-	在原系	-	七尾の村高京。底辺は同様。底切り。φ1.2-1.4cmの穴。	
22	SE01	陶器	提伊	中瓶	15.0	12.5	-	-	布志名	-	内面に底無。	
23	SB01	陶器	中瓶	端反形	10.4	4.0	6.0	-	肥前	V	赤・黒・鳥文。	
24	SB01	陶器	中瓶	束形	1.8	3.6	10.5	-	肥前	V	朱色で「御所前」。	
25	SH02	陶器	小瓶	筒形	6.6	4.8	7.5	-	山口名	-	口縁部に緑色輪解け分け。	
26	SD02	陶器	中瓶	端反形	7.8	5.4	5.4	透刻4.2	山口名	-	切込。	
27	SF02	陶器	打白	川形瓶	10.6	19.2	6.5	透刻7.0	山口名	-	切込。	
28	SP02	陶器	水盤	丁子・山形	25.0	13.4	9.6	-	山口名	-	見込みにハマ底。	
29	SP02	陶器	人朴	單工縫状	39.0	17.4	16.6	-	山口名	-	見込みに「等」。	
30	SD02	陶器	中瓶	平形	11.1	4.4	4.6	-	肥前	-	堆積付。1860年代以降。	
31	SD02	陶器	小皿	方形	8.0	5.7	2.3	-	山口名	-	予復且。1860年代以降。	
32	SD02	陶器	中瓶	丸形	10.2	-	2.6	つまみ付4.2	山口名	-	型紙沿付。1860年代以降。	
33	SD02	陶器	絆重	高台瓶・直座	10.8	9.8	2.7	-	肥前	V	型紙沿付。	
34	SD01	陶器	水盤	打白	45.8	23.0	11.7	-	山口名	-	脚。見込みにハマ底。	
35	SD01	陶器	小瓶	浅平形	-	9.4	-	-	山口名	-	脚。見込みにハマ底。	
36	SD01	陶器	大瓶	浅平形	-	5.0	-	-	山口名	-	削出高台。	
37	SD01	陶器	上置	小形	-	-	-	-	山口名	-	φ0.3cmの空気抜き用穿孔。	
38	SD01	陶器	上置	中瓶	かえり3.3	2.8-3.4	-	-	山口名	-	ノッチ抜け。	
39	SD01	陶器	小瓶	端反形	6.6	3.1	4.8	-	肥前	-	堆積付。1860年代以降。	
40	SD01	陶器	小瓶	丸形	-	5.4	-	-	肥前	V	海鈔染付。	
41	SD01	陶器	中瓶	平形	-	10.8	-	-	肥前	-	型紙沿付。1860年代以降。	
42	SD01	陶器	中瓶	平形	-	4.0	-	-	肥前	-	型紙沿付。1860年代以降。	
43	SD01	土器	廣大(直)	直筒形	15.6	9.8	2.8	-	-	-	白色系。	
44	SD01	土器	押型	直(小)	直筒形	10.0	5.4	2.3	-	-	-	椎色系。底部は内軋し系切り。並排底。
45	SD01	土器	平製	横台	-	4.8	-	-	山口名	-	高台が融解。	
46	SD02	陶器	端曲	端反形	-	3.1	-	刺繡付5.0	山口名	-	底部は削削糸切り。	
47	SK02	土器	中瓶	平形	18.6	8.9	3.9	-	山口名	-	赤色系。底衣存容。蓋して使用。底辺はハラ削り。	
48	SK02	土器	中瓶	直筒形	18.4	9.1	4.3	-	山口名	-	赤色系。底衣存容。蓋して使用。底辺はハラ削り。	
49	上面 造構外	陶器	碗	-	4.9	-	-	-	肥前	V	高台脚。	
50	上面 造構外	陶器	小杯	端反形	7.6	3.4	4.6	-	肥前	-	高台内に「猪前阿佐」印。	
51	上面 造構外	陶器	小瓶	丸形	6.9	3.5	4.7	-	山口名	-	内面削りも刀削り。外側底角にによる彫文。	
52	上面 造構外	陶器	中瓶	竹形	8.5	4.1	6.1	-	山口名	-	外底陰刻「よし風」。	
53	上面 造構外	陶器	中瓶	中段	10.4	4.5	7.0	-	山口名	-	見込みに「等」。	
54	上面 造構外	陶器	中瓶	中段	9.8	4.1	7.7	-	山口名	-	今子か。コ西添剥蝕。	
55	上面 造構外	陶器	小瓶	端反形	7.8	4.4	3.4	-	山口名	-	見込みに「等」。	
56	上面 造構外	陶器	中瓶	打白	5.0	5.1	透刻4.2	山口名	-	底部は削削へく削り。見込みにハマ底。		
57	上面 造構外	陶器	中瓶	直邊月狀	11.0	6.0	3.0	透刻7.3	山口名	-	底部は削削へく削り。見込みにハマ底。	
58	上面 造構外	陶器	小瓶	端反形	6.6	3.9	6.2	-	山口名	-	底部は削削へく削り。見込みにハマ底。	
59	上面 造構外	陶器	水盤	丁子の形	23.0	19.9	6.8	-	山口名	-	底部は削削へく削り。見込みにハマ底。	
60	上面 造構外	陶器	水盤	丁子の形	31.5	16.8	12.8	-	山口名	-	底部は削削へく削り。見込みにハマ底。	
61	上面 造構外	陶器	小瓶	無脚	8.2	3.2	5.3	-	肥前	-	白底。	
62	上面 造構外	陶器	小皿	方形	10.0	4.0	2.5	-	東・山田	-	型打陽刻。見込みに竹竹格。側面に魚の尾。高台内に「萬千」印。1860年代以降。	
63	上面 造構外	陶器	小皿	方形	8.2	3.8	2.6	-	東・山田	-	型打陽刻。見込みに花文。1860年代以降。	
64	上面 造構外	陶器	小皿	九形底足	12.2	7.2	2.2	-	肥前	V	蓋。見込みに「猪前阿佐」。蛇・日圓形高台。也紙沿付。一指・薄・竹竹梅文。見込みに「萬千」印。	
65	上面 造構外	陶器	中皿	丸底丸方	13.6-19.6	6.8	3.8	-	肥前	-	型打陽刻。見込みに「萬千」印。1860年代以降。	
66	上面 造構外	陶器	中瓶	中段	10.2	-	2.4	つまみ付4.2	肥前	V	赤色系。底部は内軋し系切り。見込みにスス付。	
67	上面 造構外	陶器	中瓶	中段	1.3	2.8	10.4	-	肥前	-	赤色系。指痕底。	
68	上面 造構外	陶器	十輪	中段	11.5	4.5	2.8	-	山口名	-	赤色系。指痕底。	
69	上面 造構外	陶器	中段	中段	13.0	5.0	2.7	-	山口名	-	赤色系。	
70	上面 造構外	陶器	中段	中段	12.3	4.6	1.9	-	山口名	-	赤色系。底部は内軋し系切り。見質。	
71	上面 造構外	陶器	中段	中段	14.5	4.0	3.1	-	山口名	-	赤色系。底部は内軋し系切り。見質。	
72	上面 造構外	陶器	中段	中段	10.0	-	2.9	-	在原系	-	赤色系。底部は内軋し系切り。見質。	
73	上面 造構外	陶器	中段	中段	6.2	1.5	-	-	在地系	-	赤色系。底部は内軋し系切り。	
74	上面 造構外	陶器	中段	中段	-	-	-	-	山口名	-	赤色系。底部は内軋し系切り。	
75	上面 造構外	陶器	中段	中段	-	-	-	-	山口名	-	赤色系。底部は内軋し系切り。	
76	上面 造構外	陶器	中段	中段	11.4	-	-	-	山口名	-	赤色系。底部は内軋し系切り。	
77	上面 造構外	陶器	中段	中段	9.6	2.3	-	-	山口名	-	赤色系。底部は内軋し系切り。	
78	上面 造構外	陶器	中段	中段	13.2	13.4	21.2	-	山口名	-	赤色系。底部は内軋し系切り。	
79	上面 造構外	陶器	中段	中段	14.0	10.8	21.5	-	山口名	-	赤色系。	
80	上面 造構外	陶器	七星	飾形	20.4	16.8	18.4	-	在原系	-	脚部下方に底。	
81	上面 造構外	陶器	七星	飾形	20.0	15.5	18.3	-	在原系	-	脚部下方に底。	

第3章 岐町 287番地調査(北側)の概要

82	上田 道標外	十郎 七郎	隨形	20.6	16.7	19.4	在油茶	輪	輪底下方に轍。		
83	上田 道標外	火鉢	方形	21.9 ^{-22.5}	18.8	9.9	在油茶	輪	輪底。		
84	SK09	四郎 大林	円筒形	18.8	20.4	28.5	布衣名	11.5cm×11.5cm内側にスリット有。			
85	SK09	七郎	仰口	24.0	19.5	19.0	在油茶	輪	輪底に轍有。		
87	SK07	五郎	大曲形	11.8	1.9	-	東坂茶	見込みに轍目痕。			
88	SK07	五郎	弘歎形	8.4	4.7	5.7	押前	IV	-		
89	SK07	五郎	白抜茶葉外輪形	-	-	-	上田 道茶	後端凹陷。			
90	SK07	五郎	圓錐形	20.0	-	-	輪底	輪底輪脚部、スリット車輪7車。			
91	SK07	五郎	小輪	6.8	3.0	5.0	肥前	II～III	輪底。		
92	SK07	五郎	中輪	10.8	6.0	-	肥前	II	輪脚突出。		
93	SK07	五郎	大輪	15.5	6.5	7.9	肥前	II	輪底。		
94	SK07	土師器	直(小)	在油茶	9.8	6.2	2.4	-	褐色系、底部は輪軸切跡。		
104	SK08	海苔	小輪	平形	9.0	3.8	3.8	肥前	II	輪部は輪軸を切り。	
105	SK08	海苔	人頭	制形	17.2	9.2	9.0	肥前	-		
106	SK08	海苔	丸形	11.2	5.4	2.1	つまみ鉢	布衣名	-		
107	SK08	海苔	小輪	丸形	8.2	3.6	4.2	肥前	V	見込みに成化年製印跡。	
108	SK08	上師器	直(小)	在油茶	7.5	4.6	1.8	-	底部は円輪を切り、蓋無。		
109	SK08	上師器	直(小)	在油茶	7.6	4.1	1.8	-	底部は円輪を切り、蓋無。		
114	SB01.1.9	桶	圓筒	中輪	調理器	10.8	1.6	7.2	輪底	輪底	
115	SB01.1.9	桶	圓筒	中輪	圓筒形	11.9	4.8	8.1	肥前	V	
116	SB01.1.9	桶	圓筒	大輪	圓筒形	8.2	-	-	肥前	V	
117	SB01.1.9	桶	圓筒	上風盒	かき桶	7.9	3.5	3.5	つまみ鉢	布衣名	
118	SB01.1.9	桶	圓筒	盛茶	7.6	4.0	2.4	つまみ鉢	布衣名		
119	SB01.1.9	桶	圓筒	蓋蓋	10.7	5.7	2.0	つまみ鉢	布衣名		
120	SB01.1.9	桶	圓筒	盛茶	10.8	4.6	5.2	肥前	V		
121	SD01.1.9	桶	圓筒	小輪	圓筒形	10.2	5.2	2.1	肥前	V	
122	SD01.1.9	桶	圓筒	重茶	圓筒形	7.2	-	-	肥前	V	
123	SD01.1.9	桶	圓筒	林	-	-	-	中国	黒鐵鏡底、前唐草文。		
124	SD01.1.9	桶	圓筒	直(中)	京都茶	12.3	5.7	2.7	-	赤色系、旋轉底。	
125	SB01.1.9	桶	圓筒	直(小)	在油茶	9.3	4.4	2.0	-	赤色系、底部は円輪を切り。	
126	SB01.1.9	桶	圓筒	直(小)	在油茶	10.5	5.9	2.0	-	赤色系、底部は圓輪系切跡。	
127	SB01.1.9	桶	圓筒	直(小)	在油茶	9.9	5.7	1.9	-	赤色系、底部不明。	
128	SB01	直上	鋸縫	圓筒外形容	36.0	-	-	肥前	II	スリット型底8本。	
129	SB01	直上	鋸縫	圓筒	35.0	-	-	肥前	II	直輪、蓋台に輪付。	
130	SD01	直上	鋸縫	小輪	平形	9.2	3.8	4.8	肥前	II	見込みに「福」、蓋台に「太明」記。
131	SD01	直上	鋸縫	小輪	丸形	11.8	1.7	5.6	肥前	II	見込みに「五分花文(ニヤック印記)」。
132	中間層 造柄外	圓筒	中輪	丸形	9.6	4.6	6.6	布衣名	-		
133	中間層 意窓外	圓筒	中輪	圓筒	-	4.5	-	肥前	II～III	百合無縫。	
134	中間層 意窓外	圓筒	中輪	圓筒	-	5.0	-	肥前	-	赤色系、旋轉底。	
135	中間層 造柄外	圓筒	中輪	圓筒	-	-	-	赤色系、底部は圓輪系切跡。			
136	中間層 造柄外	圓筒	中輪	圓筒形	11.3	5.5	6.4	肥前	II	輪底日笠型、高台強化。	
137	中間層 造柄外	圓筒	中輪	圓筒形	10.6	3.8	6.3	肥前	II	輪脚突出、底台無縫。	
138	中間層 造柄外	圓筒	三寸瓶	圓筒形	13.0	6.0	2.9	右志名	-		
139	中間層 造柄外	圓筒	小輪	字形	9.3	4.9	1.7	東邦・山家	署御式、16世紀末～17世紀初期。		
140	中間層 造柄外	圓筒	中輪	圓筒	-	5.7	-	肥前	II	輪脚。	
141	中間層 造柄外	圓筒	小輪	丸形	10.1	3.9	3.2	肥前	II～III	百合無縫。	
142	中間層 造柄外	圓筒	小輪	丸形	12.8	4.8	3.4	肥前	II～III	百合無縫。	
143	中間層 造柄外	圓筒	小輪	折筋形	12.0	4.4	4.2	肥前	II	萬古村付近日笠底。	
144	中間層 造柄外	圓筒	小輪	折筋形	14.0	4.0	4.2	肥前	II	萬古村付近見込みに移日底。	
145	中間層 造柄外	圓筒	小輪	折筋形	13.7	4.9	3.3	肥前	II	見込みに移日底。	
146	中間層 造柄外	圓筒	直(小)	平形	14.1	5.0	1.8	肥前	II	見込みに移日底。	
147	中間層 造柄外	圓筒	水洋形	2.2	3.4	4.2	輪底	II	底部は輪軸切跡、1570～80年代。		
148	中間層 造柄外	圓筒	小輪	口削形	2.4	2.6	5.3	肥前	II	底部は輪軸切跡。	
149	中間層 造柄外	圓筒	直(小)	折筋形	3.0	-	-	在油茶	底部は圓輪系切跡。		
150	中間層 造柄外	圓筒	直(小)	直(小)	21.2	-	-	肥前	II	口付の軸脚、足付底定木。	
151	中間層 造柄外	圓筒	直(小)	直(小)	29.0	-	-	圓筒	-		
152	中間層 造柄外	圓筒	直(小)	直(小)	-	14.0	-	肥前	-		
153	中間層 造柄外	圓筒	直(小)	偏反形	16.4	9.8	3.6	肥前	II	外輪に鍛鉄。	
154	中間層 造柄外	圓筒	直(中)	丸形	20.9	-	-	中田	白底。		
155	中間層 造柄外	圓筒	直(中)	生漆系	12.6	4.8	2.6	-	赤色系、底部は16世紀～17世紀。		
156	中間層 造柄外	圓筒	直(中)	生漆系	12.6	3.5	2.8	-	赤色系、底部は16世紀～17世紀。		
157	中間層 造柄外	圓筒	直(中)	生漆系	14.4	4.5	2.7	-	赤色系、底部庄。		
158	中間層 造柄外	圓筒	直(中)	生漆系	11.7	4.5	2.4	-	赤色系、輪脚庄底、輪脚底。		
160	中間層 造柄外	圓筒	直(中)	生漆系	11.6	5.2	2.4	-	赤色系、輪脚庄底、輪脚底。		
161	中間層 造柄外	圓筒	直(中)	点漆系	11.7	4.5	2.4	-	赤色系、輪脚庄底、輪脚底。		
162	中間層 造柄外	圓筒	直(大)	点漆系	15.6	9.5	2.8	-	赤色系、輪脚庄底、輪脚底。		
163	中間層 造柄外	圓筒	直(大)	京都茶	11.8	4.0	2.6	-	赤色系、指揮庄底、輪脚底。		
164	中間層 重張外	土師器	直(中)	京都茶	11.0	4.5	2.8	-	赤色系、指揮庄底、輪脚底。		
165	中間層 重張外	土師器	直(中)	底塗系	11.2	4.0	2.5	-	赤色系、指揮庄底、輪脚底。		
166	中間層 重張外	土師器	直(中)	京都茶	12.4	5.4	2.3	-	赤色系、指揮庄底、輪脚底。		
167	中間層 重張外	土師器	直(小)	在油茶	8.0	4.6	1.7	-	赤色系、底部は圓輪系切跡。		
168	中間層 重張外	土師器	直(小)	在油茶	9.5	5.4	2.3	-	赤色系、底部は圓輪系切跡。		
169	中間層 重張外	土師器	直(中)	在油茶	10.2	6.2	2.0	-	赤色系、底部は圓輪系切跡。		
170	中間層 重張外	土師器	直(中)	在油茶	6.1	-	-	中田	白底。		
171	中間層 重張外	土師器	直(中)	在油茶	10.0	5.6	1.8	-	赤色系、底部に蓮瓣有り、頭底。		
172	中間層 重張外	土師器	直(中)	在油茶	11.6	7.4	2.5	-	赤色系、底部は圓輪系切跡、頭底。		
173	中間層 重張外	土師器	直(中)	在油茶	5.5	5.2	7.6	在油茶	墨鏡底小輪切跡、高台頭底、16世紀末～17世紀前半。		
180	SK09	問筒	錐	-	5.4	-	-	輪底	輪底。		
181	SK09	問筒	八厘	-	7.5	-	-	問筒	1～2		
182	SK09	問筒	小錐	荀丁形	12.4	-	-	不規	-		
183	SK09	圓筒	瓶	-	-	-	-	1860年代以降。			
184	SK09	土師器	直(中)	京都茶	12.0	5.0	2.7	-	白色系、指揮庄底、頭底。		
185	SK09	土師器	直(小)	京都茶	9.2	3.4	2.1	-	白色系、指揮庄底、頭底。		
186	SK09	土師器	直(中)	京都茶	12.8	6.0	2.4	-	白色系、指揮庄底、頭底。		
187	SK09	土師器	直(中)	京都茶	12.0	4.4	2.3	-	白色系、指揮庄底。		

188	SK09	十脚器 直(小)	全形系	10.8	5.7	2.3			褐色系。底部は内輪系切刃。底板直。 赤褐色。底部は外輪系切刃。底板直。
189	SK09	十脚器 直(?)	右側系	12.2	6.8	2.8	-		褐色系。底部は外輪系切刃。底板直。
203	SK10	脚器 小型	平行	13.6	4.9	2.9	脚前	I-2	見込み上に脚十脚器。
204	SK10	脚器 小型	一九形	6.8			中国		足部底板系。
205	SK10	脚器 大型	平行系	14.4	7.8	2.2	-		(白色系。指明工具。) 腹壁直。
206	SK10	脚器 直(中)	直脚系	11.8	7.1	1.9	-		(白色系。底部は外輪系切刃。) 腹壁直。
207	SK10	脚器 直(中)	直脚系	11.9	6.5	2.4	-		(白色系。底部は外輪系切刃。) 腹壁直。
208	SK10	脚器 直(中)	直脚系	11.2	6.8	2.7	-		(白色系。底部は外輪系切刃。) 腹壁直。
209	SK11	舟足 小型	平行	7.2	3.1	3.8	肥前	I-2	底部は外輪系切刃。
210	SK11	舟足 有脚型	平行系	12.0	4.3	2.8	肥前	I-2	腹直。
211	SK11	舟足 有脚型	平行系	17.3			肥前	-	
212	SK11	舟足 有脚型	平行系	30.0			肥前	-	
213	SK11	舟足 丸形	平行	11.4			肥前	II	
214	SK11	十脚器 直(?)	京乳系	12.6	5.9	2.6			白色系。腹壁直。腹壁直。
215	SK11	十脚器 直(?)	京乳系	12.5	5.0	2.5			赤褐色系。腹壁直。
216	SK11	十脚器 直(?)	京乳系	12.0	5.0	2.3			赤褐色系。腹壁直。
217	SK11	十脚器 直(?)	京乳系	12.7	6.0	2.3	-		赤褐色系。指明工具。腹壁直。
218	SK11	十脚器 直(中)	平行系	12.8	6.3	2.2	-		(白色系。指明工具。) 腹壁直。
219	SK11	十脚器 直(中)	平行系	13.2	6.8	2.5	-		(白色系。指明工具。) 腹壁直。
220	SK11	十脚器 直(小)	直脚系	8.8	5.8	1.7	-		(白色系。底部は外輪系切刃。) 腹壁直。
221	SK11	十脚器 直(中)	直脚系	11.6	6.6	2.4	-		(白色系。底部は外輪系切刃。) 腹壁直。
222	SK11	十脚器 直(中)	直脚系	11.2	6.0	2.1	-		(白色系。底部は外輪系切刃。) 腹壁直。
223	SX07	舟足 小川 丸形	平行	10.2	3.6	2.9	肥前	I-2	見込み上に脚十脚器。
240	舟足外 舟足外	舟足 中間	腹壁直	17.1			肥前	II	
241	舟足外 舟足外	舟足 小且	折脚形	12.2	4.7	3.3	肥前	II	高台脚に江戸土口瓶。
242	舟足外 舟足外	舟足 簡朴	1段無外輪	31.8			肥前		スリット甲板日本。17世紀初頭。
243	舟足外 舟足外	舟足 直(中)	京乳系	12.4	5.3	2.3			赤褐色系。腹壁直。底板直。
244	舟足外 舟足外	舟足 直(大)	京乳系	15.8	9.0	3.0	-		赤褐色系。腹壁直。底板直。
245	舟足外 舟足外	舟足 直(中)	京乳系	11.3	6.0	2.6	-		赤褐色系。底部向軸七切刃。腹壁直。

表2 殿町 287番地(北屋敷) 金属製品遺物観察表

遺物番号	遺物名	種類	材質	重量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
223	SK11	刺状	鉄	長8.8/幅2.8/厚0.6	12.21	
224	SK11	板状	鉄	長8.6/幅2.0/厚0.8	35.88	
225	SK11	拂合(吸口)	真鍮	長5.7/幅1.4/厚0.15/口付φ0.6	5.68	
226	SK11	鉗	鉄	長7.1/幅1.2/厚1.6	22.27	
227	SK11	鍔	鉄	長6.9/幅1.2/厚1.0	19.74	
228	SK11	鉗	鉄	長8.0/幅1.2/厚0.9	26.46	

表3 殿町 287番地(北屋敷) 石製品遺物観察表

遺物番号	遺物名	種類	材質	重量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
74	上山 遺構外	鏡	御灰岩	長4.65/幅1.7/厚1.9-2.15	55.98	赤褐色。斜面赤。
179	中間面 遺構外	瓦小	米行石	長36.0/幅29.0/厚13.3		
246	島新面 遺構外	鏡	御灰岩	長7.0/幅5.7//厚1.2-1.4	70.25	底面不明。

第3章 殿町 287番地調査（北屋敷）の概要

表4 殿町 287番地（北屋敷）木製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	剖面	法面(cm)				木取り	備考	
				長さ(に径)	幅	高さ(奥行)	その他			
95	SK07	曲物	丸底	6.10.1				厚0.5	柱目	
96	SK07	板		4.5	2.3			厚0.4	板目 内:赤・黒、表面による紅茶文、高台内に引接き傷、101	
100	SK09	漆瓶						板目	内:赤・黒、表面による紫木文。	
101	SK09	漆瓶						板目	内:赤・黒、高台内に引接き傷、表面による紫木文。	
102	SK09	漆瓶						板目	内:赤・黒、赤茶で墨木文(ススキ)か、内部見込み4.2.3	
103	SK09	漆瓶						板目	内:四方の焼け跡	
104	SK09	漆瓶		13.0				板目	内:赤・黒、水辺による緑・山文など。	
105	SK09	漆瓶		11.3		3.8		板目	内:赤・黒・黄、水辺による紅葉文(鳥・松・桜など)。	
106	SK09	下軸	半型軸下軸	16.2	6.1			厚2.2	シノハ斜接ぎすつ。	
107	SK09	下軸	丸型軸下軸	20.5	7.6	3.7		厚1.1	高さ3.0cm。漆の剥り落の跡ある。縁の折れあり。	
108	SK09	下軸	丸型軸下軸	19.4	7.7	3.0		厚1.2	高さ1.7cm。漆の剥り落の跡ある。縁の折れあり。	
109	SK09	不明		7.8	1.0-1.4				人形などの遊具か模型か形の既成型ほか。	
200	SK09	不明	鍵具の 鍵込	8.0	2.6	2.6		柱目		
201	SK09	不明	扇貝の 鍵込	7.6	5.0	5.4	1.8	柱目	表面は台形状。表面に打目1.裏面に穴打穴が二寄刃一角形に配列。	
229	SK11	漆瓶		10.8			6.3	柱目	内:赤・外:黒、赤茶に上に黒葉文(鳥・松・桜など)。	
230	SK11	漆瓶		11.4			5.3	柱目	内:外:黒、下部に墨粉のじごく物を被る。	
231	SK11	小軸	角型渦巻下軸	20.2	8.0	2.6		厚1.2	高さ1.1cm。漆の剥り落の跡ある。縁の折れあり。	
232	SK11	曲物	底板か蓋板	13.3				厚1.2	厚0.4cm。表面に断面強張、側面は丸く切た。	
233	SK11	小軸	扇貝の一部か	12.3	2.4			厚1.3	板目 表面に目打孔すつ。側面に斜め加工。裏面に施き色:赤	
234	SK11	無(容器か)			9.2	9.2			厚1.4	厚0.4cm。表面に斜め加工。裏面に施き色:赤
235	SK11	おもちゃ等			16.9	2.6			板目	中央部にφ0.4cmの円形鉢孔。
236	SK11	柄		12.1	3.2			厚1.6	穴(2.0×0.4×6.0cm)、上部に横に1.3-1.8、深さ0.1cm以下の底み。	
247	最終面 道場外	漆瓶	平底		推12.9			5.0	板目	内外:黒、赤茶で墨木文、見込みに5cm四方の擦り焦げ斑、裏面に引接ぎ傷。
248	最終面 池場外	曲物	底板か蓋板		φ6.4			厚0.8	柱目	
249	最終面 道場外	舟形木製品			12.6	6.4		厚2.2	軽い介せ式。	

表5 殿町 287番地（北屋敷）瓦窓察表

遺物番号	遺構名	種類	法面(cm)				色調	備考
			内	外	内	外		
86	SK08	軸丸	外径2.3/内径2.0	幅25.0/厚0.7/幅2.0			内:暗赤・灰赤	
97	SK07	軸平丸	下径6.3/内径2.0				外:暗赤	唐草文、又様口工藝系。
98	SK07	軸平丸	下径1.7/内径1.6				外:暗赤	内:暗赤灰色
99	SK07	軸丸	外径1.5/内径1.2/丸底1.9				外:暗赤灰色	唐草文、又様口工藝系。
100	SK07	軸丸	外径16.0/内径10.8/丸底7.2				外:暗赤灰色	唐草文、又様口工藝系。
101	SK07	軸丸	外径1.7/内径1.6/丸底1.9				外:暗赤灰色	唐草文、又様口工藝系。
102	SK07	軸丸	外径10.4/内径11.0/丸底4.2				外:暗赤・内暗赤灰色	唐草文、又様口工藝系。
103	SK07	軸丸	外径10.4/内径10.8/丸底4.2				外:暗赤灰色	唐草文、又様口工藝系。
110	SK08	軸丸	外径10.8/内径10.8/丸底2.2				外:暗赤灰色	唐草文、左端、蝶文16。
111	SK08	種込丸	外14.1/内14.8/厚2.2				外:暗赤・内暗赤灰色	唐草文、内脚部に切削痕を持つ。
112	SK08	種込丸	外13.5/内9.1-15.0/厚1.8				外:暗赤灰色	コビキ、側脚端面に切削痕を持つ。
113	SK08	丸	外23.6/内14.7/厚7.0				灰・灰青色	
174	中國扇 道場外	軸平丸	下径4.8/-内径2.0				内:暗赤	唐草文。
175	中國扇 道場外	軸平丸	上斜径12.8/下径9.7/幅2.2				外:暗赤・灰白色	唐草文。
176	中國扇 道場外	軸平丸	上斜径14.6/-下径11.6/幅2.1				外:暗・暗褐色	唐草文、又様三畫系。
177	中國扇 道場外	軸丸	外径3.3/内径10.0/丸底2.2				外:暗赤・暗褐色	唐草三巴文、左端、蝶文9。
178	中國扇 道場外	種込丸	外13.4/内15.8/丸底1.7				外:暗赤・内暗赤灰色	唐草三巴文、左端面に切削痕を持つ。
202	SK09	軸丸	外径7.5/内径5.0/丸底1.7				外:暗・灰白色	全体的に擦り傷が多い。
237	SK11	種込丸	長13.7/幅9.3 15.6/厚2.0				外:暗赤	側脚端面に切削痕を持つ。
238	SK11	種込丸	長13.5/幅14.0/厚2.0				外:暗赤・灰白色	白地・側脚端面に切削痕を持つ。

第4章 殿町279番地外調査（北屋敷）の概要

第1節 基本層序：土層堆積状況と遺構面（第82図）

基本層序

調査の対象となったのは、屋敷境から北側の屋敷地で、堀尾・佐々・乙部家の屋敷地が想定される部分（以下、北屋敷と称する）の約1/3の範囲である。屋敷地中央付近に東西方向のトレーナーを設定し、土層堆積状況の観察を行った。これにより、いくつかの造成土と生活面が洞察でき、その結果、4面の遺構面を確認することができた。

以下、各遺構面の土層堆積状況と検出した遺構について示す。

現地表面

現地表面 標高約2.5～2.7m（現代）

明治時代以降の短間状に仕切られた区割りをほぼ踏襲して、現代まで住宅地が存在している。調査地の西側は、現道路面より40cm程高く、外側は比較的新しい石垣に囲まれている。

第1遺構面

第1遺構面より上層 標高約2.1～2.7m、層厚50～100cm（近・現代）

1～17層は明治4年（1871年）の廢藩置県以降に造成がくり返されながら現地表面に至ったものである。大量の近・現代の陶磁器とともに、ガラス片、コンクリート片が混じる。また、この層の辺りから、標高約1.6m付近まで深く搅乱を及ぼしている場所もあり、下層の遺構面を大きく損なっている状況が見られる。

第1遺構面

第1遺構面 標高約2.1m、層厚約15～40cm（18世紀代～明治初頭）

18・19層は第1遺構面の形成土で、黄色系の山土を基本とする。廢藩置県後の分筆はもとより現代までの削平を受けており、検出した遺構の中には昭和の遺物も混じるものがあり、江戸時代の遺構を抽出することが困難であった。ただし、この面で検出した2基の石積方形土坑（SK02・03）は、形成上の造成とともにつくられたことが判明していることから、この形成土の範囲が分筆の範囲より広範囲に存在することと、共伴する遺物から考えて江戸時代の遺構と思われる。

第2遺構面

第2遺構面 標高約1.8～2.0m、層厚約10～35cm（17世紀中頃～18世紀代）

20～23層は第2遺構面における生活層あるいは土坑などの遺構埋土である。

24層は第2遺構面の形成土で、灰色粘質土の土を基本とする。調査区の中央部では、近・現代の削平により形成土が失われている。遺構の残存状況が悪いながらも、島跡SN01と門柱を伴う柱列SA01、ゴミ土坑SK18、便槽2基SK20・21などを検出することができた。

第3遺構面

第3遺構面 標高約1.6～1.7m、層厚約10～30cm（17世紀前半～中頃）

25～36層は第3遺構面における生活層である。27～30層は廐棄土坑SK23の含土である。

37～40層は第3遺構面形成土で、黄色系の山土を基本とする。これらの層を基盤として、池（SG01・02）などがつくられている。

第4遺構面

第4遺構面 標高約1.2～1.5m、層厚約40～60cm（17世紀初頭～前半）

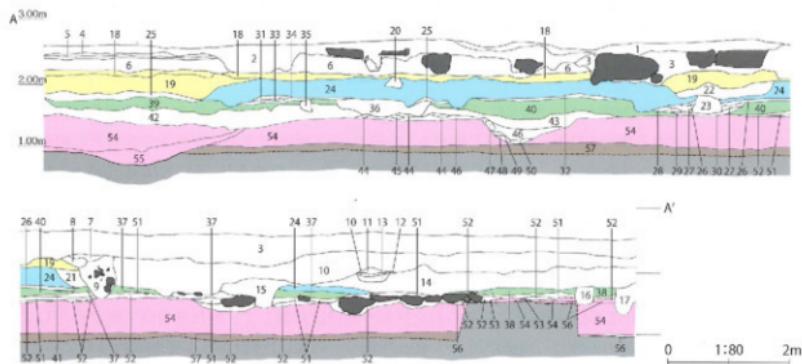
41～53層は第4遺構面の生活層である。54層が城下町形成時の最初の造成土で、黄色系の山土にブロックが多量に混じる。この層を基盤として池SG01・02、建物跡SB03～06などがつくられている。

第4遺構面 形成以前

第4遺構面形成以前 55層は第4遺構面形成時に廐棄されたゴミ（SK28）を含むものである。

第1炭化層—標高約1.4m、第2炭化層—標高約0.9m 56層が炭化層にある。

第7章で詳述するが、炭化層はグリッド調査により2面あることが確認できた。いずれも



近・現代	1	褐色土(ブロック多量に混ざる)
	2	黒褐色土
	3	暗褐色土Ⅰ
	4	暗褐色土Ⅱ
	5	赤褐色土(块土)
	6	黄褐色土(灰褐色ブロック混ざる)
	7	灰褐色土
	8	暗灰褐色土
	9	暗褐色土と茶褐色土混ざる
	10	深褐色土(淡褐色土・黄色土を含む。5mm以下の砂を含む)
	11	深褐色砂質土(茶褐色土を部分的に含む)
	12	深褐色土～茶褐色土(1mmのブロックをやや含む)
	13	深褐色砂質土(砂粒多い)
	14	黄褐色土(部分的に灰褐色土を含む)
	15	灰褐色土～灰色砂質土(上層には黄色沫を含び、下層は粘質である。淡青灰色ブロックをやや含む)
	16	淡青灰色シルトⅠ(灰色土で構成する)
	17	淡青灰色土と褐色土の混合土(明褐色ブロックが多く含み、黄色味が強い)
① 1面形成土 L ≈ 2.1m	18	淡青灰色シルトⅡ
	19	褐色土シルト(ブロック混ざる)
② 通構土	20	褐色土Ⅲ
	21	灰褐色土
	22	灰褐色土(灰褐色土)
③ 2面生活層	23	灰褐色土(ブロック混ざる) - SA01門柱1壁りこみ痕
	24	元青灰色粘土土(黒褐色ブロック多く含む)
③ 3面生活層	25	褐褐色粘土土
	26	暗褐色土Ⅱ
	27	茶褐色土と灰色シルト混ざる
	28	青みがかった茶褐色土
	29	青灰色シルト
	30	褐褐色土Ⅲ(炭化物混ざる)
	31	にごり色土
	32	茶褐色褐色シルト(しまっている。少々炭含有)
	33	茶褐色土Ⅳ(炭化物多い)
	34	黄褐色土(白色土)
	35	黄褐色土(淡灰色土を含む)
	36	淡灰色土(淡灰色土を含む)
	37	淡褐色土
	38	白褐色土と茶褐色土が混ざる
	39	深褐色土と褐色土が混ざる(褐色に変色する部分がある)
	40	褐色土Ⅱ
④ 4面生活層	41	茶褐色土と灰褐色土が混ざる
	42	灰褐色土Ⅱ(白色ブロックやや含む。1mm以下の炭含有)
	43	灰褐色土(褐色ブロック少々含む)
	44	淡褐色土Ⅰ(ブロック多量に混ざる)
	45	淡灰色土
	46	黄褐色土Ⅱ(ブロック混ざる)
	47	黄白色ブロック
	48	黄色土Ⅲ
	49	明褐色土
	50	褐褐色土Ⅱ
	51	黑色土
	52	淡青灰色シルトⅢ
	53	黄色土～淡褐色土Ⅲ(褐色ブロックやや含む)
	54	淡青灰色土Ⅱ(ブロック多量に混ざる)
	55	褐色土と茶褐色砂が部分的に互層に堆積する(木片多量に混ざる) - SK08
	56	炭化物(羽石、铁滓等)
	57	褐色砂質土
4面下層	L ≈ 0.9m	
自然層	L ≈ 0.9m	

第82図 基本土層図

調査区全体に広がるものではない。

第1炭化層は標高約1.4mで、54層に挟まれる状態で確認できる。この層の中から、羽口や滓が出土している。堆積も厚く、この中から焼土や鍛造剥片も採取されており、鍛冶が行われていたと思われる。

第2炭化層は標高約0.9mで、57層の直上に堆積する。この層は、約1～2cmの厚さしかなく滓は少ないが、羽口が出土している。鍛造剥片も採取している。

自然面 標高約0.9m(城下町形成以前)

57層の黒色粘質土は松江城下町に広く見られる城下町形成以前の湿地堆積土である。

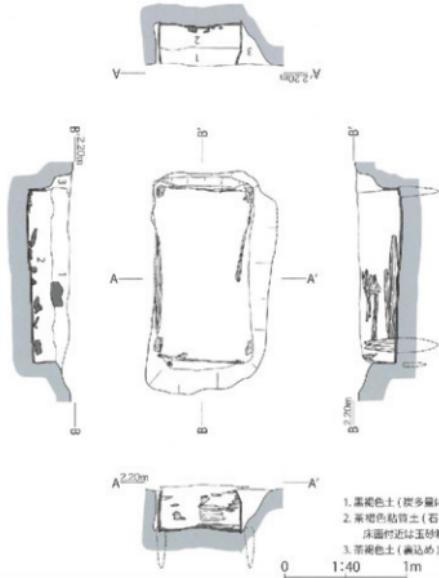
第2節 第1遺構面(第84図)

第1遺構面の概要 第1遺構面は標高約2.1mで検出された遺構面で、明治3年にはまだ乙部家の屋敷が存在し、その後分筆され、屋敷地内が切り売りされたことが文献で分かっている。屋敷が壊され、それぞれの地割で現代に至るまで削平・造成がくり返されたために、遺構の残存状況は非常に悪く、江戸時代の遺構の抽出は難しく、屋敷の配置等はほとんど判明しなかった。よって、調査区全体図に掲載されている遺構には、昭和期に入るるものも含まれる可能性がある。しかし、断片的ながら江戸時代の遺構を検出することができ、井戸SE01～05、石積方形土坑SK02・03などを確認している。

これらの遺構から出土した遺物により、第1遺構面の時期は18世紀末から明治初頭と推定した。なお、第1遺構面より下層で検出した井戸SE02・03も、共伴する遺物から第1遺構面に伴うものと考えられることから、ここで掲載している。

SK01：木枠施設(第83図)

SK01 調査区の北西側で検出した長軸約1.8m、短軸約1.0m、深さ0.36mを測る平面方形土坑である。土坑の内部に小口板と側板を据え、内側四隅に木杭を打ち込み押さえている。底面では玉砂利を検出しており、これらは一面に敷き詰めている感じではない。1層では大正から昭和のものであろう陶磁器等が火を受けた状態で廃棄されていた。検出状況からはSK01廃絶後の埋土の沈み込みに、焼却したものを廃棄した印象であった。2層では幕末から明治初頭にかけてのものと思われる陶磁器、土器が出土している。このことから、明治初頭から昭和にかけ



第83図 SK01 平面図・断面図



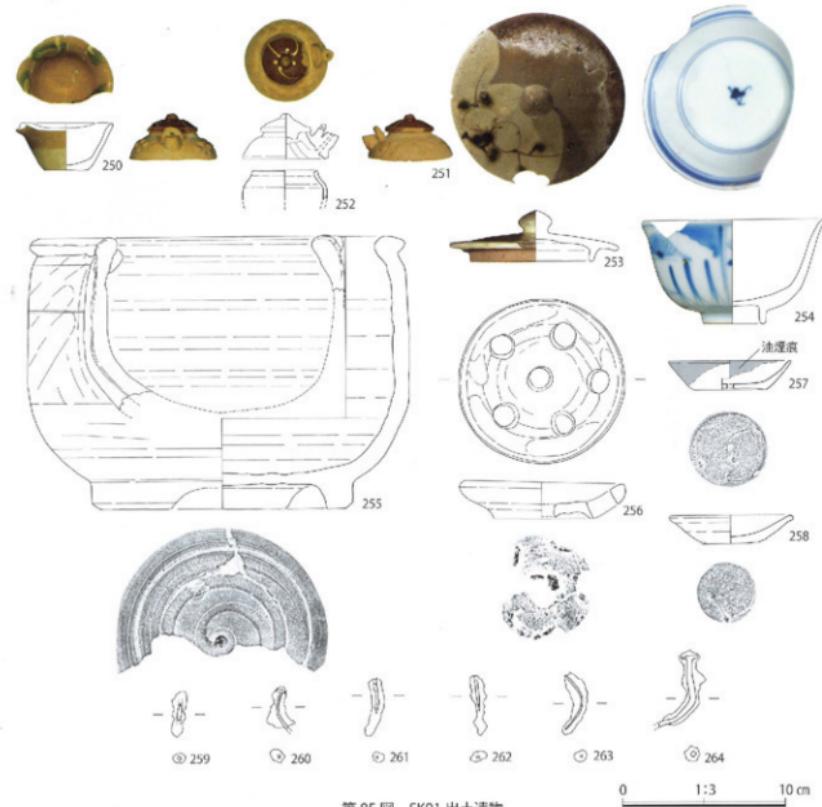
SK01 半掘状況(西から)



SK01 完掘状況(南東から)



第 84 図 第 1 遺構面 全体図



第85図 SK01出土遺物

て使用されていた施設で、用途は床下収納のようなものが考えられる。

SK01出土遺物(第85図)

国産陶器

250はミニチュア陶器の鉢で、251・252はミニチュア陶器の急須で、いずれも产地不明であるが、250の黄釉が布志名焼の黄釉と似ており、在地産の可能性が考えられる。253は京都・信楽系陶器の土瓶の蓋と思われる。254は瀬戸磁器の端反碗である。255は上製の焜炉である。256は七厘に付属する「さな」である。257・258はロクロ成形の土師器皿で、257は底部に穿孔があるものである。259～264は鉄釘で、すべて断面方形である。

国産磁器

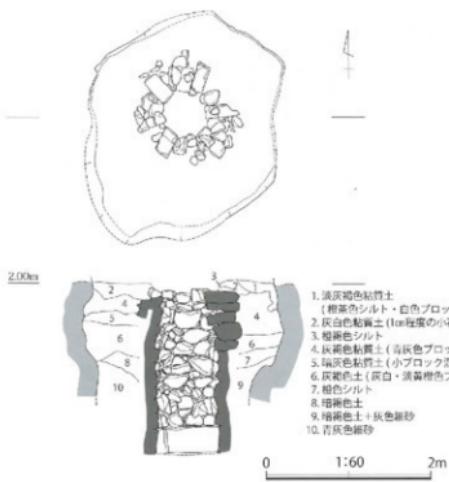
土器

金属製品

SEO1：石組井戸(第86図)

SEO1

調査区の北東側で検出した直径約0.6m、深さ約2.0mを測る石組井戸で、掘り方は直径2.2～2.9mの平面不整円形を呈している。底面に来待石製の井戸枠を置き、その上に割石を積み上げて成形しており、割石は来待石が多いようだが大海崎石も少数使用されている。掘り



第86図 SEO1 平面図・断面図

方から遺物は出土していないが、埋土中から17世
紀代の肥前陶磁器とともに、幕末から近代にかけて
の陶磁器が出土しており、幕末から近代の頃に廃絶された可能性が考えられる。

SEO1 出土遺物(第87図)

国産陶器 265は陶器の鉢で、在地産のものと思われる。



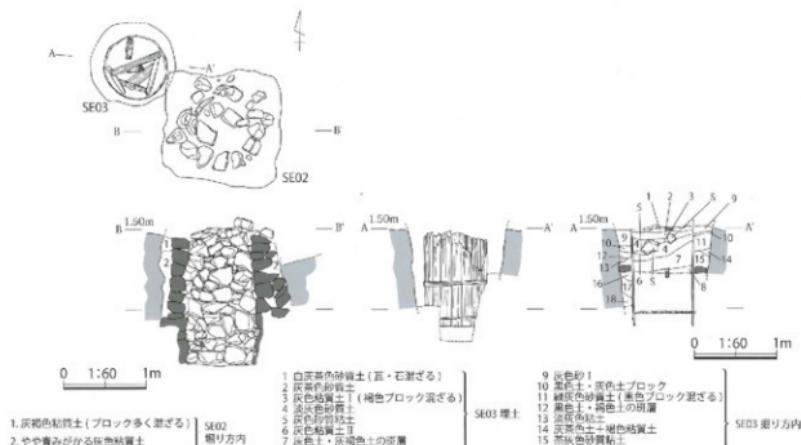
第87図 SEO1 出土遺物

SE02: 石組井戸(第88図)
SE02 調査区の北東側で検出した直徑約0.7m、深さ約1.8mを測る石組井戸で、掘り方は1辺約1.4mの平面方形を呈している。割石を積み上げて、一番上に来待石製の井戸枠を設置してあつた。割石の上側は来待石が目立つが、下側は大海崎石が多く使用されている。掘り方から出土した陶磁器から、幕末頃につくられたものと考えられる。井戸内の埋土からは、ガラス片や在地の陶磁器などが出土しており、近代まで使用されたようである。

SE02 出土遺物(第90図)

国産陶磁器 掘り方から266と267が出土している。266は肥前磁器の小碗である。267は布志名焼の碗片で、黄釉がかかるものである。268は産地不明の陶器小碗である。高台内に「月島」と銘が入れられている。269は肥前磁器の色絵碗である。270は真輪製の蓋である。271は鉄製の漁具と思われる。

SE03: 木棒井戸(第88・89図)
SE03 調査区の北東側で検出した直徑約0.75m、深さ約1.1mを測る木棒井戸で、掘り方の一部がSE02に壊されるが、直徑約1.0mの平面円形を呈する。木棒は幅12.2～15.5cm、残存長44.3～122.0cm、厚さ1.9～2.4cmの杉板20枚を目釘で輪状に繋ぎ合わせ、竹製のタガで2ヶ所固定したもので、木棒の下部は基盤となる灰色砂層に10cmほど押し込んで据えてある。



第88図 SE02・SE03 平面図・SE02 断面図

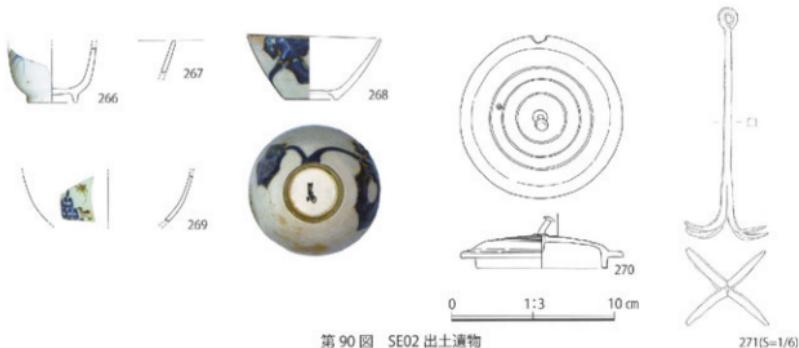
第89図 SE03 平面図・断面図



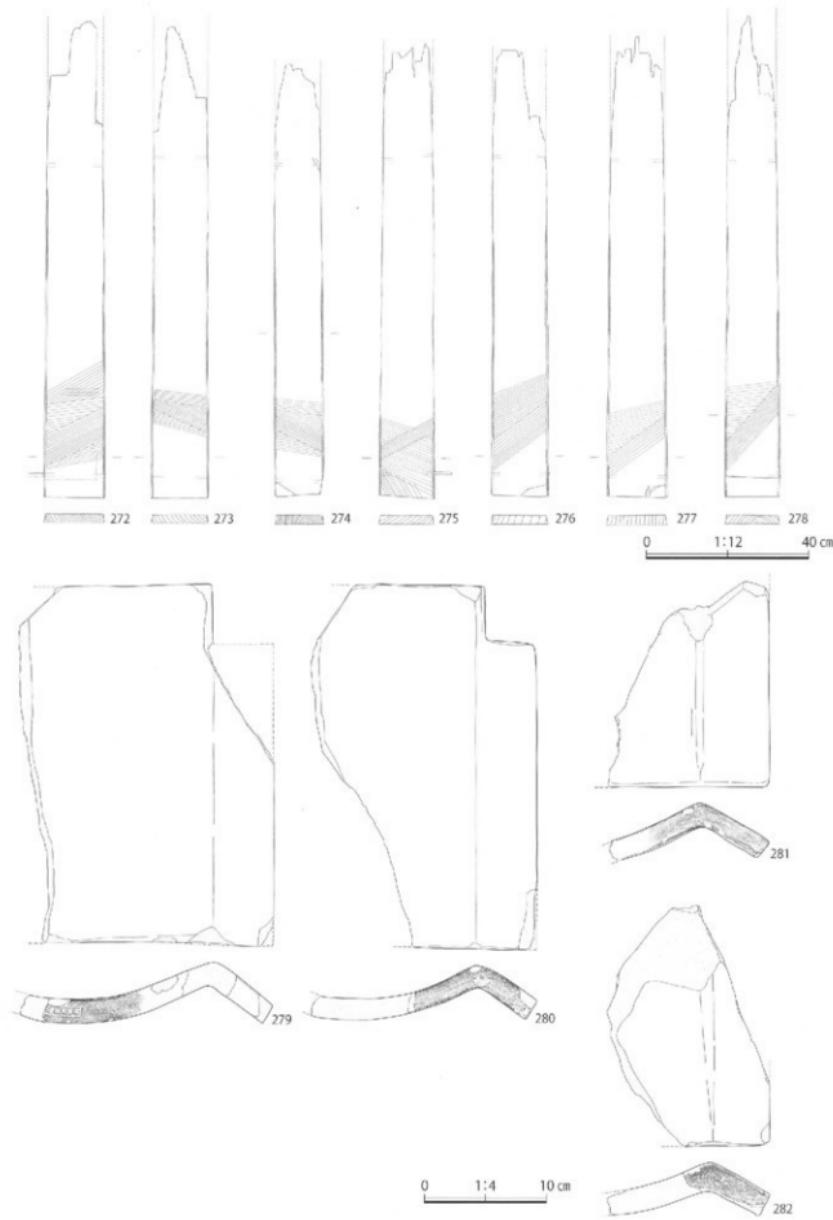
SE02 半掘状況(南から)



SE03 完掘状況(南から)



第90図 SE02 出土遺物



第91図 SE03出土遺物(1)

底面には黒色の玉砂利を敷いている。井戸の埋土中では、井戸埋め殺し時に息抜きとして使用した竹筒片が残っており、刻印をもつ棧瓦も廃棄されていた。この棧瓦は後述する石積方形土坑 SK03 から出土した棧瓦と同様の刻印をもつことから、おそらく SK03 と同時に廃棄されたものと思われる。この井戸から年代の分かる陶磁器は出土しなかったが、SK03 の年代から考えて、幕末から明治初頭頃に廃絶された井戸と推測できる。

SE03 山土遺物 (第 91 図)

木製品 272 ~ 278 は井戸枠に使用された板材で、竹製の目釘が残っており、下端から約 3.0cm のところと、約 80cm のところの 2ヶ所で板材を繋ぎ留めてある。使用される板材は針葉樹と思われる。のこぎりで加工されているようで、下側にのこぎり痕が残っている。

瓦 279 ~ 282 は SE03 から出土した刻印をもつ棧瓦で、いずれも左棧である。菊花文と「倉」の刻印は石積方形土坑 SK03 で出土した棧瓦にも施されている。

SK02 : 石積方形土坑 (第 92 図)

SK02 調査区の中央で検出した 2段の階段をもつ内法約 4.0 m × 約 1.5 m、深さ約 1.4 m の石積の遺構である。石積の間に目張りはない、底面には玉砂利が敷いてあった。また、遺構内には杭が 1 本打ち込まれており、根元が削石で固定されていたが、使用目的は不明である。石積の石材は人海崎石で、松江城の石垣と同様の矢穴をもつものも見られ、「○」のなど刻印をもつ石もあった。また、石材に筋状のノミ痕が残るものが目立つ。石積の構築状況は、第 2 遺構面から土坑を掘って、その中に第 2 遺構面のレベルまで石を積み上げ、さらに上部へは第 1 遺構面の造成とともに積み上げられたことが分かっている。掘り方の中からは、SK02 がつくられた年代を示す陶磁器は出土しなかったが、遺構の埋土からの出土遺物は、18 世紀代から 19 世紀初頭の肥前磁器などが見られるため、この時期に廃絶されたものと考えられる。また、遺構内には建築部材も多く廃棄されていた。この遺構の用途は地下室、水溜が考えられる。

SK02 刻印 SK02 に使用された石材の刻印の拓本を第 93 図に示す。刻印①ははっきりしないが、扇紋を書き据えたような形状で、松江城の石垣には見られないものである。刻印②は「○」と刻まれたもので、松江城の石垣にも見られるものである。刻印③は「二」と刻まれたもので、松江城の石垣には見られない。

SK02 山土遺物 (第 94・95 図)

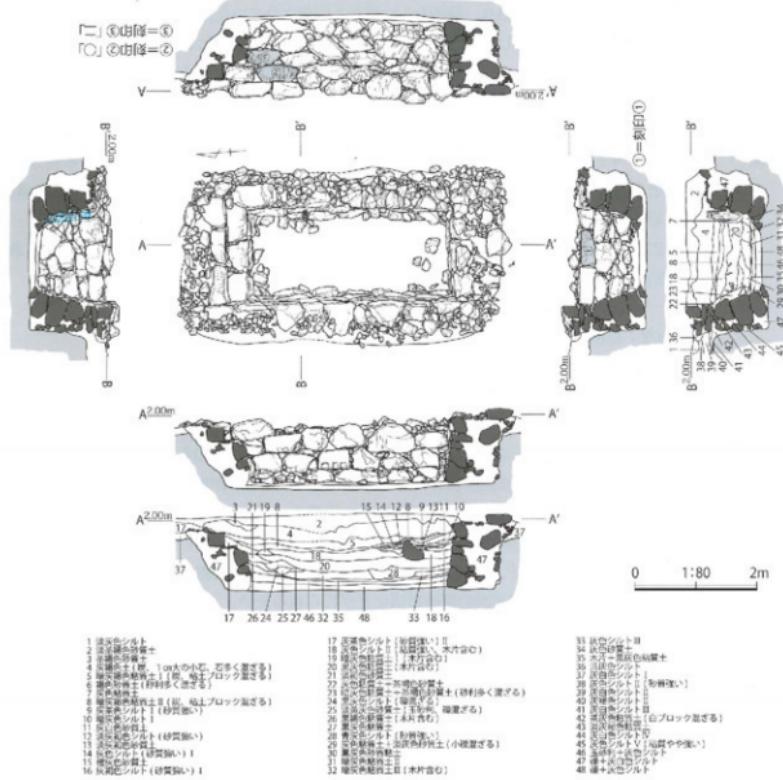
国産陶磁器 283 は京焼系陶器皿で、高台内に「○」印が施されているものである。鳥取県の因久山焼との可能性も指摘されている。¹⁰ 284 は陶器の灯明受皿で、口縁部付近に油煙痕が付着している。285 は产地不明の擂鉢である。286 は中国磁器の小鉢で、景德鎮窯系のものと思われる。287 は肥前磁器の猪口で、外面に省略雨降文が施される。288 は肥前磁器の筒形碗である。289 は土器の焙烙である。口縁部は指頭圧痕がよく残るが、体部は火を受けて調整が失われている。290 ~ 294 は土師器皿である。290 ~ 292 はロクロ成形の上師器皿で、290 は大皿で、291・292 は中皿である。293・294 は手づくねの土師器皿で、294 は油煙痕が残る。295 は銅製の容器蓋と思われる。296 は錢貨で「寛永通宝」である。297 は煙管で、雁首は真鍮製で外面に金箔が施されており、羅字は木製で外面に漆塗りが施されている。吸口も真鍮製で外面に金箔が施されている。雁首と吸口の形状から 18 世紀後半代と思われる。¹¹

土師器皿

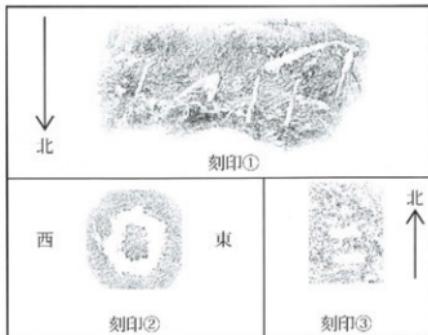
金属製品

木製品

298 ~ 307 は木製品と瓦である。298 は木製の刷毛柄で「仝」という字が彫り込んである。



第92図 SK02平面図・断面図



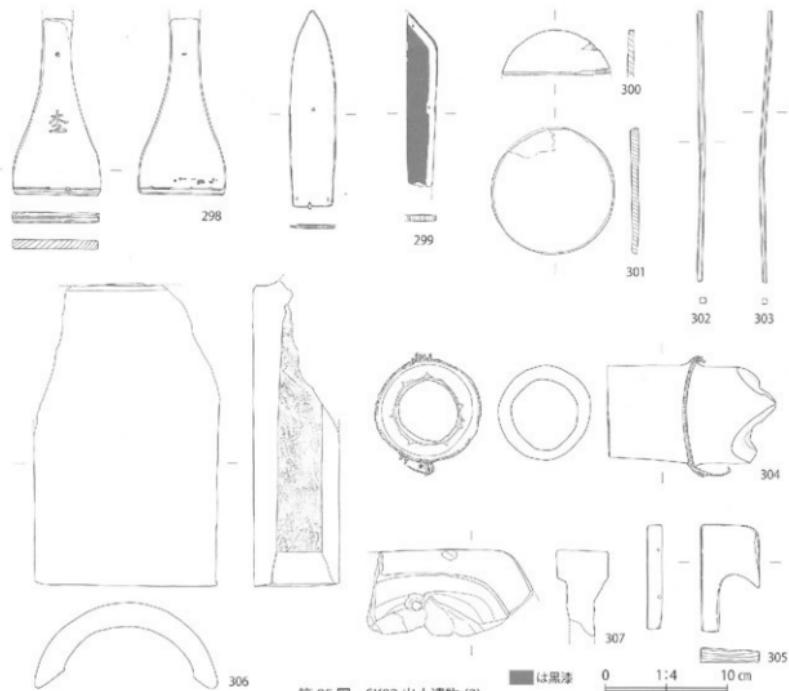
刻印②検出状況(西から)

第93図 SK02刻印拓本 (5=1/2)



第94図 SK02出土遺物

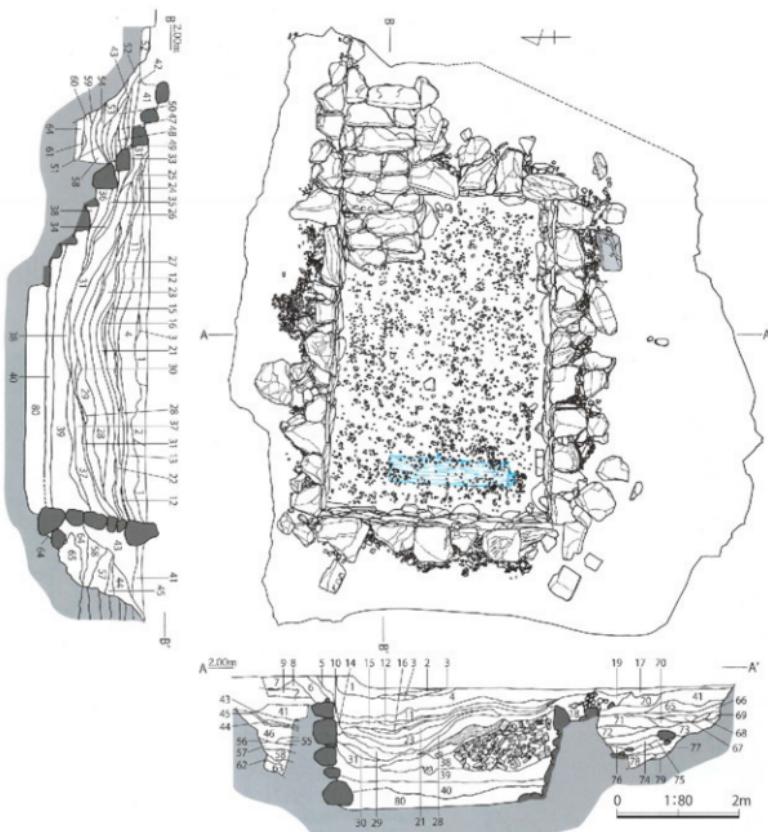
毛は失われていたが、2枚の板で毛を挟みこみ、目釘で留めていたと思われる。299は舟形木製品である。300・301は曲物の底板と思われる。302・303は白木の箸の完形品で、いずれも両端が平らに加工してある。304は竹の節を抜いて一方を斜めに加工している。添水の流水口であろうか。305は木製の部材で、四隅が丸く、表面が弧状に加工されており、長辺側面には目釘が2ヶ所見られる。306は丸瓦で、内面の調整はコビキBである。307は鬼瓦の一部と思われる。



SK03：石積方形土坑(第96・97図)

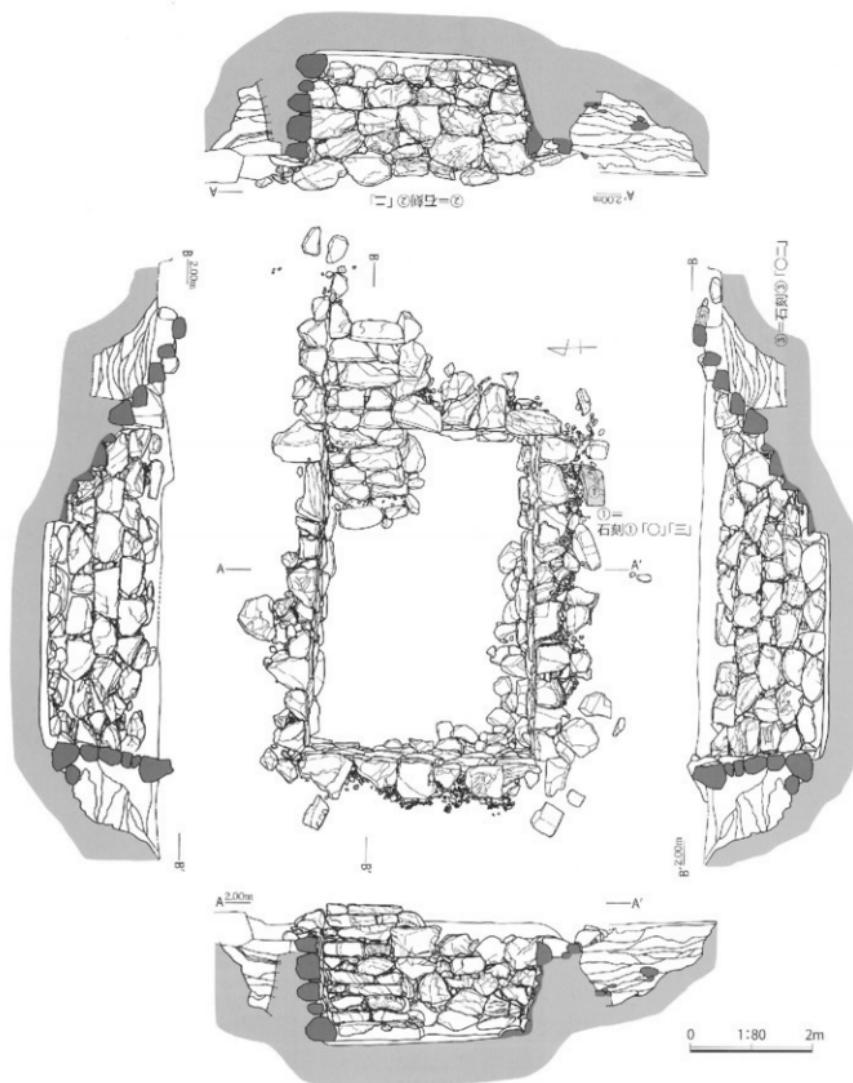
SK03

調査区の南西側で検出した10段の階段をもつ内法約5.5m×3.5m、深さ約2.2mの石積構造である。当初底面に敷かれた玉砂利の検出面まで掘り下げていたが、さらに玉砂利を除去したところ、10段目の階段ともう一段下に廻る石積が見つかり、改修された可能性がある。石積の間に目張りはない。使用されていた石材は、大半が大海崎石であった。その中には、SK02と同様に穴穴が残るものがあった。また、「二〇」などの刻印が刻まれた石も確認できた。SK02と同様に第1遺構面の造成とともに石が積み上げられたことが分かっている。石積の西南側の根石は、隣接する池SG03の埋土により内側に押し出されてしまっている。埋土中からは、建物に関係する大量の廃材とともに幕末から明治にかけての陶磁器が出土している。また、孤の土人形や石造物が一緒に出土しており、屋敷地内で「船荷」が祀られていた可能性が高い。文献資料でも、町人が乙部家の屋敷に船荷のお参りをした記録が残っており、³³これを補強するものである。その他「大工長次」と書かれた墨書きの木札や、陶磁器の碗の外底面に「大乙」「乙作」や口付が書かれたものも出土した。同じ遺構面からは、ハマといった窯道具も出土しており、この屋敷地内で焼きものを製作していた可能性が考えられる(以後、お庭焼と称する)。底面からは、長さが約198cmの杉皮も出土した。長さがおよそ1間になることから屋根材として使用されたものであろう。廃藩置県後の分筆時に、この遺構の上面は短冊状に地割がなされているため、



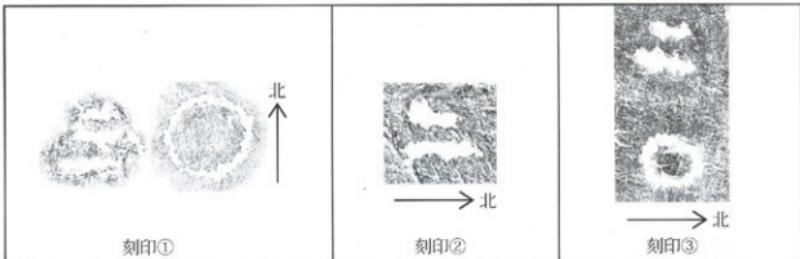
- 1 四角柱状節理上 [小縫多く泥ざる、板張上]
 2 斜面砂質土 [木の腐木土]
 3 砂質土 [木の腐木土]
 4 砂質土 [木の腐木土]
 5 砂質土 [木の腐木土]
 6 砂質土 [木の腐木土]
 7 砂質土 [木の腐木土]
 8 砂質土 [木の腐木土]
 9 砂質土 [木の腐木土]
 10 砂質土 [木の腐木土]
 11 砂質土 [木の腐木土]
 12 砂質土 [木の腐木土]
 13 砂質土 [木の腐木土]
 14 砂質土 [木の腐木土]
 15 砂質土 [木の腐木土]
 16 砂質土 [木の腐木土]
 17 砂質土 [木の腐木土]
 18 砂質土 [木の腐木土]
 19 砂質土 [木の腐木土]
 20 砂質土 [木の腐木土]
 21 砂質土 [木の腐木土]
 22 砂質土 [木の腐木土]
 23 大アーチ砂質土
 24 砂質土 [木の腐木土]
 25 砂質土 [木の腐木土]
 26 砂質土 [木の腐木土]
 27 砂質土 [木の腐木土]
 28 砂質土 [木の腐木土]
 29 実心砂質土 [木の腐木土]
 30 砂質土 [木の腐木土]
 31 砂質土 [木の腐木土]
 32 砂質土 [木の腐木土]
 33 砂質土 [木の腐木土]
 34 砂質土 [木の腐木土]
 35 砂質土 [木の腐木土]
 36 砂質土 [木の腐木土]
 37 砂質土 [木の腐木土]
 38 砂質土 [木の腐木土]
 39 砂質土 [木の腐木土]
 40 砂質土 [木の腐木土]
 41 砂質土 [木の腐木土]
 42 砂質土 [木の腐木土]
 43 砂質土 [木の腐木土]
 44 砂質土 [木の腐木土]
 45 砂質土 [木の腐木土]
 46 砂質土 [木の腐木土]
 47 砂質土 [木の腐木土]
 48 砂質土 [木の腐木土]
 49 砂質土 [木の腐木土]
 50 砂質土 [木の腐木土]
 51 砂質土 [木の腐木土]
 52 砂質土 [木の腐木土]
 53 砂質土 [木の腐木土]
 54 砂質土 [木の腐木土]
 55 砂質土 [木の腐木土]
 56 砂質土 [木の腐木土]
 57 実心砂質土
 58 砂質土
 59 砂質土 [木の腐木土]
 60 砂質土 [木の腐木土]
 61 白色シルト + 黄褐色シルト
 62 白色シルト + 黄褐色シルト
 63 白色シルト + 黄褐色シルト
 64 白色シルト + 黄褐色シルト
 65 白色シルト + 黄褐色シルト
 66 黑褐色砂質土 + 黄褐色シルト
 67 黑褐色砂質土 + 黄褐色シルト
 68 黄褐色土 [木の腐木土]
 69 黄褐色土 [木の腐木土]
 70 黄褐色土 [木の腐木土]
 71 黄褐色土 [木の腐木土]
 72 黄褐色土 [木の腐木土]
 73 黄褐色土 [木の腐木土]
 74 黄褐色土 [木の腐木土]
 75 黄褐色土 [木の腐木土]
 76 黄褐色土 [木の腐木土]
 77 黄褐色土 [木の腐木土]
 78 黄褐色土 [木の腐木土]
 79 黄褐色土 [木の腐木土]
 80 黄褐色土 [木の腐木土]
 81 黄褐色土 [木の腐木土]
 82 黄褐色土 [木の腐木土]

第96図 SK03 平面図・断面図



第97図 SK03 平面図・断面図

*床面玉砂利除去後



第98図 SK03刻印抱拓本(5=1/4)

それ以前または分筆時に廃絶されたものと思われる。以上のことと、前述のとおり第1遺構面の造成とともにつくられていることから、乙部家の屋敷に関係する遺構と思われる。

SK03刻印 SK03で検出した刻印の拓本を第98図に示す。

刻印①は「三〇」と刻まれている。刻印②は「二」、刻印③は「二〇」と刻まれており、いずれも松江城の石垣には見られない刻印である。

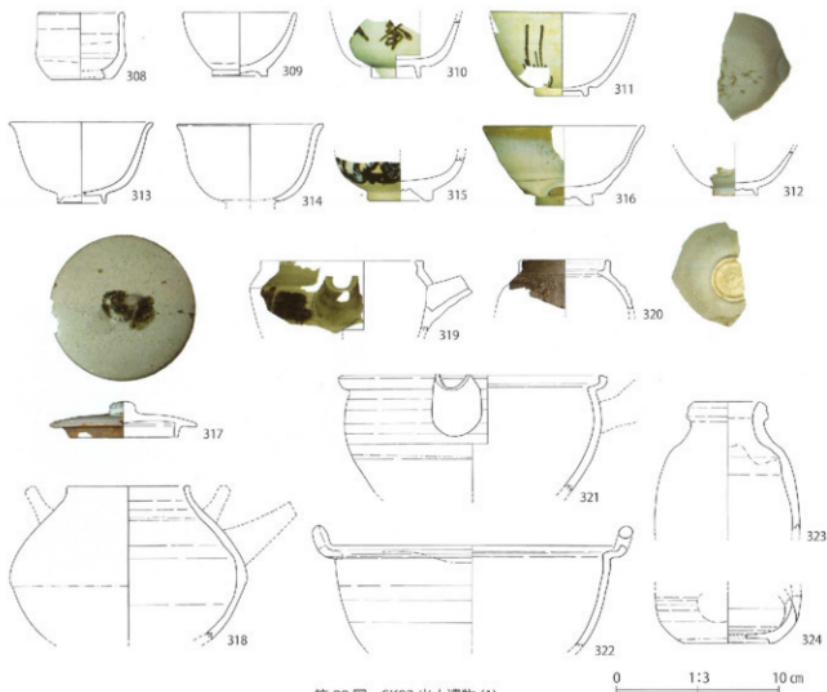
SK03出土遺物(第99図～115図)

国産陶器 308～324は国産陶器の碗類、瓶類、鍋類である。308は香炉と思われる。309は京都・信楽系の小碗である。310～312も同様のものである。313は19世紀前半の信楽の小碗である。314も同様のものである。315・316は萩・深川系のもので、315はビラ掛け碗である。317は生産地不明の土瓶の蓋である。318は京都・信楽系の土瓶である。319は京都・信楽系の急須の身である。320は急須の身部分と思われる。321は行平鍋で、産地不明である。322は土鍋で産地不明である。323は瀬戸・美濃の瓶である。324は産地不明のベコかん形の瓶である。

325～337はお庭焼陶器と布志名焼陶器である。325～330がお庭焼である。325は高台内に墨書きがあり、「大乙」と読める。326は高台内に「大乙」、高台脇に「九月吉日」と書かれている。327は高台内に墨書きがあり「乙作」と読める。また、高台脇にも墨書きがあり「子四月口十之門」と書かれている。328は高台内に墨で「大乙」と書かれており、高台脇にも墨で「九月吉日三十□」と書かれている。329は欠損のため解読できないが、高台内に墨書きがある。高台脇にも墨で「九月吉日三十□□□」と書かれている。330はお庭焼の上瓶である。331～337が緑釉の布志名焼である。この緑釉の布志名焼については、通称人手前線の発掘調査において、高台内に「天保八年」の紀年銘の入った鉢が出土しており⁴⁴、この手の陶器が少なくとも天保八年(1837)年には焼かれていたことを証明するものである。331は口縁部にむかって「ハ」字状に開く小碗である。332も口縁部にむかって「ハ」字状に開くもので中碗である。333は松江でいわゆる「ぼてぼて茶碗」と呼ばれる器形のものである。⁴⁵7代松江藩主松平不昧公が祖とされる「ぼてぼて茶」を飲む時にこういった茶碗を使用されていたとされて



刻印③検出状況(東から)



第99図 SK03出土遺物(1)

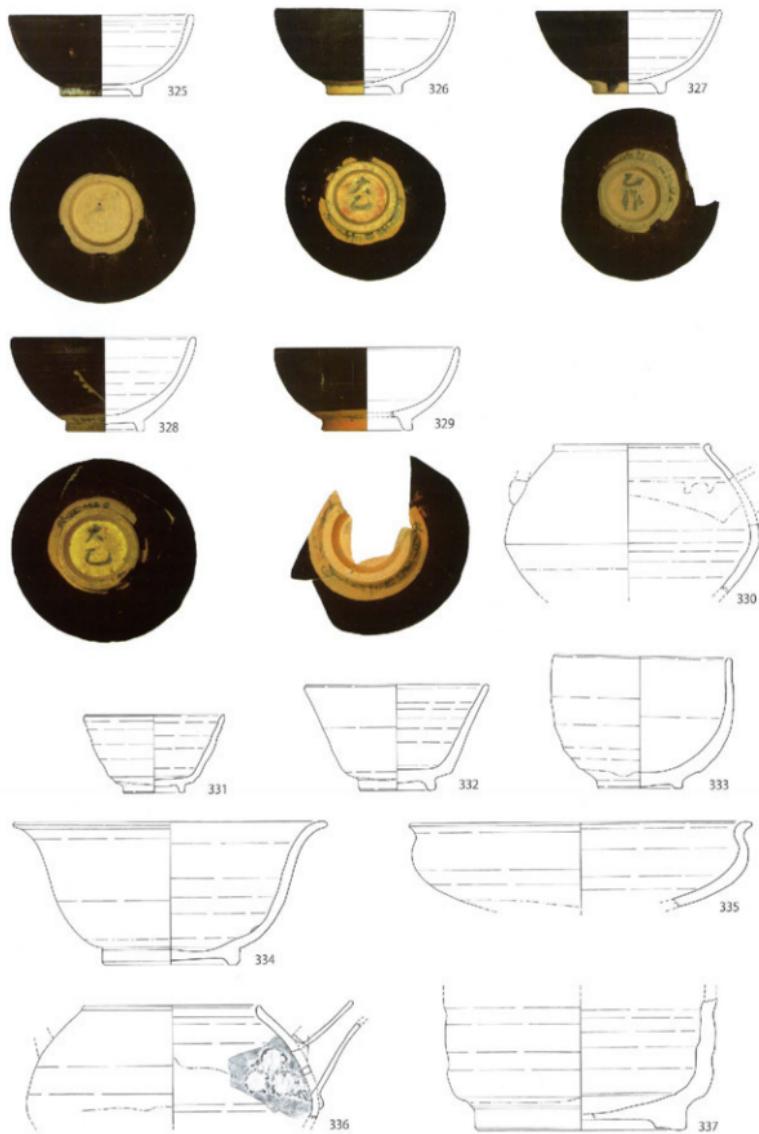
いる。334は大鉢、335は浅鉢、336は上瓶である。337は水差であろうか。

338～344は陶器鉢類である。338はおそらく在地産の人鉢で、灰釉が掛かるものであるが素地が布志名焼と似ており、布志名焼の可能性が考えられる。339も同様のもので、おそらく在地産の鉢である。340～342は、産地不明の擂鉢である。343・344は須佐の擂鉢で、高台内にカンナ痕を残す、高台の角を面取りするものである。

345～354は鉢類、甕・壺類である。345は瀬戸・美濃系の陶器の鉢と思われ、口縁部の下にそぎ文があり、緑釉が掛けられるものである。346も鉢で、産地不明品である。346は外面に獸顔が貼り付けてあり、獸顔の鼻部分に紐を通す穴が開けられている。347は陶器で、在地系の火入れと思われる。348は上器で焜炉と思われる。349は土器で七厘の脚部と思われる。350も上器で、焜炉あるいは七厘と思われる。351・352は陶器で、産地不明の植木鉢である。いずれも、底部中心に水捌けを良くするための穴が穿ってある。353は備前の壺か甕の底部と思われ、底部外面に回転糸切り痕が残る。354は陶器で、産地不明の中甕である。

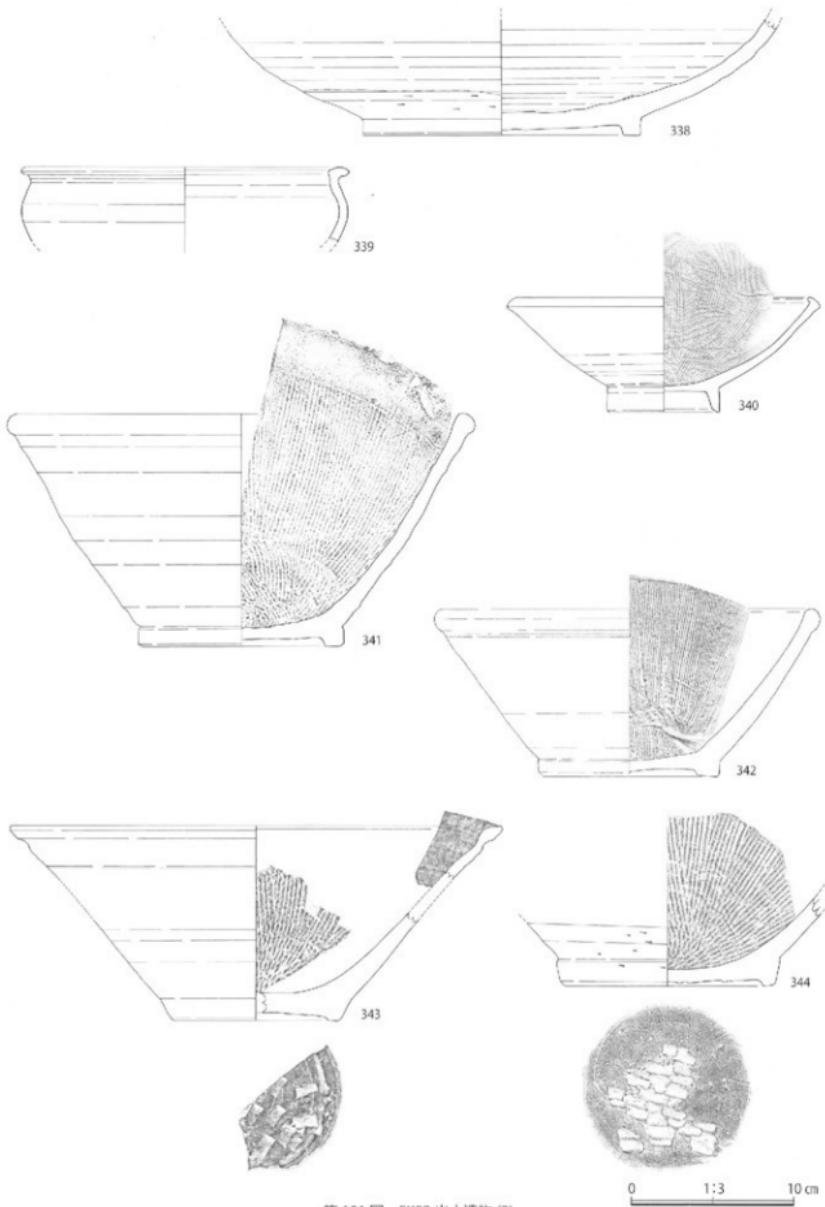
国産磁器

355～379は磁器の碗類、皿類である。355・356は肥前磁器の白磁の紅猪口である。357は肥前磁器の蓋付小鉢の蓋と身である。358は肥前磁器の猪口で、口縁部外面に省略兩降文が描かれ、体部外面に型絵刷りを施す。359は無地の紅猪口と思われる。360は肥前磁器の紅猪口皿で、外面に「小町紅」と書いてある。361・362は肥前磁器の小碗である。362は外面に折松文が描かれている。364～366は肥前磁器の中碗である。365は肥前磁器の白

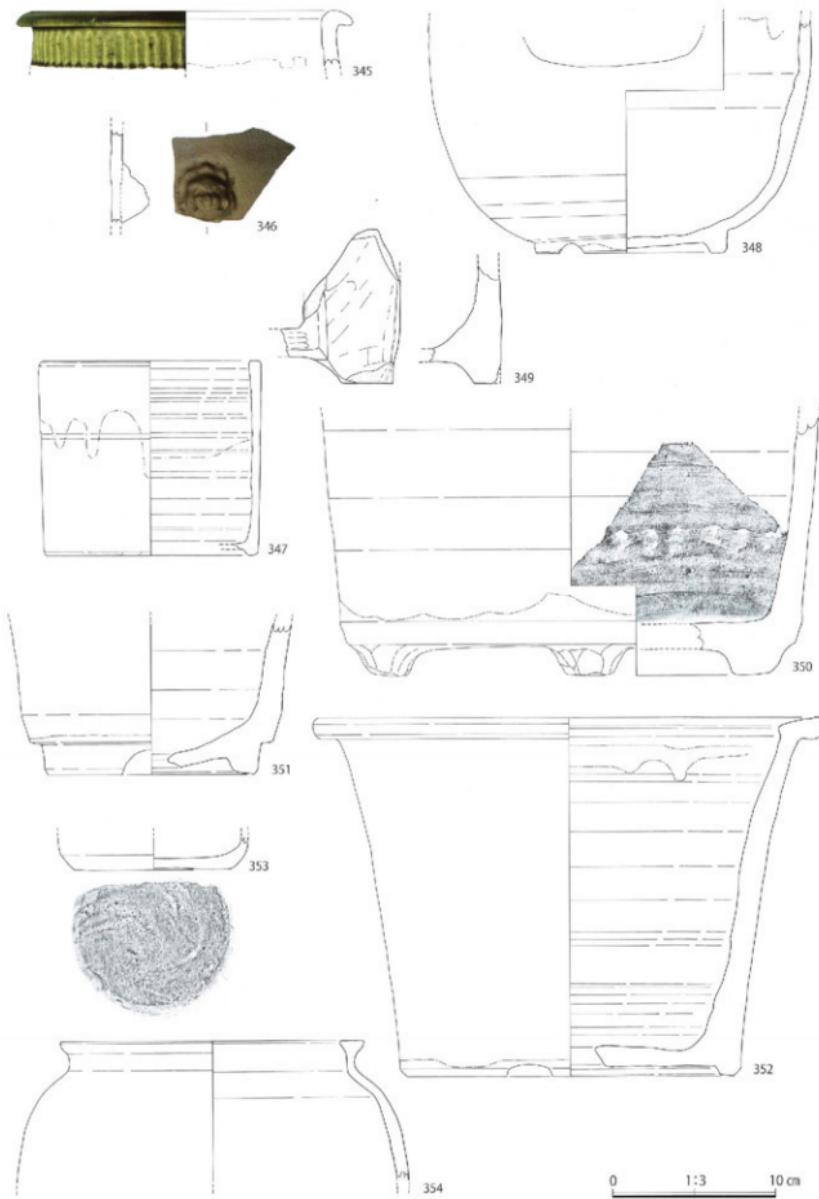


第100図 SK03出土遺物(2)

0 1:3 10cm



第101図 SK03出土遺物(3)



第102図 SK03出土遺物(4)



第103図 SK03出土遺物(5)



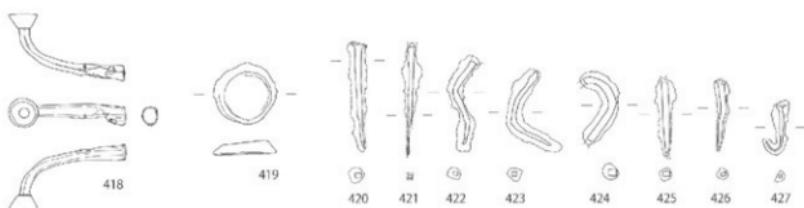
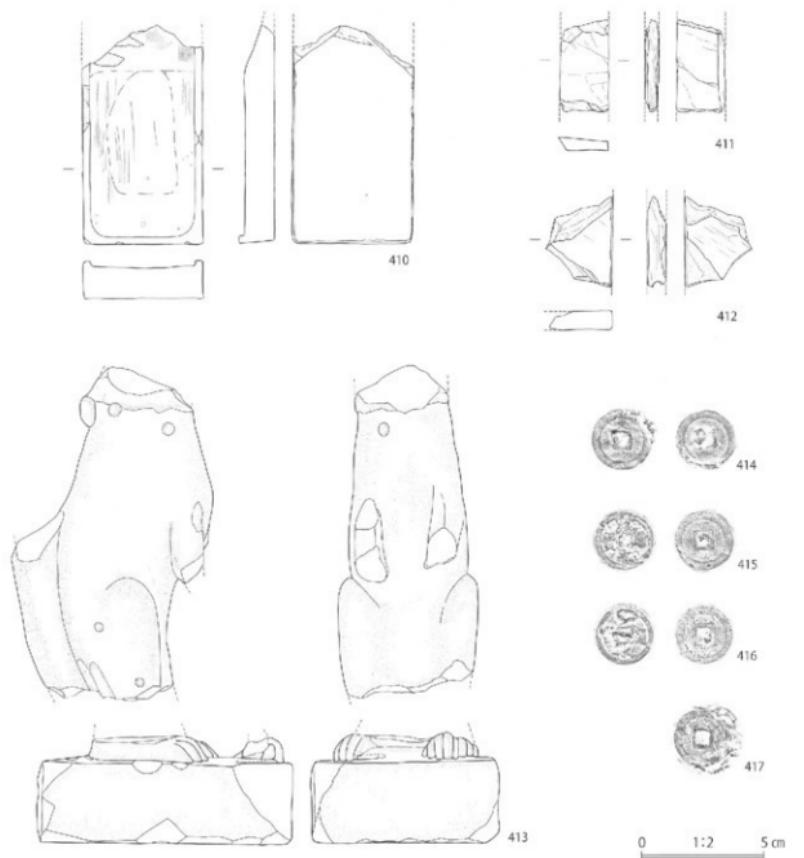
第104図 SK03出土遺物(6)

磁碗である。367は肥前磁器の広東碗の蓋である。368～370は肥前磁器の広東碗である。371～373は肥前磁器の端反碗である。374は肥前磁器で内面が青磁の皿あるいは鉢である。375は肥前磁器の皿で、高台内に二重角筋が書かれている。また、ハリ支えの跡が残る。376は肥前系の磁器皿で、蛇の目四型高台をもつ。377も肥前磁器の皿で、蛇の目四型高台である。378は肥前磁器の皿で、内面見込み部分に五弁花文が描かれている。379は中国製の磁器皿である。

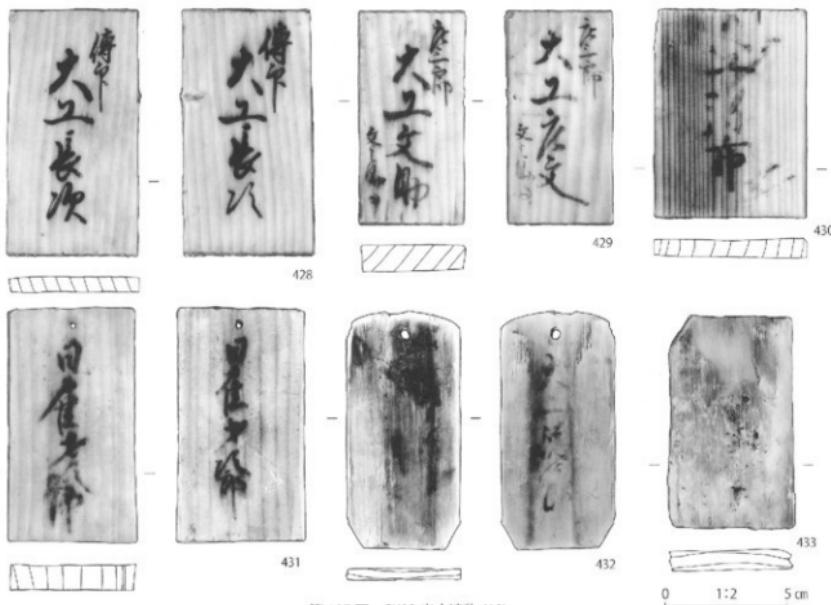
380～395は磁器の鉢類、瓶類、戸車と土師器皿である。380は肥前磁器の蓋付鉢の蓋である。381は肥前磁器の鉢で、ガラス雜ぎの跡が見られ、高台内に番号が書かれている。382・383は肥前磁器の小瓶である。384・385は肥前磁器の中瓶の底部片である。386・



第105図 SK03出土遺物(7)



第106図 SK03出土遺物図(8)

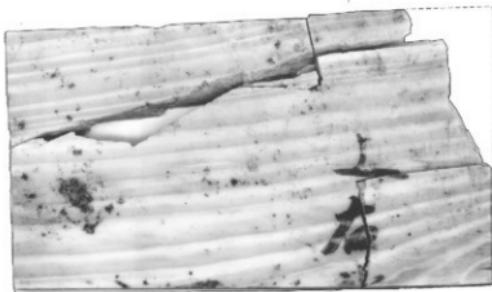


第107図 SK03出土遺物(10)

土師器皿 387は磁器製の戸車である。387は平面部に「戸」の墨書がある。388～395はロクロ成形の土師器皿である。388は小皿で底部中央に穿孔が施されるもので、呪術的に使用された可能性がある。389は小皿で内面全体に墨が残るもので、口縁部の外面にも墨がにじみ出している。390も小皿で、口縁部外面に油煙痕が残るため、灯明皿として使用されたものと思われる。391は小皿で口径6cm台のもので、392・393は口径8cm台の小皿である。394・395は口径9cm台の小皿である。

土器 396～409は大形の壺と甕と土器・土製品である。396は土器の大壺と思われる。397・398は陶器で、产地不明の大甕である。399・400は土器の焰格である。401は用途不明容器で、口縁部外面に何本もの条線が施される。402は焼塙甕で、内面に布印が残る。403～406は狐の土人形である。片面ずつ型で成形したものを貼り合わせており、中は空洞になっている。407も狐の土人形であるが、脚台の内面に「西歳」と墨書が施されている。408は人型の人形の半分だけが残るものである。409は人黒様の土人形である。

石製品 410～427は石製品、銅貨、金属製品である。410は石製の硯で、外面に黒色の塗りが施されている。411・412は砥石で、仕上げ砥と思われる。413は狐の石造物で、稻荷神社に置かれるものと類似するものである。414～417は銭貨である。414は二枚の背面どうしが鋲びで接着した状態である。一枚は背面に「文」の字があるため、「寛永通宝」と思われる。415・417も「寛永通宝」である。417は2枚以上接着していると思われる。鋲びが激しく銭種は不明である。418は煙管の雁首で、真鍮製である。形状から18世紀代のものと思われる。419は用途不明の鉄製品である。420～427は鉄釘である。いずれも断面が方形を呈す



434



435



436



437



438

0 1:2 5 cm

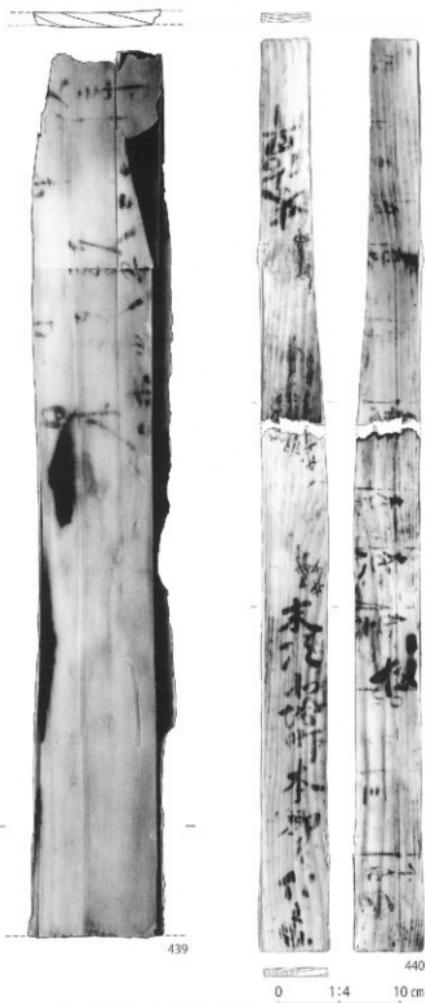
第108図 SK03出土遺物(11)

るものである。

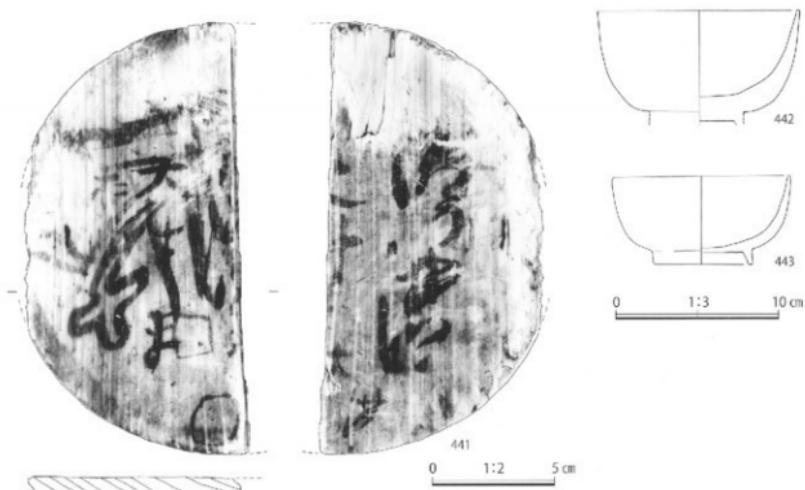
墨書き札 428～433は墨書きの木札である。428は両面とも「伝印 大工長次」と書かれている。429の片面は「庄三郎 大工文助 文乃助事」、もう片面には「庄三郎 大工庄文 文乃助事」と書かれている。430は片面に「大工弥市」と書かれている。431は両面とも「日雇才次郎」と書かれている。432は片面のみ一部が解読できるもので、「大工長□」と書かれているようである。433は墨書きがかすれて見えないが、板材の形状が他のものと同様なため、類似する内容が書かれていたものと思われる。以上の6点の墨書き木簡は、板材の形状がほぼ同じであること、「大工」の後に人名が書かれていることから、大工の出勤札、もしくは名札の可能性を考えられる。

墨書き木材 434～438は墨書きの木材である。434は片面に「上右」とだけ解読できる。435は格子状の図面が墨書きで書かれており、その横に「大尺カ一、五寸五、九寸三」と書かれている。間取りを示すものではないか、という指摘を受けている。436は「本柱一 杉芯、内□□所一 同壱、下柱一 同一、□□□ 同□」と書かれている。建物のどの場所にどういった木材を何本使用するかという仕様書のようなものであろうか。437は片面に「生馬村 良院」と書かれており、裏面は解読不能である。^④ 438は片面に「五間入」と書かれている。

439・440も墨書きの木材である。439は解読できなかった。440は片面に「末次北堀町本郷□□□□」、さらに逆向きから「末治町」と書かれている。「末治町」は「末次町」の可能性がある。裏面は板材を横長に置いて書かれているようである。ところどころ「を」、「一」、「三」と書いてあったり、墨引きしてあったりするのが確認できる。



第109図 SK03出土遺物(12)



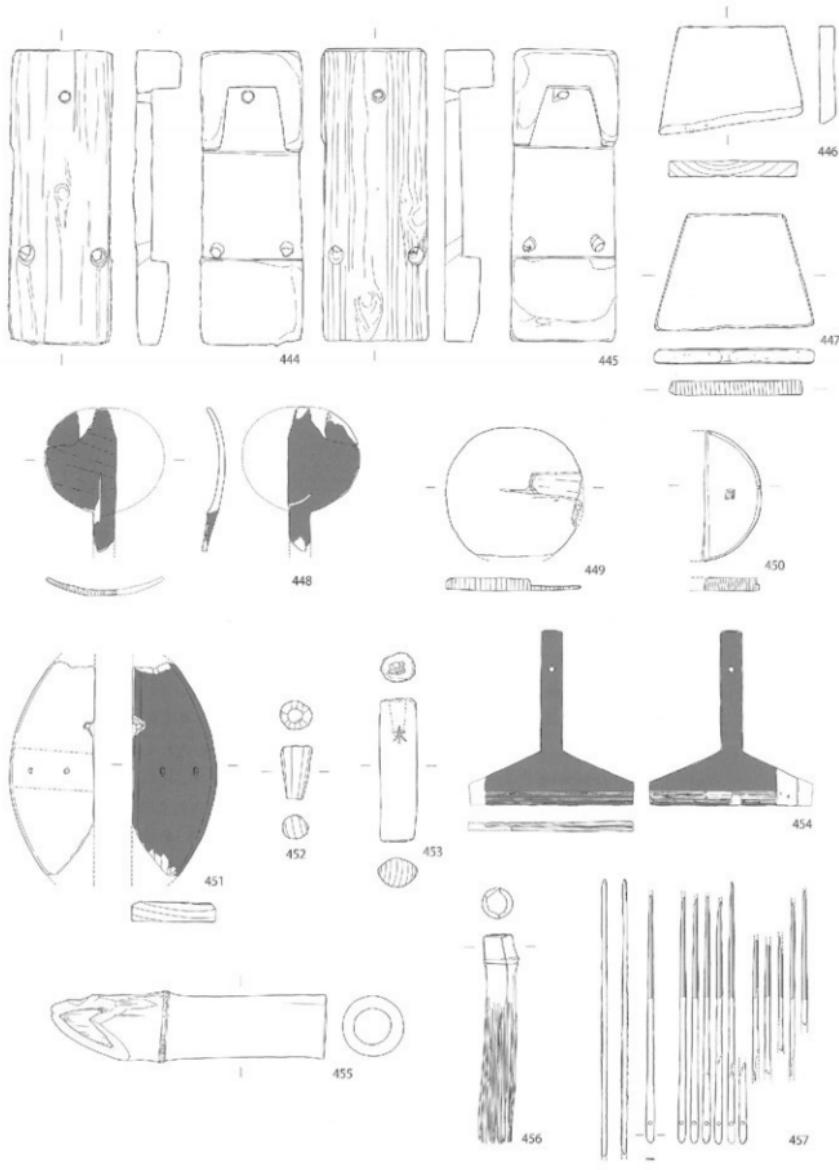
第110図 SK03出土遺物 (13)

漆椀 441～443は墨書の桶と漆椀である。441は桶の蓋か底に書かれたもので、片面は文字とともに「○」や「□」といった图形も描かれている。もう片面には文字のみが書かれているようであるが、解説できなかった。442は漆椀で、外面は黒、内面は赤の漆塗りが施されている。443も漆椀で、外面は黒、内面は赤の漆塗りが施されている。外面に銀草文が描かれている。

木製品 444～457は木製品である。444・445は角型の削り下駄である。446・447は差込下駄の歯である。小口長辺側に砂利が食い込んでおり、この面が接地面と考えられる。448は杓子と思われるもので、黒漆が内外面に塗布されている。449は曲物の底板であるが、加工痕から柄杓として使用されたものと思われる。450は曲物の底板である。451は樽の蓋板で、取っ手部分に紐を通す穴があり、片面に柿渋が塗られている。452は円柱状の栓である。453は工具か何かの柄部分と思われ、柄に「木」と線刻が施されている。454は刷毛の柄で、毛を装着するための穴と組溝が加工してある。内外面に柿渋が塗られている。455は竹で節は抜かれておらず、用途不明である。456は茶筅と思われる。穂先が直線的なもので、ぼてぼて茶に使用されるものか。457は扇子の骨で、銀色の付着物が残る部分があり、扇面に貼られた地紙の可能性が考えられる。

458～468は用途不明木製品である。458は長辺の片側に溝が穿ってあり、何かを装着したものと思われる。459・460は部材同士を組み合わせるホゾが加工してある。461は柄である。462・463は他にもセットとなる部材があるようである。464・465は赤漆塗りの箸である。466は何らかの取っ手であろうか。467・468は比較的大形の部材で、468は箱の側板と思われるものである。

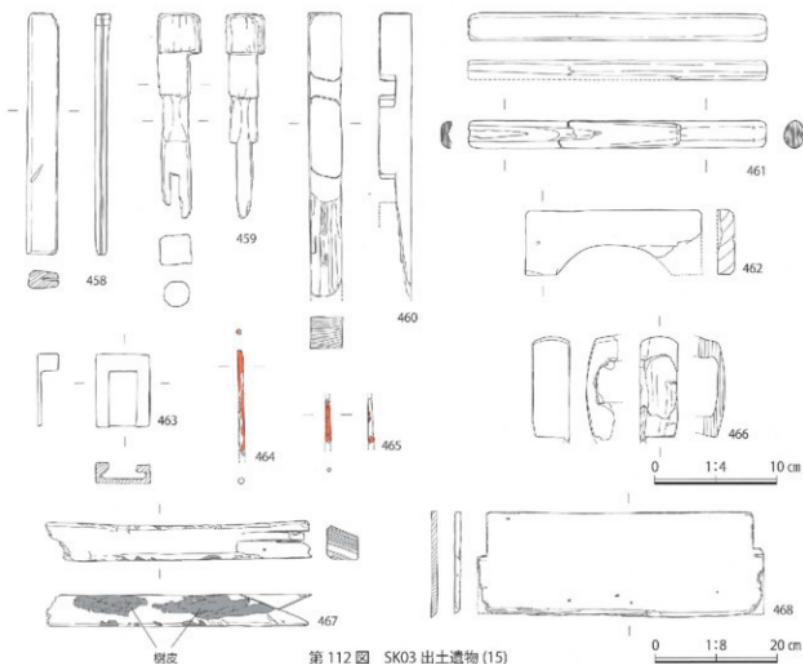
瓦 469～485は瓦である。469は軒丸瓦で、珠文の内側に三巴文が配される。珠文は13個確認でき、圈線は見られない。470は軒丸瓦で、珠文の内側に三巴文が配される。巴文の頭部が左向き、尾部が右向きのものである。珠文が8個確認でき、圈線は見られない。471は



第111図 SK03出土遺物(14)

■は黒漆

0 1:4 10cm



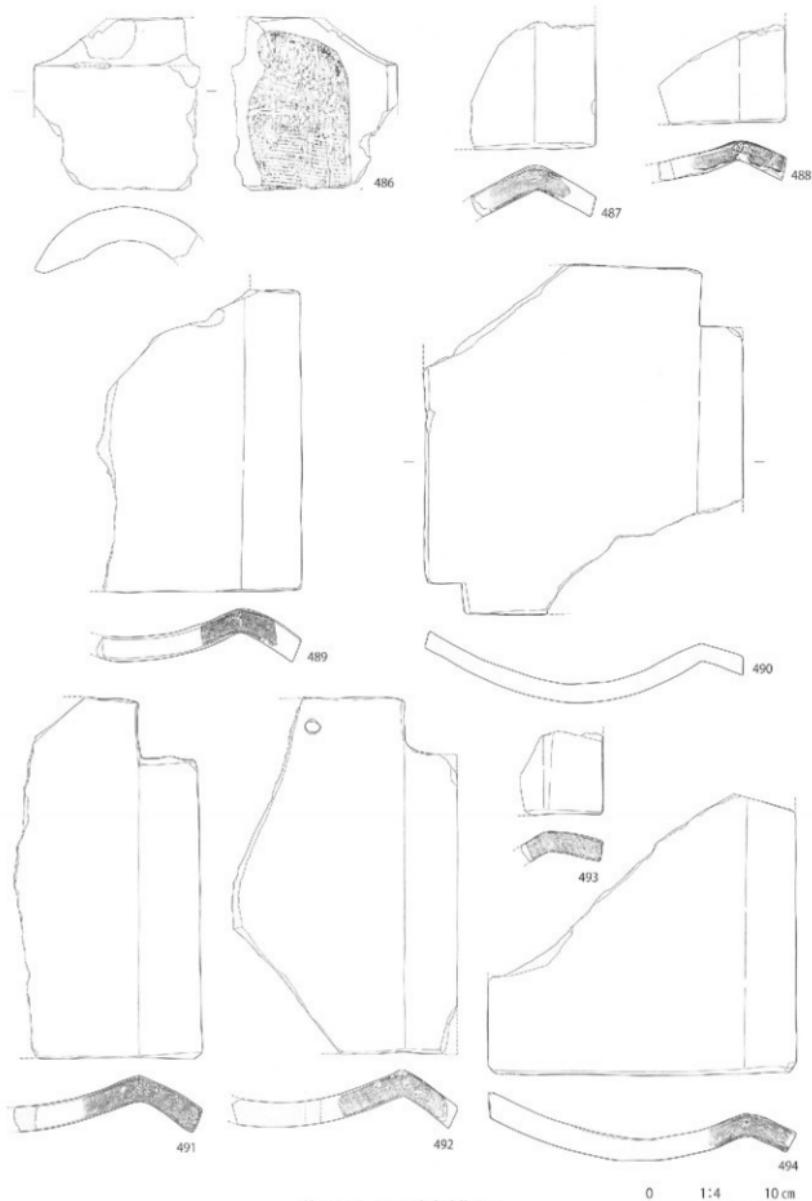
第112図 SK03出土遺物(15)

軒平棟瓦で、側面に花文状のスタンプが押されている。左棟と思われるものである。472は軒平棟瓦で、中心飾りの左右に3つずつ唐草文が配されるものである。473は軒平棟瓦で、中心飾りはおそらく葉脈を入れない簡略化された葉文と思われ、その左右には3つ連結した省略された唐草文が配されるものである。474は軒平棟瓦で、中心飾りを五葉文とし、左右に3つずつ省略された唐草文を配するものである。左棟と思われるものである。475は軒平棟瓦で、中心飾りを五葉文とし、欠損しているがおそらく左右に3つずつ連結した省略された唐草文を配するものである。476は軒平棟瓦で、中心飾りを五葉文とし、左右に3つずつ連結した省略された唐草文を配するものである。左棟と思われるものである。477も軒平棟瓦であるが、中心飾りの五葉文の葉が、上述のものよりさらに簡略化されている。これもやはり、左右に3つずつ連結した省略された唐草文を配するもので、左棟と思われるものである。478は軒平棟瓦で、中心飾りは橋状の文様が施されていたと思われる。その左右に1つずつの唐草文、さらにその外側に子葉文を1つずつ配するもので、左棟と思われるものである。479も軒平棟瓦で、中心飾りを橋状の文様とし、その左右に1つずつの唐草文、さらに外側に1つずつ子葉文を配するものである。480は軒平棟瓦で、瓦当文様は欠損のため不明である。481も軒平棟瓦で、中心飾りは橋状の文様であるが、479のものより簡略化された印象である。左右に1つずつの唐草文とさらにその外側に1つずつ子葉文が配される、左棟と思われるものである。482は軒平瓦か軒平棟瓦で、中心飾りは宝珠文である。その左右に子葉文1つず



第113図 SK03出土遺物(16)

0 1:4 10cm



第114図 SK03出土遺物(17)

つ、さらにその外側は省略された唐草文が配されるようである。483は軒棟瓦で、軒丸側は三巴文に周りに珠文が12個配されるものである。巴文の頭部は右向き、尾部が左向きのものである。軒平側は、橋状の文様の左右に1つずつの唐草文、さらにその外側に1つずつ子葉文を配するもので、右棟になるものである。484は三巴文の周りに珠文が12個配されるものである。485は鬼瓦の一部と思われる。

486～494は丸瓦と棟

瓦である。486は丸瓦で、内面調整はコビキBである。487～494は棟瓦すべて左棟である。487はV字の陰刻が円周状に廻る菊花文のスタンプが押されている。488は点状に花弁が廻るスタンプが押されている。489は点状の花弁の中心に1つ点があるスタンプが押されている。490は比較的大形で、頭部と尻部に1ヶ所ずつ切り込みが入るもので、スタンプは押されていない。491は尻部に切り込みが入るもので、菊花文のスタンプが押されている。492は菊花文のスタンプが押されており、尻部に切り込みが入り、瓦を留めて置くための穴が開けられている。493は他に比べて小さめの花文のスタンプが押されている。494は比較的大形で、菊花文のスタンプが押されている。

495・496は棟瓦である。495は尻部に切り込みが入れられているもので、平四つ目文のスタンプが押されている。496は「倉」のスタンプで、SE03で出土した棟瓦にも同じスタンプが押されている。

SK04：胞衣箱埋納坑(第116図)

SK04

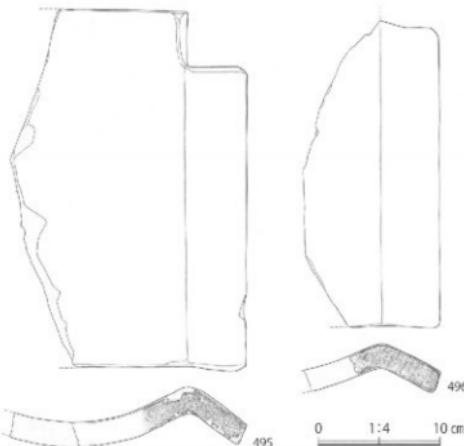
調査区の中央あたりで検出した1辺約0.7mの平面正方形に掘られた土坑で、坑の上面が近代以降の搅乱により失われており、標高約1.7m付近まで掘り下げたところで確認できた。土坑の中から「明治三庚午年六月八日、亥ノ上刻誕生女子胞衣」の銘が記された木箱が出土した。紀年銘の年代から第1遺構面の遺構、遺物として扱っている。第1遺構面から掘り込まれていたと考えれば、おそらく0.7m～0.8mの深さをもった土坑と思われる。

紀年銘と文献資料で鹿藩置県前に松江城三の丸を出た松平家が一時期、乙部家に仮住まいをした記録が残っていることから、10代藩主松平定安公の八女「鑑子」出生時の胞衣箱埋納坑であることが判明した。¹⁷⁾

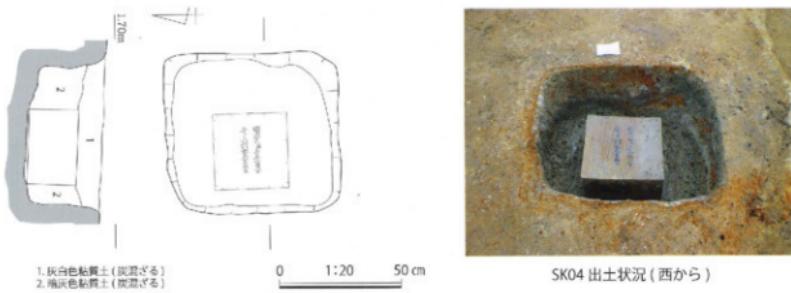
SK04出土遺物(第117～123図)

外箱

497・498は胞衣箱の外箱である。外箱の外法29.6cm×30.0cm×19.1cm、内法28.1cm×28.6cm×18.5cmの蓋と身に別かれるものである。蓋と側板の樹種同定を行ったところ、モミ



第115図 SK03出土遺物(18)



第116図 SK04 平面図・断面図

属マツ科が使用されていることが分かった。

外箱の蓋には「明治三庚午年六月八日、亥ノ上刻誕生女子胞衣」の墨書があり、文字の方向が東に向くように納められていた。また、蓋と身の2側面に金属製の留め具が残っており、これで蓋と身を繋いでいたようで、この部分以外はすべて竹製の目釘が使用されており、蓋は縁辺部に上から1辺5ヶ所ずつ合計20ヶ所に目釘を打って側板と繋げている。蓋の側板は、1側面の両端に2ヶ所ずつ合計4ヶ所に目釘を打っており、相対する側板にも同様に合計4ヶ所目釘を打って側板どうしを繋げている。身の側板は、1側面の両端に5ヶ所ずつ合計10ヶ所に目釘を打っており、相対する側板にも同様に合計10ヶ所目釘を打って側板どうしを繋げている。身の底板も、蓋と同様の配置で合計20ヶ所に下から目釘を打っている。さらに、幅2.5cmの板材4枚を身部上側に目釘で4ヶ所取り付け、受け部にしている。金属製の留め具は、側板に穴を開け両側から挟み込む状態で装着している。

内箱

499・500は胞衣箱の内箱である。平面形は正方形で、外法は1辺27.0cm、高さ16.0cmである。内法は1辺25.8cm、高さ15.5cmで、これも蓋と身に別かれるものである。側板の樹種同定を行ったところ、桐が使用されていることが分かった。内箱の蓋には葵の御紋が描かれており、外箱の墨書き同様に、文字の方向が東に向くように納められていた。

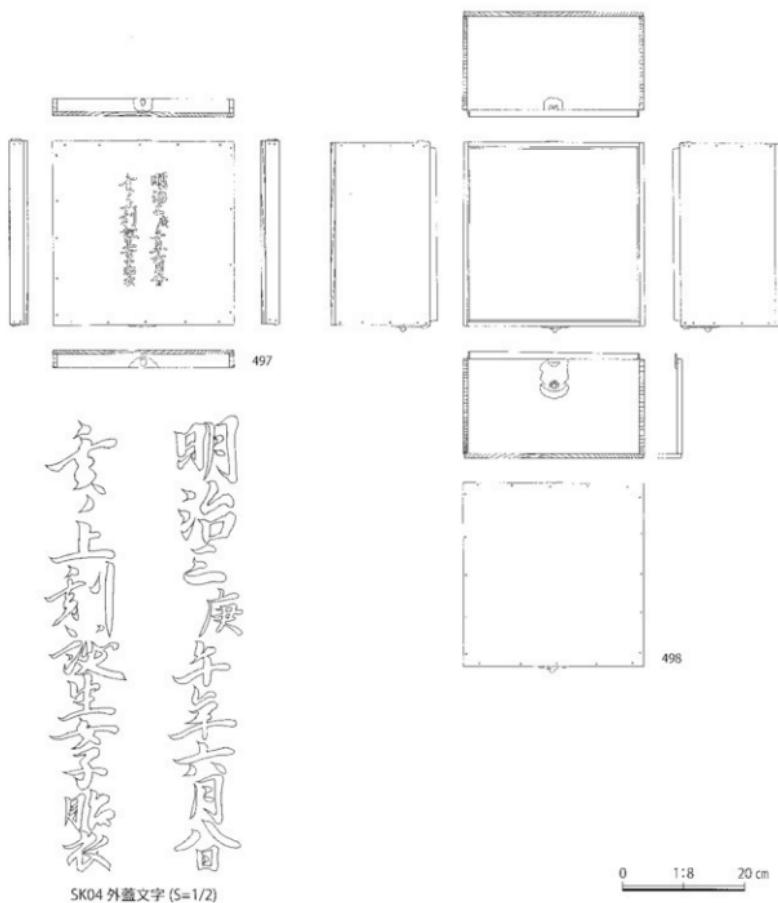
内箱はすべて竹製の目釘で成形されており、蓋は縁辺部に上から1辺5ヶ所ずつ合計20ヶ所に目釘を打っている。蓋の側板は、1側面の両端に2ヶ所ずつ合計4ヶ所に目釘を打っており、相対する側板にも同様に合計4ヶ所目釘を打って側板どうしを繋げている。身の側板は、1側面の両端に4ヶ所ずつ合計8ヶ所に目釘を打っており、相対する側板にも同様に合計8ヶ所目釘を打って側板どうしを繋げている。身の底板は、3辺は5ヶ所ずつ、1辺は4ヶ所の合計19ヶ所に目釘を打って側板と繋げている。また、身の上部に、幅4.0cmの板材4枚を目釘で留めて受け部にしている。

曲物容器

内箱の中には、曲物容器の他、羽子板、刀状木製品、筆の柄、墨、様々な種実が納められていた。

501・502は胞衣箱の内箱に納められていた曲物容器で、蓋と身に別かれるものである。外法は直径23.0cm、高さ14.7cm、内法は蓋部の直径が22.3cm、高さ2.2cm、身部の直径が16.9cm、高さ12.2cmである。樹種同定を行っていないため、樹種は不明である。

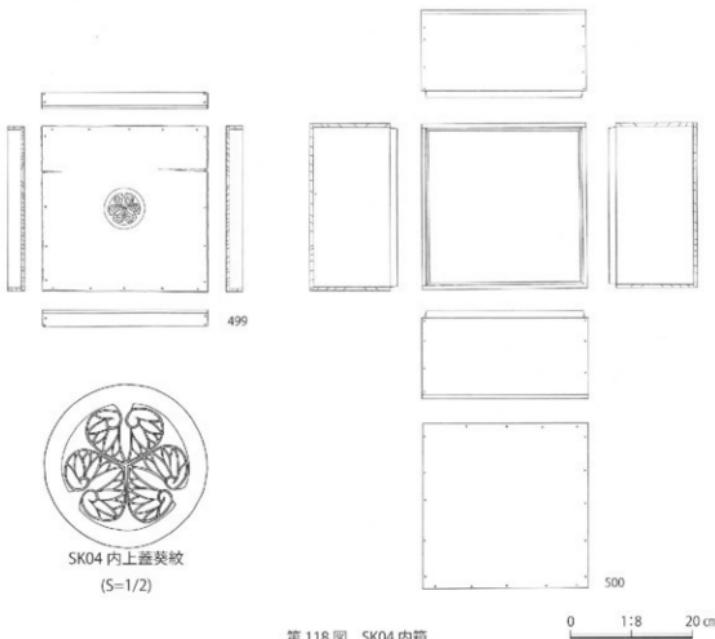
内箱の蓋を開けた時に容器の蓋の上に稻藁が置かれていた。また、蓋には葵の御紋が描かれており、この容器も内箱と同様に、文字の方向が東に向くように納められていた。蓋の側面は、へぎ板の両端を継ぎ皮で3ヶ所固定して成形している。身の側面は10ヶ所固定して成形



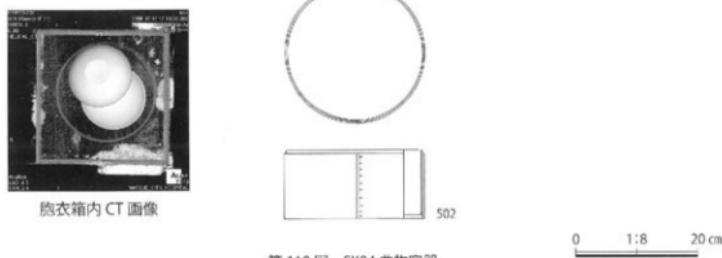
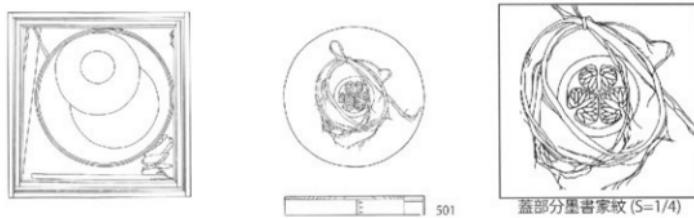
第117図 SK04外箱

しており、さらにその内側にもへぎ板を納め、受け部を設けている。この中から2枚の胞衣皿を検出した。おそらく口縁部どうしを合わせて納められていたと思われるが、検出時には蓋が横にずれていた。内箱内には水が溜まっており、取り上げ時に動いた可能性がある。

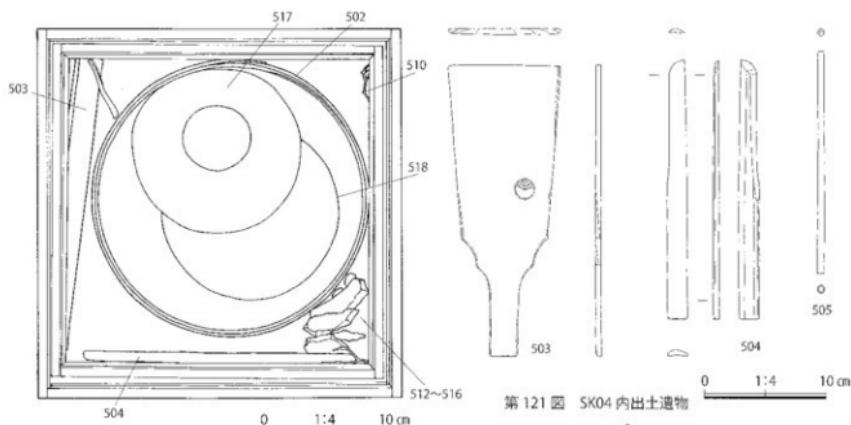
内箱内遺物 第120図は胞衣箱の内箱内の遺物検出状況で、503～516は内箱内に納められていた遺物である。503は羽子板で、内箱の側板に立てかけられており、水分を含んで羽部分が折れ曲がった状態であった。長さ24.0cm、厚さ0.5cmで刃の最大幅は復元すると9.3cmになるとと思われる。板には墨書きで宝珠文が描かれていたが、取り上げ後にしだいに薄くなり、保存処理を行ったもののほとんど見えなくなってしまった。504は刀状木製品で、長さ21.3cm、厚さは刃先部で0.4cm、柄部で0.5cmである。幅は刃先部で1.4cm、柄部で1.6cmである。505は筆



第118図 SK04内箱

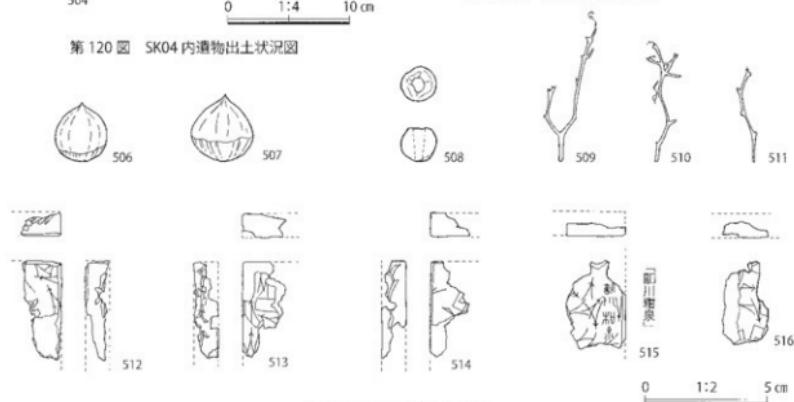


第119図 SK04曲物容器



第120図 SK04内遺物出土状況図

第121図 SK04内出土遺物

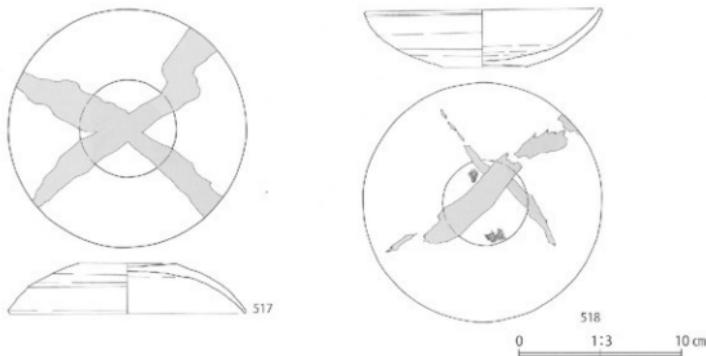


第122図 SK04内出土遺物

の柄で、長さ18.2cm、直径0.6cmで、筆毛は失われていた。506・507はクリ堅果で、検出時に内箱内に水が溜まっており、浮遊した状態で確認した。506は長さ2.4cm、幅2.1cmで、507は長さ2.7cm、幅2.5cmである。508はムクロジの種子で、直径約1.5cmである。羽根を装着するためにそ部が円形に削られており、羽根つきの球と思われる。509～511はサンショウウの細枝で、内箱内の沈殿物を調べたところ、サンショウウの種子と果皮も検出した。第8章で詳しく述べられるが、サンショウウの結実時期が10月で、それ以降の果尖の状態での保存は難しいようで、SK04の埋納時期と齧歯が生じることになるため、今後の検討課題である。512～516は墨で、篆書体で文字が描かれている。その他、いくつかの種火を検出しており、種実同定を行ったところ、イネ類、アワ類、ヒエ類、ウリ類種子であることが判明した。イネ、ヒエ類については、穂の状態であったようである。

胞衣皿

517・518は胞衣箱の曲物容器に納められていた胞衣皿である。蓋は口径14.4cm、底径6.0cm、器高3.1cmで、外面天井部から体部中位にかけて、回転ヘラ削りが施される。外面体部中位から口縁部にかけて、回転ヘラ削り後に回転ナデが施される。内面は回転ナデが施される。外面



第123図 SK04 曲物容器内胎衣皿

に斜格子状のシミが残る。身は、口径 14.5cm、底径 5.3cm、器高 3.5 ~ 3.6cmで、外面底部から体部中位にかけて回転ヘラ削りが施される。外面体部中位から上縁部にかけて、回転ヘラ削り後回転ナデが施される。外面上縁端部に 1 条の沈線が施される。内面は回転ナデが施される。これも外面に斜格子状のシミが見られ、おそらく蓋と合わせ口にした時に布または紐状のもので縛った痕跡と思われる。身の中に胎衣が納められていることが予想されたため、内容物の科学的分析を行った。その結果、胎盤の組織は腐敗のため検出できなかったが、濃い色のやや厚い布片と淡い色の非常に薄い布片あるいは膜状のものが確認された。おそらく胎盤を包んだものと推測される。

この他の遺構として、全体に不整形の土坑を多数検出しているが、その多くが用途不明である。柱穴の可能性も考えて検討を重ねたが、建物として復元できるものを抽出できなかつた。また、井戸に関しては現代まで使用されていたものを含めて 9 つの井戸を検出している。SK04・05 は井戸枠が失われていたが、埋土中に埋め殺し時に息抜きとして使用した竹筒片が残っていた。陶磁器などを伴わないため、時期不明である。この他の近代以降の井戸と判断しているものは、輪状に加工した来待石をいくつも積み重ねて井戸枠にしており、井戸内から近代以降の陶磁器やガラスなどが廃棄されていた。しかし、これらの近代以降の井戸が、江戸時代から使用されていたものを改修している可能性は否定できない。

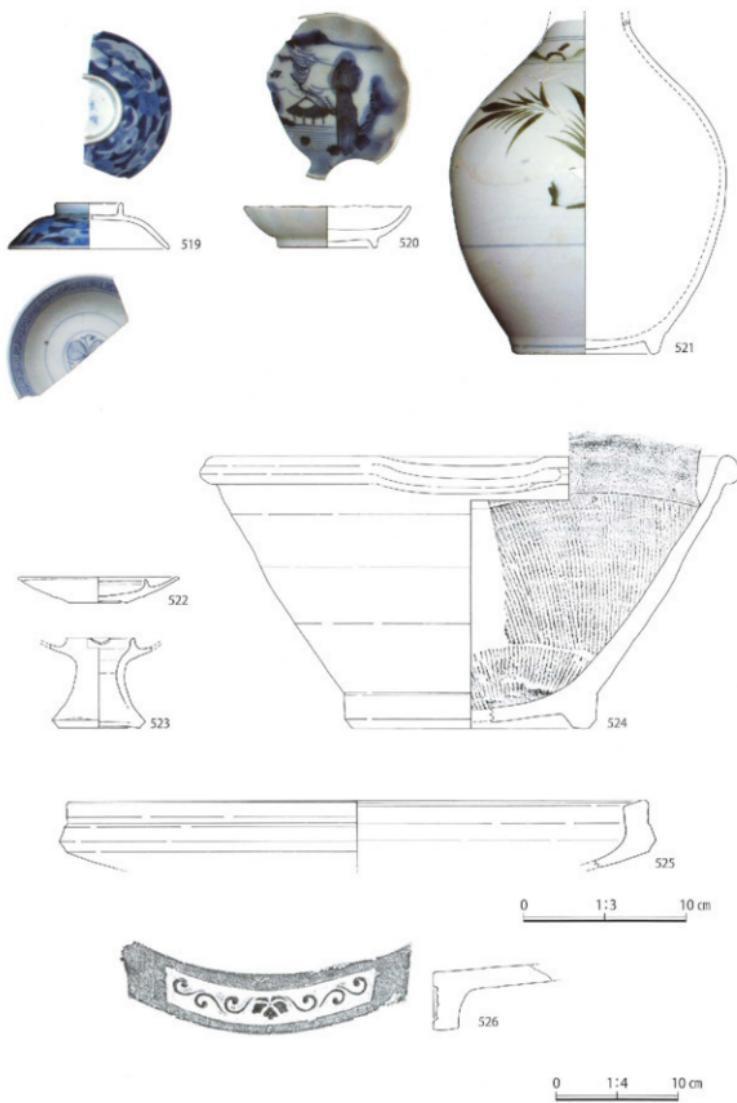
以下は、詳細遺構図は掲載していないが、第1遺構面の年代的特徴を表す遺物が出土しているため掲載している。遺構の位置については、第78図の調査区全体図を参照していただきたい。

SK05 SK05：土坑出土遺物（第124図）

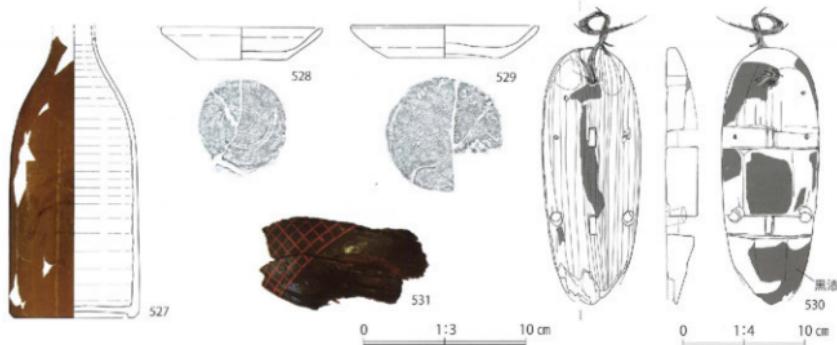
国産陶磁器 調査区の北西側で検出した用途不明の土坑に遺物が廃棄されたものである。519 は肥前磁器の壺反碗の蓋である。520 は肥前磁器の菊花皿である。521 は肥前系磁器の大瓶である。522 は陶器の灯明受皿である。523 は陶器で脚付きの灯明受皿である。524 は产地不明の擂鉢である。525 は土器で、焰烙である。526 は軒平棟瓦で、瓦当文様は中心飾りに五葉文を用い、その左右に 3 つの唐草文を配するものである。

SK06 SK06：土坑出土遺物（第125図）

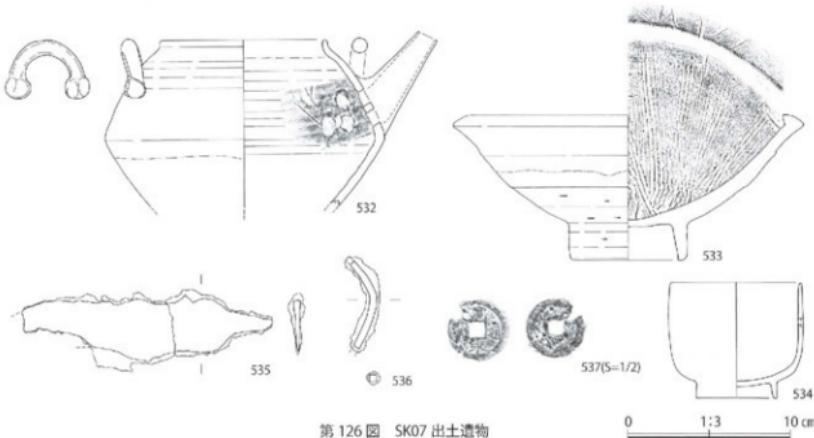
調査区の北東側で検出した用途不明の土坑に遺物が廃棄されたものである。527 は陶器の



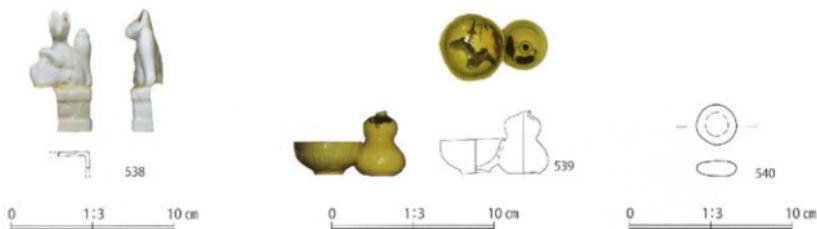
第124図 SK05出土遺物



第125図 SK06出土遺物



第126図 SK07出土遺物



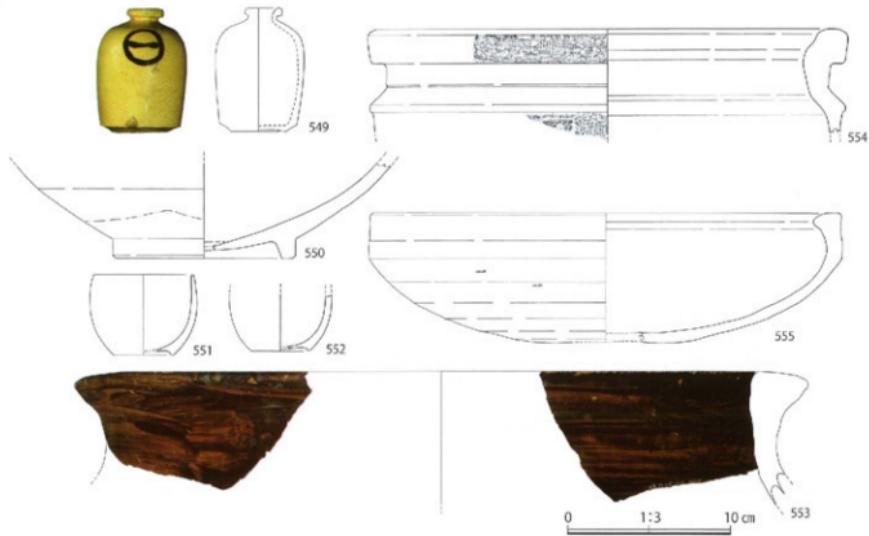
第127図 SK08出土遺物

第128図 SK09出土遺物

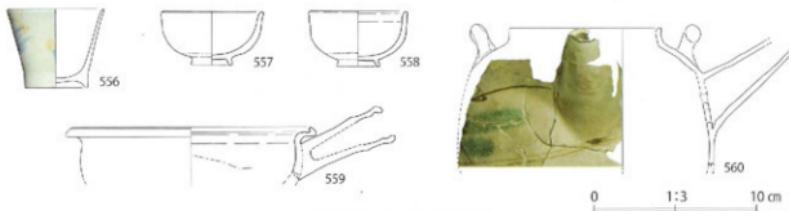
第129図 SK10出土遺物



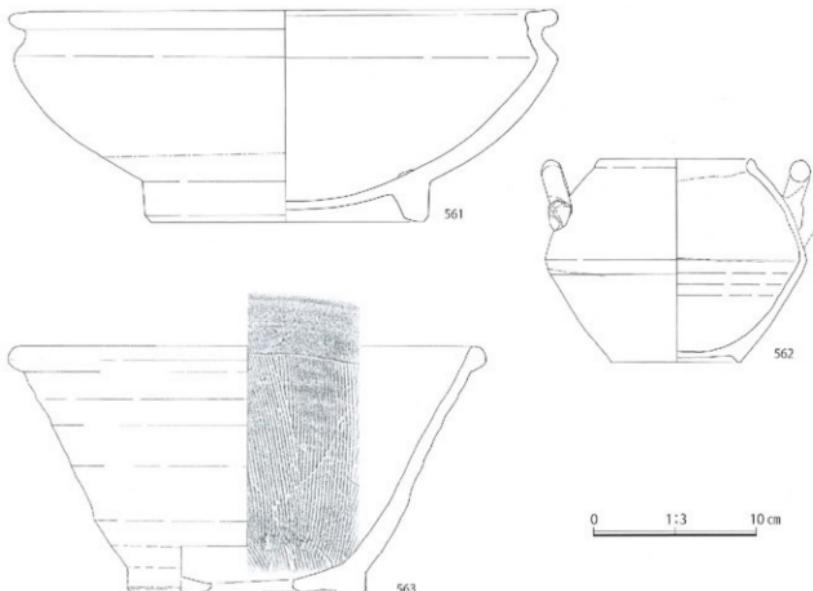
第130図 SK11出土遺物



第131図 SK12出土遺物



第132図 SK13出土遺物



第133図 SK14出土遺物

国産陶器 爐徳利で、京都・信楽系のものと思われる。528・529はロクロ成形の土師器皿で、528は小皿で内外面にごく薄く煤が付着しており、灯明使用の可能性がある。529は中皿で、煤の付着は見られない。530は丸型の差込下駄の歯が失われたもので、黒漆が塗ってある。前緒穴に鼻緒が廻った状態で出土している。台の前側に残っている足の指跡から、右足用と推定される。さらに前歯付近に補修孔が2穴残っており、使用期間は比較的長かったものと思われる。

漆器 531は腰丸椀で、外面は黒、内面は赤の漆塗りが施されている。外面に赤絵で格子模様が描かれている。

SK07 SK07：上坑出土遺物（第126図）

国産陶器 調査区の北東側で検出した用途不明の土坑に、加工された来待石とともに陶磁器などが廃棄されていた。532は產地不明の土瓶である。533は產地不明の擂鉢で、やや小形で器厚も比較的薄く、高台がかなり高いものである。内面見込みの擂目は、放射状を呈する。534は



第134図 SK15出土遺物

- 金属製品** 陶器の色絵碗で、布志名焼と思われる。535は鉄製の包丁と思われる。536は鉄釘で、断面方形を呈する。537は銭貨で、「寛永通宝」のなかでも「ス貝寶」と呼ばれる古手のもので、1636～1639年に鋳造されたものである。その他にも19世紀代の肥前磁器などが共伴している。
- SK08** SK08：土坑出土遺物（第127図）
- 国産磁器** 調査区の中央で検出した土坑から出土したもので、538は产地不明の磁器製の狛の人形で、狛の脚部と台部が欠損している。
- SK09** SK09：土坑出土遺物（第128図）
- 国産磁器** 調査区の東側で検出した土坑から出土したもので、539は陶器の水滴で、黄釉の布志名焼である。瓢箪と碗が並んだ形状で、瓢箪と碗の内部が穴で貫通している。
- SK10** SK10：土坑出土遺物（第129図）
- 石製品** 調査区北東側で検出した規模の小さい土坑から出土したもので、540は石製の耕石で、色調から白石として使用されたものと思われる。
- SK11** SK11：土坑出土遺物（第130図）
- 国産陶磁器** 調査区の中央で検出した土坑から、18世紀末から19世紀代にかけての陶磁器が出土している。541は肥前磁器の広東碗である。542は中鉢で、肥前磁器に色絵が施されたものである。火を受けたようで、色絵が薄くなっている。544は肥前磁器の猪口である。543は肥前磁器の仏飯器である。545は肥前磁器の中皿で、竈の目型高台をもつ。高台内に「角福」が書かれている。546は产地不明の陶器の大鉢である。547は产地不明の陶器の行平鍋である。548は陶器の唾壺で、京都・信楽系の可能性が考えられるものである。
- SK12** SK12：土坑出土遺物（第131図）
- 国産陶器** 調査区の東側で検出した土坑の中に、江戸時代の遺物とともに近代の遺物も大量に廃棄されていた。549は布志名焼の薬瓶である。551・552は黄釉の布志名焼の小碗である。550は产地不明の大鉢である。553は越前系の大甕の口縁部である。器形は越前焼の大甕と類似するが、塗布される釉薬が越前のものではないようである。^⑨ 554は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面に雷文が施されている。555は土器の焰格である。
- SK13** SK13：土坑出土遺物（第132図）
- 国産陶磁器** 調査区の南東側で検出した用途不明土坑の中から19世紀代の遺物が出土している。556は肥前磁器の猪口である。557・558は京都・信楽系の陶器小碗である。559は产地不明の陶器で行平鍋である。560は京都・信楽系の陶器土瓶であるが、鳥取県の浜坂焼で似たものが焼かれており、^⑩ 今後、検討していく必要がある。
- SK14** SK14：土坑出土遺物（第133図）
- 国産磁器** 調査区の南側で検出した土坑から出土したもので、561は在地の陶器の大鉢である。562

も在地の上瓶と思われる。563は擂鉢の底部を穿孔して植木鉢として転用したもので、産地不明のものである。

SK15 SK15：土坑出土遺物（第134図）

調査区の東側で検出した土坑から、17世紀前半の肥前陶器皿とともに土師器皿が出土している。564・565はロクロ成形の土師器皿で、564は小皿で一部煤が付着するため灯明使用の可能性も考えられる。565は巾皿で油煙痕が残るため、灯明として使用していたと思われる。

SK16：廐棄土坑出土遺物（第135図）

調査区の西側で検出した廐棄土坑から出土したもので、566は十器の焼塙壺の蓋で、上面に格子状のタタキ目の跡が残り、内面は型押し時の布目跡が残る。567も土器の焼塙壺の身で、側面を円筒状に成形した後に一端に粘土を充填して底部としたものである。568は肥前陶器の大鉢で、二彩の刷毛目塗りを施したものである。569は漆桶の蓋で、内外面ともに赤漆塗りが施されており、赤絵で何らかの絵が描かれている。また、高台の内側の下端部には金が塗られている。570は羽子板で、長辺半分が欠損しており、二次加工を受けたのか、板にキズが残る。571は樽の蓋板で、面に直径2.4cmの円孔が開けられている他、紐を取り付けるための小さい孔が5ヶ所確認できる。断面には目釘が4ヶ所打たれている。その他、下駄の歯も出土している。

SK17：廐棄土坑出土遺物（第136図）

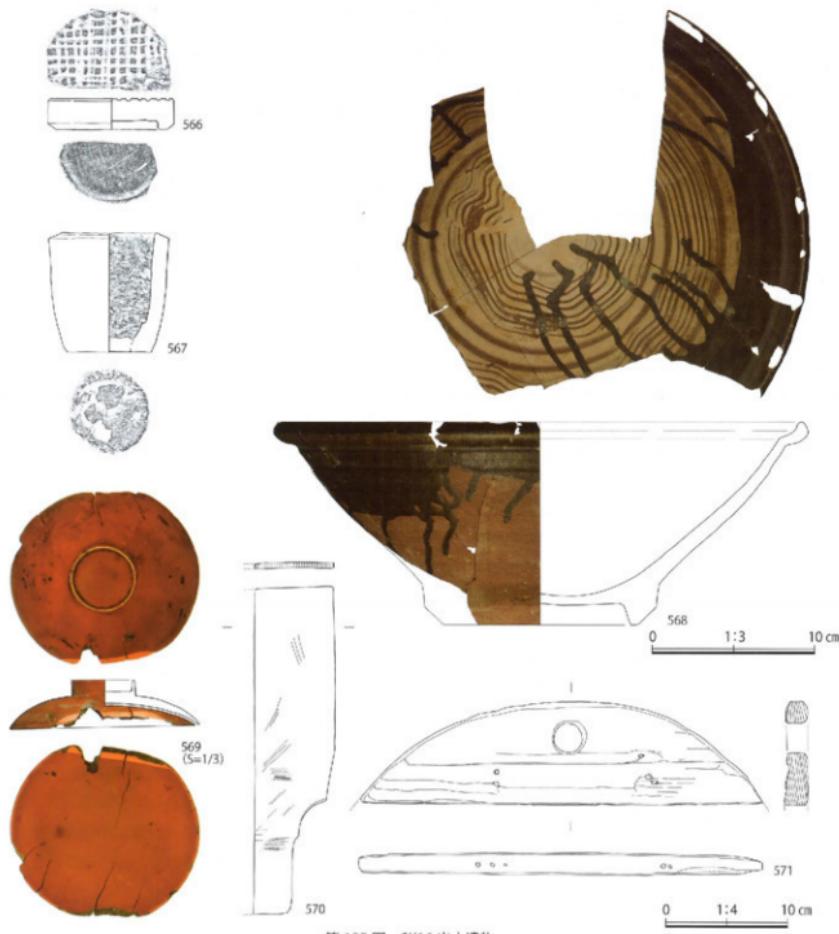
調査区の西側で検出した廐棄土坑から出土したもので、572は十器の焰焰である。口縁部外表面を板状のもので成形後、ナデで仕上げており、内面はナデ調整を施している。573は口縁部外表面から内面にかけてナデ調整を施すものである。

第1遺構面遺構外山上遺物（第137～143図）

以下は第1遺構面の直上から出土した遺物である。

574～604は国産陶器である。574はミニチュア陶器の鉢で、575はミニチュア陶器の羽釜である。576は信楽の端反碗である。577は肥前陶器の呉器形碗である。578は産地不明の中碗で、火を受けてほとんどの文様がとんてしまっているが、外面に鐵絵が描かれている。579は肥前陶器の皿で、内面見込み部分に砂口が、高台にも目跡が残るものである。第2遺構面SK18からも同様の皿が山上している。580は肥前陶器の大皿で、内面に印花文が施される。581は肥前陶器の鉢あるいは片口である。582は産地不明の中鉢である。583は在地産の陶器鉢である。584は瀬戸・美濃の急須の蓋と思われ、取手の部分が「猿」になっており、外面に緑釉が掛けられている。585は肥前陶器の香炉で、刷毛目塗りが施されるものである。586は産地不明の土瓶である。587は産地不明の上瓶の体部片である。588は産地不明の土瓶である。

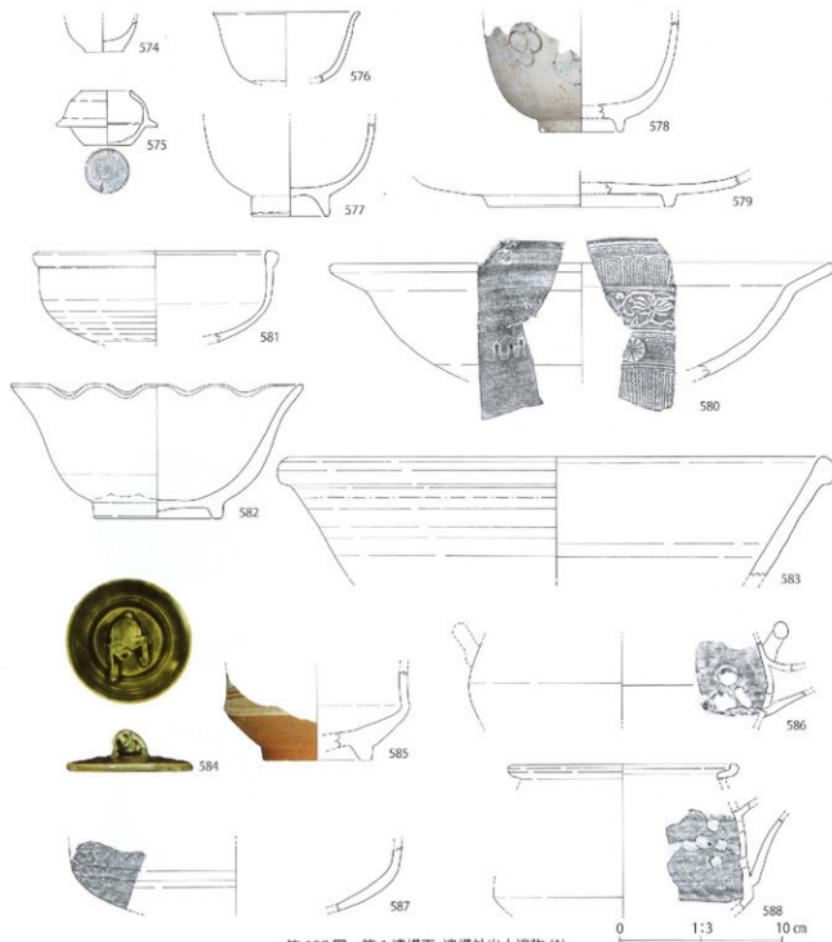
589～596は国産陶器の鉢類、窯道具である。589は産地不明の脚擂鉢である。590～592は須佐の擂鉢体部片である。593も須佐の擂鉢であるが、前述の須佐の擂鉢と胎土や高台外表面を取りりすることでは同じであるが、擂口が細かいこと、やや光沢をもった黒っぽい釉薬が掛けられている点が異なる。590～592のようなタイプは下層の遺構面からすでに見られるが、593のようなタイプは第1遺構面で初めて見られるものであるため、製作年代が新しいものである可能性がある。594・595は、在地の擂鉢と思われる。596は産地不明の擂鉢で、内面見込部の擂口は放射状を呈し、高台が高いものである。高台内に墨書が見られるが解読できなかった。



第135図 SK16出土遺物



第136図 SK17出土遺物

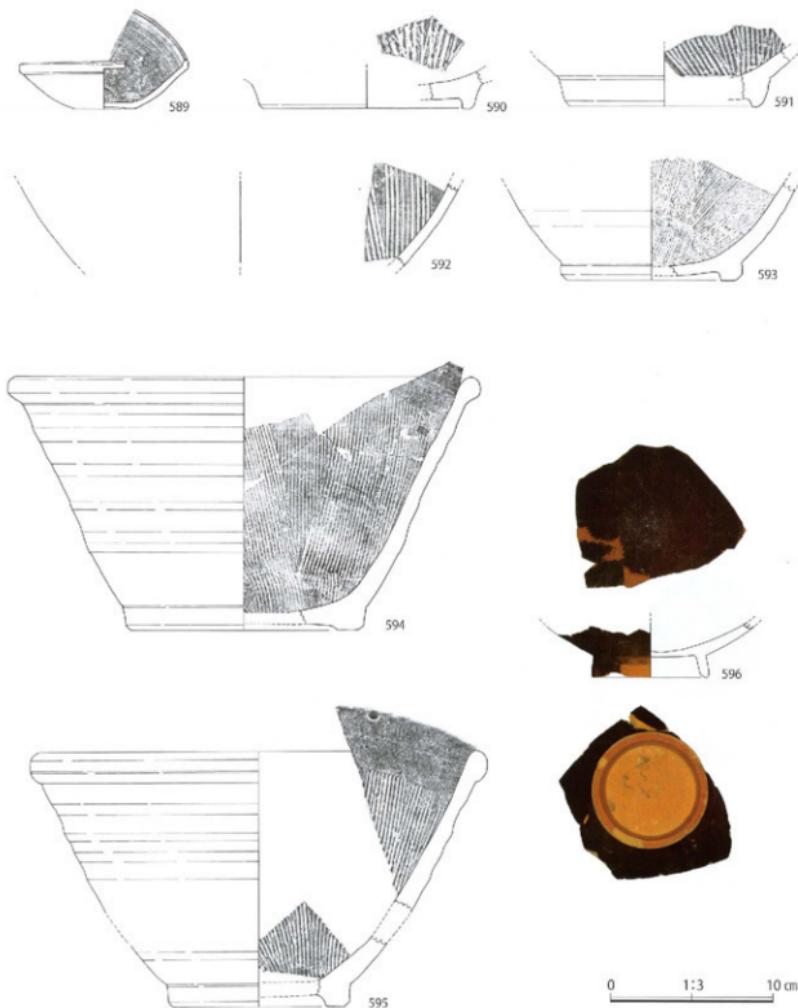


第137図 第1遺構面 遺構外出土遺物(1)

597～604は国産陶器の瓶類と土器である。597は高台内に墨書があるが、解読できなかつた。598は陶器の大瓶である。599は陶器の大瓶で、体部外面にスタンプが押してあり、「空□」と読める。600は土器の焼塙壺の蓋で、内面に型押し時についた布目の痕跡が残る。601は土器で火鉢あるいは焰格と思われる。602は土器の炉炉と思われる。603は七厘に付属する「さな」である。604は陶質の窯道具である。

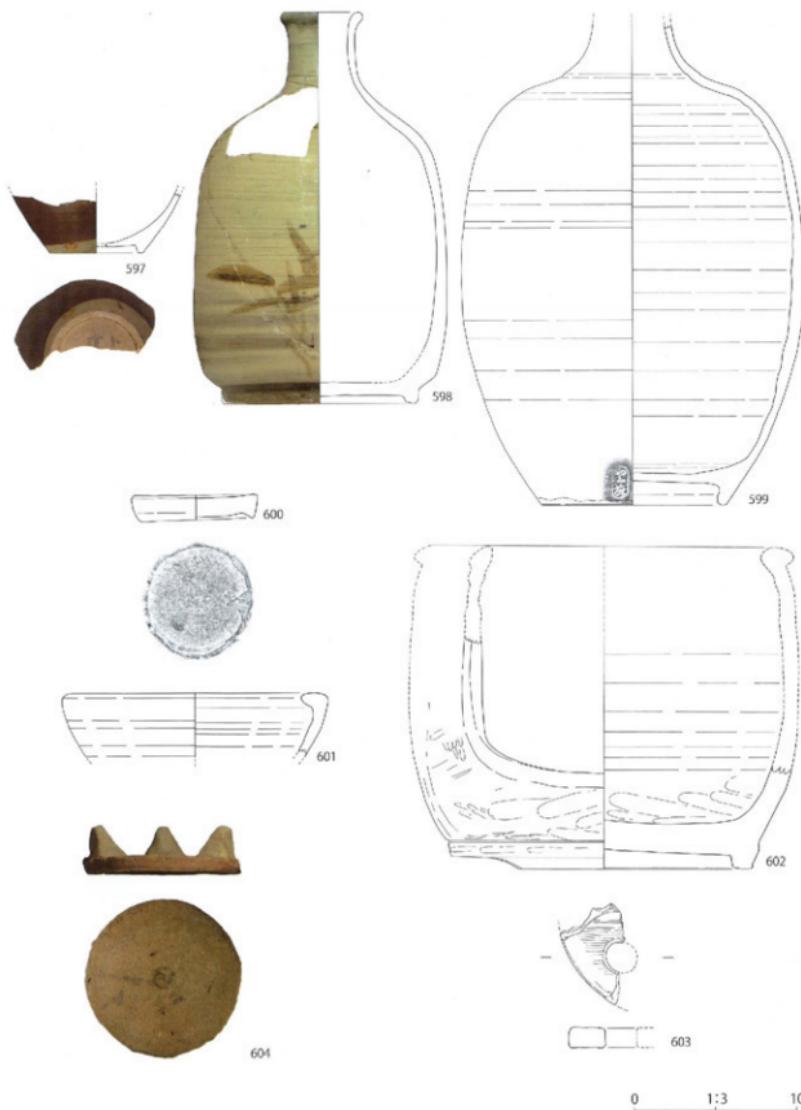
国産磁器

605～621は磁器碗である。605は产地不明の磁器製蓋である。外面は型紙刷りによる絵付けが施される。606は肥前磁器の紅猪口である。607は肥前系磁器の小碗である。608は肥前磁器の端反碗あるいは廣東碗の蓋である。609は肥前磁器の端反碗あるいは廣東碗の蓋



第138図 第1造構面 造構外出土遺物(2)

である。610は肥前磁器で端反碗の蓋である。611は復興九谷の磁器碗で、外面に赤絵が施されるもので、高台内に「九谷」と書かれている。612は肥前磁器の端反碗で、外面に色絵が施される。613～615も肥前磁器で広東碗である。616は肥前磁器の端反碗である。617は肥前磁器の端反碗で、618は肥前系の端反碗である。619・620は肥前磁器の陶胎染付碗である。621は中国磁器の碗である。



第139図 第1遺構面 遺構外出土遺物(3)



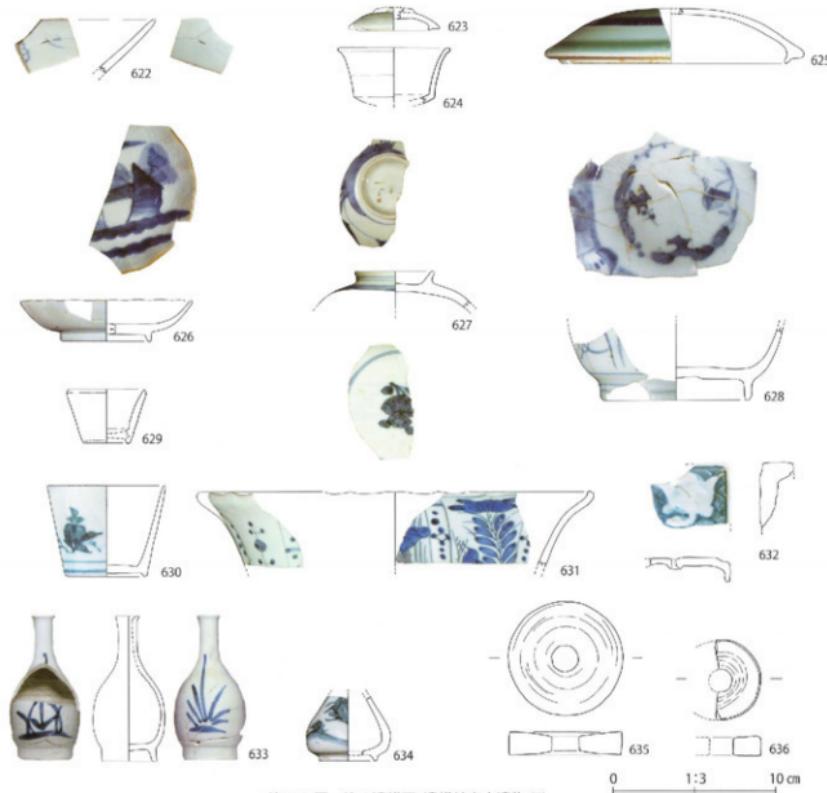
第140図 第1遺構面 遺構外出土遺物(4)

0 1:3 10cm

622～636は国産磁器の皿類、鉢類、瓶類、戸車である。622は肥前磁器の皿で、染付が一部認められる。623は肥前産の白磁で、小鉢の蓋である。624は小鉢の身部で、外面に鉄釉が掛かるものである。625は肥前磁器の鉢の蓋で、外面は染付青磁である。626は肥前磁器の皿で、口錫が施されるものである。627は肥前磁器の蓋と思われるもので、高台内に焼き緋ぎを施した時に付けられたと思われる番号が残っている。628は肥前磁器の鉢で、高台がやや高く、蛇の目凹型を呈するものである。629は白磁で、产地不明の猪口あるいは小杯である。630は肥前磁器の猪口である。631は肥前磁器の大鉢である。632は肥前磁器の水滴である。633は肥前磁器の小瓶である。634も肥前磁器の小瓶である。635・636は磁器製の戸車である。

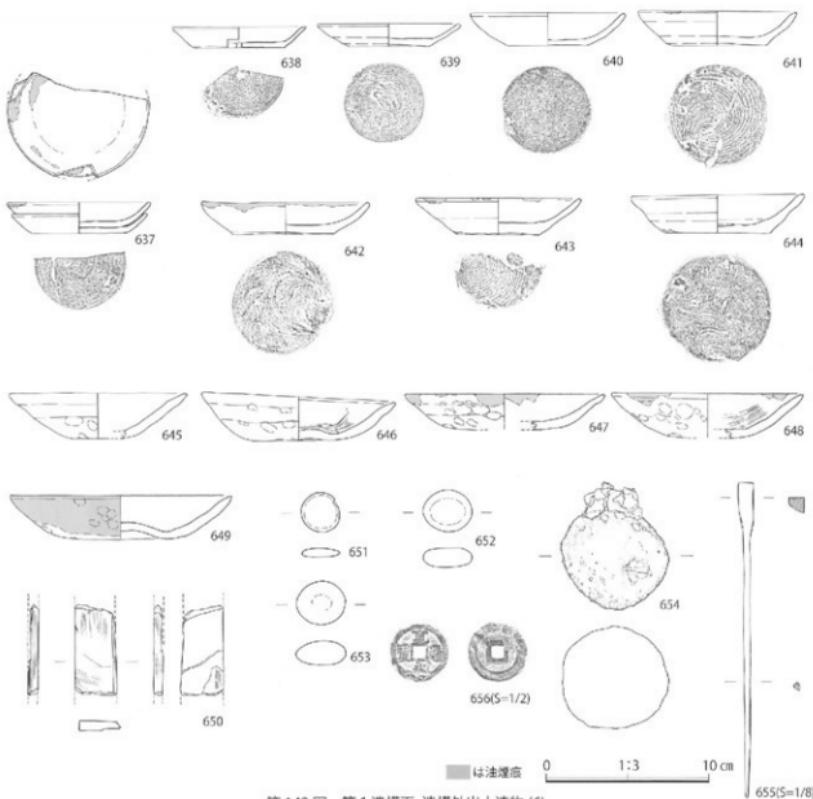
土師器皿

637～656は土師器皿、石製品、鉄製品、銭貨、木製品である。637～644は口クロ成形の土師器皿である。637は2枚が油煙痕で接着した状態で出土した。どちらも口径約8cm台の小皿で、上側の皿から下側の皿に油が垂れて固着している。638は口径8cm台の小皿で底部に穿孔があるものである。639は口径8cm台の小皿で、やや器高が低いものである。640

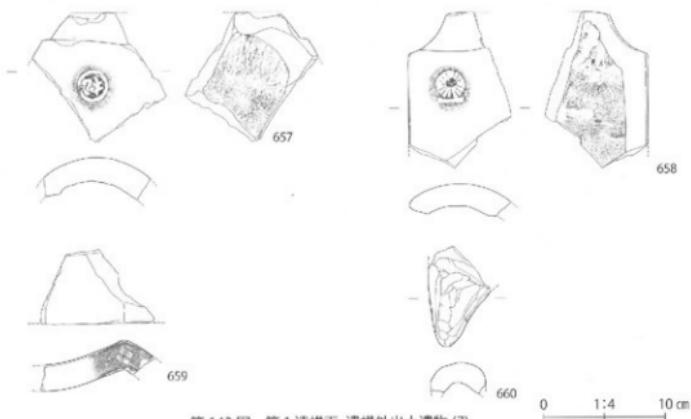


第141図 第1遺構面 遺構外出土遺物(5)

は口径9cm台の小皿である。641も口径9cm台の小皿で、口縁部に油煙痕が残るものである。642～644は口径10cm台の小皿で、642・643は口縁部に油煙痕が残る。645～649は手づくね成形の土師器皿である。645は中皿である。646も中皿で、内面に「の」字状のナデ上げ調整痕が残る。647は中皿で、口縁部に油煙痕が残るものである。648は中皿で、口縁部に油煙痕が残り、内面に「の」字状のナデ上げ調整の痕跡も見られる。649は中皿で、底部が上げ底に成形されるもので、油煙痕が外面の広範囲に残る。650は砥石で、キメの細かい石材で薄い製品であるため、仕上げ砥として使用された可能性が考えられる。651・652は碁石で、黒石として使用されたものと思われる。653も碁石で、白石として使用されたものと思われる。654は直径約6cmの鉄球で、南屋敷の第1遺構面で出土した祈祷具に使用されている鉄球と似ており、これも祈祷具の一種である可能性が考えられる。655は用途不明の木製品である。656は銭貨で、「寛永通宝」の中でもいわゆる「古寛永」と呼ばれ、1636～1659年に鋳造されたものである。



第142図 第1遺構面 遺構外出土遺物(6)



第143図 第1連構面 遺構外出土遺物(7)

瓦

657～660は瓦である。657は丸瓦で外面に「松」のスタンプが押されている。658も丸瓦で、外面に菊花文の下に横線が入るスタンプが押されており、内面調整はコビキBである。659は棟瓦で、頭側に菱四つ目文のスタンプが押されている。660は鬼瓦の牙の部分と思われる。

第3節 第2遺構面(第144図)

第2遺構面の概要 第2遺構面は第1遺構面同様に近代の擾乱が広く及んでいたものの、調査区東側で扇跡SN01を検出することができた。これを基本にして第2遺構面の形成土を認識し、掘り下げを進めたが、この形成土は途中で擾乱により失われ、第3遺構面のやや上層でいくつかの遺構を検出することができた。

これらの遺構からは遺物の出土はありませんらず、唯一陶磁器などがまとまった形で出土した遺構は廐棄土坑SK18のみであった。しかし、SK18も上坑の上面が第1遺構面SK16の削平を受けており、本来の掘り込み面は不明であるが、出土した陶磁器の年代が17世紀中頃から18世紀代を示すことから、第1遺構面と第3遺構面に伴う陶磁器の年代の間を埋めるものとして、第2遺構面の年代と相違ないものと判断した。

また第2遺構面では検出した遺構から、空間配列について若干の想定をすることが可能であつた。

調査区の南側は擾乱によりどういった空間であったか不明であるが、その北側に建物を隣てる塙SA01・02、おそらくその建物に付随したであろう便槽SK20・21、その東側に島SN01、これらの空間を別けるための塙SA03・04、廐棄土坑SK18といったもののが想定できた。

この他、調査区の南側で南屋敷との境を示す石積の屋敷境溝SD01を検出した。

SN01：島跡(第144図)

調査区の東側で南北に延びる溝3本、東西に延びる溝9本を検出した。それぞれの溝は平行に等間隔で並ぶため、溝の歓間と推定した。土層断面の観察により、畠立ての作土は、第1遺構面造成以前、あるいは造成時にほとんどが失われていることが分かっている。東西に延びる溝は、残存幅が約20cm～40cm、残存深が約10cmである。南北に延びる溝は、残存幅が約40cm～60cm、残存深が約20cmを測り、東西溝に比べて幅も広く、深いことから、島とそれ以外の空間を別ける溝であったと思われる。

島跡については、畠立ての部分の土壌を採取し分析を行った。詳しくは第8章で述べられるが、分析結果では、種子、花粉化石が検出され、栽培の可能性が高いものとして、ヒコ、コハコベ・ミドリハコベ、ナス、キュウリが挙げられている。その他、栽培の可能性は低いが種子あるいは花粉化石が少量検出されたアブラナ科、ソバ、ベニバナ、二次的にもたらされた可能性が高いイネ、サンエタデ節、オモダカ属が挙げられている。

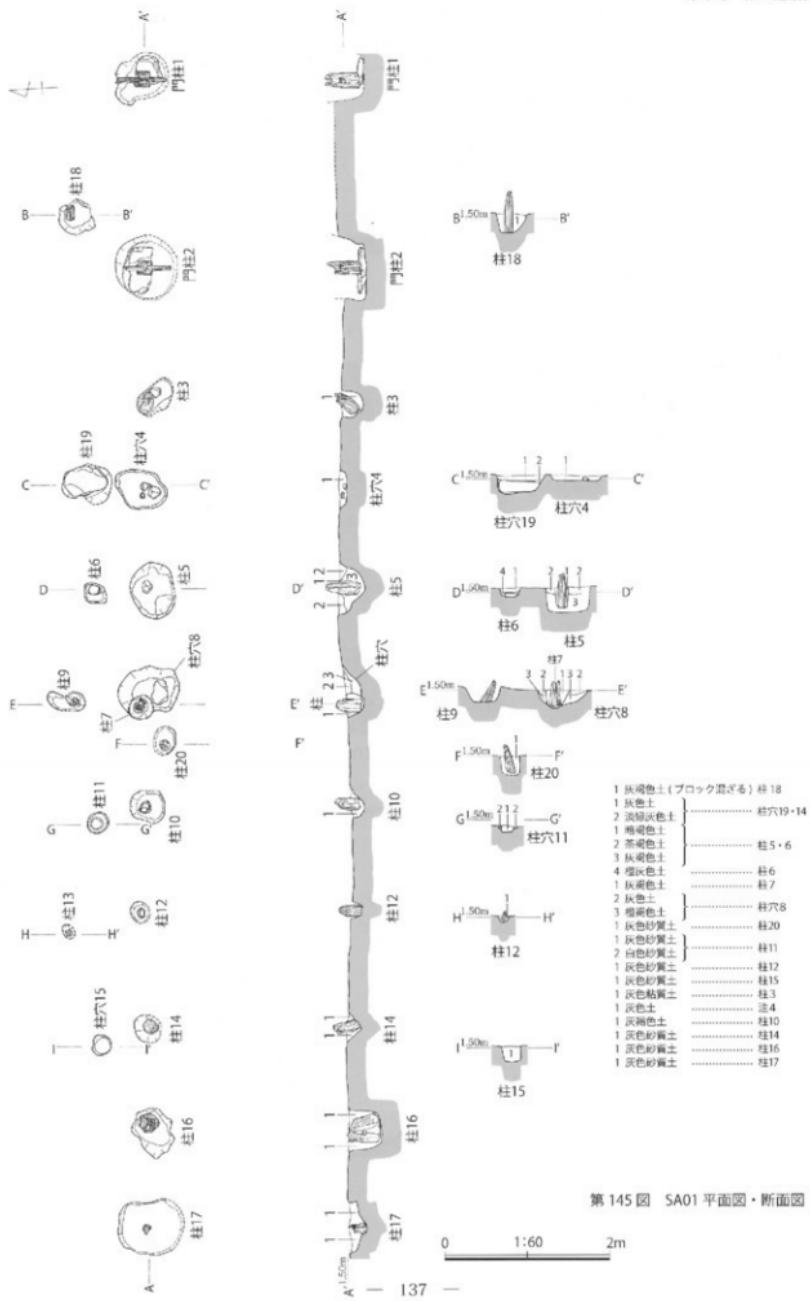
SA01：塙跡(第145図)

調査区の中央に位置する東西に長い柱列である。削平を受けているため第3遺構面に近いレベルで検出したが、門柱1の掘り込まれた層位から、第2遺構面のものであることが分かった。このことから、直線状に並ぶ門柱1～柱19と柱21～23(第147図)、それと直角に並ぶSA02：杭列(第148図)を同一遺構面のものと判断した。

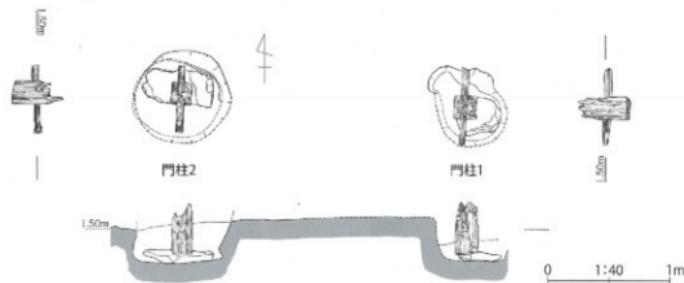
門柱1と門柱2は、SA01の東端に存在し(第146図)、門柱1は、上端直径約60cmの平面円形の土坑の底面に約35cm×約30cmの根石を置き、その上に根がらみをもつ1辺約15～16cmの角柱を据えている。門柱2は上端直径約80cmの平面不整円形の土坑の底面に約60cm×約25cmの根石を置き、その上にやはり根がらみをもつ1辺約15～16cmの角柱を据えている。上部の重みに耐えられるように、下部構造が丁寧につくられていると思われることから、



第 144 図 第 2 遺構面 全体図



第145図 SA01平面図・断面図

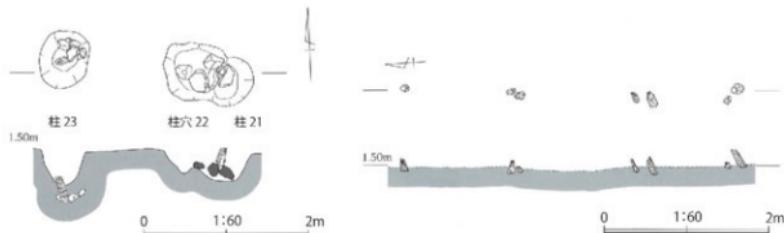


第146図 SA01(門柱1・門柱2)平面図・断面図

門柱と判断した。^[10] その他の柱は、直徑約15cm程度の丸柱で、皮が付いたままの状態で使用されているものが多い。一部、角状に加工されたもの(柱18)も見られる。柱16は直徑約25cmと他の杭より太い。門柱1、門柱2の直線上に並ばないもので、柱または柱穴が小規模のもの(柱6、柱9、柱穴11、柱13、柱穴15)は、塀の支えとして使用されていたものと思われる。柱18は性格不明である。

柱21～23はSA01の西端に位置する柱列(第147図)で、柱21と柱23はいずれも下端を斜めに加工する丸柱で、根石で支えられている。柱穴22は、やや北位に方向がずれている。
SA02：杭列(第148図)

SA02 調査区の西側で検出したSA01に直角に交わる杭列で、約10cm弱の細い杭が使用されている。杭の上部は、削平のためか同じような高さで欠損している。



第147図 SA01(柱21～23)平面図・断面図



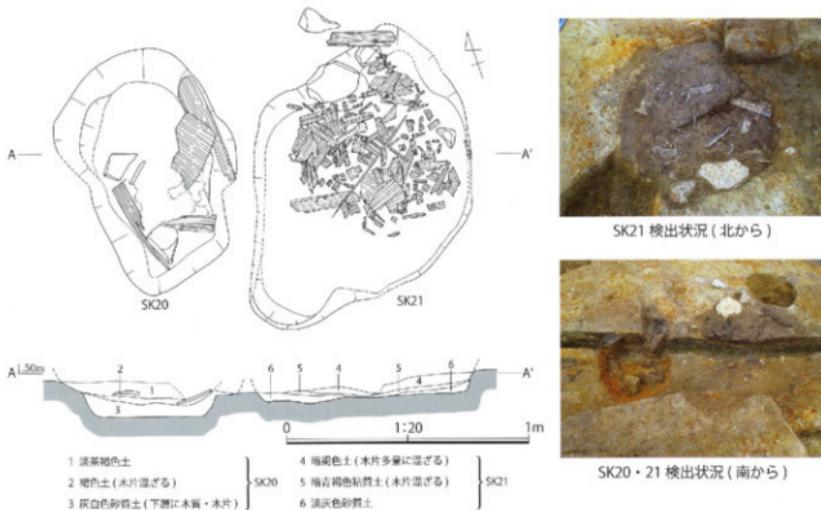
門柱1・門柱2検出状況(北西から)

SA01・02の北側に建物の痕跡を見つけることができなかったものの、柱や杭がL字状に区画するように存在すること、門柱を伴うことから考えて、この遺構の北側に建物が存在した可能性は高いと思われる。その場合、SA01・02がこの建物を区画する門を備えた塀であったと考えられる。

SK20・21：便槽（第149図）

SK20・21 調査区の北西側で検出した2基の土坑である。検出したのは第4遺構面付近であったが、この遺構付近の土層断面の記録により、第2遺構面から掘り込まれたものであることが判明した。しかしながら、この付近の第2遺構面の形成土が近世の削平によりわずかに残っていたため、本来はもっと深い土坑であったと思われる。検出面での遺構の規模は、SK20が上端約1.0m×約0.7m、深さ0.15mの平面楕円形の土坑で、土坑内に木片が多く廃棄されている。この土坑からは瓦も出土している。SK21は上端約1.3m×約1.0m、深さ約0.2mの平面楕円形の土坑である。この土坑内にも木片が多量に廃棄されており、土坑の縁辺で石を検出している。木片と一緒に廃棄されたものであろうか。これらの土坑が並ぶことと、木片を多く含んだやや粘質の土が検出されたため、念のため土壤サンプルを探取した。詳しくは第8章で述べられるが、分析の結果、兩土坑から多量の寄生虫卵が検出され、これらの遺構が便槽であることが判明した。検出された寄生虫卵は、回虫、鞭虫、肝吸虫、異形吸虫類で、おそらく食した野菜、魚などから寄生したものと解釈されている。

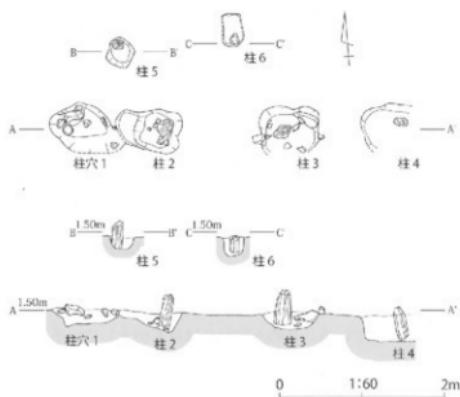
この便槽はSA01・02に区画された建物に付随するものと想定している。



第149図 SK20・21 平面図・断面図

SA03 : 堀跡(第150図)

調査区の北東側で検出した柱列である。柱穴1は長径約90cmの平面椭円形土坑に、柱は失われているが根固めに使用されたであろう石がいくつか検出された。柱2に切られているため、柱2造作時に柱が抜き取られた可能性も考えられる。柱2は長径約80cmの浅い平面椭円形土坑に柱を伴うもので、下端が斜めに削られた直径12cmの丸柱の下部には石を置いて根固めしている。柱3も1辺約70cmの



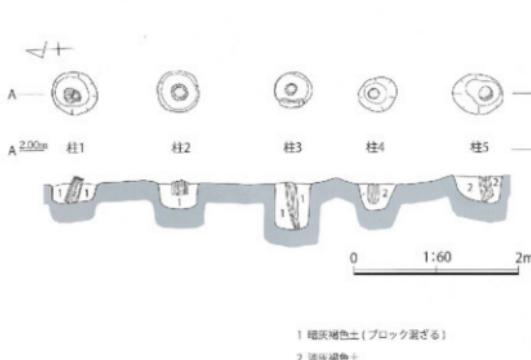
第150図 SA03 平面図・断面図

開丸方形土坑に、直径約16cmの丸柱を作らうもので、柱の下端は平らに加工してある。埋土に小石がいくつか含まれるが根固めとして機能していたかは不明である。柱4はやや深い土坑に直径約13cmの丸柱を作らうもので、柱の下端が鈍角に削られており、土坑の中から根固め石は確認されなかった。柱5は直径約35cmの平面不整円形の土坑に、直径約18cmの丸柱を作らうもので、柱の下端部はやや尖っている。柱6は長径約40cmの土坑に、直径約11cmの丸柱を作り、柱の下端は3方向から鈍角に削られている。柱穴1・柱2・柱3は、土坑の深さと根固め石を同一に作らうことなどから、関連性はありそうである。また、柱2と柱3・柱4の間は約1.5mで、柱4は土坑が深く根固め石を伴わないが、柱の間隔においては関連性があると言える。さらに、柱5・柱6は土坑の深さはほぼ同じで、柱の間隔は約1.5mである。柱穴1・柱2～柱4とは並びが北へずれるため、これらの遺構とともに存在した可能性は低い。以上のことから、これらの遺構すべてが同一の建物に関係するとは言い難く、時期差なくつくりかえられたものではないかと推測する。

この遺構の北側は遺構の残存状況が悪く、どういった空間があったかは不明であるが、南側には畠が存在し、おそらくこの柱列が畠との空間を別けるための堀であった可能性を考えられる。

SA04 : 堀跡(第151図)

調査区の西側で検出した柱列である。近代の削平のため、柱の上部は失われている。柱1は南側に傾いた状態で検出され、直径約20cmの丸柱で、柱の下端部は2方向からの削りを施し鈍角に仕上げる。柱2は土坑の下端と柱の下端が接地しない状態で検出されている。柱は直径約15cmの丸柱で、下端部は削りの痕跡があるようだが明確には分からぬ。柱3は土坑の上部内面に石が貼りついた状態で検出された。柱は直径約14cmの丸柱で、下端に向ってやや先細りするものである。柱4は直径約14cmの丸柱で、土坑の下端とは接地しない状態で検出された。柱の下端は平らに加工している。柱5は柱が北側に傾いた状態で検出された。直径約15cmの丸柱で、下端部は斜めに加工してある。これらの柱は使用される木材の長さや加工の方法に均一性が認められず、間隔も不規則であることから、堀跡と判断した。おそらくこ



第151図 SA04 平面図・断面図



SA04 検出状況(北から)

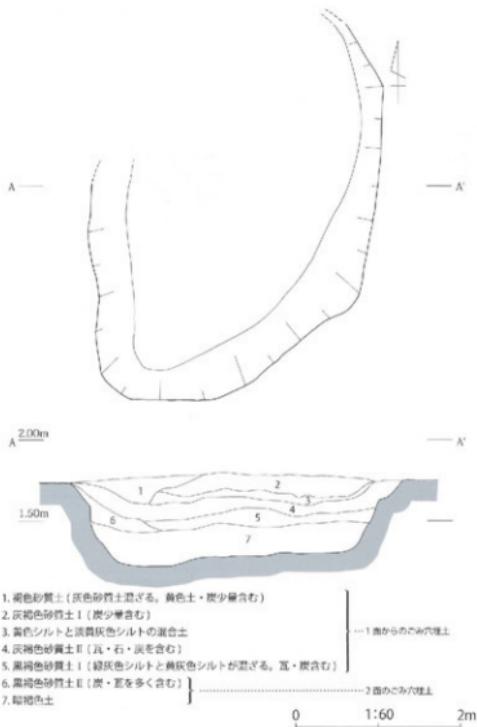
の辺を境にして東側と西側とに空間を
別けるためのものと思われる。

SK18：廃棄土坑(第152図)

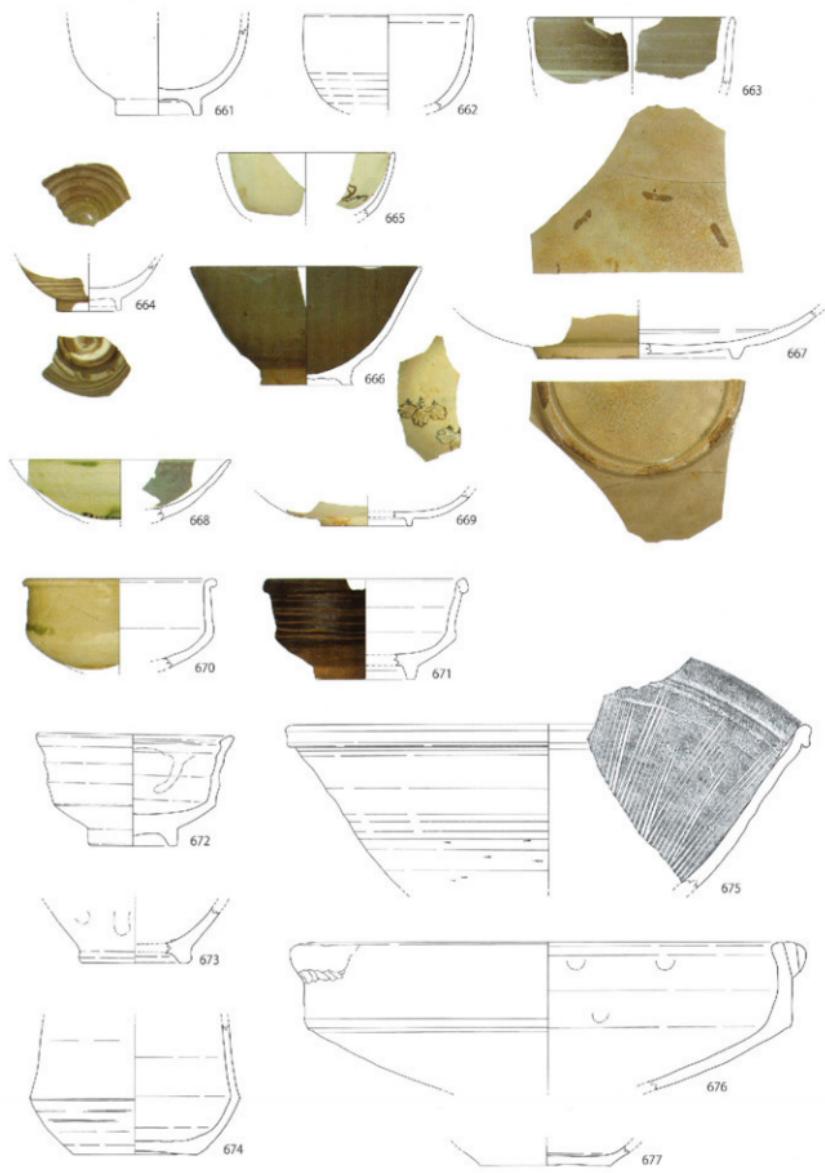
調査区に西端で検出した廃棄土坑で、一部が調査区外にあたるため全掘はしていない。前述のとおり、この遺構は上層から廃棄土坑 SK16 が掘り込まれており、本来の遺構面は不明である。検出面での大きさは、上端 5.0 m × 3.5 m、深さ約 0.8 m の平面楕円形を呈し、この中に陶磁器、木製品が廃棄されていた。陶磁器は 17 世紀中頃～18 世紀代にかけての遺物が出土しており、17 世紀末～18 世紀代の遺物の割合が比較的多い。この他、貝類(テングニシの蓋)、獸骨(ニホンジカの肩甲骨、中手骨、中足骨)が出土している。

SK18 出土物(第153～156図)

661～677 は国産陶器、土器である。661 は肥前陶器の呉器手碗である。662 は肥前陶器碗である。663・664 も肥前陶器の碗で、内外面に刷毛目塗りが施されるものである。665 は肥前陶器の碗と思われ、内面に鉄絵が描かれている。666 は肥前陶器の碗で、口



第152図 SK18 平面図・断面図



第153図 SK18出土遺物(1)

0 1:3 10 cm



第154図 SK18出土遺物(2)

0 1:3 10 cm

縁部に向かって「ハ」字状に開くものである。667は肥前陶器の大皿で、乳白色の釉薬が全面に施釉されており、内面の見込部と高台部に砂目が残るものである。同様のものが第1選構面でも出土している。668は肥前陶器の皿で、内面に銅錆釉が掛けられ、見込部分に蛇の目釉剥ぎを施すものである。669は京都・信楽系と思われる皿で、内面見込部に花文が描かれている。670は肥前の京焼風陶器で香炉である。671も肥前陶器の香炉である。672は緑釉の布志名の香炉である。673は肥前陶器の瓶である。674は产地不明のペコカン形の瓶である。675は須佐の搗鉢である。676は土器の炻器で、口縁上端部に紐を取り付けるための穿孔が施される。677は上器で、焼成の底部と思われる。

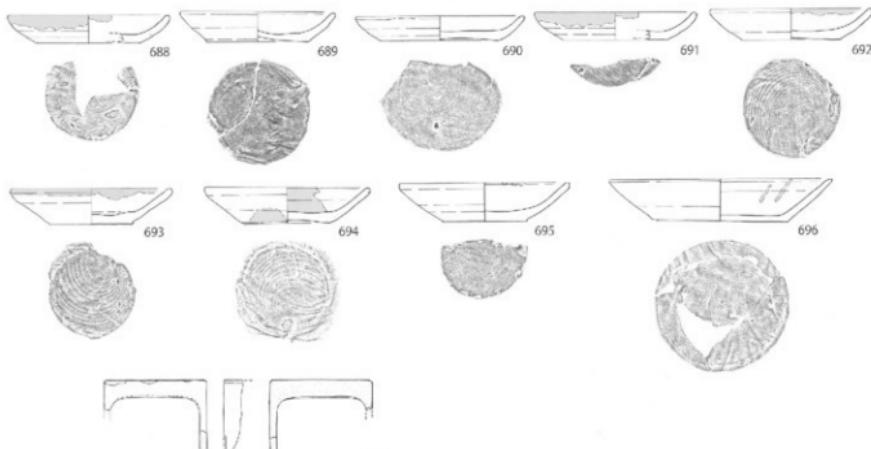
国産磁器 678～687は国産磁器である。678・679は肥前磁器の小碗である。680は肥前磁器の型打ちによる陽刻を施した白磁である。681は肥前磁器の白磁碗である。682は肥前磁器の陶瓶染付碗である。683は波佐見の五寸皿で、いわゆる「くらわんか手」と呼ばれるものである。684は肥前磁器の皿で、コンニャク印判が施されるものである。685は肥前磁器の皿で、口銷が施されるものである。686は肥前磁器の大皿である。687は肥前磁器の人鉢である。

土師器皿 688～702は土師器皿、石製品、漆椀、墨書き木簡である。688～696はすべてロクロ成形の土師器皿である。688と689は口径9cm台の小皿である。690も口径10cm台の小皿であるが、口径に対してやや器高が低いものである。691～695は口径10cm台の小皿で油煙痕が残るものである。696は口径13cm台の中皿で、2条の灯明芯の痕跡が残るものである。

**石製品
漆椀** 697は硯で、台部が欠損している。698は抵石で、キメの細かい材質で薄い製品であるため、仕上げ砥の可能性が考えられる。699は漆椀で外面は黒、内面は赤に漆塗りが施され、外面に銀丸に葉脈などが省略化された「丸二抱半格」文が描かれている。700は墨書きの木材で、片側が欠損しているものの墨書きが比較的良好に残っていた。片面には、左上から「一十八通、一十二通、一十六通、下に「三口メ 三拾六通」と読める。この裏面にも墨書きがあり、文字の方向が長辺側から書かれているようで、中央辺に「升」という文字だけ解読できた。701も墨書きの木材で、両面に墨書きが書かれており、片面に「遊花」、もう片面に「上」と読める。702は墨書き木簡で、片面に墨書きが確認できた。上端が欠損しており、その下に「御定 松次郎」と読める。

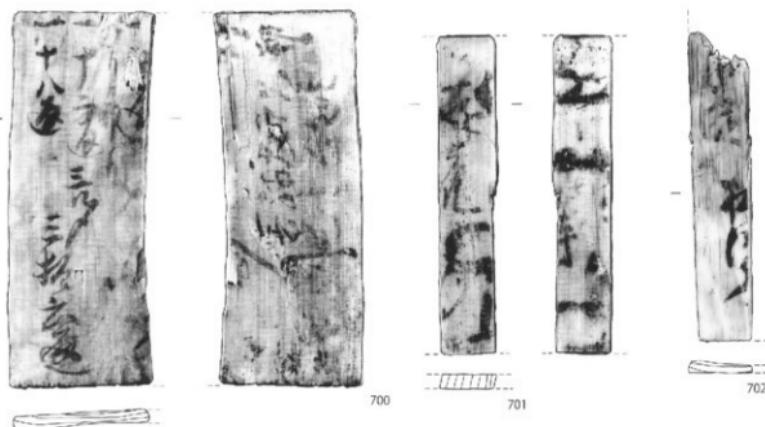
木製品 703～712は木製品である。703は丸型の差込下駄で、歯は失われており、側面に黒漆が残っている。704は丸型の差込下駄で、黒漆が塗られている。705は角型の差込下駄で、歯は失われていたが鉄釘で留めていた痕跡が残っている。706は用途不明の容器形の木製品である。707は曲物の蓋板か底板で、面上に円孔が1ヶ所開けられており、側面には目釘が3ヶ所打たれている。708は曲物の蓋板と思われ、面上に円孔が1ヶ所設けられている。709は箱物の側板と思われ、両端を凸状に加工しており、そこに目釘が打たれていたようである。また、下端部にも目釘穴が3ヶ所開けられており、底板と接合していたものと思われる。710～712は白木の筈である。710は、一端を平らに加工するもので、もう一端はやや先細りさせる比較的短いものである。711は両端が平らに加工されるものである。712は両端とも尖らせたもので、比較的長いものである。

第3節 第2選構面



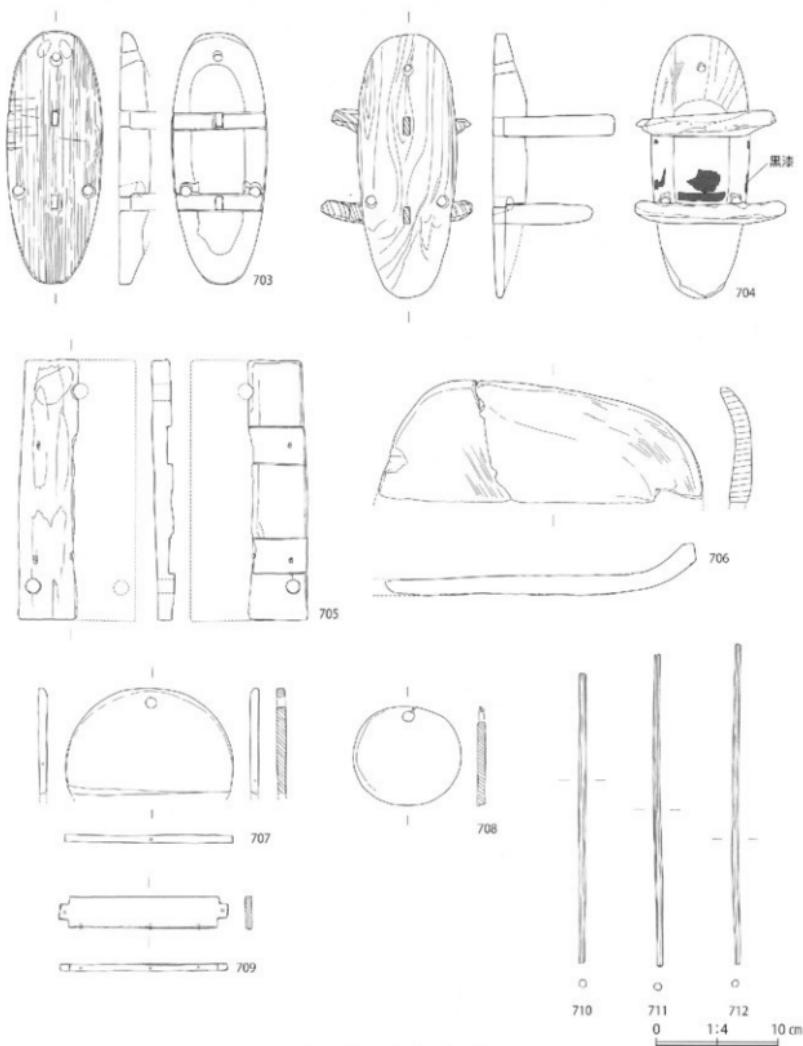
■は油漬痕

0 1:3 10 cm



第155図 SK18出土遺物(3)

0 1:2 5 cm



第156図 SK18出土遺物(4)

この他、用途不明の上坑がいくつも集まる空間が存在する。1つめはSA01の北東に存在する土坑群で、直線的に並ぶ部分も見受けられるものの施設を想定することまではできなかつた。2つめは調査区南側に点在する土坑群であるが、第3遺構面ではこの下にひょうたん型の池SG02が存在しており、この池を埋めて何らかの施設をつくったものと思われるが、後世の削平により実態は不明である。3つめは屋敷境の東側に存在する土坑群で、この西側にある屋敷境を示す石積が終息しており、あるいはこの石積から西側は塀が使用されたことも考えられ、この土坑群が塀に関係する柱穴かもしれない。

また、屋敷境の西側で、北側に延びる2本の石積溝が確認されており、この溝の北側に何らかの施設が存在し、それに付随するものと思われる。

さらに調査区に西側でも用途不明の上坑SK19を検出しており、この遺構から陶器碗が1点出土している。

SK19 SK19：上坑出土遺物（第157図）

国産陶器 713は産地不明の陶器碗であるが、肥前陶器の可能性も考えられる。

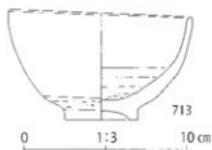
第2遺構面遺構外出土遺物（第158～160図）

以下は、第2遺構面の包含層から出土したものである。

国産陶磁器 714～725は国産の陶磁器である。714は肥前陶器の小鉢である。715は産地不明の陶器碗で、外面に鉄絵が描かれる。716は布志名焼の陶器碗で、松江ではいわゆる「ぼてぼて茶碗」と呼ばれる器形のものである。717は産地不明の陶器碗で、高台内に墨書がある。718は産地不明の陶器の行平鍋の蓋である。719は肥前陶器の絵唐津と呼ばれる鉄釉で内面に草花文などが描かれるものである。720は再興九谷の磁器鉢である。721は陶器の瓶で、「白渕本町秦酒店」と描かれている。722は産地不明の陶器の土瓶である。723は京都・信楽系の陶器製十瓶である。724は肥前陶器の甕と思われ、外面胴部に一条の刻目突沿が残り、内面調整は同心円状のタタキが施される。725は産地不明の陶器の灯明受皿で、油受けの部分が深く筒状になるものである。

土器 726～742は土器である。726はミニチュアの小鉢である。727は焼塩壺の蓋で、内面に型押し時に付いたと思われる布目痕が残る。728は七厘のさなであろうか。729は壺あるいは鉢と思われる。730は焙烙である。731は窯道具と思われる。732～734はロクロ成形の上部器皿で、中皿の口縁部に油煙痕が付着するものである。735は手づくね成形の十師器皿の中皿である。736は碁石で黒石として使用されたものと思われる。737の材質は玉髓の一種で、火打ち石の原材料の可能性がある。738は鉄釘で、断面方形を呈する。739は用途不明の鉛製品である。740は腰丸椀で、外面は黒、内面は赤の漆塗りが施されるもので、外面は赤絵で鶴丸文が3ヶ所描かれている。741は腰丸椀で、外面は黒、内面は赤の漆塗りが施されるものである。高台部が欠損し、腰部に約1cmに円孔が設けられていることから、この穴に柄を装着して、柄約に転用された可能性が高い。742は腰丸椀で、外面は黒、内面は赤の漆塗りが施され、外面には金泥状の塗料で「丸ニ三つ引き」文が描かれている。

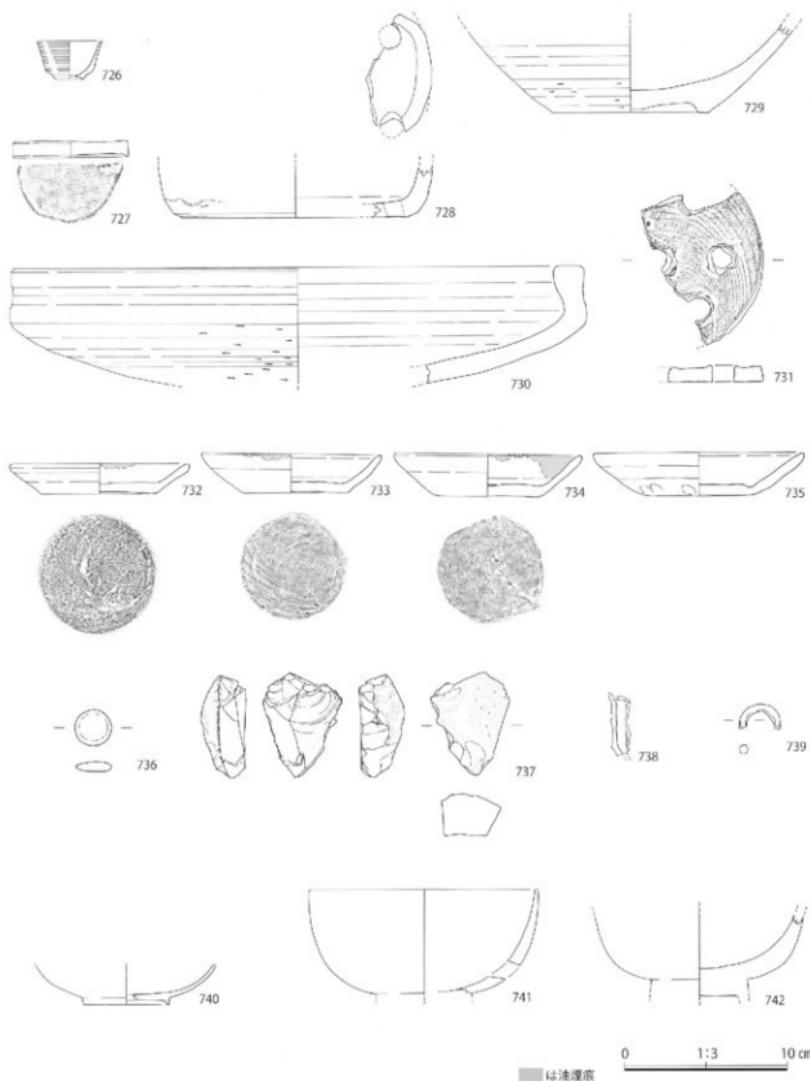
瓦 743～748は瓦である。743・744は軒丸瓦で、いずれも中心に三巴文、その周りに珠文が19個配されるもので圈線は



第157図 SK19出土遺物

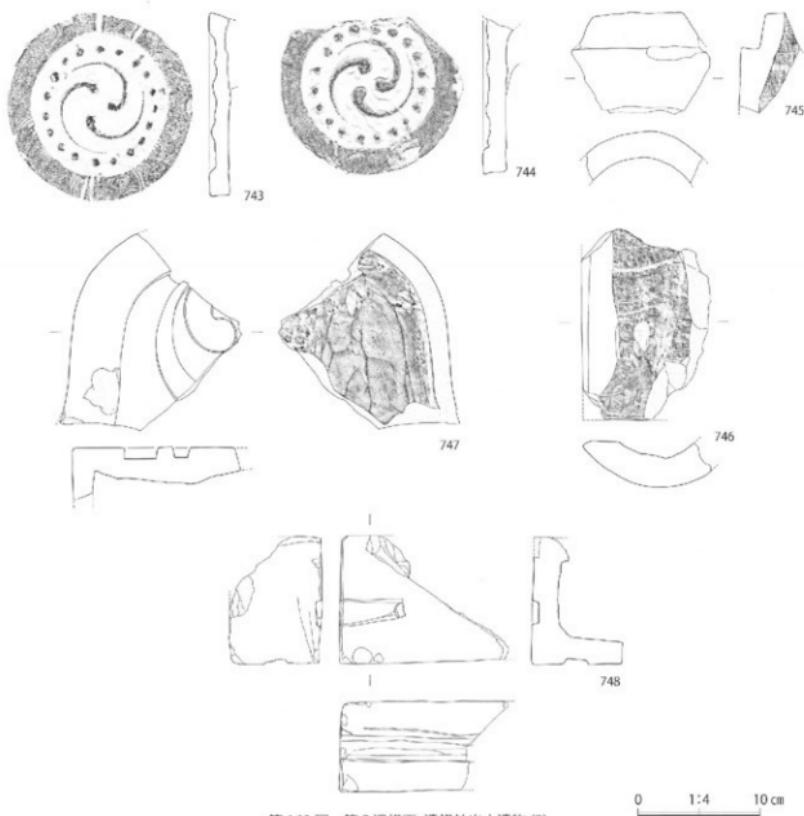


第158図 第2遺構面 遺構外出土遺物(1)



第159図 第2遺構面 遺構外出土遺物(2)

見られない。巴文は、頭部が右向き、尾部が左向きである。744の巴文のほうが743に比べて太くしっかりしている。745・746は丸瓦で、内面調整はコビキBである。747は鬼瓦の一部で、おそらく三巴文が配されるものと思われる。748は瓦で、鎌をはめるホゾ穴が設けられている。



第160図 第2遺構面 遺構外出土遺物(3)

第4節 第3遺構面(第161図)

第3遺構面の形成土は、厚さが約10～30cmで調査区のほぼ全体で確認することができた。

概要 第2遺構面の造成時に、第3遺構面に存在した施設を取り壊しているため、性格不明の遺構もあるものの、ひょうたん型の池SG02が見つかるなど、遺構の残存状況は比較的良好であった。なお、調査区南西側で第2遺構面の形成土を除去したところ、池SG03を検出した。しかし、第3遺構面以下のこの部分は調査対象外にあたるため、遺構の性格を把握するための追加調査という形で部分的な調査にとどまっている。これらの検出した遺構により、空間配置を推定することができた。

調査区南側に遺水SD01で繋がった池が2基SG01・02、それらを鑑賞するための建物2棟SB01・02があり、これらの建物には石積溝SD03・02が付属する。SB01の北西側には廐窯十坑SK23を伴う空闊地が存在したと思われる。また、SB02の北東側に礎敷、礎石群SS01～03が検出され、この周辺に建物が存在したと思われる。また、SG01とSG02の西側にも池SG03が存在し、SG03は塀SA05・06で空間分けがされている。

この他、調査区南端で屋敷境を示す石積の屋敷境溝SD01が存在する。

また、SK23からは陶磁器、上部器皿、木製品などが出土しており、中でも「佐々九郎兵衛」名の墨書き木筒が出土していることは注目される。この「佐々」の住んでいた年代と第3遺構面から出土した陶磁器の年代から、この遺構面が17世紀前半～中期にあたるものと考えている。

SG01：池(第162図)

SG01 調査区の南西側で検出した東西約3.4m×南北約4.6m、深さ約0.8mの平面方形の素掘りの上坑の中に、大海崎石の割石を方形に積み上げたもので、第3遺構面の形成上がこの上坑をよけて整地されていたことから、第4遺構面から引き続いて存在していたものと考えている。基底部の石は、比較的大きく、内側の面を丁寧に加工してあり、上面までこのような石が積み上げられていたと思われるが、部分的に抜き取られてしまっている。遺構の南東隅はSE04(第1遺構面検出の井戸)に、北東側は近代以降の井戸によって壊されている。底面は南に向かって傾斜しており、一部割石を貼っていないところもあった。この割石の空白部分の精查断ち削りを行ったが、地下構造は見つかっていない。また、この石積の東側には人形の割石が2つ立て並べられており、さらに東側に存在するひょうたん型の池SG02と遺水SD01で繋がっていることが判明した。これらのことから、SG01も小型の池と判断した。

SG01 山上遺物(第163図)

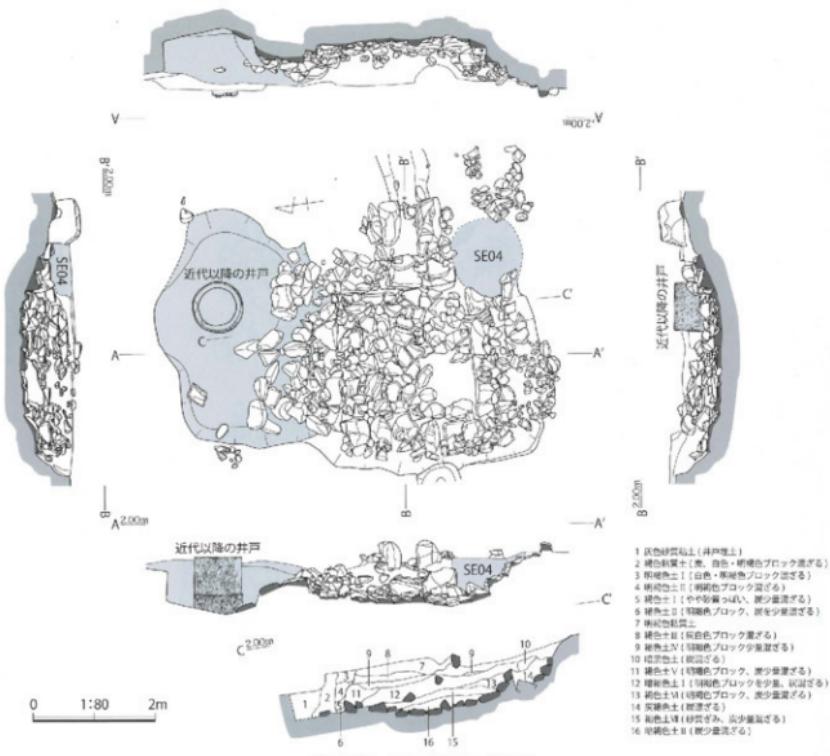
木製品 埼土から用途不明木製品749が出土している。その他、細片のため掲載はしていないが、初期伊万里と思われる磁器碗の細片も1片出土している。

SG02：池(第164～165図)

SG02 調査区の南側で検出した東西約13.5m×南北約7.0mの平面ひょうたん型の池で、深さは約0.9～1.2mを測り、池の西側が浅く東側にむけてしまいに深くなっている。また、池の東側には近代以降に設置された来往石製の井戸枠が残っていた。SG01と同様に第3遺構面の形成土がこの土坑をよけて整地されていたことから、第4遺構面から引き続いて存在している。池の北岸に使用されていたであろう護岸用の石は、大部分が抜き取られているものの、池の北西側と南東側には、大海崎石の大形の割石を貼り付け壁面を成形している状況が確認でき



第 161 図 第 3 遺構面 全体図

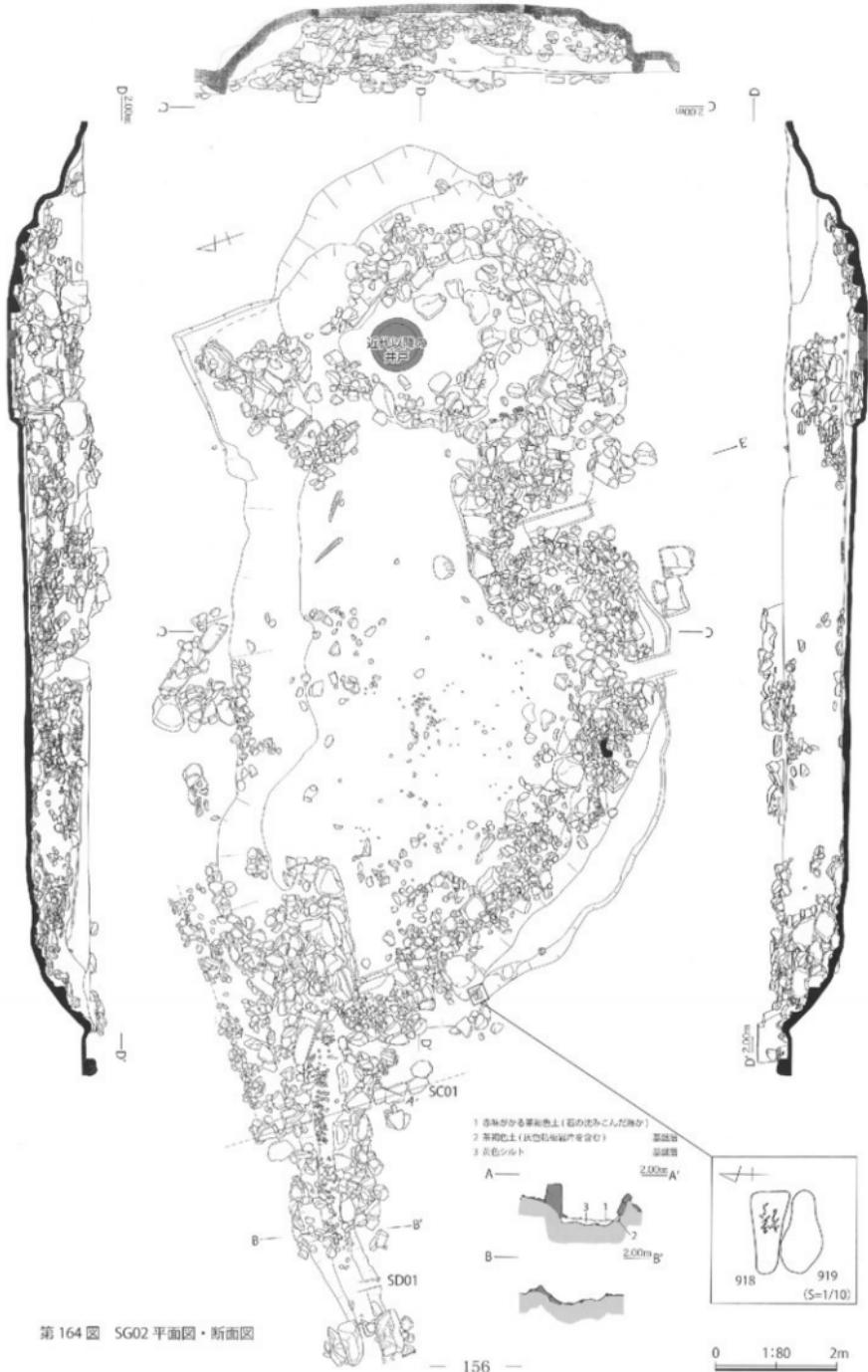


第162図 SG01平面図・断面図

第163図
SG01出土遺物
(S=1/4)

や矢穴が残るものがあり、このような石材は松江城の石垣にも使用されている。その他、南西側の岸辺には、墨書のある石が2つ並んだ状態で据えてあった。北西側においては、大海崎石の割石を使用した立石が1つ設置しており、先述のとおり造水SD01でSG01とつながって

た。さらに中央のくびれ部分は拳大の河原石で緩やかな傾斜を持つ護岸が設けられていることが判明した。また、南東部の割石がくずれないように3本の杭で押さえているところが認められた。使用された大海崎の割石の中には、扇紋の刻印が穿たれているものや、「一つ両引き」紋の墨書き



第164図 SG02 平面図・断面図



第165図 SG02 土層断面図



SG01断面状況(西から)



墨書き石検出状況(東から)



「一つ両引き」紋が書かれた石材(東から)



SG02検出状況(俯瞰)

いた。立石には本来、対になる石がもう1つあったと思われるが、失われている。残っている立石は、上部の一端に段状の加工がしてあり、何らかの設備が施してあった可能性がある。池の底面には黒色系のものを中心とした玉砂利が敷いてあった。また、詳細は第8章で説明されるが、池底部の一部を土壤分析にかけたところ、ガマ属、ミクリ属、オモダカ属、ヒシ属、アリノトウグサ科が検出され、池内に生育していた可能性があることが分かり、池内に水が溜まっていたことも判明している。

なお、池の南側には遺構の痕跡が確認できず、この部分に築山が存在したかもしれない。

SD01：造水 (第164図)

SD01 調査区の中央やや西側で検出したSG01とSG02を繋ぐ石積溝である。2つの池との接続部にそれぞれ立石が設置されており、その間に人頭大の石で石列をつくり、その内側に玉砂利が敷かれていた。造水の底面に傾斜は認められず、SG01とSG02のどちらに水が流れていた

かは定かではないが、SG02側の立石には、段状の加工が施されているため、懸樋のようなものでSG01からSG02に水を引いていたかもしれない。

墨書き

墨書き 遺水SD01の先にあたる滝口付近の岸辺に、ばち形の石が2つ互い違いになるように置かれていた。詳しくは後述するが、北側の石(第166図752)の上面に「おつる」、「三久郎」と墨で書かれており、側面にも「○×」の墨書きがあるのが分かった。南側の石(第166図753)の上面には、墨書きは確認できなかったが、裏側に「三久郎」と書かれているようであった。この2つの石は、意図的に墨書きを表裏にして据えられたものと思われる。

SG02山上遺物(第166図)

**国産磁器
土師器皿
墨書き** 750は池の埋土の中層位から出土したもので、肥前磁器の小皿で17世紀中頃のものと思われる。751はロクロ成形の土師器皿で石積の裏込めから出土したものである。752はSG02の岸辺に据えられていた石である。石の上面に墨書きが確認でき、人名が2つ並んで書いてあるという指摘を受けた。⁽¹¹⁾左側が「おつる」、右側が「三久郎」と読めるとのことであった。石の側面には、「○×」と墨で書かれており、裏面は墨書きを確認できなかった。753もSG02の岸辺に752と並んで据えられていたもので、墨書きのある面を下にしてあった。752と異なり、扁平な大海崎石が使用されており、墨書きの内容は752の右側と同様に「三久郎」と書いてあるのではないか、という指摘を受けた。754はSG02の底面から出土した曲物の底板で、内外面に黒漆が塗られている。一部に側板が残り、片面にホゾ穴が3ヶ所設けられていることからこのホゾ穴に脚がつけられた可能性がある。921・922は軒丸瓦で、中心に桔梗文が配されるものである。同様の瓦が、屋敷境溝SD01の石垣の裏込めからも出土している。

SBO1・SD03：建物跡・石積溝(第167図)

SBO1・SD03 調査区の東側で検出した石積溝SD03を伴う建物跡で、1間約2.0mを測る南北4間あるいは5間×東西2間の建物が想定される。南北5間とした場合、南西端の礎石位置はSG02の中に入ってしまうが、この部分に浅い段が存在しており、柱あるいは礎石がこの部分に据えてあった可能性も考えられる。残存する礎石の下部には棟石が伴うが、礎石の多くが抜き取られており、棟石のみ残るもののがほとんどである。池を鑑賞するための茶室のような建物が想定される。なお、この建物跡の北側には石積溝SD03が存在している。石を2段に積み、深さ約30cmを測るもので、ところどころ石が抜き取られている。また、建物の東南側には、比較的浅いピットがいくつか並び、植栽の痕跡の可能性も考えられる。

さらに、SBO1の西側にも棟石を伴う土坑がいくつか存在し、あるいは後述する池に付随する渡り廊下SC01と繋がるものかもしれない。

SD03・SBO1出土遺物(第168図)

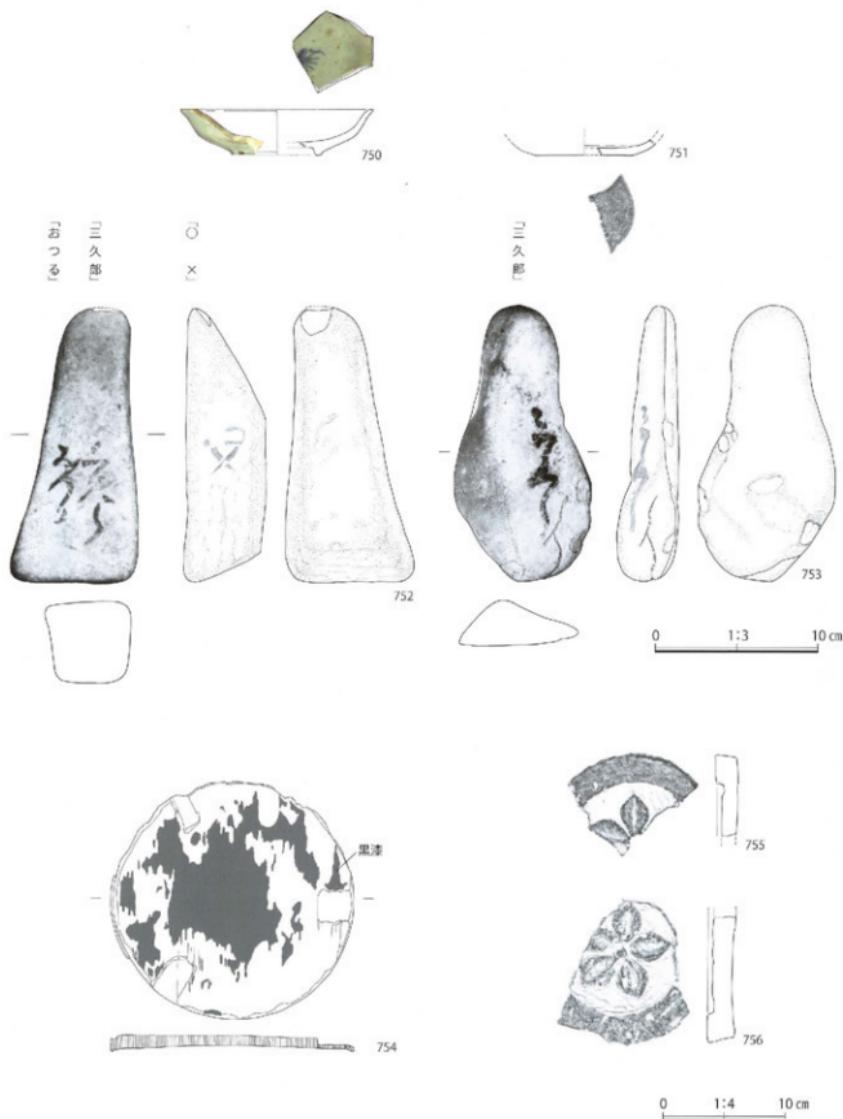
SD03・SBO1 757はSD03から出土した手づくねの土師器皿で、油煙痕が付着するため灯明皿として使用されたものと思われる。この他はSBO1から出土した遺物で、758は瀬戸・美濃系の天目碗である。759は丸瓦で、面に孔が開けられており、内面調整はコビキBである。

SK22：廃棄土坑(第167図)

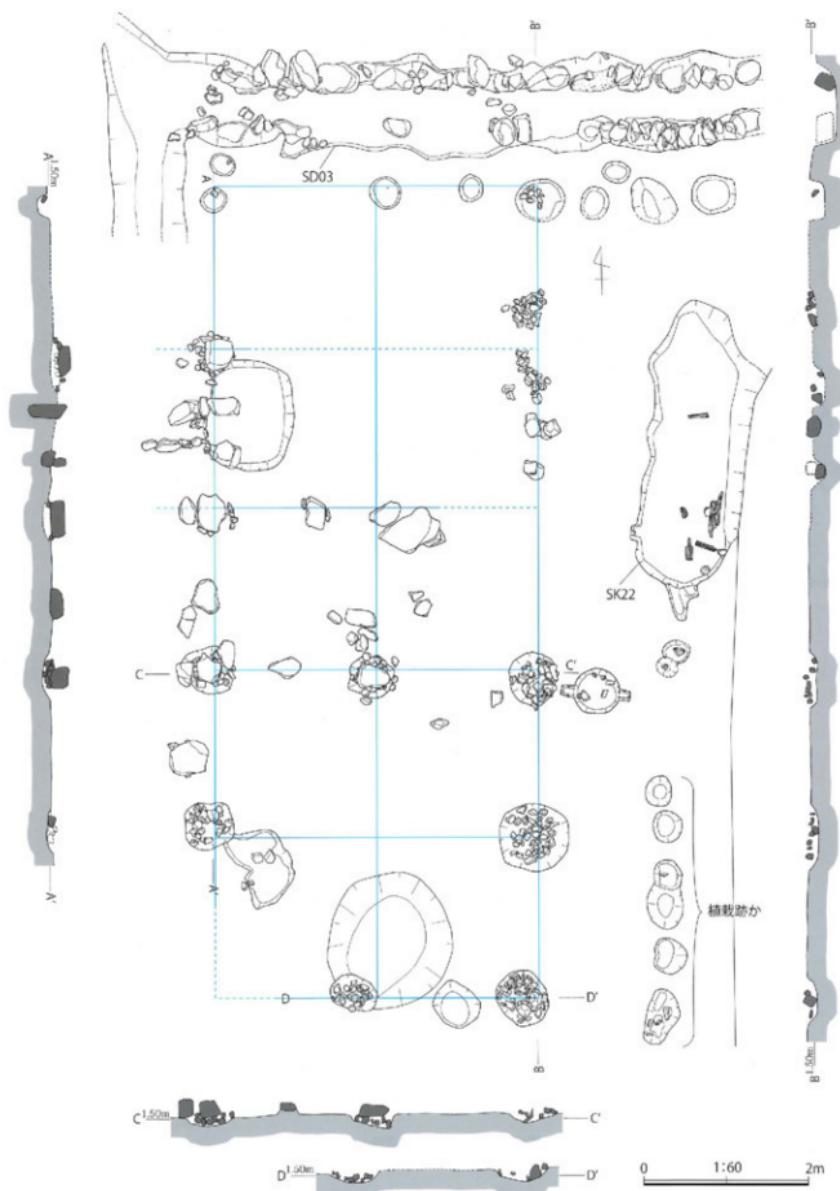
SK22 SBO1の西側で平面長楕円形を呈する廃棄土坑を検出した。これもSBO1に付随する植栽跡をゴミの廃棄に利用した可能性がある。

SK22山上遺物(第169図)

**土師器皿
国産磁器** 760は手づくねの土師器皿で、中皿で灯明として使用された痕跡がある。761は肥前陶器の大皿で、内面に鉄絵が施されている。762・763は軒丸瓦である。762は三巴文の周りに



第166図 SG02出土遺物



第167図 SB01・SD03 平面図・断面図



SB01 検出状況（東から）



SD03 検出状況（東から）

瓦 珠文が配されるものである。763は三巴文の外側に圓線を持ち、その周りに珠文が配されるもので、巴文の頭部は右向き、尾部は左向きである。764は碁石で、白石として使用されたと思われる。765～768は木製品である。765は栓である。766は曲物の底板で、面に綴り皮が残る。767は白木の箸である。768は用途不明の羽子板状の板で、羽部分の中心に孔があけられている。

SBO2：建物跡（第161図）

SB02 調査区の中央で検出した碁石の並びから、1間が約1.98mを測る礎石建物の存在を推定した。おそらくSG01・02を鑑賞するための規模の大きい建物の存在が想定されるが、遺構の残存状況が悪く想像の域を出るものではない。また、SD01をまたぐように存在する渡り廊下SC01と繋がっていた可能性も考えられる。

SB02出土遺物（第170図）

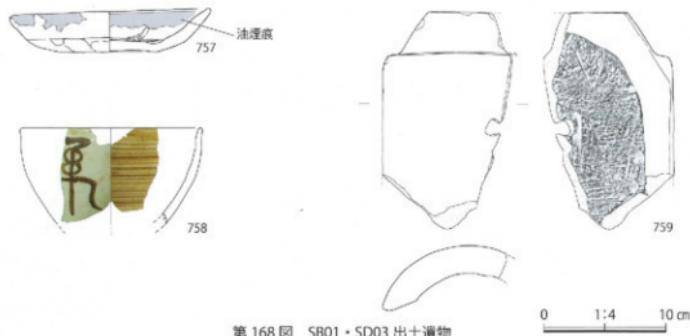
国産陶磁器 磚石建物の存在を推定する範囲から出土した遺物である。769は肥前陶器の皿で、内面見込み部に砂目が残るものである。770は肥前陶器の天目碗である。771は中国磁器の碗である。772は肥前陶器の皿で、内面に鉄絵が描かれるものである。773～775はロクロ成形の土師器皿である。773・774は小皿である。775は中皿で、油煙痕が残るものである。776～781は手づくねの土師器皿である。すべて中皿で、油煙痕が残るために明皿として使用されたものと思われる。782・783は木製のヘラである。

SC01：渡り廊下（第161図）

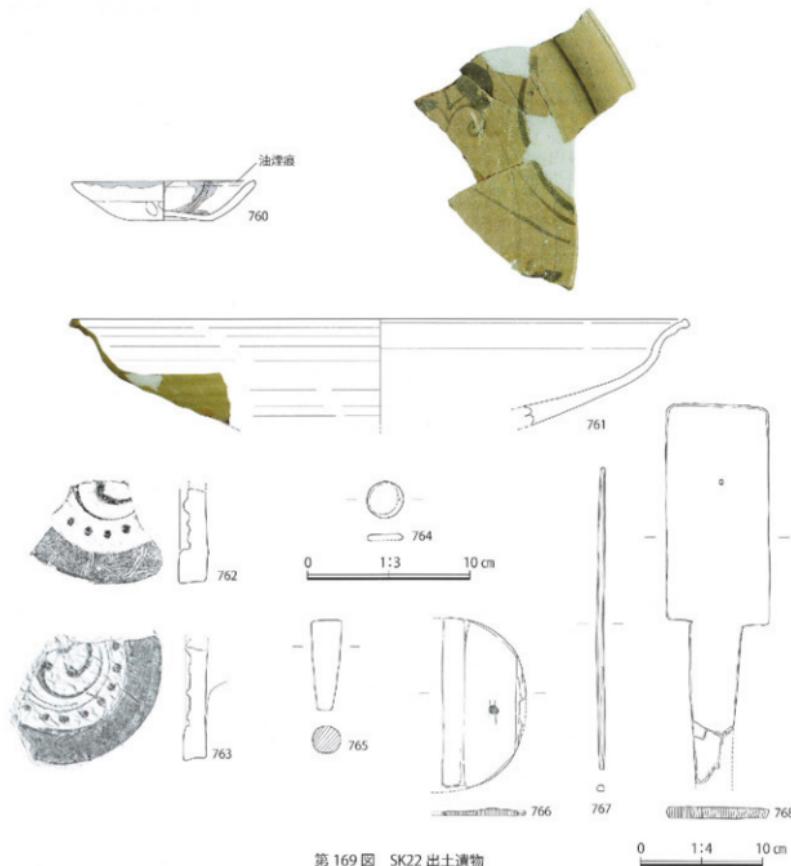
SC01 SG01とSG02とを繋ぐSD01をまたぐように存在する石積の石列で、第3遺構面の形成土とともに積み上げられていることから、第4遺構面から引き続き存在するものと考えている。おそらく、SBO2と繋がる渡り廊下として機能していたと思われる。また、石列と直交するようには拳大の石敷が伸びる部分が認められ、SBO1の西側に延びる栗石を伴う土坑と繋がるものであったかもしれない。

SD02：石積溝（第161図）

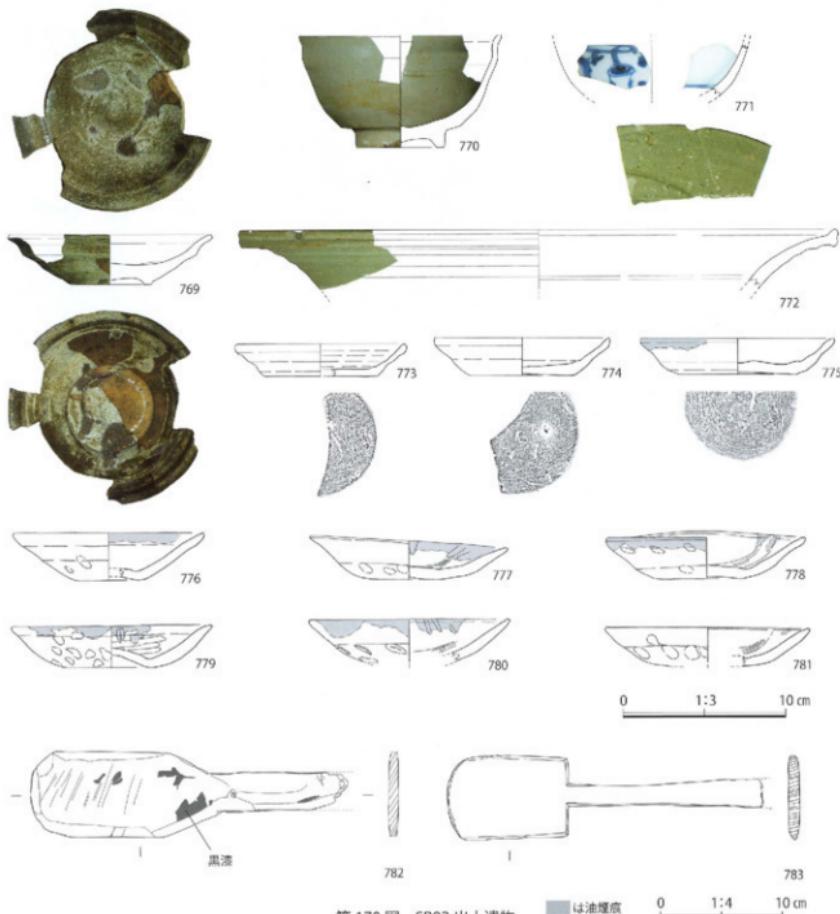
SD02 調査区の西側で検出した石積の溝である。部分的ではあるが、石積が第3遺構面の造成土



第168図 SB01 + SD03出土遺物



第169図 SK22出土遺物



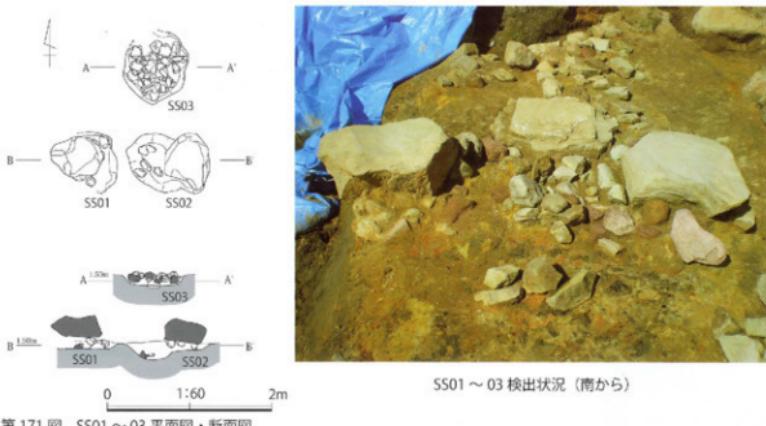
第170図 SB02出土遺物

■は油煙痕

とともに積み足されていることが確認できており、第4遺構面から引き続いて存在するものである。おそらくSB02に付随するものと想定している。また、SG01と直接的なつながりを確認できなかったが、SG01・02・SB02・SC01とともに一連の遺構であったと推測する。

SS01～SS03(第171図)

SS01～SS03 SS01～SS03は調査区北端で検出した拳大の栗石をもつ礎石列で、SS03はすでに礎石が取り除かれた状態で検出された。この礎石の周辺にも、栗石に使用されたものと同様の大きさの石が密集して敷設されており、大型の建物の基礎であった可能性が考えられる。詳細は第3章で述べられているが、殿町287番地調査時にも、同様の遺構が近くから検出してお



第171図 SG01～03平面図・断面図

SG01～03検出状況(南から)

連の遺構であった可能性がある。この遺構から遺物は出土していない。

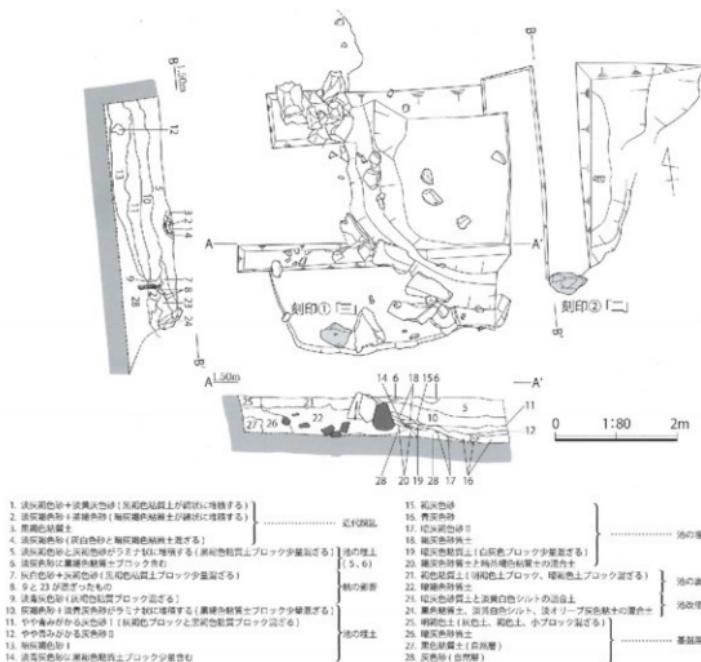
SG03：池(第172図)

SG03 調査区南西端で検出した土坑であるが、第3遺構面以下のこの部分は調査区外にあたるため、追加調査として遺構の性格の把握のための部分的な調査を行った。内側に白色の砂を埋土に持つ土坑と、外側に大形の割石をいくつも含む黒褐色粘質土を埋土に持つ土坑との、2重の掘り方が検出された。内側の土坑は直径約5.0mで、その縁辺部は外側の土坑の埋土とともに大形の割石を廻らせており、割石には大海崎石が多く使用され、中には刻印をもつものもあった。土層断面から、土坑の内部に水が溜まった状態のまま埋め戻されたと考えられた。以上のことから、内側の土坑が池状の遺構で、割石周辺は石材を配した築山のようなものがあったのではないかと推測される。なお、第2遺構面の屋敷境溝SD01から、北側に傾斜しながら延びる石積溝を検出しておらず、当初はこの遺構に伴う可能性も考えられたが、この遺構の北側に位置するSK03(第1遺構面)の掘り方に切られることや、第2遺構面より下位で検出されたこと、堀尾期に伴う屋敷境溝SD01の素掘溝を切ることなどから、第3遺構面に伴うものと判断した。

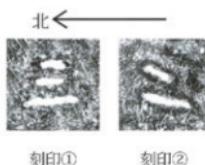
SG03で検出した刻印の拓本を第173図に示す。刻印①は「三」と刻まれ、松江城では確認されていないものである。刻印②は「二」と刻まれたもので、これも松江城では確認されていないものである。

SG03出土遺物(第174図)

国産陶器
土師器皿 784は在地の陶器の瓶と思われる。内側の土坑から出土したものであるが、幕末以降の遺物である可能性があり、上層からの混入が考えられる。785・786は手づくね成形の土師器皿で、外側の土坑から出土したものである。785は中皿で、786は中皿で油煙痕が付着するものである。787・788は用途不明の木製品で、内側の土坑から出土したものである。789は棟込瓦で内面調整はコピキBである。



第172図 SG03平面図・断面図



第173図 SG03刻印拓影(S=1/4)

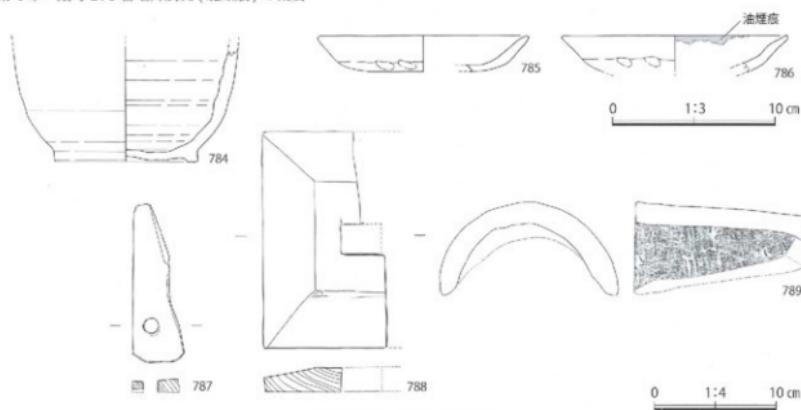


SG03一部掘下状況(西から)

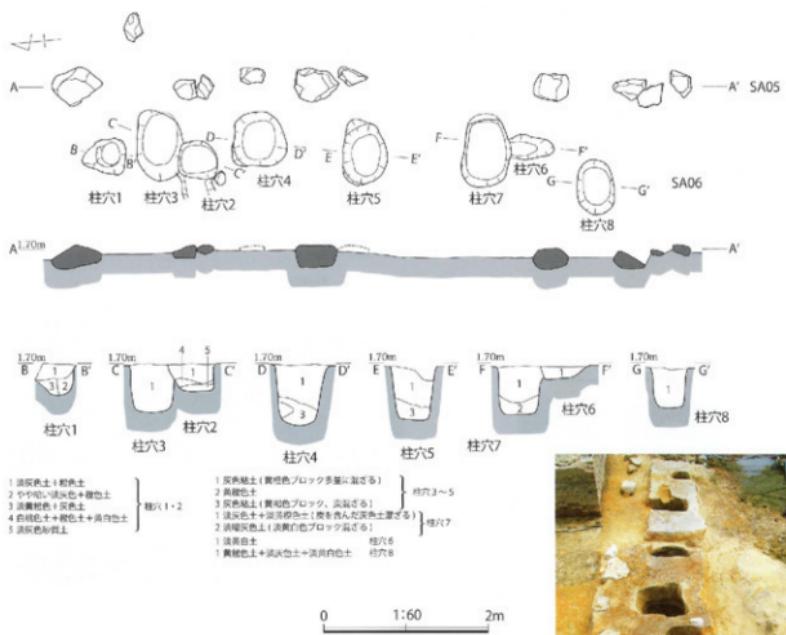
SA05・06：跡跡(第175図)

調査区の南西側でSA05とSA06が南北方向に並んで検出された。SA05は約1.5m間隔で礎石が南北に並ぶもので、石材は割石が多く産地は不明である。これらの礎石は、直線的に並ぶものの相対する礎石が周辺で確認できなかったことと、礎石の間隔が約1.5mであることから建物であった可能性は低い。

SA06 SA05の西隣に位置するSA06は、柱穴1～柱穴8が南北方向に並んで存在する。柱穴1、



第174図 SG03出土遺物



第175図 SA05・06平面図・断面図



SA05・06検出状況(北から)

柱穴2は、直径約50cm弱の平面円形を呈し、深さが約35～40cmと類似するもので、同時期に存在した可能性が考えられる。また、柱穴3～5、柱穴7は、直径約70～90cmの平面長楕円形を呈し、深さが約60～75cmと類似するもので、同時期に存在した可能性が考えられる。柱穴6に関しては、柱穴7に柱があったとすれば、柱を抜き取る際の痕跡の可能性が考えられるかもしれない。これらの柱穴は、ほぼ直線的に並ぶものの、相対する柱穴は確認できず、建物があったとは想定しにくい。

SA05とSA06はSC01とは直接繋がらないことから、SG03の存在する空間とを遮蔽する施設であった可能性が考えられる。また、SA05の南側延長線上に屋敷境溝SD01の石組がランクする部分にあたるため、屋敷境と一連の施設であったかもしれない。

SK23：廃棄土坑（第176図）

SK23

調査区の中央で検出した推定長軸5.5m×短軸3.0m、深さ0.5mの平面長楕円形の土坑の中に、陶磁器、土師器皿、木製品などが多量に廃棄されていた。土層断面の観察より、掘り直しがあったことが推測される。山上遺物の中で火を受けたようなものが多く見られ、屋敷地のどこかで火災があった時の廃材を捨てた可能性が考えられる。また、墨書きのある木製品が多量に出土しており、中でも文献資料でこの敷地内に住んでいたことが分かっている「佐々九郎兵衛」名の木簡や、他にも人名、荷物の内容を示す墨書きが多く出土している。共伴する陶磁器は17世紀前半にあたるものが主である。

この他、詳しく述べられるが、鳥骨（カモ亜科）、魚骨（スズキ、マダイ）、貝類（テングニシの蓋、サルボウ、ヤマトシジミ）、実といった食糧残滓も残っていた。魚骨、鳥骨も、火を受けていることが指摘されている。^[12]

SK23出土遺物（第177～186図）

国産陶器

790～804は陶磁器と上器である。790・791は肥前陶器の碗で、いずれも高台まで種葉が掛かるものである。792は中国青磁の大皿で、銅緑釉の上から鉄釉が掛けられているようである。793は肥前陶器の碗で、長石釉が掛かるものである。794は織部の鉢で、取手部分の破片である。795は備前の鉢の取手部分である。796は产地不明の陶器鉢である。797は肥前陶器の火入れと思われる。798は陶器の瓶で、外面にやや青みがかった鉄釉が掛けられ、内面は同心円状のタタキ目が残る。上野・高取系のものであろうか。799は備前産の甕である。800は備前擂鉢で、乗岡編年の近世IIa期にあたるものと思われる。^[13]801～803は中国磁器である。801は景德鎮窯系の小杯である。802は森村分類で瀬州窯系の青花青海波文盤と称されるものである。^[14]803は漳州窯系の皿で、内面に赤絵を施すものである。804は土器の火入れと思われ、底部外表面の足が付いていたようである。口縁部に煤が付着している。

詳細は第9章で述べるが、SK23では擾乱による混入品を除けば、肥前磁器は共伴していないものと判断している。

土師器皿

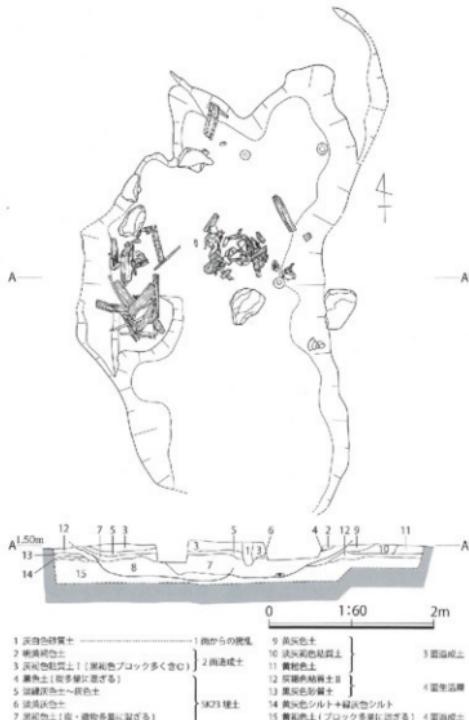
805～841は土師器皿、金属製品、錢貨である。805～823は上師器皿である。805はロクロ成形の土師器皿で、灯明に使用した痕跡は見られない。806はロクロ成形の後に、底部付近を指で押さえている。807～823は手づくね成形の上師器皿である。807・808は小皿で、808は口縁部に油煙痕が残るため、灯明に使用したと思われる。809～818は中皿で、すべて灯明に使用した痕跡が残っている。819は油煙痕以外に、内面底部に炭と白色の固形物が付着している。灯明以外に別の用途で使用されたものと思われる。820～823は大皿で、ロクロ成形後に底部を指押さえし、手づくね風に見せている。820以外は油煙痕が付着して



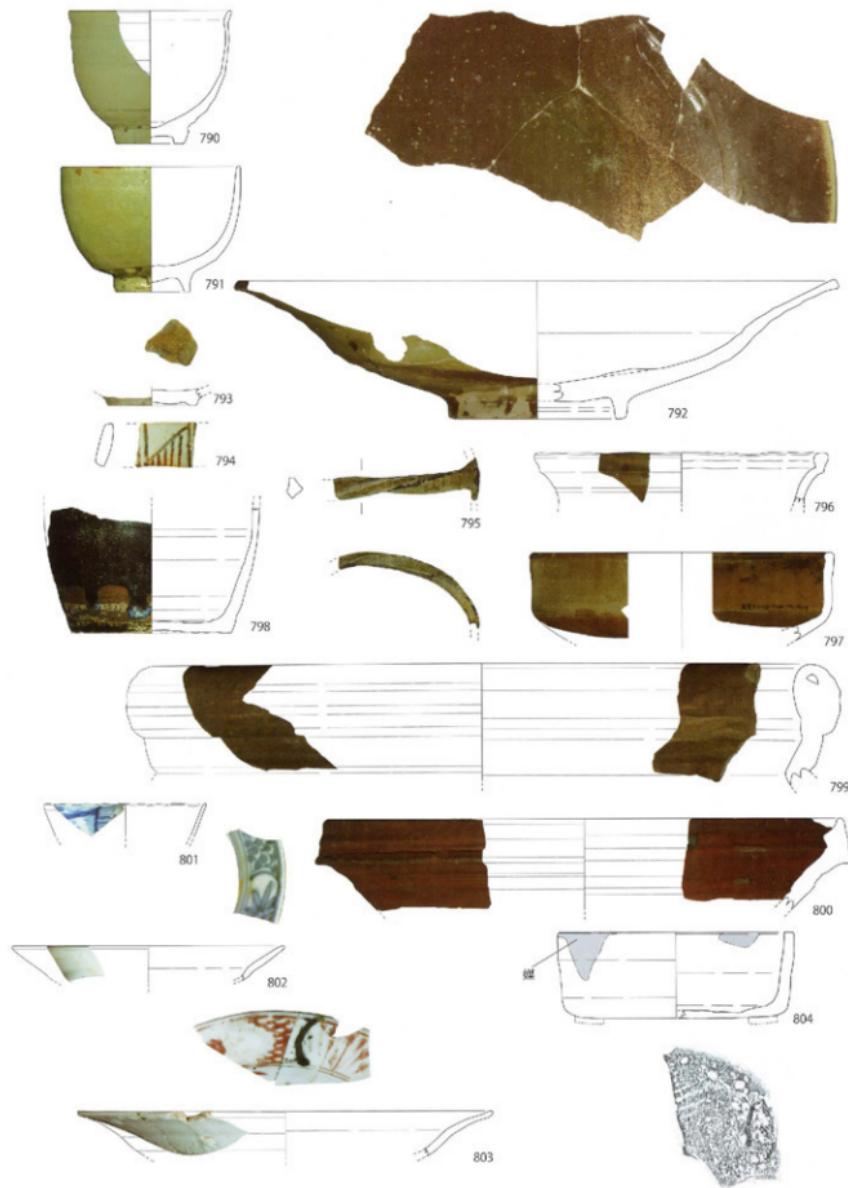
SK23 土層堆積状況 (南西から)

金属製品 おり、灯明皿として使用されたものである。824～832は鉄釘で、断面方形を呈するものである。833は銅製の小柄であろうか。834は鋳造の鉄製品で、風化のため用途不明である。835は煙管の雁首である。銅製であることが分かっている。836～838は煙管の吸口である。836は銅製で、837・838は真鍮製であることが分かっている。839は用途不明の鉄製品である。840と841は銭貨で、840は風化のため判読不能である。841は唐錢の「開元通寶」で、初鋤年は621年である。

墨書き木製品 842～855は墨書のある木製品と荷札木筒である。842～846は将棋の駒である。842は表に「銀将」と書かれており、裏は墨書が消えてしまっている。2ヶ所に日釘が付いたために、将棋として実用されたものではないかもしれない。843は表に「○将」、裏に「金」と書かれているようである。844は表に「香車」、裏に「金」と書かれている。845は表に「香車」、裏の墨書きは解読不能である。「香車」の字が盛り上がっており、漆で書かれている可能性がある。846は表に「飛車」、裏にも墨書きがあるが解読できなかった。847～855は荷札木筒である。847は「佐々九郎兵衛」銘の木筒で、裏面には荷物の内容が書かれているようである。848は片面には「佐々九郎兵衛」と書かれており、裏面にも「さゝ九郎兵衛」と書かれている。849は上下部が欠損しているが、両面に墨書きが認められる。片面に書かれている字は「佐」の可能性がある。850も佐々銘木筒である。「佐々九郎兵衛内」の下に書かれている「河村長三郎」は、佐々家の陪審と思われる。851は、片面と下部が欠損しているが「乙部」と読める可能性がある。「乙部」ならば、第3構面に「佐々九郎兵衛」が住んだ後に「乙部」が統いて居住していた可能性を補強することになる。852は2次加工により下部が欠損しているものの、両面に墨書きが確認できたものである。解読できたのは片面のみで「孫門」という人

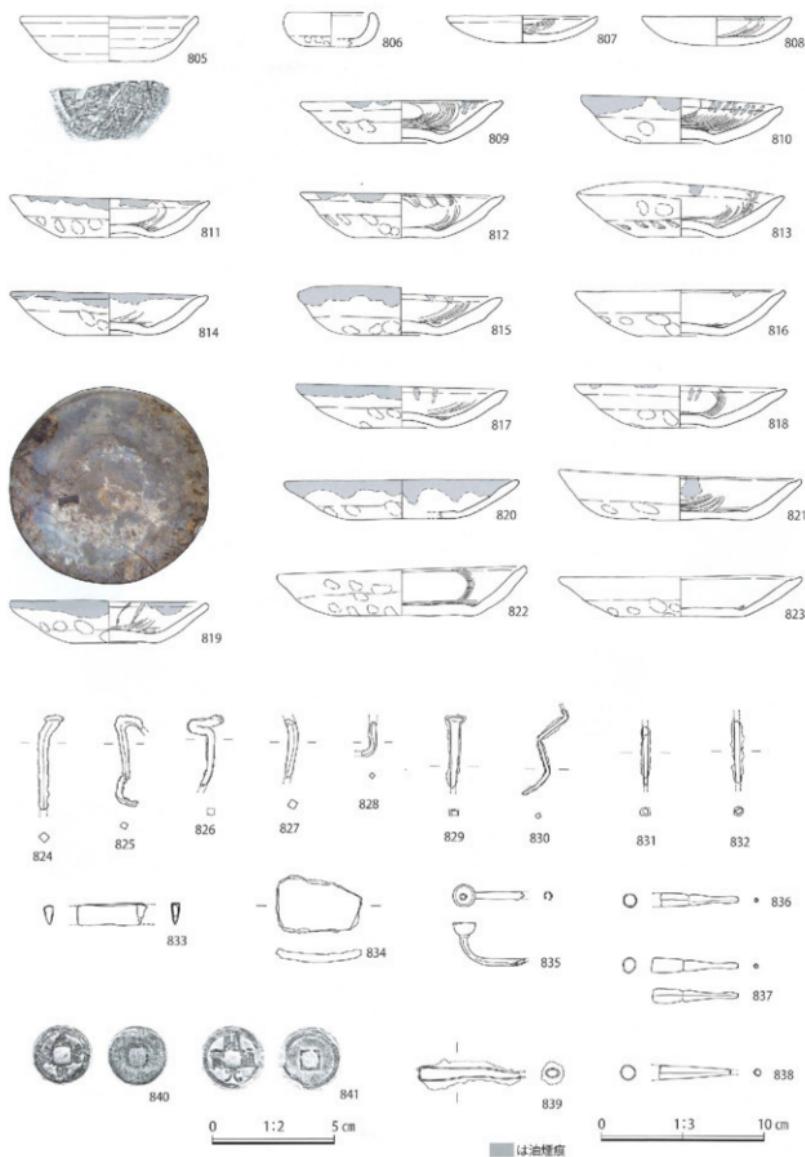


第176図 SK23平面図・断面図



第177図 SK23出土遺物(1)

0 1:3 10 cm



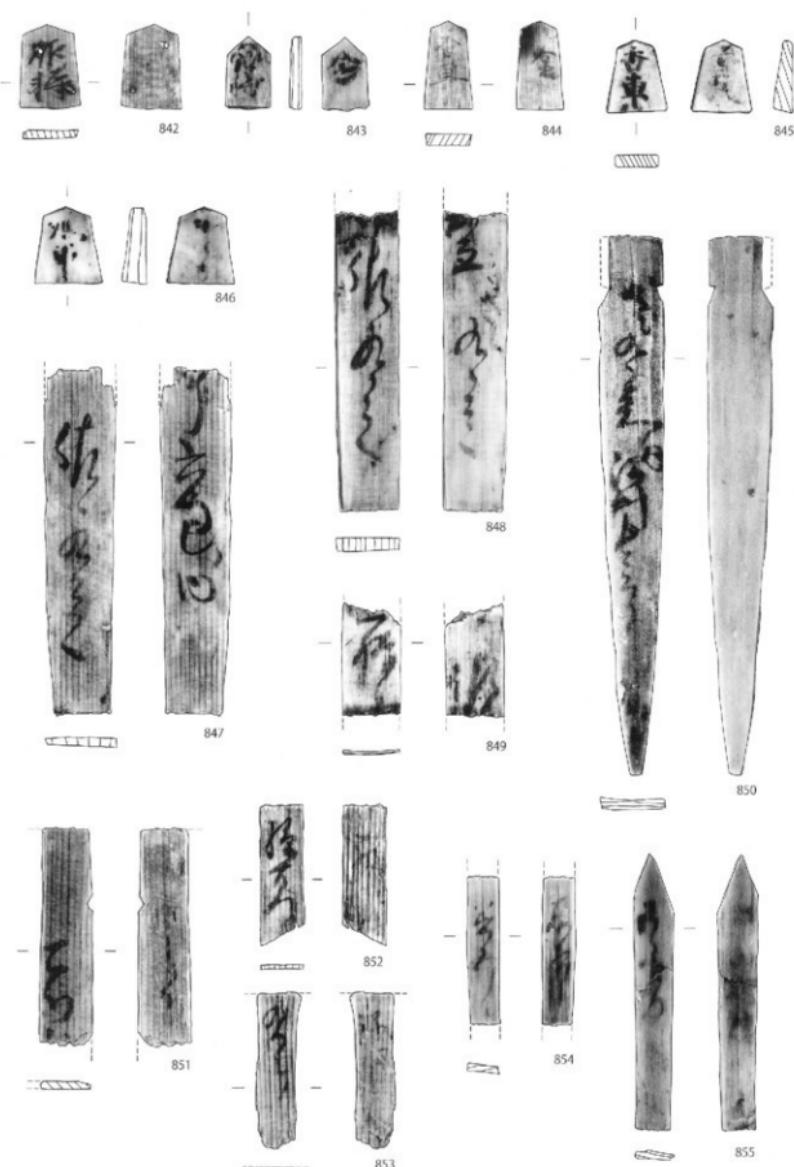
第178図 SK23出土遺物(2)

名が書かれている。853は下部と左右が欠損しているが、両面とも墨書きがあり、片面に「九ろう」と書かれている可能性がある。854も両面に墨書きがあるが、解読できたのは片面のみで、「善五郎」という人名が書かれている。855は完形品で片面のみ解読でき、「五郎衛門」と読める。

856は片面に「乃木」という記載がある。「乃木」という地名は、現在の松江市内にも存在しており、江戸時代にすでに地名として存在したことが分かる資料である。また、その下は「角兵へ」と読み、この人物は佐々家に仕えていた陪臣の可能性が高い。裏の「みそかうの物」という墨書きは、この人物が発送した荷物の内容を示すものと思われる。857は完形品で、表裏面とも墨書きの残りが良いものである。片面に「占田助左衛門様之内 松本八左衛門殿(有田カ)左兵衛へ」、裏面に「大豆四拾俵ノ内 濱田より」と書かれている。「松本八左衛門」といった同様の内容が書かれた墨書き木簡が、この遺構内から他にも2点と第3遺構面からも1点出土している。これらの人物について、今後の検討課題である。858は片面に「口四拾俵内(物カ) 田樽(橋カ)八」と読み、届けられた荷物の内容を示すものと思われる。裏面には「松口左衛門^口津田殿」と書かれており、おそらく「松本八左衛門」のことを指すと思われる。859は上下部が欠損しているが、両面に墨書きが確認でき、片面は「四拾俵ノ内」と読み、荷物の内容と思われる。裏面は「衛門」と読み、人名が書かれていると思われる。860は完形品で、片面には「六升入」と読み、荷物の内容が書かれているようである。もう片面には「月十五日」と読み、日付が書かれている。861は両面に墨書きがあったと思われるが、片面しか墨が残っていない。「丑ノ米四」と読み、荷物の内容が書かれているようである。862は完形品で、片面に「四斗一升入中口(門カ)」と読み、荷物の内容を示すものと思われる。もう片面には「九月十二日」と読み、日付が書かれている。

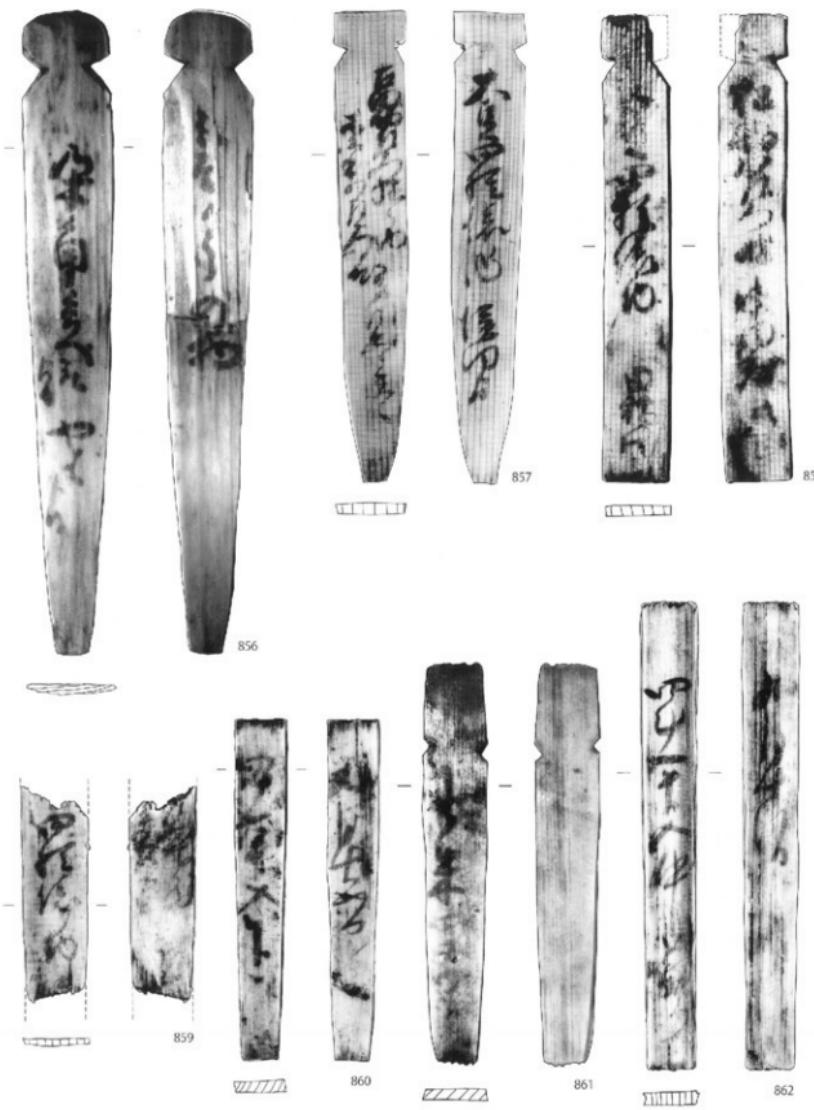
863は片面に「三斗八升中米」と読めるものである。荷物の内容が書かれていると思われる。864は上部が欠損しているが、両面ともに墨書きがある。片面は「様之内 本八左衛門殿 有田左兵衛へ」と書かれており、ここにも「松本八左衛門」が現れる。裏面は、「拾俵ノ内 濱田方より」と書かれている。865は両面に墨書きが確認でき、片面は「四拾俵數門」と読めるが、もう片面は解読できなかった。866は2次加工を受けており、片面の一部に「永」とだけ読めるが、他は解読不能である。867は欠損のため一部しか残っていない。片面のみ墨書きが確認できるが解読不能である。868は片面に比較的はっきり墨書きが残っているが、解読できていない。869は片面のみ墨書きがあり「中左衛門」と読み。870は2次加工を受けているようである。片面は、「新(斯カ)右衛門」と人名が書かれており、もう片面は解読不能である。871は両面に墨書きが確認できるが、上下部と片側欠損のため解読不能である。872は下部と片側が欠損しているが、両面に墨書きが確認できた。片面に「極月十四日」と日付が書いてあるようで、反対の面は「大万八」とまで読めるが、その下の墨書きは解読できなかった。873は下部と片側が欠損しているが、片面に墨書きが確認でき、「さんのせし殿 九郎右」を読める。874は両面に墨書きが確認でき、片面に「弥一」、もう片面に「切」とだけ読める。875は部材長辺を横向きに墨書きが施されている。片面に墨書きが確認できるが、ほとんど解読できなかった。876は目釘の跡が2ヶ所あり、2次加工を受けていることが分かった。片面に墨書きが確認でき、長辺側を横に置いて字が書かれている。欠損のため、一字文ずつしか確認できないが、右から「ん」、「頬」、「さ」、「為」、「与」、「そ」と読める。

877は片側と下部が欠損している。両面とも墨書きは確認でき、片面の上部には、「無足」と書いてあり、もう片面は不明である。878も片側と下部が欠損しているが、「大豆四」のみ解読でき、荷物の内容を示すと思われる。879は片側と下部が欠損しているが、両面に墨書きが

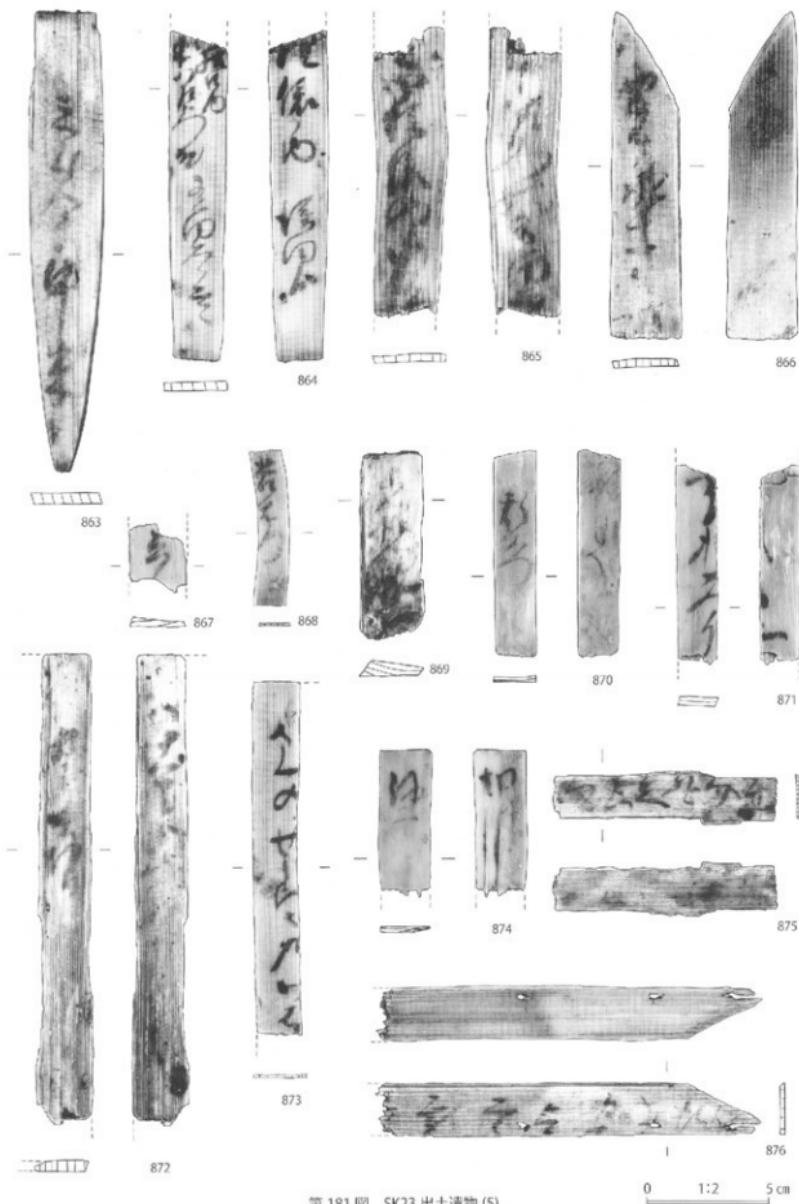


第179図 SK23出土遺物(3)

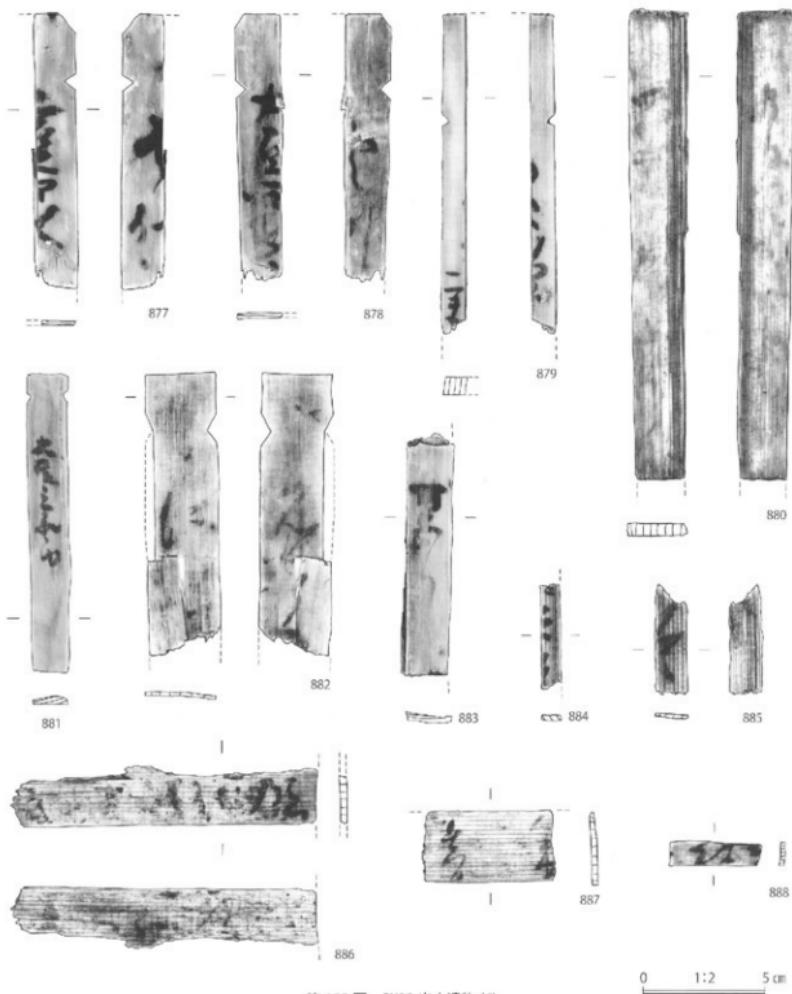
0 1:2 5cm



第180図 SK23出土遺物(4)



第181図 SK23 出土遺物(5)



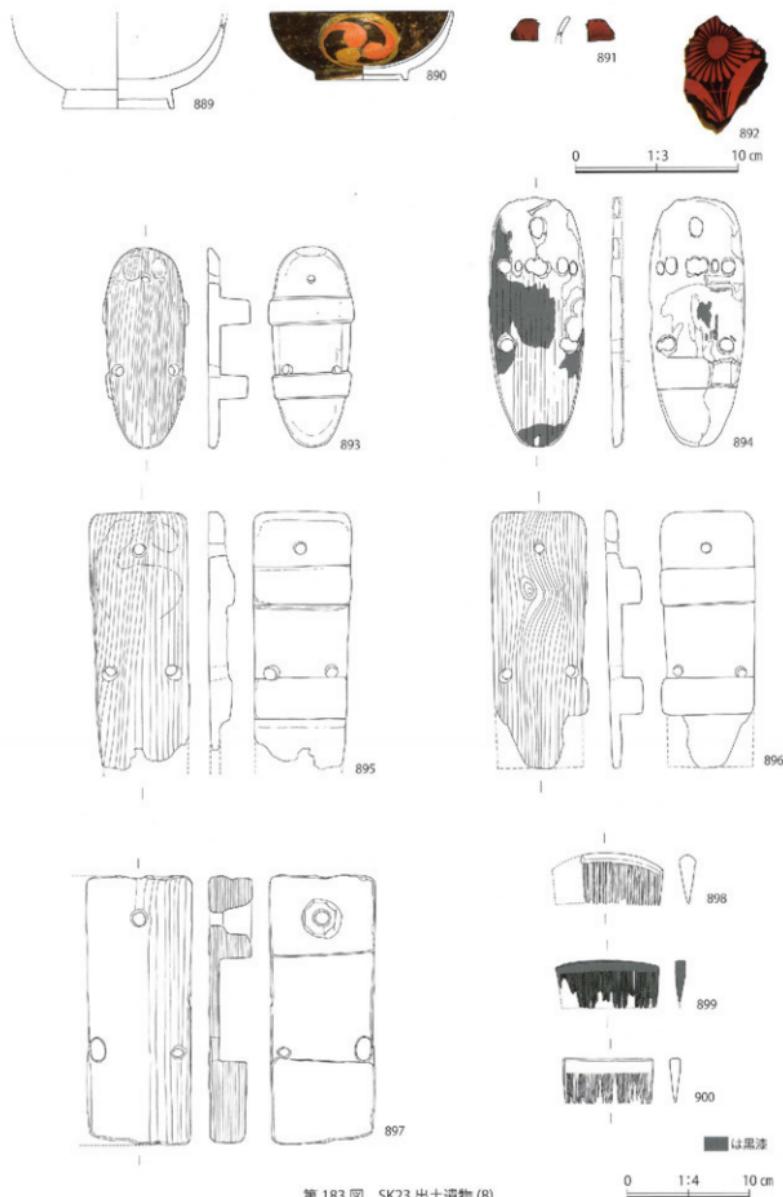
第182図 SK23出土遺物(6)

確認できる。片面の下部は「こま」だけ読み、もう片面は解読不能である。880は下部が欠損しており、墨書もかすれが激しく解読がほとんどできない状態である。881は完形で、片面に荷物の内容が書かれており、「大豆三表之内」と読める。882は欠損のためほとんど解読できないが、片面は「□に」、もう片面は「一人」とだけ読める。883は片面に墨書が確認できるが、解読不能である。884は上下部と片側が欠損するもので、墨書は片面のみ確認できるが、解読不能なものである。885は上下部が欠損しており、片面に墨書が確認できるが、

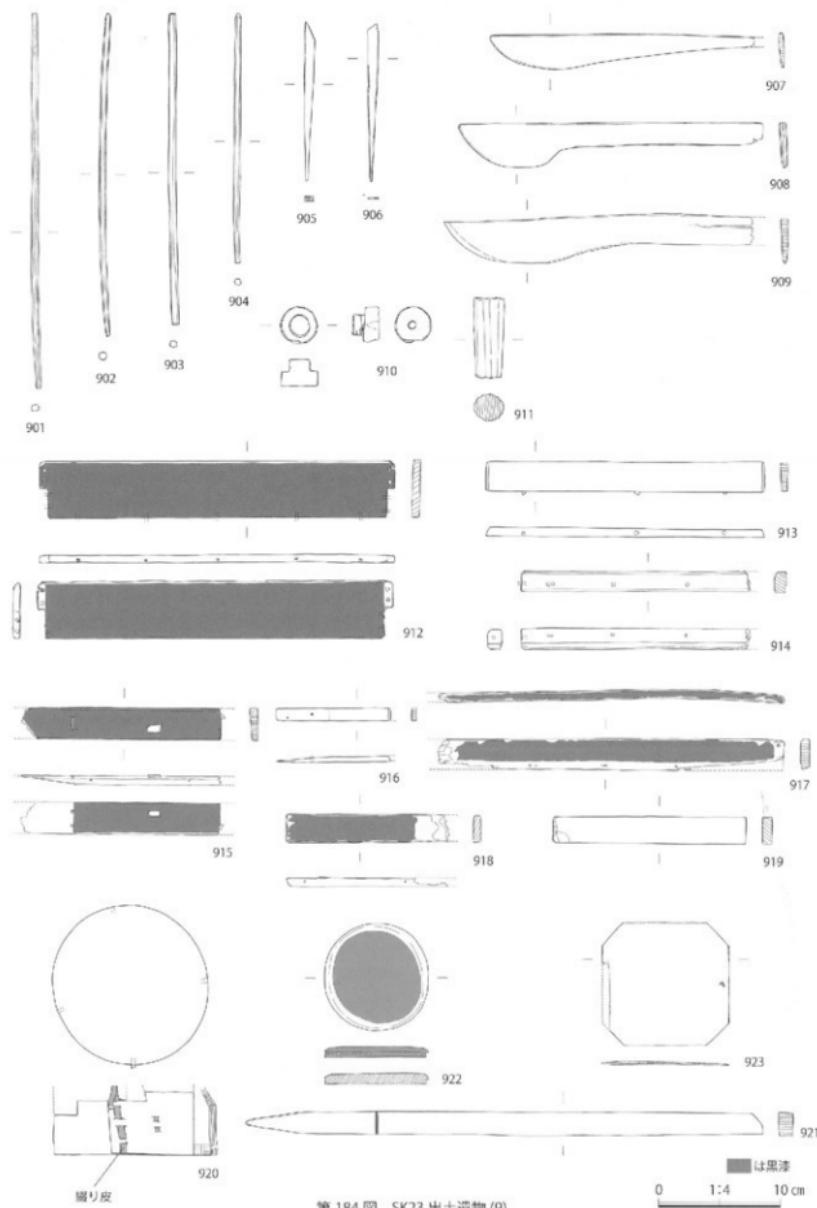
解読できない。886は横向きに呂かれており、部材を転用したものの可能性がある。右端の「有」だけ読めるが、他は解読不能である。887は片面のみ墨書きが書かれているが、「亥」以外は解読不能である。888はほとんどが欠損しているため、「次」以外解読不能である。

- 漆椀** 889・890は腰丸椀である。889は無文で、内外面ともに黒漆が塗られている。890は外面は黒、内面は赤の漆塗りが施され、外面に黄色の墨線内に左三巴文が描かれている。三巴文は、1つが黄色で、あと2つは赤色で描かれている。891は漆椀の口縁部片で、内外面ともに赤塗りが施され、口縁端部外面に金色の線で文様が描かれていたようである。892は外面は黒、内面は赤の漆塗りが施されており、外面に朱で菊花文が描かれている。893～897は下駄である。893は丸型の連齒下駄で、小形なので子供用であろうか。前縫穴の内側に足の親指の痕跡が残っており、左足用であったことが推測される。また、前歯の前方がやや磨り減っている。894も丸型の連齒下駄で、歯部が欠損している。緒穴が合計5つあり、鼻緒の位置を付け替えた可能性が考えられる。また、黒漆が塗られていた痕跡が残る。895は角型の連齒下駄で、台の後端が欠損している。前縫穴付近に足の親指の痕跡が残っており、左足用であったことが推測される。また、前歯、後歯ともにかなり磨り減っている。896も角型の連齒下駄で、台の後端が欠損している。前歯、後歯とも左側の磨り減り具合が激しい。897は角型の削り下駄で、前縫穴の裏が不整六角型を呈し2段に加工されている。後緒穴の右側は2度穿孔された痕跡がある。この他にもいくつか連齒下駄が出土しているが、角型のものが多い。また、差込下駄の歯部分も出土している。898～900は木製の櫛で、898は柄が弧状を呈し、歯の間隔が他のものより若干広い。899も柄がゆるい弧状を呈する。900は柄が直線状を呈するものである。

901～923は箸、楊枝、ヘラ、栓、折敷、柄杓である。901～904は白木の箸である。901・902は完形品で両端が尖らせてある。903は完形品で片側は平坦で、もう片側は尖らせてあり、他のものよりやや太い。904は完形品で両側を尖らせてあり、他のものよりやや短い。905・906は楊枝と思われる。907～909はヘラで、いずれも片刃である。910・911は木製の栓で、910は凸型状を呈し、911は円柱状を呈する。912～919は折敷の部材と思われるものである。912は折敷の側板と思われ、表裏上側面に黒漆が塗ってある。下側面に5ヶ所目釘跡が見られ、両端のホゾにも2ヶ所ずつ目釘跡が残る。913も折敷の側板の一部と思われる。1側面に目釘跡が3ヶ所見られる。914も側板の一部と思われる。片端は欠損しているが、1側面に5ヶ所目釘跡を確認でき、小口側にも目釘跡が1ヶ所残る。915は折敷の側板の一部と思われる。3面に黒漆が塗られており、黒漆が塗られていない面に目釘が2ヶ所残る。また、縞皮で板材をつなぎ留めている。916も折敷の側板の一部と思われるが、片面を薄く斜めに削り、1ヶ所を目釘で留めている。917も折敷の側板の一部と思われ、ほぼ全面に黒漆が塗ってある。底板との接合部分に5ヶ所目釘が打たれており、側板との接合部にも目釘が1ヶ所残る。918も折敷の側板の一部と思われ、表裏と上側面に黒漆が塗ってある。底板との接合部にあたる面に目釘が2ヶ所残る。919も折敷の側板の一部であろうか。端部に面取りが施されており、目釘の痕跡は見られない。920・921は柄杓と柄杓の柄、曲物と思われる。920は柄杓に身部で、側板の両端を縞皮で留めており、側板と底板は、目釘を4ヶ所打って留めている。921は柄杓の柄と思われ、端部を斜めに加工し、柄杓の身部に装着したものであろう。922は曲物の蓋板か底板で、表裏に柿渋が塗られている。また、縁に段状の加工が施され、側面から打たれた目釘跡が4ヶ所残る。923は曲物あるいは柄杓の身部と思われ、縞皮が1ヶ所確認できる。



第183図 SK23出土遺物(8)



第184図 SK23出土遺物(9)

924～939は桶、鉢などの木製品である。924は桶の蓋板で、表、側面に黒漆が塗ってある。何枚かの板材は目釘でつなぎ合わせていたようで、1側面に目釘が2ヶ所残り、裏面は身と合わせるために段状に加工してある。表面は刃物と思われる傷が多数みられ、まな板として転用された可能性がある。925も桶あるいは樽の蓋板と思われ、板材をつなぎ留めるための目釘が断面に2ヶ所確認できる。表面には穿孔が4ヶ所施され、取っ手の紐を通していた可能性がある。両面ともに多数の刃痕が残っており、まな板として転用された可能性がある。926は桶か樽の底板と思われるが、表面に焼け焦げた跡があり、火起こしに転用されたものと思われる。板材をつなぎ留めるための目釘跡が1ヶ所残る。927は刃物あるいは工具の柄と思われる。928は木製の鎌頭で、おそらくこの先端に鉄製の鎌先が装着されたものと思われる。角状のほどぞに柄が残る。929は鍾錠形の木製品で、実際の用途は不明である。930は竹製の扇骨と思われる。7片しか残っていないが、おそらくもっと多く存在したものであろう。931は刀あるいは槍の櫂台と思われ、長側面に目釘が4ヶ所、短側面に1ヶ所残る。932は舟形形状木製品で、中央と下端に穿孔があり、底面は平らである。側面上部には19ヶ所の目釘穴が開いており、舟底部分にも貫通しない穴が15ヶ所確認できる。呪術的な用途で使用されたものであろうか。933は小形の荷札木簡状のもので、墨書きは確認できなかった。934は竹製の用途不明品で、何かに差し込んで使用したものであろうか。935は竹製の箒の可能性がある。中が空洞になっており、上部に穿孔が施されている。936と937は用途不明の円盤状の木製品である。938は帯の先で3条の燃り紐で束ねられている。939は刀状木製品の切先付近である。

940～949は用途不明木製品と瓦である。940は中央部に穴があり、片面端部を段状に加工してある。何かの蓋であろうか。941はおそらくドーナツ状を呈するものと思われる。目釘あるいは目釘跡が残るため、他の部材と接合していたと思われるが、用途は不明である。942は何かの脚部で、黒漆が塗ってある。943も用途不明部材で、面中央に目釘が残り、長辺側面にも長方形形状の目釘が2ヶ所打たれている。944も用途不明部材である。945は軒丸瓦で、三巴文の外側に一条の圓線が、その周りに珠文が配されるものである。珠文は、欠損しているため7個しか確認できない。巴文の頭部は右向きで、尾部は左向きである。946も軒丸瓦で、三巴文の外側に一条の圓線が、その周りに17個の珠文が配される。巴文は頭部が右向き、尾部が左向きである。947は丸瓦で、内面に工具痕が残る。948は丸瓦で内面調整はコビキBである。949は鬼瓦の一部と思われる。

屋敷境溝：SD01(第161図)

SD01

調査区南端で検出した屋敷境を示す石積溝である。上段の石が外されているものの、第3遺構面から掘り込まれていることが分かっている。石積には大形の大海崎石が、裏込め石にも小形の大海崎石が使用されている。石積の西側にクランクする部分が認められ、SA05とつながる可能性がある。

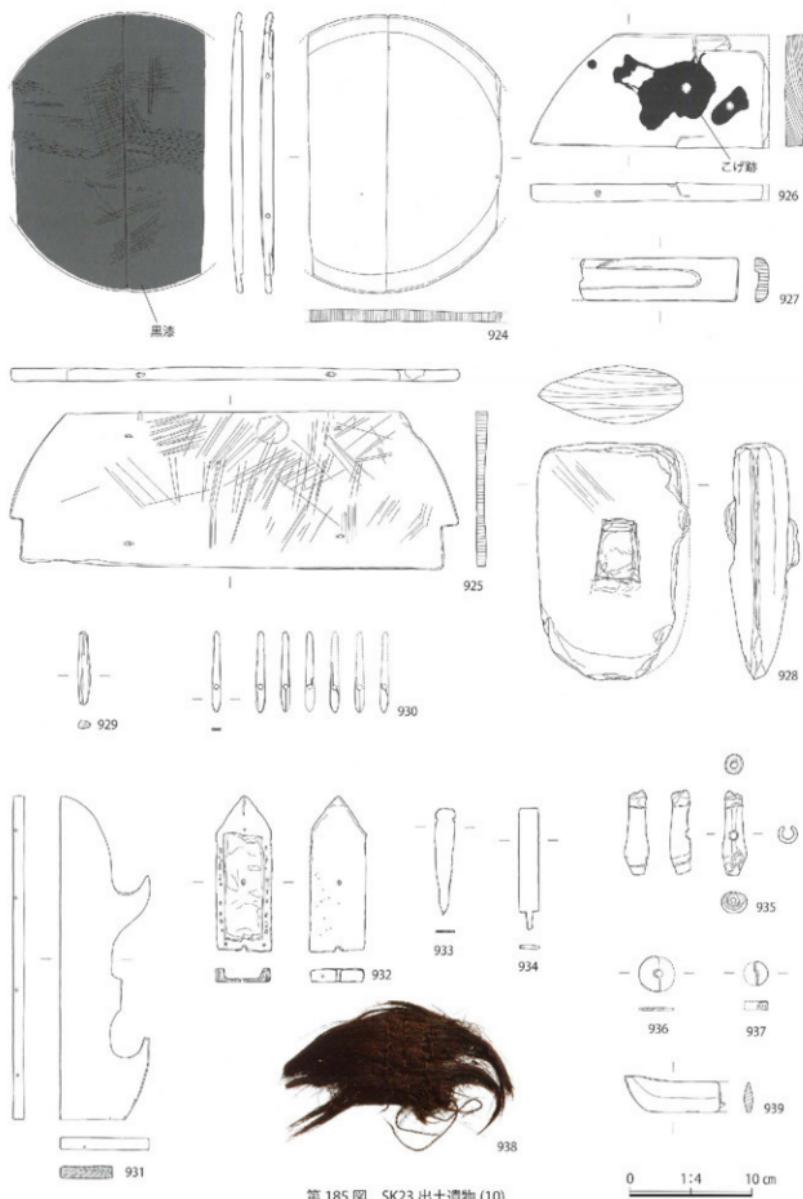
屋敷境溝出土遺物(第187、188図)

国産陶器

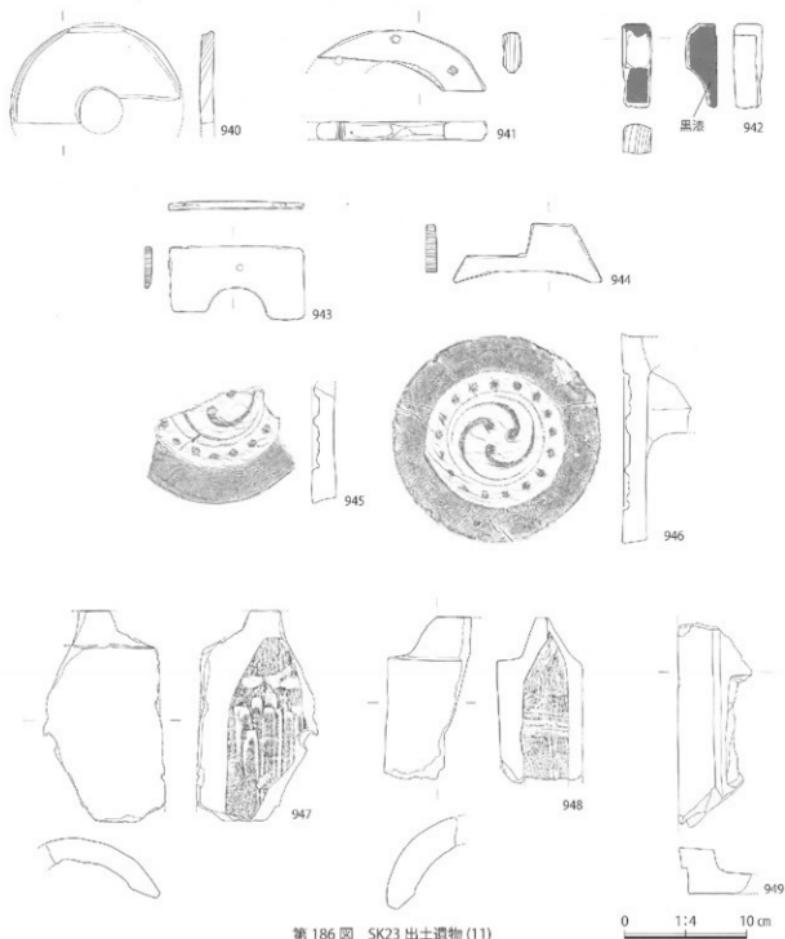
石積の裏込めから出土した遺物である。950～952は国産陶器である。950は肥前陶器の碗である。951は肥前陶器の皿である。952は備前の擂鉢で、口縁端部に線刻が施されている。

瓦

953～962は瓦である。953はSG03でも出土した桔梗文の軒丸瓦である。954も軒丸瓦で、三巴文の周りに珠文が8個残存しており、巴文の頭部は右向きで、尾部は左向きである。955は軒平瓦で、中心飾りに葉脈を入れた3葉を置き、その左右に2つ唐草文を配するもので

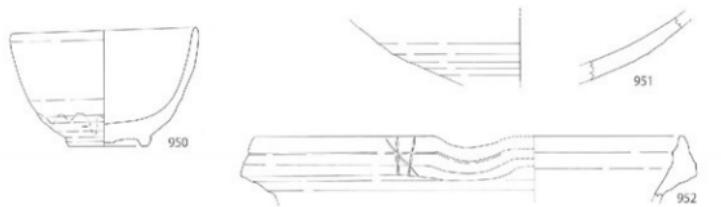


第185図 SK23出土遺物(10)



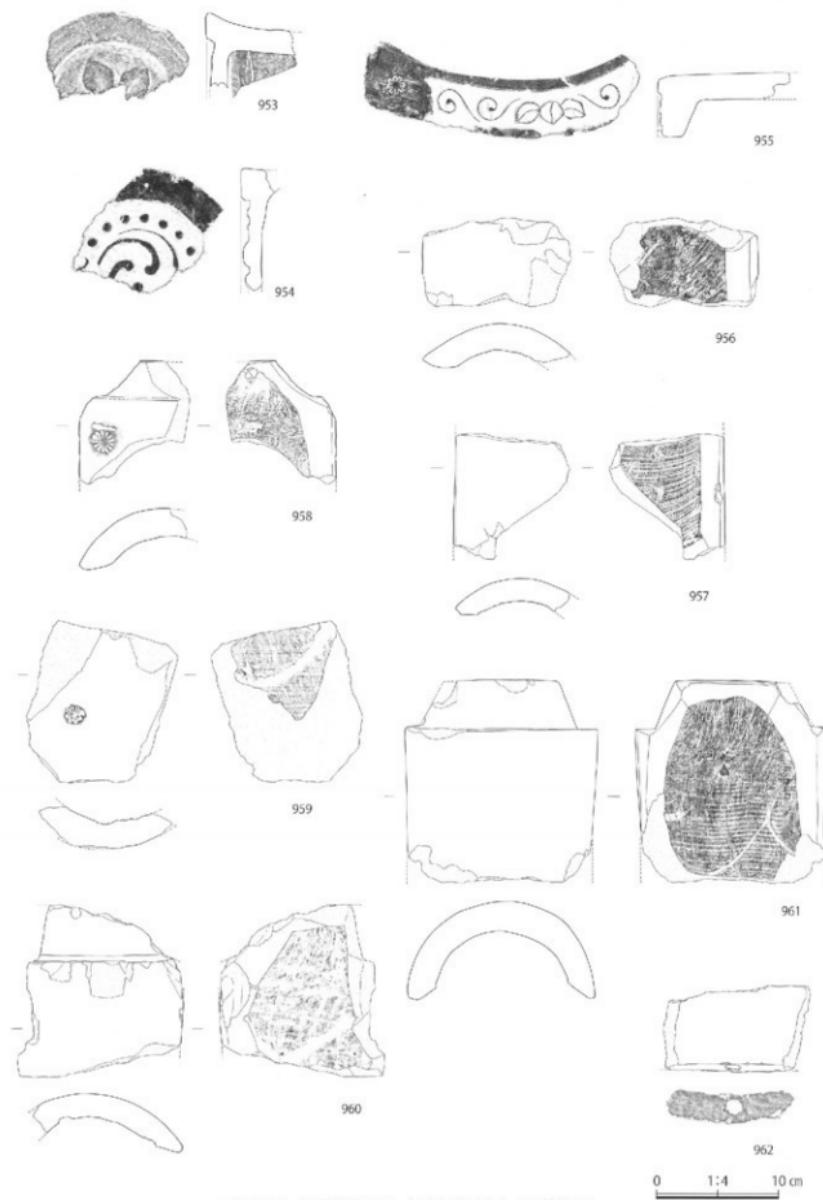
第186図 SK23出土遺物(11)

0 1:4 10 cm



第187図 屋敷境溝SD01(北側石垣裏込)出土遺物(1)

0 1:3 10 cm



第188図 屋敷境溝SD01(北側石垣裏込)出土遺物(2)

ある。956は丸瓦で、内面調整はコビキAである。957も丸瓦で、内面調整はコビキAである。958も丸瓦で、外面に菊花文に「一」のスタンプが押されており、内面調整は不明である。959は丸瓦で、外面に菊花文のスタンプが押されており、内面調整はコビキBで、さらに紐の痕跡が残る。960は丸瓦で、内面調整はコビキBである。961も丸瓦で、内面調整はコビキBである。962は平瓦で頭部に菊花文のスタンプが押してある。

この他、SK23の東側に用途不明の土坑や遺構の空白地が存在し、この部分が屋敷地の中の空閑地であった可能性が高い。また、SB02の北東側に拳大の石が敷設される部分が認められ、建物の基礎構造の可能性を考えている。

以下、詳細な遺構図は掲載していないが、第3遺構面の年代的特徴を表す遺物が出土しているため掲載している。遺構の位置については、第148図の調査区全体図を参照していただきたい。

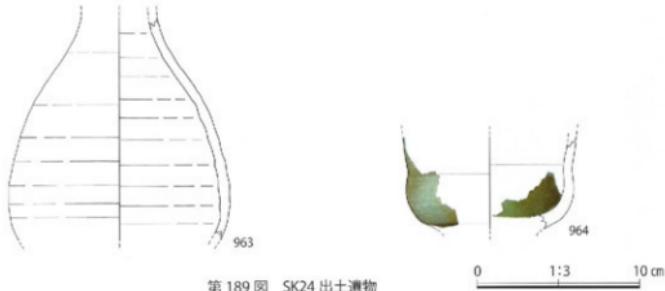
SK24 SK24：土坑出土遺物（第189図）

国産陶器 調査区の中央やや東側の土坑から出土した遺物で、963は產地不明の陶器瓶である。964は中国青磁の壺であろうか。

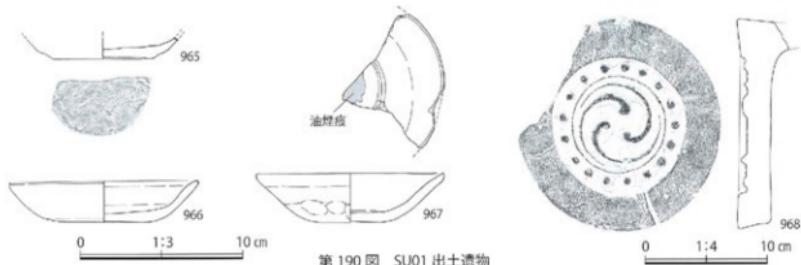
貿易磁器 SU01：瓦溜り出土遺物（第190図）

土師器皿 調査区の南東側で検出した瓦溜りから出土した遺物で、965～968は土師器皿である。965はロクロ成形のもので、口縁部が欠損している。966は中皿で、ロクロ成形後に底部外側の糸切り痕をナデ消している。967は手づくねの中皿、で内面に圓線が施されるものである。

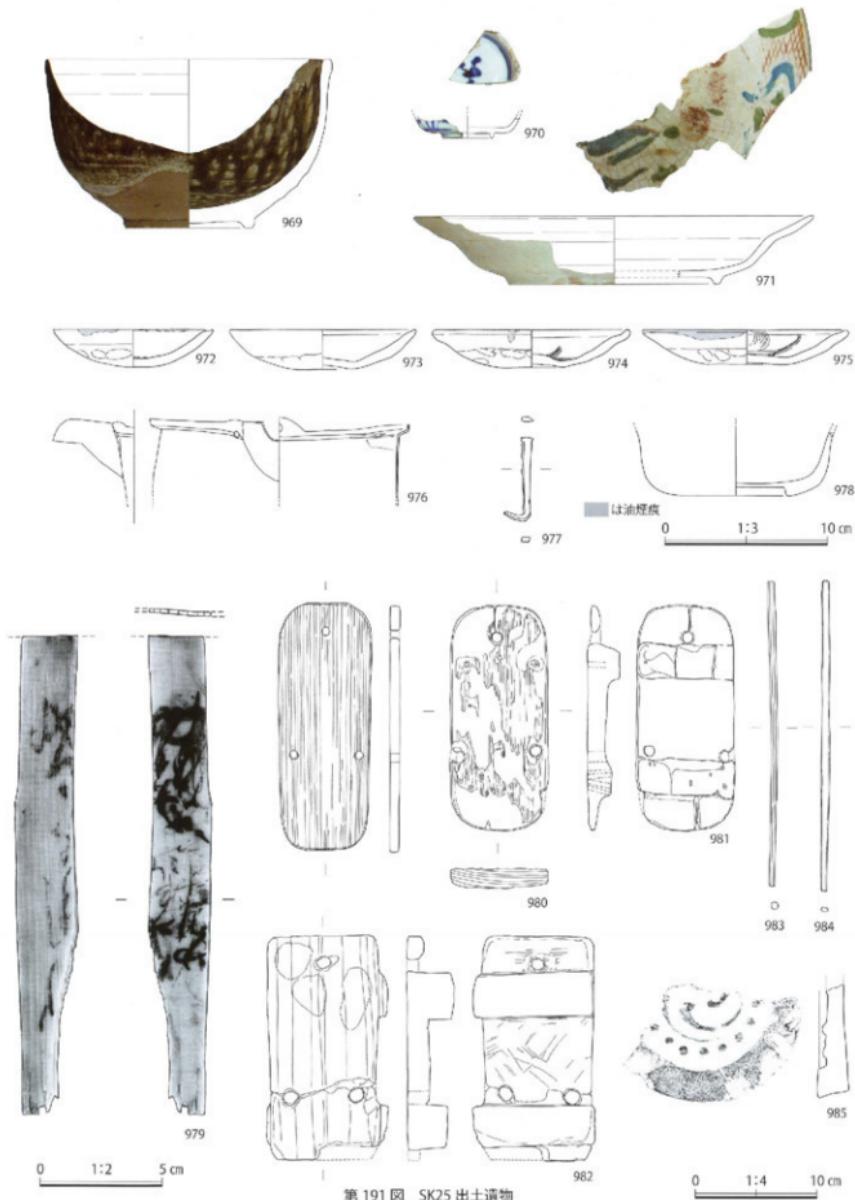
瓦 968は軒丸瓦で、三巴文の外側に圓線が、その外側に珠文が17個配されるものである。巴文の頭部は右向き、尾部が左向きである。



第189図 SK24出土遺物



第190図 SU01出土遺物



第191図 SK25出土遺物

SK25	SK25：廃棄土坑山上遺物（第191図）
国産陶器 貿易磁器	調査区の中央で検出した廃棄土坑から出土した遺物で、969は肥前陶器の鉢で、内面見込みに胎土目が付着する。970は中国磁器の小碗で、景德鎮窯系のものと思われる。971も中国磁器の皿で、素地が陶胎のものである。漳州窯系の五彩皿と思われる。972～975は手づくねの上師器皿である。972は小皿で、灯明として使用されている。973は中皿で、底部がやや上げ底を呈するものである。974・975も中皿で、灯明として使用されている。974は内面に「の」字状の、975は内面に「2」字状のナデ上げを施す。974は内面見込み部分にナデ上げ時につく凹縫状の圓線が入る。976は銅製の洒餌器で、内面には黒漆が塗布されている。977は鉄釘で、断面方形を呈する。978は漆楓で、高台内のみ黒漆が塗られ、他はすべて赤漆が塗られている。高台内は内削りされており、特殊な形状である。内面見込部は火を受けたようで、焼け焦げている。979は墨書の木材で、両面ともに墨書が確認でき、片面の「聖奉」という文字以外は不明である。980は齒が無いタイプの卜駄である。981は丸型の連歛卜駄で、歯を鉄釘で留めていたのか、釘穴が9穴確認できる。後歛の方がよく磨り減っている。982は角型の連歛下駄で、前縫穴周辺に足の指跡が残っており、右足用と推測される。983・984は白木の箸である。983は完形品で両端とも尖らせないタイプである。984は完形品で片方のみを尖らせている。985は軒丸瓦で、三巴文の外側に珠文が配されており、闇縁は見られない。巴文の頭部は右向き、尾部は左向きである。
土師器皿	
金属製品 漆楓	
墨書き木製品 木製品	
瓦	

第3遺構面遺構外出土遺物（第192～196図）

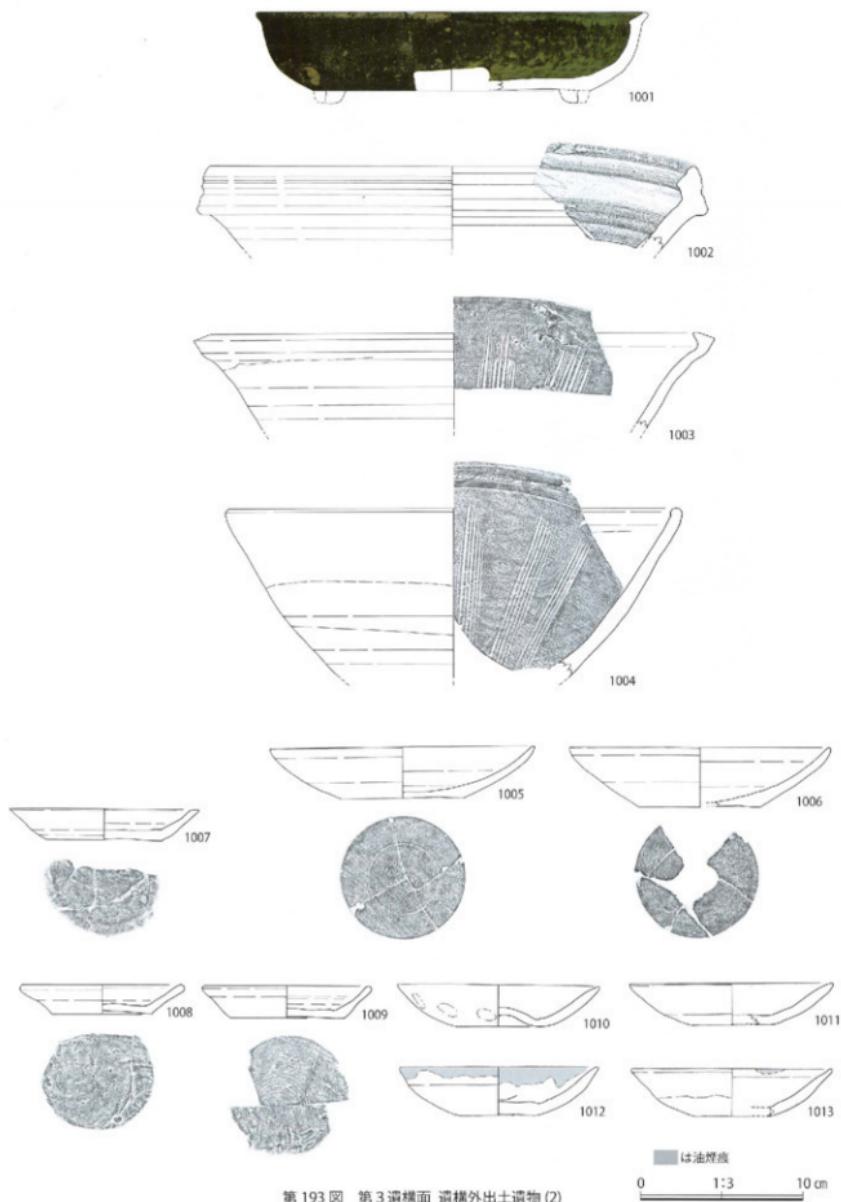
以下は、第3遺構面の包含層から出土した遺物である。

国産陶器	986～1000は陶磁器である。986は肥前陶器の碗である。987も肥前陶器の碗で、内外面に鉄釉が掛けられるもので、瀬戸・美濃の大口碗に比べて光沢がある。988は肥前陶器の碗で、外面にいっちゃん掛けが施されるものである。989は肥前陶器の鉢で、内面に鉄絵が描かれるものである。990は肥前陶器の清縁形の皿で、内面見込み部に砂目跡が残る。991は肥前陶器の皿で、内面見込み部と高台部分に砂目跡が残るものである。992は瀬戸・美濃の大口碗で、内外面に鉄釉が掛かるものである。993は志野の変形鉢で、底部外面に足が付くものである。994も志野の変形鉢である。995は中国磁器の皿で、景德鎮窯系と思われる。996は中国磁器で、漳州窯系の五彩皿である。997は肥前磁器の碗で、初期伊万里と呼ばれるものである。998は肥前磁器の陶胎染付碗で、素地の上に白化粧土を施してから釉薬を掛けたもので、17世紀後半のものと思われる。999も肥前磁器の陶胎染付碗で、白化粧を施すものである。1000は肥前磁器の皿で、17世紀中頃のものと思われる。
貿易陶磁 国産陶器	
土師器皿	1001～1013は鉢類、土器、上師器皿である。1001は備前の盤あるいは鉢である。底部外面に足が付くもので、足の側面に竹管文状のスタンプが押されている。1002は備前の擂鉢で、擂目は欠損のため不明である。1003は肥前の擂鉢である。1004も肥前の擂鉢で、口縁部が内側に突出しないものである。1005・1006は脛衣皿と思われ、どちらか蓋部かは不明である。いずれも底部外面の調整がヘラ削りである。1007～1009はロクロ成形の上師器皿である。1007は中皿で、1008・1009は小皿で油煙痕が残るものである。1010～1013は、手づくねの上師器皿である。1010は中皿で、底部が上げ底になっており、京都でつくられた始めたいわゆる「へそ皿」と呼ばれるものに似た形状である。1011も中皿である。1012・1013は中皿で、油煙痕が残るものである。
墨書き木筒	1014～1016は墨書き木筒である。1014は荷札形木筒で、中央部に目釘穴が1ヶ所開けら

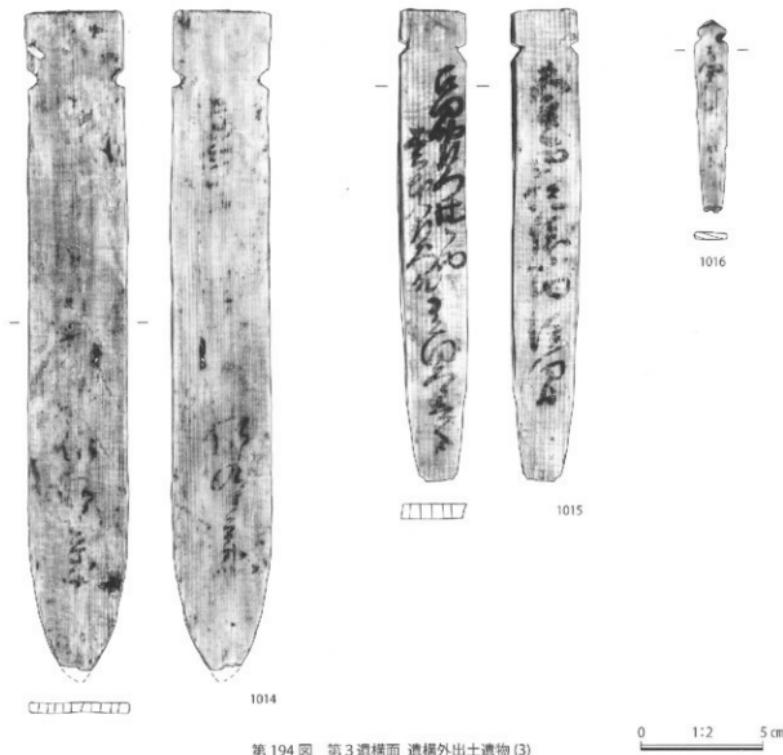


第192図 第3造構面 造構外出土遺物(1)

0 1:3 10 cm



第193図 第3遺構面 遺構外出土遺物(2)

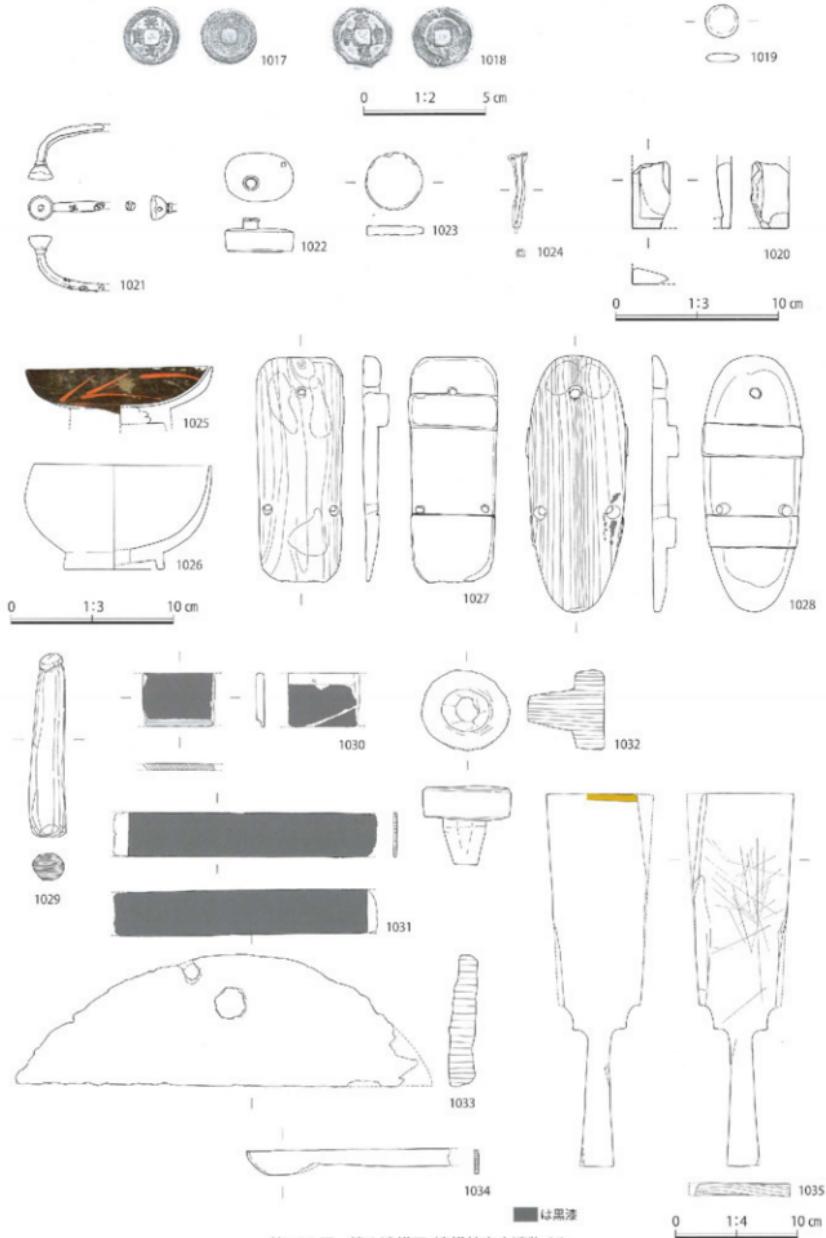


第194図 第3遺構面 遺構外出土遺物(3)

れている。両面に墨書きが確認できるが、片面は解読不能で、もう片面は下部に「九郎兵衛」と書かれている。1015は片面に「古田助左衛門様之内 松本八左衛門殿 有田左兵衛へ」と書かれており、裏面に「大豆四拾俵之内 濱田より」と書かれている。同様の内容が書かれた木簡が第3遺構面検出SK23からも出土している。1016は小形の荷札形木簡で、片面に墨書きが確認でき、上部に「賣」と読める。

銭貨 1017～1035は銭貨、石製品、金屬製品、漆椀、木製品である。1017は銭貨の「祥符元寶」で、初鑄年は1009年である。1018も銭貨の「元豐通寶」で、初鑄年は1078年である。1019は轡石で、黒石として使用されたものと思われる。1020は石製の硯である。1021は煙管の雁首で、外面に卍字の飾りが入れられるものである。本体は銅製で、飾り部分は真鍮に錫が入るものである。1022は銅製の水滴である。1023は円盤状の用途不明鉄製品である。1024は鉄釘で、断面方形を呈している。1025～1035は木製品である。1025は腰丸椀で、外面は黒、内面は赤に漆塗りが施され、外面に赤草文が描かれている。1026は腰丸椀で、外面は黒、内面は赤に漆塗りが施され、底部を穿孔するものである。1027は角型の連歛下駄で、後歯が磨り減ってほとんどなくなっている。前緒穴前後に指と足裏の痕跡が残っている。1028

第4節 第3遺構面



第195図 第3遺構面 遺構外出土遺物(4)